ヒベルニアの極光

葉梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒベルニアの極光

【Ｎコード】
Ｎ４３４５Ｙ

【作者名】
葉梨

【あらすじ】
ヨーロッパ全域を襲った大地震を境に、世界の空は分厚い雲に覆われ続けていた。　ある日、西の果ての島から流れ着いた一人の少女が言う。「ヒベルニアにだけは太陽が照っている」と。　異常気象の秘密を探るためにヒベルニアを目指したのは、家族を失った異能の少年、ヒベルニアの秘密を知るエディンバラ名誉司教、好奇心に負け続ける民話学者、冒険小説好きの書籍商。　１８世紀のアイルランドとスコットランドを舞台に、彼らの旅が始まる。

プロローグ（前書き）

災害によって心や体を傷つけられたすべての方に、この作品を捧げます。

プロローグ

夜明けが来ても　西を向いていればまだ夜だ
朝が来ても　目を閉じていれば真夜中だ

もし　太陽が昇らなかったら
東へ向かって走ればいい
僕と　世界の夜明けを見に行こう

夜の向こうには朝が
暗闇の向こうには光が
混沌の先には希望が
必ず僕らを待っている

（オペラ『ラヴェル』より「夜明け」）

＊＊＊

しかし、マキシムの弟は言いました。

「だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか」

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に異を唱えたのは、彼にとって初めてのことでした。

「まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきっとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか」

マキシムの妻は別れを惜しんで涙を流しました。

「きっとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム」

「ああ、約束する」

「約束だ」

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。しかし、約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています――。

（ヨイク・アールト著　『クラシックの歴史』（リプトン書店、１７６７年）　より　一部抜粋）

＊＊＊

そのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。

猫のようにしなやかな人影が修道院の庭に音もなく着地する。ま

るで漆黒の闇夜に現れた伝説の盗賊のようだった。修道院の塀の高さは二メートル以上あり、その上、塀の外をぐるりと掘が囲んでいる。そんな芸当を難なくやってのけるのはこの町でも彼くらいだろう。

「いい匂い」

形の良い両眉を上げ、彼は鼻腔を膨らませた。ついでに両腕を広げて月も星も見えない天を仰ぎ、その場でぐるぐると回る。しばらく子供じみた遊びに興じていると、彼の短い茶色の髪が、しっとりと甘い夜霧に濡れた。この修道院はその名の通り、ウイスキーを蒸留している。

魅惑的な香りに酔いしれてはいるが、彼は酒に深く酔う性質ではない。彼の酒の強さは大酒飲みの多いこのアイルランドでも抜きん出ていて、今夜も行きつけのパブの閉店時間までビールを飲んでいた。酔いの回った客に酒を薄めて出す店主も、彼だけはまだ騙せずにいるというもっぱらの噂である。ちなみに飲酒に年齢制限はなく、紳士としての振る舞いさえできれば、誰もが好きなだけ酒を飲むことができる。その代り、泥酔など絶対にしてはいけない。

朝から建設現場で働き、夕方には行きつけのパブでギネスビールを飲み、夜が更ければ歌を歌い楽器を鳴らし、深夜になって町はずれの修道院へ帰って来るというのが彼の日課だった。門限に間に合わず、塀を乗り越えて修道院内のねぐらに戻るのもいつものことだ。昼間はウイスキー造りやレース網みや農作業に精を出すおせっかい焼きの修道女がうろうろしているこの庭も、深夜を過ぎた今ではしんと静まり返っている。建物から火の気は消えていて、どんなに耳をすましても物音の一つもしない。

修道女たちの眠りを妨げることのないようにと彼はそっと草を踏んで庭を横切った。敷地内には修道女や病人が寝起きする居住棟と事務所、礼拝堂が建っていて、礼拝堂の裏には果樹園や畑が広がり、そこでは林檎や野菜や小麦をつくっている。彼は礼拝堂の横を通り過ぎ、木の葉や小枝を踏みしめて収穫の済んだ果樹園を抜ける。その先にある開けた草地へ近づくにつれ、彼の足取りは徐々に重くなっていった。

「ただいま、帰ったよ」

彼が足を止めた場所は墓地だった。本来は修道院内で亡くなった老人や病人を葬るための墓地だが、最も新しい墓標の一つには彼の妹の名が刻まれている。彼は草地に片膝をつき、冷たい石の墓標にそっと触れた。

「今日も三月地震で壊れた旧街道の石畳を直したよ。幹線道路や街の中心部の修繕が済んだから、やっと旧街道に手をつけられるようになったんだ」

今から九ヶ月前の一七六五年三月九日、未曾有の大地震がヨーロッパ全域を襲った。震源地は各地に散らばる断層や火山であったが、それらがほぼ同時に大地震を引き起こした原因は解明されておらず、地震とそれに続いて起こった津波や火事、大雨や洪水などの災害は総じて三月地震と呼ばれている。

大地震は町や道や港湾を壊し、津波や洪水は建物や家畜や農作物を押し流したが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。三月地震の発生から今日までの九ヶ月間、世界中の空が分厚い雲に覆われて一度も太陽の光が差さないのだ。最初は火山灰が上空を舞っているだけだろうと楽観的に考えていた者もいたが、しばらくするとそんな

ことを口にする者は誰もいなくなった。太陽の光が差さない、たったそれだけのことがどんなに恐ろしい未来を紡ぎだすのか、秋が訪れるまでもなく人々は悟っていた。人間が口にする農作物も、家畜の飼料も、魚介の餌となる微生物も、十分な日差しがなければ育たないのだ。

案の定、今秋の収穫は昨年の半分以下で、世界中が厳しい飢饉に見舞われている。彼の住むアイルランドも例外ではなく、ビールは値上がりするし、育ち盛りだというのに一日二回の食事はジャガイモ料理ばかりだ。

「三月地震は神が我々に与えた試練である。神のしもべとして祈りを絶やさず善行に励むことを欲する。災害の混乱に乗じて悪事を働けば決して神の国に行くことはできない。最後の審判を忘れることなかれ」

そのエディンバラ教皇の声明は日曜の礼拝で馴染みの司祭の口から耳にたこができるほど聞いた。それならオレはもう神の国には行けないな。彼は自嘲して墓標に触れていた手をだらりと垂らした。

とん。

遠くでかすかな音が聞こえた。少し前に彼がしたように、誰かが修道院の塀を乗り越え庭に着地したような音だ。彼は素早く立ち上がり、足音を忍ばせて来た道を戻った。果樹園の林檎の木の隙間からそっと様子をうかがうと、背の高い男の影がゆっくりと居住棟へ向かうのが見えた。

ウイスキー修道院はこの港町ベルファスト唯一の女子修道院である。老病人以外の男性の立ち入りは日の出から日没までと決められているので、こんな真夜中に男が訪ねて来るのはおかしなことだっ

た。見知らぬ訪問者は実にのんびりと、暢気にゆったり歩いている。応対に出るべきかと彼が林檎の木の影で思案していると、訪問者の男は思い立ったように急に方向転換して彼のいる果樹園に身体を向けた。

男は聖職者のようだった。暗闇に浮かび上がるほど白い肌と背中で結んだ金褐色の長い髪がとても上品で、地面に届きそうなほど丈の長い濃紺色の法衣をまとった身体はがっしりとしている。年の頃は壮年に見えた。長いまつげに縁取られた瞳は翡翠色で、腰に提げている数珠も同じ色をしていた。

相手が聖職者と分かると彼は林檎の木の影から出た。男も彼に気が付いたようで、ゆっくりとした動作で彼の方を見た。

「こんばんは」

男の口から聞こえたのは、音楽のような声だった。低く響く穏やかな声で暢気な挨拶をしながら、男は彼に向かって微笑んだ。だが、その微笑みが一瞬のうちに固まったのを彼は見逃さなかった。男は彼の顔を穴があくほどじっと見つめたり、芝居じみた仕草で自分の目をこすったりしている。

「こんばんは。……あの、何か？」

居心地の悪い思いで彼が問うと、男は我に返ったように居住まいを正したが、すぐに愛好を崩して再び親しげに彼を見つめた。それはうっとりと、愛おしみ慈しむような瞳だった。はっきり言って気持ちが悪い。男が聖職者だと知って安心していた気持ちが消え、彼の心に警戒心が生まれた。だが同時に何かもっと根の深い感情が、彼の心の隅っこでわずかに疼いた。それが何なのかは今の彼には分

からない。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。――君はシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメかな？」

1．ウイスキー修道院

そのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。今夜二人目だ。

広大な緑の敷地は高い塀と深い堀で囲まれている。ギーヴ・バルトロメはその内側の芝生に、木の葉のように着地した。このウイスキー修道院を訪れるのは六十年ぶりだった。

「うわあ、やっぱり相変わらずだあ」

ふわふわと夜霧とともに漂うアルコールの香りに、ギーヴは顔をしかめた。ウイスキーを蒸留しているこの女子修道院は昼でも夜でも一日中、酒の匂いがぷんぷんするのだ。酒好きにはたまらないだろうが、ろくに酒が飲めないギーヴにとっては騒音と同じか、それ以上の迷惑である。

つい何日か前にうっかり飲んでしまったフルーツビールで泥酔したことを思い出し、ギーヴは頭を振った。口で息をしながら、「よいしょ」と言っておもむろに歩き出す。本人は急いでいるつもりだったが、はたから見れば暢気に散歩しているとしか思えない足取りだった。

「この匂いだけで酔いそう。エディンバラより酷いよ」

彼の暮らすスコットランドのエディンバラの悪臭は国際的にも有名で、「エディンバラは一マイル先からも匂う」と言われるほどだ。パリ同様、家庭の窓から汚物を投げ捨てるので、街はいつでも悪臭が立ち込めている。

ウイスキー修道院の庭はまるで林のようだった。両腕をいっぱいに広げたようなナラの木が乱立していて、闇よりも濃い直線的なシルエットを天に向かっていくつも作り出していた。その根元にはやせたドングリがごろごろと落ちていて、白い花が黄緑色の冬草に紛れるように点々と咲き、軽く跨いだ小川には薄氷が張っていた。

ギーヴが風を切って庭を横切ると、身にまとった濃紺の法衣のひだが扇のように広がり、月明かりも差さない漆黒の闇にとろけた。地面についた錫杖の輪がりんと澄んだ音を奏でる。ギーヴの目に礼拝堂の裏に広がる果樹園が映ったのはその時だった。六十年前にここを訪れた時もギーヴは果樹園に足を踏み入れている。天気の良い秋の昼下がり、修道女たちが林檎の木陰で食後のお茶を飲みながら笑いさざめいていた光景を思い出し、ギーヴはちょっと寄り道をしてみようという気になった。

くるりと方向転換して果樹園に向かうと、六十年前の記憶がまざまざと蘇り、ギーヴは少々ばつの悪い気持ちになる。前回、ギーヴがここを訪れたのは彼の兄嫁を家出から連れ戻すためだった。ギーヴはその兄嫁に横恋慕していたが、もちろん彼女を兄から奪い取ろうとか、兄に内緒で彼女と関係を持とうなどとは一度も考えたことはなく、彼女への想いや不埒な劣情は胸の奥に鍵をかけてしまい込み、誰にも打ち明けなかった。だが。

「迎えに来てくれて嬉しかったわ」

彼女にそう言われた時、ギーヴはひた隠していた想いを彼女に告げてしまった。彼女はさぞ困っただろう。優しい彼女はギーヴを傷つけないように気遣いながら、きっぱりと彼を拒んだ。ギーヴは悲しかったが、同時にひどくほっとしたのを覚えている。

果樹園は六十年前より大きく広がっていた。確か何十年か前にもらった手紙に、オンフルール村の林檎の苗を何本か移植したと書いてあった気がする。フランスのギーヴの故郷からやってきた林檎の木がアイルランドですくすくと育ち、人々に美味しい実をふるまっている。感慨深く心を弾ませた時、果樹園の中から小柄な人影が颯爽と現れた。修道女だろうか。

「こんばんは」

こんな夜更けに出歩くとは奔放なシスターだと笑いながら近づくと、夜の闇の中で、その人の顔はどうしてかずいぶんよく見えた。

それはギーヴがかつて恋慕っていた女性の顔だった。

「あのー……何か？」

不審者を見るような目で見つめられ、ギーヴは我に返った。よくよく見ると、目の前の人物は少年だ。年は十代半ばくらいだろうか、中性的な顔立ちは幼く見えるが眼光は刃物のように鋭く、細身の体にオリーブグリーンの上着とズボンを身につけている。短い髪も瞳もアンジェラと同じ茶色だった。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。――君はシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメかな？」

容姿と年齢から判断してギーヴはそう言った。確かアンジェラの曾孫の中で男の子は一人だけだったはずだ。彼の名前がコルガーといい、古代アイルランドの言葉で「荒武者」を意味するということ

はアンジェラが手紙で教えてくれた。

「確かにオレの名前はコルガー・バルトロメですが、シスター・アンジェラの曾孫ではありません。神の花嫁に子や孫はいませんからね。――シスター・アンジェラに御用でしょうか？」

コルガー少年は一瞬だけ驚いたような表情を見せたが、すぐに涼しげな顔で大嘘をついた。外見は曾祖母似で、性格は曾祖父似なのかもしれない。マキシムにもそういうところがあった。やたらめったら口が達者なのだ。

「隠さなくていいよ。俺はギーヴ・バルトロメ、つまり身内だ。アンジェラの曾孫はたしか男の子が一人に、女の子が三人くらいいるんだっけ」

「……妹は二人ですよ。二人とも死んだけど」

コルガーは数秒間の思案の後、低い声で真実を明かした。聡明な子だ。

「緊急のご要件ならお取次しますが、そうでなければ明日改めてお越しください。ここは日没以降、男子禁制ですから」

「前に来た時は快く泊めてくれたよ。それに、君も男子じゃない」

「オレはいいんです」

よく分からない。一刻を争うわけではないものの、こんな時間にやってきて緊急じゃないと言ったらそれはそれで怒られそうだったので、ギーヴは取り次ぎを頼むことにした。

「取り次いでくれないかな？この時間じゃあどこの宿も開いていないし、どちらかというと急ぎの用件だから」

「シスター・アンジェラは最近寝つきが悪いようなので、できれば起こしたくないんですけど、それでも取り次げとおっしゃいますか？それともシスター・アンジェラが起きるまでお待ちいただけますか？」

朝まで待てと言われている気がする。気を遣えと。

「分かったよ。アンジェラが起きるまで待たせていただきます」

ギーヴは降参した。どうやらアンジェラは曾孫にとても愛されているようだ。そう思うと、少年の手厳しい対応も悪い気がしない。むしろ、彼の強引で計算高いところが兄マキシムを思い出させて嬉しくもあった。

「ようこそ、お茶を淹れますね」

コルガーはそれまでの慇懃無礼が嘘だったように破顔した。その底抜けに朗らかな花のような笑顔を見て、ギーヴもつい笑ってしまった。どんなに泣いても怒っても、あっという間に端から忘れていくのが典型的アイルランド人だと聞く。アンジェラの容姿を引き継ぎ、マキシムの性格を受け継ぎ、アイルランド人の気質を持つ、これが兄の曾孫か。

コルガーが先に立って修道院の事務所へ向かって歩き出し、ギーヴは彼の小さな背中をのんびりと追った。コルガーは楽器ケースを背負い、小脇にスケッチブックを抱えている。黄緑色の芝の上を歩く足取りは弾むように軽く、その下で踏みつぶされたドングリがぱきぱきと楽しげに歌う。

「ねえ、背中の楽器は何？」

訊ねると、コルガーはわずかにギーヴを振り向いた。アンジェラに良く似た茶色の目がくるりと動く。さっきまでの鋭さは消え、小動物のように可愛らしい。ギーヴの心にはすでに血縁者に対して抱く親愛の情が芽生えていた。

「フィドルですよ」

コルガーは意味ありげに唇の端を上げた。

「フィドル？」

聞いたことのない名前の楽器だった。ギーヴが首をかしげていると、少年はおかしそうに目を細めながら脚を止めて楽器ケースを背中から下し、蓋を開けて中身を見せてくれた。それは紛れもなくバイオリンだった。

「アイルランドではフィドルって言うんです」

「へえ、君は演奏家なの？」

「演奏家？まさか！パブで弾くんですよ。みんなで色んな楽器を持ち寄って合奏（セッション）するんです」

ギーヴが暮らしているスコットランドにもパブの文化があるが、アイルランドのそれはまた独特だと言う。下戸のギーヴには無縁の世界だ。

「あの、あなたはシスター・アンジェラとどういったご関係で？」

フィドルを背負い直しながらコルガーはギーヴを遠慮がちに見上げた。頭二つくらいの身長差のある少年がようやく自分のことを訊

ねてくれたのでギーヴは気分良く答えた。相手の反応がおおよそ見えているだけに躊躇いはなく、むしろ面白がっている節もある。

「俺はマキシム・バルトロメの双子の弟だよ。アンジェラにとっては夫の弟、君にとっては……大大叔父さんかな。実は俺、こう見えて百九歳」

疑わしげな顔をするか、大嘘をつくなと怒りだすか、馬鹿にするなと鼻で笑うか、この子供はどんな反応を示すだろう。ギーヴはひねくれた思いでコルガーの表情をうかがった。ところが、少年は感心したような顔でギーヴをちらりと見たきりで、再び事務所に向かって歩き出した。

「へえ、大大叔父さんかあ」

拍子抜けして彼に続くのが遅れたギーヴは慌ててコルガーを追いかけた。慌ててと言っても全く速くない。

「あの、君、それ信じるの？」

「え、嘘なんですか？」

コルガーは振り返りもしない。

「いや、嘘じゃないけど、本当に本当だけど。こんなに簡単に信じてもらうの初めてだから、どうしてかなあと思って」

どう見ても三十歳前後の容姿のギーヴが十七世紀の生まれで、こともあろうに百歳を超えていると聞いて驚かない者はあまりいない。驚かないとしたら、鼻から信じていないか聞き間違えたと思っているかのどちらかだ。しかしコルガーはそのどちらでもないようだっ

た。

「それはもう」

低く切り出し、コルガーは脚を止めてギーヴに向き直った。小動物のようだった彼の目が再び刃物のような鋭さで光る。この子供が抱えている何か暗く重たいものの正体がギーヴにも垣間見えたような気がした。

「それはもう、他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえると思うから」

眉を下げ、苦々しく微笑んだ少年はアンジェラにもマキシムにも似ていなかった。

「ああ、それは――」

ギーヴも苦い思いで応じる。自分の心の歪みを感じるのはこんな時だ。ギーヴの思いを感じ取ってくれたのか、コルガーはいくらか親しみをこめて彼を見つめ返してくれた。ギーヴは片頬を上げて微笑む。

「――同感だね」

築百年以上の修道院は白い漆喰塗の壁に赤黒い瓦屋根が乗っている二階建てだ。コルガーはギーヴを事務所の中の小さな応接室に通し、熱い紅茶を淹れてくれた。石造りの応接室には堅い木の机と揃いの椅子が四つあり、その足元には古い絨毯が敷かれている。

壁に飾られた一枚の絵にはこのウイスキー修道院が描かれていた。

強い日差しの注ぐ緑いっぱいの庭で、青空と白壁の居住棟と果樹園を背に、修道女たちが笑いさざめいている。それはギーヴの記憶の中のウイスキー修道院のイメージとぴったり重なった。

「それ、オレが描いたんですよ」

食い入るように壁の絵を見つめていたギーヴの背後で、コルガーは照れ臭そうに言った。

「そうなの？君は楽器が弾けて、絵も描けるんだ」

振り向いたギーヴはコルガーの姿を見て目を見張った。コルガーは二人掛けの布張りのソファを片手で軽々と担ぎ上げている。

「あ、これ、眠くなったら軽く休めるようにと思って」

どすん、と音を立てて少年は暖炉の前にソファを下す。ギーヴはコルガーの言葉を思い出してなるほどと思った。「他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえる」と彼は悲しそうに言ったのだ。

「みんな五時には起きてきますから、それまでゆっくりしてて下さい」

コルガーはアンジェラが起きて来るまでソファで横になったらどうかとギーヴに勧めたが、ギーヴはそれを辞退した。時刻は二時過ぎだ、あと三時間もすれば居住棟で眠っている修道女たちは起床する。

「ねえ、それ見せてよ」

赤々と燃える暖炉の炎の前のソファに座り、ギーヴが指差したのはコルガーが脇に抱えるスケッチブックだった。コルガーは頬を染めてわずかに渋ったが、結局はそれをギーヴに差しだした。

スケッチブックにはベルファストの古い大聖堂や教会や市庁舎が描かれていた。建物の外観、内部の全体図、柱飾り、扉の彫刻、屋根の上の魔物の像、天井の造詣……色々な角度から執拗なまでに描かれたスケッチは、少年の入れ込みようをうかがわせるには十分だった。

「やっぱり。タッチがマキシムによく似てる」

スケッチブックをめくりながらギーヴはのんびりと言った。胸に懐かしい気持ちが広がり、暖炉の炎で温まり始めた身体と心が眠気に誘われる。兄も絵を描く人だった。彼はギーヴにはない才能を他にも多く持ち合わせていた。

「君は建築が好きなんだねえ」

ギーヴがソファの背によりかかり、背後に立つコルガーを顧みると、彼は暖炉の炎に照らされたギーヴの姿を頭からつま先までゆっくりと見下した。ギーヴは僧侶が着用する黒の詰襟の上に丈の長い濃紺の法衣をはおり、自分の背丈ほどの長さの錫杖を脇に抱えている。

「失礼ですけど、濃紺の法衣を着る方がエディンバラ教会にいるという話は聞いたことがありません。エディンバラ教皇は純白、枢機卿は朱色、司教は紫、司祭は灰色の法衣をまとうものでしょう？あなたはエディンバラ教会の方ではないのですか？」

ギーヴの身元を見極めようとする少年の問いは鋭かったが、彼の声や表情からは何故だか警戒心は感じられなかった。ギーヴはどこまで本当のことを話そうかと頭をかきながら、自分の隣に座るようコルガーを促した。

「さすが修道女の曾孫だ、よく知ってるね。そうだよ、俺はエディンバラ教会のヒエラルキーからはずれているんだ」

「ヒエラルキーからはずれてる？」

コルガーはギーヴの隣に腰を下して首をかしげた。

「俺は六十年間エディンバラ教会に囚われていた、名ばかりの司教なんだ。実は閉じ込められていた塔から脱走して来たお尋ね者なのさ」

2. 冒険のはじまり

ギーヴがウイスキー修道院を訪れる二日前、十二月一日のことだ。

ギーヴは窓を開けた。分厚い木の窓は勢い良く開いて、塔の中に重く溜まっていた空気がみるみる外へ吸い出されてゆく。彼は胸一杯に息を吸い込み、大きく伸びをした。この塔に幽閉されて六十年、飽き飽きするほど眺めたエディンバラの街は今日も変わらず美しい。薄らと朱色を帯びた夕暮れの光に照らされた赤いレンガ屋根群は、まるでルビーのように輝いていた。

「案外あっさり帰って来るかもだけど、行ってくるよ」

窓に背を向け、ギーヴは多少の感慨を込めて自室を眺めまわした。可愛らしい小さな木の丸テーブル、テーブルと揃いの椅子二脚、天蓋つきの寝台、火の消えた暖炉、礼拝台、木のついたて。それがこの塔に閉じ込められた彼に与えられた全ての家具だった。

囚人のように扱われ、惨めな気持ちにならないわけではなかったが、もし自分が普通の人間に生まれていたら、今頃もっと苦しい生活をしていたに違いないとも思う。雨風をしのぐ屋根のある場所で寝起きできるだけましだ。ギーヴには自分の不遇に酔いしれる趣味はなかった。たとえ学者でありながら一冊の本を持たなくとも、エディンバラ大学図書館への出入りが許されているならそれで充分だった。

彼を捕えているのはヨーロッパのほぼ全域に教えを広めるエディンバラ教会である。もっともらしく「エディンバラ名誉司教」などという位を授かったが、組織内での権限はほとんどなく、エディン

バラ城の建つ岩山にそびえる聖ピーター大聖堂に隣接する塔のひとつに軟禁されている。彼はエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒なのだ。

クラシック教徒は六十年前にエディンバラ教会から破門され、改宗しなかった者たちは処刑された。それを免れた者はヨーロッパ中に潜んでいるとも、誰も知らない遠い島に移り住んだとも言われている。彼らが反乱を起こさぬように捕らえた人質、それがギーヴだ。クラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの双子の弟である。

ギーヴは窓の外を眺め、小声で歌を口ずさんだ。

「過ぎた日々はただ懐かしく
振り返ることしかできないけれど
ただ心だけで　この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

子供の頃、マキシムとギーヴは故郷の聖歌隊で『神の歌声を持つ双子の神童』ともてはやされていた。

「愛を告げる勇気も　己の非を認める強さも
運命に立ち向かう覚悟もなかった
あなたが許してくれるなら
他にはもう何もいらない」

ギーヴの実年齢は百九歳だが、外見は壮年に見える。背中で緩く結んだ腰まで届く長い髪はつややかな金褐色で、身長は十八世紀のヨーロッパ成人男性の中でも長身の部類だ。長いまつげに縁取られた瞳は、祈りの回数を数えるために腰に提げている翡翠の数珠と同

じ色をしている。黙って立っていれば若い女性にもてないこともないが、一度口を開いてしまうと「年寄りみたい」と言動に非難を浴びることが多い。十七世紀のフランス北部の漁村に生まれ、クラシック教徒が異端とされる前から生きているのだから仕方がないといえば仕方がないのだが。

「どうも、菓子店ニュートンでーす！」

塔の地階から若い娘の元気な声がした。

「ギーヴ猊下にアップルパイをお持ちしました！」

合図だ。いよいよ始まった。

ギーヴは石の壁に立てかけてあった一本の錫杖を手に取り、別の手で自分の頭より小さな布包みを持った。荷物はそれだけだ。

「きゃあ！」

くぐもったような爆発音がして、娘が叫び声をあげた。

「何だ、何事だ！！」

「地下だ！地下道で何かあったんじゃないか？！」

複数の衛兵たちが大騒ぎを始め、それを聞きつけて大聖堂前の広場を見張っていた衛兵たちも持ち場を離れた。予定通りだ。

「さて、行こうか」

出かける覚悟を決め、六十年間も雨風から自分を守ってくれた小さな部屋に背を向けたとき、ギーヴの足の下で鐘が鳴った。この塔

は鐘楼なのだ。鐘は毎日、日の出から日没まで十五分ごとに鳴り響く。

西の空が燃えるように赤い。この鐘はこの日最後の鐘だろう。ギーヴは目を閉じて鐘の音に聞き入った。耳に慣れた厳かな旋律を、しばらく聞くことはないのだと思いながら。

鐘はまだ鳴っていたが、ギーヴは窓枠に手をかけてそこへ上った。狭い窓枠の上に立ち、思い切って外に身を乗り出すと、夕暮れの美しいエディンバラの町並みが遠くまで見渡せた。地面は遠く、人が豆粒のようだ。

新鮮な風が吹き、長い髪や足首まで覆っていた濃紺の法衣が扇のように広がる。ギーヴは思わず声を立てて笑った。六十年間感じたことがないくらい清々しい気分だった。

鐘がやんだ。ギーヴは大きく息を吸い込み、両眼を見開いて、力いっぱい窓枠を蹴って窓の外に飛び出した。年甲斐もなく、わくわくした。

――まだ、諦めるのは早いんじゃないか？マキシム。

法衣をはためかせて落下し、ふわりと石畳へ着地した彼の姿を見た者はいない。ギーヴは身をかがめて広場を抜け、階段を下りて待ち合わせ場所へ急いだ。このエディンバラから逃げ出すために。

エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメが病に伏したという噂がエディンバラ教会内で囁かれ始めたのは翌日だった。彼がクラシック教徒の人質であり、本当は脱走したのだということを知る者は少ない。

これが冒険の始まりであった。

「その後、脱走を手伝ってくれた子たちと別れて、船に乗ってアイルランドまでやって来たんだ。ここまでは郵便馬車に乗せてもらったんだよ」

ギーヴはバンゴールというアイルランドの小さな港町で船を下りた。教会の放った追手の裏をかこうと思ってのことだ。ギーヴが姿を消せば、教会が真っ先に調べるのはベルファストのアンジェラの元のはずだ。港で待ち伏せでもされていたらたまらないと思い、彼は陸路でベルファストへやってきた。案の定、市門では厳しい検問を行っていたので夜を待ち、高い市壁を飛び越えて町に入り、やっとのことでウイスキー修道院まで辿り着いた。万事不器用な自分としては大変首尾よくできたものだとギーヴは我ながら思う。

「クラシック教徒の人質？教会から逃げて来た？」

コルガー少年は困ったような顔で腕組みした。

「あなたはクラシック教徒なんですか？」

「うん。六十年前にエディンバラ教会から破門されて、そのまま教会に捕えられたんだ。ヨーロッパ中に潜んだクラシック教徒が反乱を起こさぬように」

あっさりと答えるギーヴに少年はますます困ったような顔をした。

「なぜ、ここへ？」

コルガーの質問には答えず、ギーヴは唇の端を上げた。

「君はアンジェラの曾孫で、しかもここに住んでいるんだよね。それなら、この修道院の秘密を知らないはずはないと思うんだけど」

少年が何か言おうとした時、窓の外が光った。まるで雷でも落ちたかのように一瞬だけ庭が明るくなったのだ。二人は窓に駆け寄り、外の様子を窺った。よく見ると、礼拝堂に明かりが灯っているようだった。

「こんな時間に誰だろう」

「眠れずにベッドを抜け出した誰かがお祈りをしているだけだといいけど」

修道院は日没と同時に唯一の門を閉ざして堀に架かる跳ね橋を上げる。夜更けに庭を散歩しても危険はないはずだが、コルガーの表情は厳しい。ギーヴの胸にも言いようのない不安がよぎった。心に何かが引っ掛かっている。

「オレ、様子を見てきます。あなたはここにいて下さい」

「待って、俺も行く」

ギーヴは暖炉の薪に灰をかけ、慌てて部屋を出て行くコルガーを追いかけた。嫌な予感を抱えながら二人は炊事場や食堂を抜け、門の外れていた扉を開いて外へ出た。そのとき、ウイスキーの香りに混じって妙な匂いがした。

「――魔の匂いがする」

ギーヴは背中の毛が逆立つのを感じた。コルガーもうなずいた。

「行かなきゃ」

礼拝堂に向かって走り出したコルガーの背中をギーヴは追う。辺りには奇妙な風が吹いていた。生命の気配が大いに混じった、それでいてひどく冷たい風だ。見上げると、重々しい曇天が彼らの頭上へのしかかっていた。風に吹かれ雲は確実に流れているが、それが途切れることはこの九ヶ月間で一日もなかった。

「中に何者がいるか、分かりますか？」

コルガーは礼拝堂の前で足を止め、静かにギーヴを顧みた。修道院に隣接した礼拝堂は一見すると白い石造りの二階建てだ。だが本当はレンガで造った後に石を貼り、石造に見せかけている。どこの修道会にも所属せず、修道院長も置かず、資産家の後ろ盾もないので、石で礼拝堂を建てる金などないのだ。三月地震の時に崩れなかったのは奇跡としか言いようがない。

「アンジェラと、少なくとも一人、魔法を使う者がいるね」

ギーヴは声を潜めて答え、少年と視線を交えた。

「ちなみに、こういうことに対処する自信はありますか？」

訊ねつつ、コルガーは両開きの扉の片方を押した。

「全然ないねえ。長生きだけはしてるんだけど、俺は箱入りだからね」

悪びれもせずに答え、ギーヴはもう片方の扉に手をつく。二人の手で力いっぱい押し開けられた扉はバンと音を立てて壁にぶつかっ

た。装飾のない壁と天井を持つ小さな礼拝堂の床にさっと光が差し込み、風が壁のろうそくの火を消す。入口から祭壇まで太い通路が真っ直ぐに伸びていて、その両脇に木製の長椅子が合計二十個ほど並んでいる。

長椅子の群れの向こうに、二人を顧みる人影が二つ見えた。彼らは高窓から注ぐわずかな光に照らされていた。

「ばあちゃん！」

少年は人影に向かって呼びかけた。帰って来たのは期待通りの声だった。

「コルガーね？」

張りのある堂々とした声で応じたシスター・アンジェラは、最前列の長椅子に座らされていた。その傍らにすっと立つ侵入者は、シルエットを見る限り女性だったが、着ているものは典型的な男性貴族の服だった。茶色の長い髪を丁寧に結いあげていて、化粧が濃く、胸が豊かだからすぐに女性と分かる。女であることを隠すというよりは機能性を求めての男装なのであろう。年齢は二十台前半くらいに見える。

「やあ、俺もいるよ」

「まあ、ギーヴ猊下（げいか）！よかった、あなたが病に倒れたという噂はやっぱり嘘だったのね！」

おもむろに手を振るギーヴと、歓声を上げるアンジェラに、無視されたと思ったのだろう、男装の女が動いたのは間もなくだった。

ずがん！という鈍い音とともに、祭壇と扉を結ぶ通路に小さな穴が開いた。撃ち込まれたのは銃弾だ。コルガーはギーヴの腕をつかみ、とっさに長椅子の影に身を隠した。

「あらあら、誰かと思えば、ギーヴ・バルトロメ名誉司教猊下ではございませんか」

高窓からの薄光を浴び、男装の女は胸をそらして妖艶に笑った。

「君は誰だい。エディンバラ教会の人間には見えないけど」

ギーヴは長椅子の影から顔を出し、女に訊ねた。彼女は新しい銃を構え、それをアンジェラに向ける。ところが、そこで一瞬だけ、彼女は表情を曇らせた。アンジェラを見下ろし、寂しげな顔をしたのだ。

「ええ、その通り。私はアヤ・ソールズベリ。教会とは無関係よ。あなたやシスター・アンジェラに用があるの」

女は言いながらしげしげとギーヴを見つめた。

「本当なのね。三十歳の身体に百九歳のおじいさんが閉じ込められているという噂は。あなたのことを聖なる妖怪と言う人もいるのよ」

壮年の頃から姿が変わらないこと。それこそがマキシムとギーヴがかつてエディンバラ教会に認められた『神の奇跡』だった。二人は三十歳のある日を境に、髪や爪が全く伸びなくなった。擦り傷や切り傷を作っても瞬時に癒え、傷跡さえ残らなくなった。

「いつまでもこの世にとどまり、神のために尽くすよう、老いが止

まったのだ」

当時の教皇はそう言って二人の名を福者の列に加えたが、ギーヴとマキシムだけは本当のことを知っていた。

「君はこんな夜更けに、物騒なものを持って、そんなおしゃべりをするために来たの？」

ギーヴは不愉快な気持ちを抑えて立ち上がった。無礼な女を恐れて椅子の影に隠れているのが我慢ならなかったからだ。彼の法衣の裾をコルガーが引っ張ったが構わない。

「ええ、そうよ。単刀直入に言うわ。シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

3．遠い日の約束

この年、一七六五年、世界から太陽が消えた。ヨーロッパ全域を襲った大地震の日からずっと、空が雲に覆われているのだ。なぜ太陽が雲に隠れているのかは分かっていない。作物の不作で食料の値段は跳ね上がり、人々の不満が各地で燻り始めている。各国の王たちは異常気象の原因を躍起になって探していた。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

彼女はきっぱりと言った。

「こう見えても、できればあなたたちに危害を加えたくないのよ。私はあなたたち二人が持っているヒベルニアに関する情報が欲しいだけ」

女王のような風格を持つ彼女は、アンジェラの後頭部に真っすぐ拳銃を向ける。彼女の名はアヤ・ソールズベリという。名門貴族の家系図に名を連ねる生粋のイングランド人で、現在は「ロッキンガム東方貿易会社」という企業に雇われている用心棒だ。

子爵家の令嬢であった彼女が家を飛び出し、安穏な生活と貴族の身分を捨てたことには理由がある。アヤには幼馴染の親友がいた。彼の名前はジャック・ロッキンガムといい、ロッキンガム東方貿易会社の跡取り息子である。アヤの両親は「成金商家の馬鹿息子」と言ってジャックを敬遠したが、アヤにとって彼は唯一友達と呼べる存在だった。

ロッキンガム東方貿易会社は、イングランド王国からの特別な委託事業を請け負う民間企業である。今から二十年ほど前、財政難で植民地を維持できなくなった王室が、その一部の統治を民間の資産家に開放したのだ。それに真っ先に飛びついたのがロッキンガム東方貿易会社の創始者ジョージ・ロッキンガムだった。王室御用達の商家とはいえ、それまで国内だけで収益を上げていたロッキンガム家はみるみる巨大化していき、今では植民地統治のための私的な軍隊まで保有している。

ロッキンガム家は、表向きはインド北部の領地から紅茶と小麦を運んでいる巨大貿易会社だ。安心で安全な品を扱う、誰もが知っている食料品店というクリーンなイメージも大衆に定着している。しかし、利益のためなら手段を選ばないことでジョージ・ロッキンガムの右に出るものはないということもまた業界では周知の事実だった。

「もっと不作になればいいのにな」

九月のある夜のことだ。ジョージ・ロッキンガムは孫のジャックとアヤの前でそう言った。ロッキンガム家の居間でアヤがジャックに相談事をしているところへ、泥酔したジョージ・ロッキンガムがスコッチウイスキーの瓶を手にやって来たのだ。イングランド中から舞い込む縁談話に苛々していたアヤは彼の姿を目にとめて顔をほころばせた。彼女は子供のころから老人というものが好きだった。

ジョージ・ロッキンガムは高齢にもかかわらず、いまだに会社の舵取りをしている。その日も恰幅のいい体躯を高級なスリーピースで包み、四十年前は男前だったであろう顔を脂で光らせていた。頭髪は色こそ真白だが禿げてはおらず、とても六十代後半には見えな

い。

「どこもかしこももっともっと不作になれば、俺の領地の作物がもっともっと高く売れるのに」

目を丸くするアヤの隣で、ジャックは豪快に笑った。彼はアヤより五つ年上で、この夏に二十五歳になった。祖父の過激な発言にも慣れている。

「おいおい、じいさん。そうなりゃインドの作物だって育たないだろ」

祖父の発言を丸きり冗談と受け取り、ジャックは軽い口調で言った。彼は長めの黒髪に黒い瞳の美丈夫で、ジョージ・ロッキンガムにあまり似ていない。趣味のいい赤茶のジャケットとパンツに乗馬用のブーツをはいている。彼が大股で通りを歩けばリヴァプール中の女が振り返るとも、振り返った瞬間につまずいた彼に幻滅するとも言われている。彼の底なしのどんくささは王子様のような外見と同じくらい有名だ。

ジョージ・ロッキンガムは柔らかいソファにどすんと腰を下ろし、大きな腹を震わせて笑った。

「違うさ、ジャック。俺の領地にだけは太陽が輝くんだ」

「はあ？」

「エディンバラの友人が、いいことを教えてくれたんだよ。世界中が雲に覆われ、世界が不作に見舞われているにも関わらず、ある場所にだけ太陽が輝いているんだと」

ジョージ・ロッキンガムは瓶に口をつけ、ウイスキーをごくりと

飲んだ。

「へーえ、そりゃどこなんだ？」

老人が酒を飲み下すまで待ってから、ジャックは笑いながら訊ねた。本気にしていない。

「――ヒベルニアだよ、ヒベルニア。ヒベルニア王マキシムが気象を操って、世界中の空を雲だらけにしているんだとよ」

ジョージ・ロッキンガムの声はしごく真面目だった。だからジャックもアヤも腹を抱えて笑った。

「あっはっは、じいさん、ヒベルニアはないだろ！俺たちだってもう子供じゃないんだから、御伽噺は卒業したぜ！」

「おじいさまったら、ご冗談がうまいんだから！」

だが、笑い転げる二人を見るジョージ・ロッキンガムは、やはり真面目な顔をしていた。

「まあ聞け。ヒベルニアへ行ってその気象兵器を手に入れることができたら、世界の気象を思うままに操ることができるってこった。それは想像もできないくらい莫大な利益と途方もない軍事力を生む。イングランドを買うことだってできるかもしれない」

ジョージ・ロッキンガムが本気らしいことが分かると、アヤの胸の中で亡き祖母のことが思い出された。彼女の祖母は敬虔なクラシック教徒で、クラシックのリーダー・マキシム・バルトロメたちと共にエディンバラ教会と戦った人物だった。息を引き取るその時まで、彼女はヒベルニアのことを口にしていた。ヒベルニアには離れ

離れになってしまった大切な仲間がいると。もう一度彼らに会いたい、ヒベルニアの地を踏みたいと。

「おじいさま、ヒベルニアは本当に存在するんですね？」

笑いを収めてアヤが訊ねると、ジャックが大げさにソファに倒れこんだ。

「あー、もー、しょーがねえなあ、アヤまで何言い出すんだか。ヒベルニアやアトランティスは御伽噺の舞台だろ。俺級のヒーローでも行けねっつうの、おわっ！」

勢いあまってソファから転落した孫を無視して、ジョージ・ロッキンガムは身を乗り出した。

「ヒベルニアが本当に存在するかどうか、それは俺にも分からん。だが、もし本当にヒベルニアがあって、そこに気象兵器があって、他の会社に先を越されたらどうなる？他の国に先を越されたら？大変なことになる。我々は富を絞り取られ、飢えに苦しみ、そうなったら戦争が起こるかもしれん。しかも勝ち目はない。その最悪の事態を避けるには、ヒベルニアの有る無しも気象兵器の有る無しも、俺たちが真っ先に確かめればいい。正直、半信半疑ではあるが、俺はうちの用心棒たちを何人か選抜して、ヒベルニアを探す」

ジョージ・ロッキンガムはウイスキーの瓶に口をつけ、それを勢いよく傾けた。

その時、アヤの脳裏に懐かしい思い出が浮かんだ。本当はもっと早く思い出さなければならなかった、心のどこかに引っかかっていた大切な記憶だ。

『ヒベルニアにはお砂糖の雪が降るのよ』

それは彼女が六歳の頃のことだ。舌足らずな口調でアヤは言った。生まれ育った屋敷の厨房で、お菓子の城を作っていた。かまどから漂う熱気が暖かったのを今でも鮮明に思い出せる。

『まあアヤお嬢様、そんなにお砂糖をかけられては。こちらのクリームになさいませ』

ブランデーの瓶を手にそう言ったのは祖母だった。瓶の中できらきらと揺れる茶色の液体は、お菓子作りには欠かせない。

『だめよ！ヒベルニアは誰も知らない西の果てにあって、世界で一番美しいお城があって、いろんなお花が咲いて、いろんな果物がなって、それでお砂糖の雪が降るの。教えてくれたのは、ばあやでしょ。それで、雪の下には黄金と宝石が、まるで石ころみたいにごろごろ転がってるのよね、ほら見て』

アヤが城の土台の中から小麦粉とクリームと砂糖にまみれた大量の貴金属類を取り出して見せると、祖母は卒倒しそうになった。

『お、お嬢様！奥様の宝石じゃありませんか！』

『いいのよ。あたしはいつかヒベルニアに行って、こんなもの、いくらでも持って帰るんだから！』

アヤはクリームだらけの両手を腰に当て、椅子の上に仁王立ちした。

『あたし、いつか絶対ヒベルニアを見つけるの！楽しみにしててね、

ばあや！』

祖母は目じりに涙をにじませて破顔した。

『まあ、アヤお嬢様ったら！』

忘れていた約束への想いが胸にあふれたとき、アヤの意識はロッキンガム邸に引き戻された。目の前には怪訝そうな顔をしたジョージ・ロッキンガムと興味津津のジャック・ロッキンガムがいる。

「私、行くわ、ヒベルニアへ」

アヤの唇はひとりでに動いていた。アヤがヒベルニアを見つけると誓った時に顔をくしゃくしゃにして喜んだ祖母の姿と、息を引き取る時にアヤの手を握ってヒベルニアへの思いを口にした祖母の姿が重なって、アヤの胸を締め付けた。

「行かなくちゃならなかったのよ。約束をしたから」

過去の残像を振り払い、アヤは居住いを正してソファに浅く座り直した。ジョージ・ロッキンガムの双眸を真っすぐに見つめる。酒に酔ってはいたが、彼の眼は力強くアヤの視線を受け止めた。

「おじいさま、お願いです。私にもヒベルニア探しを手伝わせてください。私の祖母もヒベルニアは実在すると言っていました。ヒベルニアの地を踏みたかったと最期の時まで悔やんでいたほどです。私が祖母の代わりにヒベルニアへ行くことができたら、祖母はとても喜ぶと思うんです」

まじかよ、と仰け反って叫ぶジャックの横で、ジョージ・ロッキンガムは深く頷いた。

「いいだろう。だが、アヤ君……その話は二度としない方がいい」

「え？」

「ヒベルニアを聖地としているのはクラシック教徒だけだ、君のお祖母さんは恐らくクラシック教徒だったんだろう。もし彼らの縁者と知れれば君も教会に睨まれる」

ジョージ・ロッキンガムの忠告に、アヤは黙って首を縦に振った。祖母が異端と呼ばれるクラシック教徒であったことをアヤは知っていた。首をかしげたのはジャックだった。

「ん？そのクリケット教徒ってのは、みんな改宗したんだろ。じゃなかったら処刑されたって歴史で習ったぜ」

「人は自分の信じるものをそう簡単に変えられないものさ。俺の友人曰く、クラシック教徒はヨーロッパ中に潜んでいるそうだ」

「双子の魂百までってやつか」

アヤは指を三本立ててジャックの鼻先に突きつけ、ジョージ・ロッキンガムは再び孫を無視して話を続ける。

「そいつが言うには、ヒベルニアを探している人間は三種類いる。ひとつは俺たち金の亡者ども。気象兵器を手に入れてひと儲けを企む連中だ。もうひとつはエディンバラ教会。奴らはクラシック教徒の反乱を恐れていて、中でもヒベルニアの勢力は目の上のたんこぶだ。人質にしている名誉司教を餌にすればヒベルニアのクラシック教どもを従えることもできるかもしれないと踏んでいるんだろう、ヒベルニアを見つけ出したら、ヒベルニア人の弾圧に走るのは目に見えている。そして最後に、クラシック教徒たちだ。ヒベルニアは彼

らにとって聖地だが、そこへ行く方法は謎に包まれている」

その島は誰も見つけてはいけない島なのではないか。そんな疑問がアヤの脳裏を横切った。だが、いずれ誰かが見つけてしまうのなら、自分の手で見つけたい。そしてできることなら、祖母が想いを馳せたヒベルニアを守りたい。気象兵器とやらが悪党の手に渡らぬようにしたい。もしかしたら、そのためにジョージ・ロッキンガムを裏切ることになるかもしれないが。

「君のお祖母さんはヒベルニアを目指す手がかりを何か残していないものかね？」

アヤの思惑など知らないジョージ・ロッキンガムは、ヒベルニア探しの最初の糸口はないものかと頭を抱えていた。アヤは平静を装いつつ古い記憶を探った。祖母が亡くなってもう十年経っている。

「たしか、ヒベルニアへ行く方法はクラシックのリーダーのマキシム・バルトロメの妻と弟しか知らないと言っていました。ヒベルニアへ行く方法を知っているのに彼らはなぜ船を出さないのだろうと祖母は不満を口にしていたように思います」

「妻というのはともかく、弟というのはギーヴ・バルトロメ名誉司教猊下のことだな」

「ギーヴ・バルトロメ猊下？どなたですか？」

「普通の人間は知らない男だ。年をとらない、聖なる妖怪さ。外見は三十そこそこだが、本当の年齢は百九歳と言われてる。幽閉された塔の中でクラシックに関する研究をしているというが、クラシックが反乱を起こさないように捕らえられた人質だ。ギーヴ猊下に接触する方法と、生きていればの話だがマキシム・バルトロメの妻の

居所を並行して探ってみよう」

祖父の言葉に誰よりも勇ましく立ち上がったのはジャックだった。

「聖なる妖怪に、異端の残党、御伽噺の島に、気象兵器とくらぁ、そりゃー面白そうだ！よし、俺もやるぜ！」

ジャックは軽いノリで笑いながらアヤの肩を叩いた。いつものことながらアヤは呆れ果て、ジャックに二言三言の小言を告げる。だからその横でジョージ・ロッキンガムがつぶやいた言葉は、彼自身の耳にしか届かなかった。

「御伽噺と言って笑っていられるのは今のうちかもしれんぞ」

そうしてアヤ・ソールズベリは家を飛び出し、ロッキンガム東方貿易会社に雇われた。たった三ヶ月間だったが、彼女は用心棒としての身のこなしを学び、体力や筋力をつけるための訓練や射撃の練習に明け暮れ、魔法を覚えるなど血のにじむような努力をした。特に男性と比べて体力的に劣る彼女は魔法の習得に没頭した。人の道にはずれると教会が忌み嫌う魔法を扱うことは、祖母を弾圧した教会への復讐になるような気がしてアヤはその行為に快感さえ覚えた。

遠い日にかわした約束は追い風を受け、今や彼女の胸に熱く燃え盛っていた。

ウイスキー修道院侵入当初、アヤはもう少しスムーズに事が進むと思っていた。シスター・アンジェラを脅して必要な情報を聞き出すくらい朝飯前だと思っていたのだ。拳銃や弾薬は多めに持って来

てはいたが、三対一となれば、ここから離脱するだけでやっとの装備である。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

アヤはそう言って、シスター・アンジェラに拳銃を向けた。出直した方が賢明かもしれないという考えが頭をよぎったが、マキシム・バルトロメの妻と弟が二人揃って目の前にいることを考えると、引き下がるわけにはいかないという気持ちの方が大きかった。

「ヒベルニアって、御伽噺のオバケ島だろ？そんなわけ分かんないもののために、ばあちゃんに拳銃なんか向けるなよ」

長椅子の影に隠れていたコルガー少年がすっくと立ち上がり、憤るでもなく、恐れるでもなく、平然と言った。気負いのない自然体な彼の言動に、アヤは一瞬ひるんだ。彼女はアンジェラに向けた拳銃を握り直す。少年がただの命知らずならいいが。

「君はシスターのお孫さん？」

年下の少年に対して、アヤはできるだけ友好的に微笑んだ。得体の知れない相手だ、なるべく優しく、刺激しないに越したことはない。だが、色気より飲み気のコルガーはただ顔をしかめた。

「修道女に子や孫がいるわけないだろ。オレはここの住人だ」

「そう。でも彼女にはマキシム・バルトロメという夫がいたのよ」

アヤはどうやって情報を聞き出そうかと考えを巡らせる。彼女が求めているのはヒベルニアへ行く方法、たったそれだけだ。

「ねえ坊や、本当のことを教えてあげましょうか。ヒベルニアはオバケ島なんかじゃないわ。一年中花が咲き乱れ、あらゆる果実が実り、雪山の下に余るほどの黄金と宝石が眠り、世界で最も美しい城があるといわれている理想郷よ」

それはアヤが祖母から聞いた話だ。

「理想郷？オレは子供のころ、ヒベルニアにはオバケがいるって聞いたぞ。悪いことするとヒベルニアへ連れて行かれるぞ、って言われなかった？」

そうだよね、とコルガーが同意を求めるとシスター・アンジェラは困ったような顔をした。アヤは苛立つ気持ちを抑えて軽く頭を振る。少年は本当に何も知らないのだ。

「いいえ。ヒベルニアはそんな場所じゃない。そもそも架空の島なんかじゃないわ。その島にはエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒たちが住んでいるの。このギーヴ猊下の兄君マキシム・バルトロメや、ヨーロッパ大陸から逃げ出したクラシック教徒やその子孫たちがね」

「ヒベルニアに人が住んでる？冗談だろ」

コルガーは苦笑して、助けを求めるように再びアンジェラやギーヴの顔を見た。二人とも口を閉ざしたまま、否定も肯定もしない。

「坊や、一七〇五年のクラシックの大行進のことは知ってる？」

「歴史の授業で習ったよ。クラシック教徒って、エディンバラ教会の教えに反する悪魔を信仰してたんだろ」

「いいえ、クラシックが崇めていたのは神の四人の妻よ。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神と言ったの。神が太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、私たちの住むこの世界を創り上げたその時、同時に四人の美しい女神たちを生み出した、そう信じているのがクラシック教徒よ」

アヤ自身はその教えを信じてはいない。もはや彼女が何かの宗教を信じることはないだろう。エディンバラ教会の裏の歴史を知れば知るほど、宗教そのものに対する不信がつのり、クラシック弾圧の歴史を知れば知るほど、信仰への執着が招いた悲劇に胸が悪くなるのだ。

「シスター・アンジェラやギーヴ猊下はクラシック教徒。シスター・アンジェラはクラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの妻で、ギーヴ猊下はマキシム・バルトロメの弟。マキシムはクラシック教徒たちを率いてヒベルニアへ渡ったけれど、この二人は大陸に留まったの。二人とも後からヒベルニアへ向かうはずだったのにそうしなかったと、私の祖母が言っていたわ。行き方を知っているのに行かなかったと」

アヤはアンジェラとギーヴへ視線を移した。何か言いわけでもして情報を漏らしてくれればいいのに、二人とも黙ったまま微動だにしない。アヤは唇をかんだ。もしヒベルニアへ行く船が出たとしたら、祖母は喜んで乗ったことだろう。しかしアンジェラもギーヴもヒベルニアを目指さなかった。そう考えると彼らが恨めしく思えてならなかった。

「私たちのことに詳しいと思ったら、あなたのお祖母さんはクラシックなのね。もしかして一七〇五年の大行進に参加していたんじゃ

ないかしら」

しばらく続いた沈黙を破ったのはアンジェラだった。銃口を向けられているにも関わらす、彼女の声はしっかりしている。これまで幾度となく修羅場をくぐりぬけてきただけのことはある、アヤは唇だけで笑った。

「ええ。祖母は熱心な信徒だったわ。そしてマキシム・バルトロメを慕っていた。大怪我をしていなければヒベルニアまでお供したのに、って」

アヤは祖母が行くことのできなかったヒベルニアの話やマキシムたちの話を聞いて育った。エディンバラ教会へ抗議の大行進を行った時の思い出は特に好んで聞かせてくれた。祖母はマキシムに心酔していた。

「あなたたちが船を出さないのなら、私がヒベルニアへ行くわ。だからヒベルニアへ行く方法を教えて頂戴」

アヤは銃口をアンジェラの後頭部にこすりつけた。ギーヴは思案するように指先でのんびり頬をかくと、ゆっくりとした口調で言った。

「あ、あのね、俺たち、ヒベルニアへ行くよ」

4．天に選ばれること

ギーヴのあっさりとした答えにアヤはぽかんと口を開けた。

「え？」

「だから、俺たちこれからヒベルニアへ行くんだ」

ギーヴは中央の通路まで歩み、身をかがめて床に片膝を着いた。小さな祭壇や何も描かれていない壁をゆっくりゆっくり見回し、それから頭を垂れて口の中で祈りの言葉を唱える。ここは、彼にとって神聖な場所なのだ。コルガーは彼の一挙手一投足を目で追った。

この人は本当に神の僕なのだ。

やがてギーヴは立ち上がり、困ったような顔でアヤを見下ろした。彼の大きなシルエットが入口に浮かび上がり、風に吹かれた法衣のひだが扇のように広がる。

「良ければ君も一緒に来る？」

さらりと言ったギーヴに、アヤは言葉を失ったように凍りついた。彼女は数秒間まじまじとギーヴの顔を見つめ、それからようやく切り返す。

「な、何を言ってるのよ！」

「だって君、ヒベルニアへ行きたいんでしょ。エディンバラ教会の関係者ならお断りだけど、君のお祖母さんは大行進にも参加したクラシックだっていうし、一緒に連れて行ってもいいよ」

「わ、私はねえ、ある組織に雇われてるの！そいつらはヒベルニアの異常気象の原因をつきとめて、それでお金儲けするのが目的なのよ！要するに金の亡者よ！」

そこまで言ってからアヤはしゃべり過ぎたことを悔やむように口を覆った。アヤたちの目的を聞いてアンジェラとコルガーは目を見張ったが、ギーヴは驚かなかった。

「知ってるよ。異常気象の原因が本当にヒベルニアにあるのなら、それを利用しない手はないよね。どこから嗅ぎつけたのか知らないけど、列強国はみんなヒベルニアを狙ってる。どうせ君を雇っているのも、どこかの国か企業でしょう」

ギーヴの静かな指摘に、アヤは自棄を起こしたように言った。

「ええ、そうよ。夢のような話だけど、気象を操ることができれば、自分の国にだけ太陽を輝かせ、他国を飢えさせることができる。作物を輸出すればその値段は跳ね上がり、大きな利益を得ることもできる。信じがたいけど、そういう非情なことを狙っている人間が実際にいるのよ。私の雇い主もそう。――でも、それを知っていて、よくも一緒に行こうなんて言えるわね！」

「だって、人質とってるのは君の方だろ。それ以外にどうしろって言うの？」

アヤははっとして銃を握り直した。動揺したせいかアンジェラに向けた銃口が下がっていたのだ。彼女は心を落ち着かせようと深く息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「……ヒベルニアへ行く方法を教えて。それだけでいいの」

アヤは言い切らないうちに呻き声を上げて床に両膝をついた。

「そんなこと、してやる必要ないよ」

コルガーは誰にも気づかれないようにアヤの背後に回り、彼女の手から銃をもぎ取り、ついでに鳩尾に肘で一撃をくれたのだ。付け焼刃とはいえ用心棒としての訓練を受けたアヤが少年の近付く気配を全く感じなかった。アヤは歯を食いしばり、コルガーの顔を見上げた。コルガーは手の中の銃を珍しそうにしげしげと眺めている。

「こういうの、あると便利なんだろうけど、えい」

それは粘土をこねるような動作だった。コルガーの手の中で、鉄製の拳銃がぐにゃりと折れ曲がった。少年はそれを丸めてすっかり球状にしてしまうと、足元にぽいっと投げ捨てた。

「なっ……何を！」

アヤが立ち上がって後ずさった隙にコルガーはアンジェラを抱きかかえて跳躍した。美しいアーチを描いて着地したのはギーヴの後ろ、礼拝堂の扉の前だ。

「まだやる？女の人を痛めつけるのは趣味じゃないんだけどな」

そう言いつつ、コルガーはギーヴにアンジェラを預け、アヤの方へ進み出る。神聖な修道院へ踏み込み、喧嘩を売って来たのはアヤの方だ。遠慮する理由はない。

「気をつけて、あれはただ者じゃないよ」

ギーヴがささやくと、コルガーは皮肉っぽく笑った。

「オレも似たようなものだから、釣り合いが取れてちょうどいいかな」

コルガーが自分の超人的な肉体能力に気がついたのは物心ついてすぐだった。ほんの子供だったコルガーが一緒に遊んでいた兄の手の骨を折ってしまったのだ。兄には大泣きされ、両親からはこっぴどく怒られた。そしてアンジェラだけが、優しくこう言ってくれたのだ。

『あなたは神々から素敵な贈り物をもらったのね』

自分が他人と違うとどれほど思い知っても、彼女のその言葉があれば乗り越えられると信じて生きてきた。

「君のは生まれつきでしょう、彼女とはまるで違うよ。彼女は禁じられた古の知識を詰め込むことで魔法を後天的に体得している」

ギーヴは答え、アヤの姿を見た。コルガーも彼女に目を向ける。育ちのよさそうな美しい女性がなぜ魔法に手を染めたのかは分からない。だが、彼女が本気だということは分かった。彼女は本気でヒベルニアへ行く方法を手に入れようとしている。

「俺たちはヒベルニアへ行く。君たちは、その後をつけてくるといい」

音が反響するように設計された礼拝堂にギーヴの声が響いた。余裕を取り戻した女の笑い声がそれに重なる。

「私たちはヒベルニアの気象兵器を狙ってるのよ。一番にたどり着けなければ意味はないわ」
「俺たちは気象兵器なんかに興味はないよ。第一、君たちが望むような気象兵器は存在しない。この空を雲で覆ったのは極光の女神だ。彼女は人間の言うことなんか聞かない。――マキシムと俺以外の言うことなんか聞かないんだよ」

極光の女神。

ギーヴの口からするりと出た言葉は何とも甘美な響きを持っていた。

「……どういうこと？」
「俺たちは遠い昔の約束を果たし、極光の女神を止めるためにヒベルニアへ行くんだ」
「遠い昔の約束？」

アヤはオウム返しに訊ね、眉をひそめる。その一瞬の後、コルガーは鼻孔を刺激する不快な匂いに気が付いた。開け放たれた扉の向こうから、ウイスキーの香りに混じって焦げくさい匂いがした。

「まさか……！」

礼拝堂を飛び出したコルガーの目に飛び込んで来たのは、果樹園の方角に揺らめく真っ赤な光だった。

「火事だー！火事だー！かなりやばい大火事だー！」

炎の向こうから若い男の間延びした声が聞こえ、コルガーは走り

出した。男手がなく、閉鎖された修道院で火事ほど恐ろしいものはない。

少年が超人的な速度で走り去ると、アンジェラは深いため息を吐き出して礼拝堂の外に出た。ギーヴとアヤもそれに続く。

「あの果樹園には大切な林檎の木があったの。思い出の林檎の木がね。火をつけたのはあなたのお仲間でしょう、今夜はもうお引き取り下さい」

憤るでも悲しむでもなく、アンジェラは静かに告げた。その時アヤは、彼女の茶色の瞳が少年の目にとてもよく似ていることに気がついた。

「……ありがとう」

アヤはギーヴとアンジェラを交互に見つめてそう言った。何がありがとうなのかアヤ自身も分からぬまま、彼女は脱兎の如く逃げ出した。その足の速さや身のこなしは、やはり魔法に手を染めた者のそれだった。

「アンジェラ、早くみんなを起こして、門を開けて外に逃げるんだ」

「大丈夫よ、猊下。コルガーが何とかするわ。神々はね、あの子の期待を決して裏切らないの」

「それでもだめだよ。逃げて」

自信たっぷりのアンジェラに言い捨て、ギーヴは緩慢な動作で柔

らかな冬草の上を走った。本人はとても急いでいるつもりだ。ギーヴが林檎の木が密集する果樹園にたどり着くと、コルガーは夜露に濡れた草に片膝をつき、両手を組み合わせて燃え広がる炎を見つめていた。

「コルガー？」

ギーヴが後ろから声をかけると、少年はぱっと顔を上げ、朗らかに笑った。

「オレがこうすると雨が降るんです。雨が必ず助けてくれるんです。ここの人たちはみんなオレの家族ですから、オレが何とかするんです」

当たり前とでもいうような、自信に満ちた顔だった。子供のころのアンジェラにそっくりだなと口の中でつぶやき、ギーヴは微笑んだ。暗い空を見上げると、鉛色の雲が空を覆っている。三月地震以来ずっと居座り続けているその分厚い雲が雨を降らせたのは、ここ数カ月でも数えるほどだ。

「ばあちゃんはオレの天使なんだ。みんなや修道院に何かあれば、ばあちゃんが悲しむでしょ。それはだめなんです」

「天使？骨と皮の？」

「そう、骨と皮の！」

ギーヴはおかしくなって吹き出した。二人がけらけら笑うと、それに同調するかのように雷が低く呻いた。ギーヴは少年の隣に立ち、彼が組み合わせた小さな両手に片手を置く。その瞬間、コルガーは息をのんだ。

「あ」

ぽつりと少年の手の甲に雨粒が落ちてきた。夜明けの遠い闇の中、しとしとと救いの雨が降り出したのは間もなくだった。雨脚は次第に強くなり、肌に当たると痛いほどだ。二人はあっという間にずぶ濡れになり、果樹園を蝕む炎の手は脆くも崩れ去る。白煙を上げながら赤い光が消えていく。

辺りが再び暗闇に包まれると、ギーヴはコルガーの手から自分の手を離した。その途端、何かで遮ったように雨がぴたっとやんだ。

「……あなたは何者ですか」

組んでいた手をほどき、コルガーは立ち上がった。それでも、彼がギーヴと目を合わせるには顔をうんと上げなければならなかった。ギーヴは濡れた髪をかき上げ、首をかしげて微笑む。

「答えになってないかもしれないけど――俺はバルトロメ家の人間だ。君と同じだよ」

二人はお互いの目の中に、自分と同じものを見つけた。それは、人と違う何かを持って生れたものの悲しみだ。誰も、天に選ばれることを望んだわけではなかった。

「同じかあ」

コルガーは肩をすくめ、空を仰いで息を吐き出した。その唇には、わずかに笑みが浮かんでいた。同じ悲しみと同じ喜びを噛みしめ、ギーヴも微笑んだ。

5．異端の女神（前書き）

クラシックの歴史についてのギーヴの朗読から始まります。

5. 異端の女神

「むかしむかし、古代のヨーロッパにおける宗教の中心地はバチカンでした。バチカン教会は古くからの教えを守り、神を崇め、神の四人の妻を女神と呼んで慕っていました。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神といいました。

神とは自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすものです。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、四人の美しい女神たちとこの世界を同時に創ったといわれています。

中世になると、異民の侵略によって弱体化した教会は、権力を別の都市へ移します。教皇はエディンバラに移り住み、教会は以後、エディンバラ教会と呼ばれるようになりました。それから間もなく開かれたのがグリンヒル公会議です。この七日間に渡る話し合いの末、教会は神を唯一神とし、四人の女神たちの存在をこの世から抹消してしまいました。妻の存在を隠して神から人間性をとりあげ、神を唯一無二の超越した存在に仕立て上げることで、教会の権力を強めようというのが教会の狙いでした。

聖書や福音書が書き直され、あるものは焼き捨てられました。女神の描かれた宗教画や壁画やステンドグラスも失われました。彼女たちを讃える歌も歌うことを禁じられました。それまで妻帯することができた聖職者たちは次々と離縁させられ、彼らの家族はばらばらになりました。失いかけた教皇の権威を取り戻し、教会を建て直すためだけに、神も人間も人間らしさを奪われたのです。

しかし、やがて新たな宗派が生まれます。ルネッサンス文化とともに生まれた考え方です。ルネッサンスとは、迷信や聖書を鵜呑み

にし、エディンバラ教会の言いなりになっていた中世に差し込んだ理性という名の光です。もちろん、その考えに賛同した者の多くが知識人ではありましたが、盲目的に聖書を信じる者は減りました。科学に目覚める者も、美や欲望を追い求める者も現れました。それは暗黒のような中世を抜けた、輝かしい近世の幕開けだったのです。

中世以前に存在していた人間らしさを追求する彼らは、古代遺跡から発掘された情報をもとに、女神たちを崇めるようになりました。配偶者を持ち、自分たちと同じように笑い、怒り、悲しむ魅力的な神々を、彼らは心から愛したのです。それは瞬く間にヨーロッパ中へ広まり、『古典へ帰れ』と唱えた彼らはいつしか『クラシック教徒』と呼ばれるようになりました。

それが再び、中世の暗闇に飲み込まれたのが一七〇五年のことです。エディンバラ教会がクラシックの教えを改めて異端としたのです。教会は、唯一絶対の神に妻など存在しないと、もう一度、女神たちの存在を公に否定しました。

ルネッサンス期に好んで制作された女神の絵画や彫刻は破壊され、彼女たちについて書かれた本は焚書の憂き目に遭いました。中世に行われた悲劇が再び繰り返されたのです。知恵をつけ、賢く自由になった人々の心が聖書から離れていくことを教会は恐れたのでしょう。教会は神が高潔で唯一無二の存在であることを徹底的に説き、女神たちをもう一度歴史から抹殺したのです。神がいつも人々の心を惹きつけ、スポットライトを浴び続けるただ一人の英雄でいられるように――。

中世に起きた最初の女神末梢の時、人々は教会に従いました。彼らは女神を忘れ、唯一神と教会を信じました。しかし、今度は違います。クラシック教徒たちは改宗を迫られると集会を開きました。

力を合わせて抗議し、エディンバラ教会の決定を覆そうとしたのです。その運動のリーダーがマキシム・バルトロメという男です。彼はフランスの漁村オンフルールの修道士でした。マキシムは妻と弟の助けを借り、ヨーロッパ中のクラシック教徒に呼びかけ、フランスから海を渡り、エディンバラへ向かって抗議の大行進を始めたのです。マキシムたちと共に歩いたクラシックの数は千とも万とも言われています。

もちろん、エディンバラ教会は黙っていませんでした。大行進のために留守になったクラシックの教会や修道院へ立ち入り、女神崇拝の象徴を没収して回ったのです。没収された絵画や古代の聖書は街の中央広場にうず高く積み上げられ、歴史的に価値のある物さえ容赦なく火をつけられました。弾圧は厳しく、マキシムたちは行進の途中で、教会との武力衝突を繰り返します。それによって多くの死者や怪我人を出し、やがて彼らはヨーロッパを去ることを決めました。ヨーロッパを出て、西の果てにある島ヒベルニアを目指そうとしたのです。

しかし、マキシムの弟は言いました。

『だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか』

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に意を唱えるのは、彼にとって初めてのことでした。

『まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきっとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか』

マキシムは答えます。

『待ってくれ。俺は諦めたわけじゃない。俺たちは信仰を諦めないためにヒベルニアへ行くんだ』

すると弟は首を横に振りました。

『エディンバラ教会は規律ある中世へ戻れという。クラシック達は古典へ帰れという。俺は古典でも中世でもない、この時代らしさを、ここで探したい。いろいろな信仰や思想が共存できる、この時代らしい信仰の在り方を』

弟は迷いのない言葉を続けます。

『だから俺はエディンバラへ行くよ』

『よせ、殺されるぞ！教会が俺たちに容赦しないことは十分に分かっただろう！』

『いいや、教会は決して俺を殺せない。俺に危害を加えればクラシックが黙っていないことは教会も知っているんだ。何より、俺が殺されたとしたらおまえが何をしでかすか。教会はその事態を恐れているはずだよ』

弟はマキシムを安心させるように柔らかく微笑みました。

『今まで宗派も国境も世代も越えて、色んな人たちと意見を交わしてきたんだ。これまでのように彼らと共に暮らすことができなくなるなんて嘘だ。どうして、みんな一緒にいられないんだ？おかしいだろう？――だからまだ、諦めるのは早いと思うんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。どうかそれま

で待っていてくれないか』

弟が頑固に言い張るのでマキシムはしぶしぶ頷きました。

『君は来てくれ、アンジェラ』

妻が大陸に残ることを、マキシムは頑なに認めませんでした。誰がヨーロッパ大陸に残っても、彼女だけは自分と一緒に来てくれると思っていたのです。

『マキシム、よく考えて。ヒベルニアへは長い航海に耐える体力がなければ行けません。ここには怪我人のクラシックがたくさんいるし、どうしても故郷を捨てられない人だって、新しい土地へ旅立つ勇気がない人だっているわ。彼らの面倒を誰が見るの？故郷に帰すにしても、時間と労力は必要だわ。語学力と統率力のある人間が何人かここへ残らなければ。彼らを見捨てたとなれば、あなたは人々の信頼を失うことになります。私が残れば、誰にもあなたの悪口は言わせません』

『俺は実の弟を残していくんだ、それで十分じゃないか』

『マキシム、この戦いで愛する者を失った人はたくさんいるわ。家族と別れなければならなかった人も。でも、生きてさえいれば、きっとまた会える。私たちにはまだ命がある。それだけで無限の可能性があるの、私たちにも、この子にも』

妻はそう言って大きな自分のお腹を撫でました。彼女のお腹にはマキシムの子供が宿っています。口ごもるマキシムに弟が提案します。

『マキシム、俺がヒベルニアへ行く時は、彼女と、おまえの子供を

連れていくよ。必ずだ、約束する』

妻も口を添えました。

『マキシム、元気な赤ん坊を産んで、こちらでの仕事が全部済んだら、その時は私も必ず行くわ、ヒベルニアへ』

マキシムはようやく承諾し、二人はしっかりと抱き合いました。

『きっとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム』

ぽろりと妻の瞳から涙がこぼれました。

『ああ、約束する』

『約束だ』

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。ひとりはクラシック教徒を率いて西の果ての島ヒベルニアへ。もうひとりは教会との共存を夢見てエディンバラへ。最後のひとりは大陸に残ったクラシックを故郷に帰した後、拠り所のないクラシックを連れてアイルランドへ移り住み、修道院をつくりました。彼らの約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています――」

コルガーとギーヴは濡れた服を着替え、ウイスキー修道院の広間で暖炉に当たっていた。二人は毛織の絨毯に並んで座り、薪の燃える音を聞きながら、ギーヴは紅茶を、コルガーはウイスキーを口に運ぶ。厨房から、アンジェラがスープを温めるいい匂いがした。

「これはヨイク・アールトという民話学者が書いたもので、頼まれて内容をチェックしてたところなんだけど、どう？俺の話とクラシックの生き残りの日記を元にしたらしいんだけど」

ギーヴは視線を上げた。スープの入った皿を手に持ったアンジェラが戸口に立っていた。彼女はくすくすと笑い、温かいスープをコルガーとギーヴの前の床に置く。

「そうね、とても懐かしいわ。でも、ちょっと美化され過ぎなんじゃないかしら」

「君もそう思う？なんだか恥ずかしいんだよねえ。話が大げさすぎるっていうか」

ギーヴとアンジェラは微笑み合い、コルガーに目を向けた。少年はギーヴの手から紙の束を受け取り、熱心にめくっている。ヨイク・アールトという名はコルガーも知っていた。民話だか御伽噺だかを集めて大衆向けの本にした学者で、コルガーもそのベストセラー本を読んだ覚えがある。ユーモラスな新聞広告で話題になった本だ。

「冷めないうちに食べなさい」

見かねたアンジェラが声をかけると、コルガーとギーヴは両手を組んだ。

「あなた方の恵みに」

感謝の言葉をささげてスプーンをとりながら、コルガーははっとした。子供のころから食事の前に唱えるように言われていたこの言葉の「あなた方」というのは、神と四人の女神のことだったのだ。知らず知らずのうちに、自分の中にはクラシックの教えが根づいて

いる。だが、コルガーは不思議と嫌な気持ちにならなかった。

「ばあちゃんや、猊下の事情は分かりました」

じゃがいものスープをみんな胃の中におさめてしまうと体が芯から温まった。コルガーは本格的な眠気を感じた。

「でも、ヒベルニアって本当にあるんですか？」

コルガーは膝を抱え、大あくびをしながら訊ねた。つられたようにギーヴもあくびをする。

「うん、正直、俺も百パーセントの確信は持てなかったんだけど、九月に教会がマキシムの孫娘を保護したんだ。彼女はヒベルニアからやってきたと言っていて、どうやらそれは本当らしい。マキシムは今、ヒベルニア王と呼ばれてるんだってさ」

今度は二人同時にあくびをした。ギーヴは絨毯の上に寝転がって丸くなった。毛織の絨毯は硬くて寝心地が悪かったが、それが気にならないほど疲れていた。

「ヒベルニアという島はね、もともと、古の教えに登場する、女神たちの聖地なんだ。それが転じて御伽噺や怪談になったんだよ。悪いことするとヒベルニアに連れて行かれるぞっていうのは、クラシック教徒たちが聖地を隠すために流したデマだね」

へええと感心しながらコルガーもギーヴと同じように寝転がる。ギーヴはとうとう目を閉じた。

「そのヒベルニアへ行く方法を猊下は知ってるんですか？」

「もちろん。後を追うってマキシムと約束したからね」
「じゃあ、本当にヒベルニアへ行くんですか？」
コルガーは訊ね、なかなか返事が返って来ないのを見かねてギーヴの顔を覗き込む。金褐色の長いまつげはぴくりとも動かず、規則正しい寝息が聞こえ始めたのは間もなくだった。

6. ロッキンガム東方貿易会社（前書き）

場面が一転します。

6．ロッキンガム東方貿易会社

アヤ・ソールズベリとジャック・ロッキンガムはウイスキー修道院から逃げ出し市街地を目指していた。ヨーロッパの辺境と呼ばれるこの国にも、ロッキンガム家の所有する商館がある。

辻馬車がいるような時間ではないので、男装の麗人と茶色のジャケットとパンツ姿の美丈夫は自分の足で路地を歩いた。暗い裏道には浮浪者が何人も寝転がっていたが、不機嫌な顔で先を急ぐ二人のイングランド人に絡んでくる者は幸いいなかった。

「しくじって悪かったわ、ジャック。相手を舐め過ぎてた」

歩調を緩めず、アヤは言った。敗北感に苛まれながらも、彼女にはやはり女王のような気品と風格がある。二人は中央広場に面した五階建ての商館の前で立ち止まった。築百年は経っている古い建物だ。入口には金色の文字で「ロッキンガム東方貿易会社」と書いてあった。

「気にすんなよ、収穫ゼロってわけじゃなかったんだし」

「でも目的はヒベルニアへ行く方法を聞き出すことだったのに」

「ああ、でもギーヴ猊下が言ったんだろ、彼らの船について行っていいって。まあ、そうなるとヒベルニアに一番乗りってわけにはいかないけど、それでもいいんじゃねえの？うちのジジイの望みは叶うんだろ？」

そのとき、使用人によって商館の扉が開かれた。二人は暗い建物の中に入り、ほとんど手探りで階段を上って二階の一室に滑り込ん

だ。

ジャックはすぐに応接セットのソファに倒れこむ。アヤは窓に近づいて、締め切られた重いカーテンを開けた。月も星も雲に覆われているが、ほのかな明かりが応接室の空気に滲む。

「ねえ、ジャック。私の望みが、ジョージおじいさまの望みと真逆のものだったら、あなた、どうする？」

ジャックは目を丸くして身を起こした。

「はあ？」

「私、ヒベルニアの気象兵器なんてどうでもいい。私は祖母の夢見たヒベルニアの地を踏みたい。できることなら、ヒベルニアを守りたい。私の本当の望みはそれだけなのよ」

言いながら、アヤは祖母のことを思い出していた。今夜やたらと彼女のことを思い出すのは、ウイスキー修道院で仲睦まじい老シスターと少年のやりとりを目にしたせいかもしれない。

ジャックは乗馬用のブーツをはいた脚を組み、おもむろに頭をかいた。

「あのよー俺も聞いていい？いまいち分かんないんだよなあ。アヤのお祖母さんって、あのばあやのことだろ？……血、つながってないよな？」

アヤの両親がジャックの訪問を嫌がったため、彼はアヤの家に入ったことがあまりない。だが子供の頃、二人が日暮れまで遊んでいると、青いドレスにエプロンをつけた白髪の老婆がアヤを迎えにや

って来たものだ。

「ええ。彼女はうちの使用人の一人だったわ。でも、私にとっては、たった一人のかけがえのない家族だった」

アヤは父親の不義の子だった。物心ついた時から兄や姉と明らかに差別され、母親からは暴力を振るわれて生きてきた。自分の夫とメイドの間にできたアヤをいじめる母親からアヤをかばってくれたのが祖母だった。アヤを愛し、慈しんで育ててくれたのは、愛する「ばあや」だけだったのだ。アヤは彼女の恩に報いたかった。

「そういえば、そういうあなたはどうしてヒベルニア探しに加わったの？面白そうだからってだけじゃ割に合わないと思うけど」

アヤが首をかしげると、ジャックは胸を張って冗談めかして笑った。

「しゃあねえだろ。強情なダチが、どうしても行くって聞かねえからよ」

木枯らしが窓の外の木々から茶色の葉をもぎとって去ってゆく。隙間風が足元を通り過ぎて身を凍らせる。ジョージ・ロッキンガムを敵に回すかもしれない。ヒベルニアの地を踏むために命を落とすかもしれない。様々な不安が浮かんではアヤの心を重くしたが、それでも、ジャックがいればどこまででも行けるような気がした。何だってできるような気がした。

アヤが両肩を上げて破顔すると、幼馴染みもにっこりと笑った。リヴァプール中の女性の心を奪うような笑顔だったが、アヤにとっては心強いお守りだ。

「おまえの望みが何であろうと、それがうちのジジイと全然違うものでも、俺はどこまでも付き合うぜ」

親友同士が語らう部屋の前で、その扉に耳をつける者がいた。ロッキンガム家当主ジョージ・ロッキンガムに気象兵器奪取を任されたパーシヴァルという男である。長身の筋骨たくましい体は上から下まで黒い衣服に包まれていて、短い髪も切れ長の目も黒い。闇の中で白く浮かび上がる顔は整ってこそいるが見る者に冷めたい印象を与え、帝王のような威厳を感じさせる。年の頃は四十ほどだ。

「やはり信用ならんな」

気象兵器奪取を狙うロッキンガム家を裏切らんとするアヤとジャックの言葉に彼は眉をひそめ、口の中でそうつぶやいた。憤るでもなくそっとその場を立ち去ると、彼は自室に向かった。暖炉に火を入れ、黒いブーツを履いたままソファに横になって毛布を被る。

パーシヴァルはジョージ・ロッキンガムたっての願いでアヤとジャックを連れていくことにした。いつもなら子供のおもりなど御免と渋るところだが、今回ばかりは二つ返事で引き受けた。ジョージ・ロッキンガムが気象兵器を手に入れることは、彼の望みでもあったのだ。

だが、アヤはパーシヴァルに心をゆるさなかった。恐らく、パーシヴァルがヒベルニアの気象兵器に固執し過ぎているからであろう。アヤはジャックだけを連れ、パーシヴァルに黙ってウイスキー修道院へ向かった。彼らはパーシヴァルにばれていないつもりのようだ

が、イングランド王家に二十年仕えて海軍大佐に上り詰め、三月地震以降ロッキンガム家の特別用心棒として訓練を重ねたパーシヴァルが、彼らの単独行動を見逃すはずがなかった。

生真面目なパーシヴァルにとって、チームワークを乱すアヤたちの行動は不愉快でしかない。しかも、どうやら彼らは敗走してきた様子だ。パーシヴァルは一刻も早くヒベルニアへ行くための手がかりを手に入れようと、慎重に確実にシスター・アンジェラの隙をうかがっていたというのに。

パーシヴァルは毛布から顔を出し、炎の影が躍る天井を見つめた。黄金色と暗黒が絡まりあい、溶け合ってまた別れていく。揺れ動く光と影を眺めていると、パーシヴァルの瞼に眩しい記憶が蘇った。

白いレースのカーテンが窓辺で風に揺れていたのを、パーシヴァルはよく覚えている。窓の外から差し込む弱い光と、蜂蜜のように甘く澄んだ声のことも。

『どうか私のお墓は日の当たるところへつくって。風に吹かれ、雨に打たれ、草や花のように眠っていたい』

空に横たわる分厚い雲を見るたび、パーシヴァルは妻の最期の言葉を思い出した。世界は灰色の雲に覆われ続けていて、半年前に亡くした彼女の遺言を、彼はまだ果たせずにいるのだ。

もう少し待ってくれ、エヴァ。

パーシヴァルは起き上がり、茶色のカーテンを開けた。確認するまでもなく、暗い夜空には晴れることのない雲が横たわっている。

もう少し待ってくれ、エヴァ、今にきっとヒベルニアの気象兵器を手に入れてみせる。そして我らが偉大なボスが定める土地にだけ、太陽の光が降り注ぐ日がやって来る。そうしたら、俺は真っ先におまえの棺をそこへ運ぶぞ、エヴァ。

その時ノックの音がしなければ、パーシヴァルは悲しい思い出の海に身を投げてしまっていたかもしれない。妻の死に顔を目の前から振り払い、パーシヴァルはドアに近づいた。扉を開ける前に神経を研ぎ澄まして廊下の様子をうかがう。そこにいるのはアヤ一人のようだった。ジャックは立っているだけで気配が騒がしいので間違いない。

「こんな時間にごめんなさい。話があるの、いいかしら」

パーシヴァルが扉を開けると、アヤは張りつめた表情でそう言った。パーシヴァルは黙ってアヤを見下ろし、武器を持っていないことを密かに読み取る。

「作戦会議をするには不向きの時間だと思うがね」

「そうね。でも密談するには都合のいい時間だと思うわ」

女というのはつくづく秘密が好きな生き物だ。妻もよく内緒ごとを匂わせては「あなたには秘密よ」と人差し指を立てていた。パーシヴァルはアヤにソファを勧め、暖炉の上に置いたブランデーの瓶を取り上げた。

「あなたに謝らなければならないの」

アヤはソファに腰を下ろし、握った拳を膝にのせた。男装していてもすぐに彼女が女と分かるのは、体に染みついた上品な仕草のせ

いかもしれないとパーシヴァルは思った。小柄な妻のしなやかな立ち居振る舞いを思い出しかけ、パーシヴァルは首を振った。

「私に黙ってウイスキー修道院へ行ったことか？」

顔をしかめ、アヤは視線を床に落とした。苦虫を噛み潰したような顔だ。

「知ってたの？」

「私はロッキンガム家の特別用心棒だぞ」

言いながら、パーシヴァルはブランデーを二つのグラスにそそぎ、ひとつをアヤに手渡した。彼女の酒の好みなど知らないが、仕事を失敗した夜に出された酒を拒む人間もそうそういないだろう。

「それなら話が早いわ。ヒベルニアへ行く方法は見つからなかったけど、ギーヴ猊下やシスター・アンジェラと接触できたの。彼らはヒベルニアへ行きたければ自分たちについて来いと。自分たちもヒベルニアを目指すのだと言っていたわ」

「ついて来い？それではギーヴ猊下に先を越されて、気象兵器を奪われるかもしれないということだろう？」

「いいえ、あの人は気象兵器には興味がないとはっきり言ったわ」

それは君もだろう。喉まで出かかった言葉を胸にしまい、パーシヴァルは息を吐いた。パーシヴァルにとってはヒベルニアもクラシック教徒もどうでもいい存在だ。気象兵器を手に入れることができれば他には何も要らない。だから、気象兵器に興味がないと言い切るギーヴの言葉が信じられなかった。それがもし本当なら、ギーヴとパーシヴァルの利害は完全に一致するのだが。

「君が余計な事をしなければ、私はシスター・アンジェラをさらい、ギーヴ猊下から必要なことを聞き出すつもりだった。それは君たちにも話しておいただろう。これで彼らはもう隙を見せない。なぜチャンスを待てなかった?」

「あなたが目的のためならどこまでも冷酷になれる人だからよ。理由が何であっても、老人に手荒なまねをするのは反対よ。それに、私ひとりで何とかなると思ったのよ」

「仕事を舐めていたということか」

「そうね。甘く見てたわ」

アヤは勢いよくブランデーをあおった。反対にパーシヴァルはグラスを置いて立ち上がった。

「トムとジェリーには民話学者と書籍商をつけさせている。君とジャックはギーヴ猊下たちを見張れ。彼らが船に乗ったら、こちらもすぐに出港し、奴らの先導によってヒベルニアへ向かう。ヒベルニアへ上陸したら、すぐに奴らを殺す。そのために、君もこれで覚悟を決めろ」

パーシヴァルは酒瓶の並んだキャビネットから一本の小瓶を取り出した。色は黒く、ラベルはない。

「覚悟?」

直感的に身の危険を感じたのか、アヤは緊張した面持ちでパーシヴァルと小瓶を見上げる。パーシヴァルはせせら笑うように言った。

「君はなぜ彼らに負けたか分かるか？彼らはクラシックの女神に愛されている。神に対抗できるのは悪魔だ。昔からロッキンガム東方貿易会社の特別用心棒は、悪魔と契約することで超人的な力を手に入れてきた。私も半年前にアザゼルという下級悪魔と契約を交わした」

「悪魔と……契約？」

「なんだ、知らないのか。ならば見せてやろう」

パーシヴァルは小瓶を床に叩きつけた。ガラスの破片が飛び散り、瓶から黒い霧のようなものが現れる。背筋が凍り、心臓や胃袋を冷たい手で直接撫でられたような気がした。

――我が名はミスティック。おまえが差し出すものは何か。

黒い霧の中心から、腹に響くような重低音がした。それは聞き取りにくいが人の言葉だ。

――我が名はミスティック。おまえが差し出すものは何か。

「差し出すもの？」

部屋いっぱいに広がる黒い霧に圧倒されつつアヤはパーシヴァルを見た。

「神や悪魔と契約するには交換条件が必要だ。例えば、飼い犬を差し出せばそれなりの力を、両親を差し出せば巨大な力を彼らは貸してくれる」

「あなたは何を差し出したの？」

「分からない。悪魔は契約のために何かを差し出させるが、それを後から人が惜しまぬように差し出した物に関する記憶を消すんだ」

アヤは逡巡するように目を伏せた。

――我が名はミスティック。おまえが差し出すものは何か。

「ミスティック。なるほど、確かに霧のようね」

もやもやとした黒いものを見上げ、アヤはひきつったような笑みを見せた。

「私にはあげられるものがないわ。家族も資産も捨てたの。他を当たってちょうだい」

――ジャック・ロッキンガム、欲しい。

「だめよ！」

アヤは慌てた。なぜ悪魔がジャックのことを知っているのだろう。

――ジャック・ロッキンガム、欲しい。

「だめ！彼は私の持ちものじゃないわ、あなたにあげられない！」

パーシヴァルは自分が悪魔と契約した時のことを思い出した。あの時、パーシヴァルも彼女と同じように「あげられるものはない」と言ったのだ。しかし、パーシヴァルは何かを差し出した。そう、無理やり奪い取られたのだ。何か、とても大切なものを。

「お願いよ、他を当たって！私には、自分以外の何かを差し出すなんてできない！」

懇願し、アヤは扉に向かって後ずさりした。だが、悪魔は愉快そうに低く笑った。

――それが答えだな。契約は結ばれた。

悪魔の声がしたとたん、黒い霧がアヤの身体に吸い込まれた。アヤは恐怖に表情を凍らせ、苦しげに口を開閉させて床に倒れ込んだ。

7．まだ下せない背中の荷物がある（前書き）

また、一転。

7．まだ下せない背中の荷物がある

『欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる』

十歳のコルガーの目の前で、古ぼけた銀の懐中時計が振り子のようにぶんぶん揺れる。　暖炉の火が赤々と燃える父の部屋の揺り椅子で、コルガーは頬を膨らませていた。

『欲しくなーる、欲しくなーる。――どうだ？欲しくなったか？』

時計の鎖を持ったまま、父はにかっと笑った。けれどもコルガーは、そんな古臭いのは嫌だと言う。兄は誕生日にぴかぴか光る新しい時計を買って貰ったのに。

『あんなのはどこにでもある時計だ。これは世界でたった一つの特別な時計なんだぞ』

そう言って父は時計のふたを指でそっとなでた。コルガーはふてくされながら、父の表情を盗み見た。父はしわだらけの顔を悲しげにゆがめ、いつくしむように時計を見つめていたが、すぐにまた時計を振り出した。

『よーし、こうなったら別の術をかけてやる。おまえはこれを貰わなかったことを、　後悔すーる、後悔すーる、後悔すーる、後悔すーる、死ぬまで一生絶対後悔すーる……』

あんまりしつこいのでコルガーは観念した。　父は満足げに笑って彼の髪をかき回し、へたくそな歌を歌いながら向かいの椅子に腰掛けた。

――ぎんのとけい、きみにあげよう、ぼくのこころ、とわのあい。

『おまえは知らないか。私が若い頃に流行ったんだぞ』

コルガーは手の中で時計をもてあそびながら、しばらくの間、父が歌う声を聞いていた。

コルガーは目を開けた。毛布が顎の辺りまでかけられていて、部屋はまだ薄暗い。懐中時計の蓋を開けると五時を指していた。

ああ、あのまま暖炉の前で眠ってしまったのだ。そう思いながら、コルガーは九ヶ月前の三月地震で一度に亡くした家族のことをふいに思い出した。

父や兄は家の下敷きになって死んだ。同じ家の同じ部屋にいながら、不思議な力でコルガーだけが助かった。屋根や壁が崩れ、あらゆる家具や柱が住人に向かって倒れてきたにも関わらず、コルガーの周りだけが何かに守られてでもいたかのように何も落ちてこなかったのだ。彼はすり傷ひとつ負わなかった。それからというもの、彼は自分が生き残ったことに罪悪感を覚え、ときどき、生きていることが間違いのようにさえ思える。

大好きな人たちがたくさんこの世から姿を消して、もう二度と顔を見ることも触ることも声を聞くこともできないのに、自分がまだ息を吸って食べ物を食べて排泄していることが不思議に思えてならない。ぜんぶ、悪い夢に思えてならない。

そして、妹のことを思うと頭が真っ白になる。
目の前が、真っ暗になる。

コルガーがぎゅっと拳で毛布をつかんだとき、暖炉に薪をくべる音がした。顔を上げるとギーヴ・バルトロメと目が合った。

「あれ、眼が覚めた？」

彼の翡翠のような緑色の瞳は優しくコルガーを見つめた。ギーヴは片膝を立てた格好でコルガーの傍らに座っていた。長い髪を結っていた紐をほどき、襟元を緩め、ゆったりとくつろいでいる様子だった。

コルガーはなぜだか、ほっとした。

「もう少し寝ててもいいかもね」

ギーヴは暖炉に薪を放る。コルガーは半身を起して頭をかいた。

「……夢じゃなかったんだ。あなたや、変な女が来たこと」
「変な女ね。そういえば彼女、これからどうするつもりなんだろう。ある組織に雇われてるって言っていたけど、雇い主は誰だろう。ひょっとしてイギリス王室かなあ。イングランドの上流階級の言葉を使っていたよね」

「それにしちゃお粗末なスパイじゃないですか」
「じゃあイングランドの大富豪かな。どっちにしろ、気象を操って利益を得ようだなんて、神々をも恐れぬ行為だよ。まったく、経典を書き換えるとか、女神を歴史から抹消するとか、特定の宗派を弾圧するとかさ、本当に人間って――」

ギーヴは立ち上がり、暖炉にかけていた薬缶の湯をポットにそそいだ。白い湯気とともに、紅茶の良い香りがふわりと広がる。

「――身の程を、知らないよね」

そう言ったきり、ギーヴは黙ってしまった。コルガーはギーヴがのんびりと紅茶を淹れる様を眺めながら、彼の言葉の裏に隠された静かな怒りと信心を感じ取っていた。この人は、実は怒っているのだ。人間の思い上がった行動や、権力の横暴に怒っているのだ。

「そうだ、君に見せたいものがあるんだ。外は寒いから、毛布はそのまま被っていくといいよ」

二人が熱い紅茶を飲み終えた頃、沈黙がようやく破られた。ギーヴは暖炉の火をランプに移し、コルガーが立ち上がるのを待たずに扉へ向かった。

「外？」

コルガーは空のカップを床に置き、毛布を頭から被った姿でギーヴを追いかけた。ギーヴは建物の外へ出ると、林のような庭を真っすぐ横切り、礼拝堂の扉を開けた。夜明け前の闇は深く、ギーヴの持つランプの炎がゆらゆらと礼拝堂内部をわずかに照らす。彼は入口で片膝をついて頭を垂れると、静かに祈りを捧げた。

「この修道院へ来たのは初めてじゃないんだ」

ギーヴは立ち上がり、柔和な表情でコルガーを顧みた。

「前に来たのは六十年前」
「というと一七〇五年ですね。クラシックの大行進の年だ。ええと、猊下って、おいくつなんでしたっけ？」
「こう見えて百九歳。でも、あれだね。言っちゃあ悪いけど、君も十八には見えないねえ」
「……失礼な」

コルガーは首に下げた小さな木の札を服の中から引き出した。彼の掌の半分ほどの札には姓名と生年月日、性別、所属教区が彫られ、ベルファスト市の紋章がスタンプされている。

これは四月から携帯を義務付けられた市民証で旅券も兼ねる。三月地震の際、命を落とした人々の身元が分からず、引き取り手のいない数千の遺体を共同墓地に墓標も建てずに埋葬せざるを得なかったことを教訓にエディンバラ教会が取り決めた。普段は首札と呼ばれることが多い。

最初はまるで首輪でもつけられたような不愉快な気分だったが、これさえあれば誰に対しても自分の身分を証明できるのでコルガーにとっては好都合だった。

『コルガー・バルトロメ、一七四七年生まれ、男』

間違いなく十八歳の男だろ、とばかりにコルガーは胸を張った。

「人は見かけに寄らないよねえ」

ギーヴの余計な一言を無視して、コルガーは視線を礼拝堂の奥に移した。目の前にあるのは何の装飾も無い祭壇と壁だ。漆喰で塗り固められた三方の壁にも、天井にも、彫刻のひとつも絵画の一片も

ない。資金不足ここに極まれりといった具合だ。

「それで、オレに見せたいものって何ですか？」

「あ、そうだった。座って、明かりを消すから」

ギーヴは一番後ろの列の長椅子に腰をおろした。コルガーが通路を挟んだ同じ列の椅子に座ると、ギーヴはランプの炎を吹き消した。自分の手さえ見えない闇に覆われ、コルガーは目を閉じた。木々の揺れる音が聞こえ、ふくろうの鳴き声がかすかに届く。五秒後、彼は両目を開いた。

「……ああ」

コルガーはつぶやいた。

それはまるで星座のようだった。四方の壁と天井と床がぼんやりと光を放っていた。よく見ると目の前に広がっているのは彩り鮮やかな絵画だった。建物の内側いっぱいに描かれた、一枚の巨大な祭壇画だ。

「見せたいものってこれかあ」

コルガーは驚くでもなく、ぐるりと辺りを眺めまわした。

「君、やっぱりこの絵のこと知ってたんだ？」

「この絵は暗闇の中でしか見えないようになってるでしょう。それも、一度明りに照らして、それから真っ暗にすると数分間だけ光るようになってる。だからオレもこの修道院に住むようになってから気がついたんです」

背景の青空には豊かな白い雲が浮かび、小さな天使が何十人も舞

っている。祭壇の奥の、金色の太陽が輝く手前に男神が立っていて、彼は両腕で空を持ち上げるような格好をしている。隆起した二の腕の筋肉がたくましい。

「神は自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすもの。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、この世界を創ったといわれている」

ギーヴは頭上に描かれた青空を仰いだ。エディンバラ教会が定めた神は一人だけだ。その他に神は居ないことになっている。だが、男神の周囲には、寄りそうようにたたずむ四人の女神の姿があった。四人ともそっくりの姿で、官能的なまでに美しかった。

「――雨の女神、雷の女神、虹の女神、そして極光の女神。エディンバラ教会によって存在を消されてしまったが、神には美しい妻がいた。彼女たちが復権したのはルネッサンス初期に古代遺跡を発掘し、独自に女神のことを調べあげた一部の聖職者のおかげだった。それ以降、女神の絵画や彫刻が好んで製作されたけど、それも六十年前にみんな処分されてしまった。識字率が今より低い時代に焚書なんてものがあったくらいだから、それは徹底してたんだよ。だから、この絵も隠されていたんだ。聖なる術をかけて、弾圧から逃れるためにね」

「……逆行だ。そんなの、中世へ後退してるようなものじゃないですか」

こんなに美しい絵を人々の目から隠さなければならないなんて悲しすぎる。コルガーは憤った。建築や美術に関心が高いだけに、少年の怒りは大きい。

暗黒の中世からルネッサンスへの移り変わりは、美術史を見ると一目瞭然だ。中世の時代、神や聖人は絵画の中で作り物のように描かれていた。表情は無く、体は薄っぺらで、棒のように直立しているか、人形のように椅子に座らされていた。頭からは後光が差し、背景は描かれないのが普通だった。ルネッサンス期に入ると、宗教画に変化が現れた。神々や聖人がまるで本物の人間のように、瑞々しく、艶めかしく描かれるようになったのだ。神々は服をはだけ、地べたに寝転び、喜怒哀楽を惜しげもなく表すようになった。後光は小さくなり、描かれないことさえあった。背景は写実的になり、リアリティや臨場感が増した。彼らがより身近に愛されていた証拠である。

六十年前、それが再び、中世の暗闇に飲み込まれてしまった。神々は人間らしさを取り上げられ、人々は捻じ曲げられた教えによって真実に目隠しされている。中世へ逆行している。

「神様や聖人に人間らしさを加えた、ルネッサンスの巨匠を侮辱してる」

怒りをこめ、つぶやいた少年の胸にあるのは偉大な芸術家たちのことだ。彼が敬愛する芸術家が、もし女神の彫刻を造っていたら？そしてそれが教会の手によって壊されていたら？

ギーヴは昔の記憶をさぐるように、ゆっくりと語った。

「人々が賢くなって、自由になって、教会は人心が経典から離れるのを恐れたんだ。神を高潔で唯一無二のものに仕立て上げ、いつも人々の心を惹きつけていられるように、女神たちを歴史から抹殺したのさ。俺の知る限り、彼女たちの絵が残されているのはここだけだ。だけどね、コルガー、エディンバラ教会が間違っているわけじ

ゃないんだよ。クラシックが間違っているわけでもない。信仰に間違いなんてないんだよ」

生き生きと輝く神々の姿を眺め、ギーヴは自分自身に言い聞かせるかのように言葉を紡いだ。

「あれから六十年経ったけど、俺はまだ諦めてないんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。いろいろな信仰や思想が共存できるようになる。まだまだ、しつこく、俺はそう信じてるんだよ」

ギーヴが語る間に、祭壇画の彩りはしだいに褪せていった。壁に浮かんでいた壮大で繊細な絵が消え、淡い光は跡かたもなく沈み、二人の前には暗闇と沈黙が再び舞い降りた。

「さっき、空を雲で覆ったのは極光の女神だって言いましたよね。それって、三月地震の原因も極光の女神にあるってことですか？そもそも極光の女神っていったい何者なんですか？本当に神様なんですか？だとしたらどうして人々を苦しめるようなことをするんですか？」

ギーヴが答えようとした時、礼拝堂の扉が開いた。

「ああ、ここにいたのね。心配したわ」

薄明かりが差し込み、ロウソクを手にシスター・アンジェラがやってきた。

「極光の女神とは、俺や君に不思議な力を授けてくれる張本人だ。今はマキシムと一緒にヒベルニアにいるはずだよ。三月地震やこの

異常気象を引き起こしたのは彼女たちだと俺は踏んでいる。こんなことができるのは極光の女神くらいだから」

歩み寄るアンジェラを目で追いながら、ギーヴは静かに言った。コルガーは椅子から立ち上がった。じっとしていられなかった。そして、家族や、妹のことを思う。頭が真っ白になる。目の前が、真っ暗になる。

「ばあちゃん、ギーヴ猊下」

コルガーは顔を上げ、大人びた表情で二人を見た。

「オレ、三月地震で家族を一度に亡くした時、天災だから仕方がないと思った。自然の力にはかないっこないから仕方がないって、ずっとずっと、今まで、自分自身に言い聞かせてきた。妹が酷い目に遭ったのも、仕方がないことだったんだって。でも、もしこのことに人為的な原因があるなら、もしこのことに犯人がいるなら、オレ、そいつにどうしても言ってやりたい。みんなが……妹が死ななければならなかったことの根っこに犯人がいるなら、一発ぶん殴ってやりたい。ギーヴ猊下、ヒベルニアへ行くなら、オレを連れて行ってください」

ためらいなく言い切り、コルガーは胸元で両手を握りしめた。その掌の下で、古ぼけた銀製の懐中時計が静かに時を刻んでいる。

「じゃなきゃ、いつまで経っても、オレは前を向けないような気がするんです」

家族の死が誰かのせいかもしれないなら、それを明らかにしたい。そうでないと、自分の弔いは終わらないような気がする。背中に負

った荷物を、地面に下ろせないような気がする。心の闇が晴らせない気がする。

「その犯人が自分の曽祖父かもしれなくても？」

ギーヴの問いにコルガーは迷わなかった。彼はうんと顔を上げ、ギーヴの緑色の双眸を見つめた。

「はい」

「そう」

しんみりと短く応えたそれがギーヴの承諾のようだった。

「それじゃ、よろしくお願いしますね」

まさにアイルランド男児らしく、コルガーはさっきまでの沈痛な表情を顔から消し去り、ギーヴに右手を差し出しながらにっこりと笑った。ギーヴも彼に倣ってぎこちなく微笑む。

「猊下、私からも、この子をよろしくお願いします」

アンジェラはコルガーの肩を抱き、ギーヴを見上げた。

男性陣は目を丸くした。

「え、ばあちゃんは行かないの？」

「え、君が行かなくてどうするの？」

老シスターは自嘲気味に目を伏せる。

「私は行けないわ。もうこの年だし、今さらだもの」

「何が年で、何が今さらなのさ?そんなの俺だってそうだし、君を連れて行くって、俺はあの時マキシムに約束したんだ!」

「ええ、でもね……私はマキシムに会うのが怖いの。変わってしまった彼に会うことも、変わってしまった自分を彼の前にさらすことも、彼の築いた家庭を目の当たりにすることも怖いのよ。彼の妻や子や孫が私のことをどう思うか、私が彼らをどう思うか、不安でたまらい。どうしても決心がつかない」

アンジェラはコルガーの肩に置いた手をぎゅっと握った。力を込め過ぎてしわだらけの手が一層白くなる。ギーヴはそれ以上追及しなかった。

「マキシムには、君は死んだと伝えるよ。その代りにコルガーを連れて来たと」

異常気象を引き起こした原因がマキシムにあるのなら、彼の怒りに触れるようなことは避けるべきだ。ギーヴとアンジェラが六十年もヨーロッパ大陸にとどまり続けたことにマキシムが怒っているのなら、アンジェラが死んだことにすれば少しは彼の怒りを鎮めることができるかもしれない。

ギーヴの理解を得て、アンジェラはほっと息をついた。

「ありがとう、猊下。さてと、二人とも朝食までもう一眠りするといいわ。コルガー、荷づくりは入念にするのよ。セーターを着て、靴下も厚手のものを履いて、懐炉も持っていきなさい、出かける前にちょっと暖炉で暖めるだけだから。手袋やマフラーも忘れずにね、冷えは女の敵ですもの」

アンジェラはコルガーの肩を抱いたまま礼拝堂の出口に向かって

歩き出す。今さらヒベルニアへ行けないと言うアンジェラのことも、それをあっさりと納得したギーヴのことも、コルガーには理解できなかった。

「ねえ、ばあちゃん、本当にいいの？」

少年のとまどいに気がつき、アンジェラは目を細めた。彼女はコルガーの髪にそっと頬ずりする。

「私の代わりにヒベルニアへ行ってちょうだい、コルガー。あなたはマキシムの血を引いているんだもの。あの人は、決して後ろを振り向かない人だった」

8. フライオーバー

アンジェラはコルガーの荷造りに手を出し口を出し、最終的にはそのほとんどを彼女がやることになった。コルガーは手際よく荷物を詰める曾祖母の傍らに座り、円筒形の革の鞄の中に防寒着や日用品が消えていく様を眺めていた。

「そういえば、私がなぜここに修道院を作ろうと思ったか、あなたに話したことなかったわね」

コルガーの部屋の窓は南向きだ。空は雲に覆われているものの、正午ともなれば淡い光が木の床やベッドを優しく照らす。

「うん、知らない」

出発は夜だ。暗闇に紛れてベルファストを脱出し、バンゴールという小さな港町に停泊している船を目指すとギーヴは言った。別れを惜しむ時間を与えられたアンジェラとコルガーは、どちらからともなくできるだけ一緒に過ごしている。今生の別れではないにしろ、どちらかが街を出るということはこれまで一度もなかったのだ。

「私は嫁いでからたった一度だけ、家出したことがあったの。マキシムのそばにいるのが辛くなってね。当時、私やマキシムやギーヴ猊下はフランスのオンフルール村の林檎修道院というところで暮らしていたのだけれど、そこを一人で飛び出して、海を渡ってベルファストへ来たの。その頃、この町で大きな帆船を造っていてね、一目でいいから見てみたかったのよね」

「どうしてマキシムのそばにいるのが辛くなっちゃったの？嫌いに

なったってこと？」

アンジェラは肩をすくめた。

「今ではこのとおり真っ白だけど、昔は私の髪もあなたみたいな茶色だったのよ。それがある朝、髪を梳いていたら白髪を一本見つけたの。怖くなったわ。マキシムは永遠に歳を取らないけれど、私はどんどん年老いていくんだって。そう思ったら居ても立っていられなくなってしまったのよ。彼を愛してたから」

コルガーはぽかんとした表情で瞬きした。異性に寄せる愛情について、彼はまだ無理解だ。そういうものなのかと感心するばかりのコルガーにアンジェラは微笑む。

「ベルファストへやってきて、どこか教会で休ませてもらおうと街を歩いていたら、一人の修道女に出会ったの。彼女は私の母親くらいの年齢で、何も聞かずに私を自分の修道院へ連れて行くと、十数人の修道女たちを紹介してくれた。言葉は半分も通じなかったけれど、そこに暮らす修道女たちが皆、歳老いたクラシックだということはすぐに分かったわ。誰もが親切で、何かの縁だからいつまでもここにいるといいと言われ、私も半分その気になっていた。その修道院には後継者になるような若い修道女がいなかったから」

きゅうっと鞄の口の紐をアンジェラが引いた。円筒形の鞄の口が絞られ、紐が持ち手となった。試しに持ち上げて担いでみるとコルガーの背中にぴったり収まったが、少し紐が短いようだった。

「その一方で、私はマキシムが私を捜しに来てくれることを願っていた。捜し当てられるような場所じゃないことは分かっていたけれど、それでも彼が迎えに来てくれたら、私はすべてを諦めて彼と一

緒にいようと思ったのよ。最後の最後まで一緒にいようとね」

アンジェラは鞄をコルガーから受け取り、紐の長さを調整する。コルガーは机の上からスケッチブックを取り、これも入るかなと首を傾げる。

「そして、彼女たちと暮らし始めて二週間後、とうとう迎えが来たの」

「へえ、マキシムもここに来たことあるんだ」

コルガーはスケッチブックを鞄に押し込みながら不真面目に話を聞いていた。どうせ最後は迎えにきたマキシムと仲直りしてハッピーエンドに決まっている。

「いいえ。私を迎えに来たのはマキシムじゃなかったのよ」

少年の心中を察したのか、アンジェラはくすりと笑った。コルガーは目を瞬き、それから信じられないという顔をした。そうだ、ギーヴは六十年前にここへ来たことがあると言っていた。

「でも、あのギーヴ猊下がどうやって、ばあちゃんを見つけ出したの？」

ギーヴはお世辞にも勘が鋭いようには見えない。

「私も真っ先に聞いたわ。でも誤魔化された。マキシムが大慌てで私の実家へ旅立った後、何となく西のような気がしてアイルランドへやってきたんですって」

「それだけで修道院まで特定できないよ」

「ええ。だから私は、ギーヴ猊下には、まだまだ秘密があるんだと

思うのよ。私にさえ明かしてくれない秘密の力が」

アンジェラは楽しそうに笑い、コルガーに鞄を手渡した。今度は紐の長さも丁度良いようだ。

「あの人はいつでもマキシムの後ろにいた。修道院で暮らしている時も、教会へ反旗を翻した時も、いつもいつも自分はマキシムのオマケですって顔をしてた。前へ出ていく性格じゃなかったと言えばそれまでなのかもしれないけれど、今はそうじゃないような気がするの。彼は自分と兄を対のように見せ、そればかりか兄の方が優れているように見せていたけれど、本当は逆なのかもしれない。あの兄弟は、ギーヴ・バルトロメという異能の男と、ちょっと変わったその兄と言った方が正しいのかもしれないわ」

不老の男を『ちょっと変わった』と言ってしまうのは彼女だからだろう。

「ともかく、家出した私はギーヴ猊下に連れられて林檎修道院へ帰った。するとすぐに教会のクラシック弾圧が激しくなって、私たちは教会に抗議するべくエディンバラへ向けて行進を始めたの。そのどさくさに紛れてマキシムとはすぐに仲直りしたわ。彼の子を身ごもっていると分かったのもその頃で、今から思えば私の人生が一番輝いていた時だった。そして大行進が終わり、マキシムがヒベルニアへ旅立ち、ギーヴ猊下がエディンバラへ向かった後、私は怪我人や病人を収容できる安全な場所を探したの。その時、思い出したのがこの修道院だった。そして、この修道院を手放せずに私はまだここにいるというわけ」

ウイスキー修道院には後ろ盾となる有力者や資金源となる貴族のスポンサーがいない。必要なものは自給自足し、院内で収穫した農

作物や手作りの酒やジャムや菓子を売り、教会の目を盗んで彼女は細々とクラシックの教えを守ってきたのだ。

「ついでに聞いてもいい？」

コルガーはふと思いついて訊ねた。

「なあに」

「マキシムが迎えに来てくれたら、最後の最後まで一緒にいようと思ったって、それって、ギーヴ猊下の場合も適用されたのかなあって」

アンジェラは思いがけない質問に心底びっくりしたようだった。彼女は何度か瞳を閉じ、今まで考えてもみなかったわ、と微笑んだ。

「でも、彼が迎えに来てくれた時、とてもとても嬉しかったのは本当よ」

彼女の唇からこぼれた声は驚くほど愛情に満ちていて、自分はしてはいけない質問をしてしまったのではないかとコルガーは緊張した。曾祖母の本当の気持ちに気づいてしまうことは、誰に対してだか分らない後ろめたさがある。彼の心を読んだのか、アンジェラはうふふとおかしそうに笑った。

「それでも、私が愛していたのはマキシムだけよ」

昼寝から目覚めてギーヴが厨房に顔を出すと、夕飯の支度に取り

掛かっていた修道女たちが一斉に振り向いた。（見た目が）若くて顔の良い男が珍しいので、神々の花嫁たちも色めき立つのである。

「まあ、ギーヴ猊下、お目覚めですのね！」

「うん、おはよう。修道院の戒律を破って世話になっちゃって、悪いね」

これまでにウイスキー修道院に滞在を許された健康な男はギーヴ・バルトロメくらいであろう。女子修道院は日没とともに男子禁制となる。

「そのようなこと、エディンバラ名誉司教猊下のなさることですもの！」

「それもそうだよね」

可憐な野の花のような修道女たちに囲まれてギーヴが鼻の下を伸ばしていると、彼女たちの黄色い声を聞きつけたアンジェラが釘を刺しに来た。

「開き直ってどうするんです。本来なら、司教だろうと修道士だろうと、日没以降、老病人以外の殿方の滞在は許されていないんですよ」

「いいじゃない、俺は老人だよ。コルガーは？」

ギーヴがピクルスをつまみ食いしながら応じると、老シスターは薬草の入った籠をどんとテーブルに置いて笑った。

「一緒にお昼寝でもしましょうかって誘ったら、すっとんで逃げて行ったわ」

「そりゃね、もう十八歳でしょ、彼」

「……」

アンジェラは窓の外へ視線を転じ、暮れてゆく外の景色を一瞥した。

「ねえ、猊下、あなたは世間のことに疎い方だし、あの子もあなたより世慣れているとはいえ、長い旅に出るのは初めてのことだもの。道中くれぐれも気を付けてくださいね」

「分かってるよ。どうしたのさ」

「心配なのよ、あなたのこともあの子のことも」

アンジェラはそう言い残し、上の空の様子で厨房を出て行った。

「コルガーは多分、墓地にいますよ」

修道女たちから果樹園の奥に墓地があることを教えられ、ギーヴはコルガーを探しに行くことにした。火災のせいで焼け焦げた果樹園を抜けて墓地に着くと、案の定、彼は小さな募石の前に座り込んでいた。ギーヴがおもむろに近づいていくとコルガーはすぐに気が付き顔を上げた。彼の表情はひどく暗く、ギーヴはつられて悲しい気持ちになる。

「家族のお墓？」

「妹です」

短く答え、コルガーは募石を撫でた。覗きこむギーヴに、少年は皮肉っぽく言った。

「これ、彫ったのオレなんです。三月地震の直後は混乱してたから、適当に拾ってきた石を削って墓標にしたんですよ」

石工顔負けの技巧をこらした墓石を眺め、ギーヴは感心した。

「君って本当に芸術家なんだねえ」

マキシムもそうだった。そう思いながらギーヴが微笑んだ時、修道院の門の鐘が鳴った。庭で日直の修道女が「ズボンは出て行け」と唱え始める。男子禁制となる日没の合図だ。

「猊下、行きましょう」

二人が居住棟に戻ると、扉の前でアンジェラが待っていた。ギーヴは自分の荷物を取りに客室へ戻り、コルガーはアンジェラに荷物を背負わされ、防寒着を着こまされた。

「ばあちゃん、みんなに宜しく言っといてね」

「あの子たちも、あなたに宜しくって。これ」

アンジェラが手渡したのは弁当の包みだった。

コルガーは洗濯物を取り込んでいる修道女たちを見た。家族を失い、打ちひしがれていた彼に彼女たちはやすらぎと日常をくれた。彼女たちはどんなに口やかましく小言を言っても、コルガーが決して触れてほしくない話題については一言も口にしなかった。彼女たちはコルガーのことを静かに温かく、絶えず見守ってくれていた。

コルガーは無理やり笑顔を作り、大きくうなずいた。少しでも力を抜けば、涙がこぼれてしまいそうだった。

「コルガー」

「ばあちゃん」

コルガーはシスター・アンジェラに向き直り、彼女のしわだらけの両手を握った。老シスターは渾身の力で曾孫を抱擁した。

「身体を大事にしなさい。あなたは――女の子なんだから」

耳元で囁いたアンジェラに、コルガーは頷いた。

「それ、猊下には黙っててね」

「あら、どうして？」

「だってあの人、オレのことばあちゃんの若い頃にそっくりだって、うっとりしながら言うんだぜ。二人旅で変な気、起こされても困るし」

「……それもそうね」

何故かしみじみと頷いて笑い、アンジェラはコルガーの髪を撫でた。

「愛してるわ、エド。いつも、あなたの上に光が差しますように」

「……オレも祈ってるよ、いつも」

カンカンカン！しつこく鳴り響く鐘の音に、二人は体を離した。そこへギーヴが戻ってくる。彼にしては機敏な動きだった。

「行こうか、コルガー」

「はい！」

シスター・アンジェラと別れのキスを交わし、コルガーは踵を返した。心は決まっている。揺るぎようがないほど決まっている。

駆け出したコルガーの背中に、修道女たちの惜別の言葉がぶつかったが振り返らなかった。待っていてくれる人がいるというのは良いものだ。走りながら勝気に笑い、彼は――彼女は思った。

「猊下、こっちから出ましょう」

修道院の広い庭を走りながら、二人は視線を交わした。前方には高い塀がそびえ、その向こうには深い堀がある。彼らはうなずきあって無邪気に笑い、同時に冬草を蹴った。二人とも、いい踏切だった。

そしてそのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。

1．民話学者の冒険（前書き）

第二章のはじまり。
おはなしはスコットランドを旅する民話学者と書籍商へ。

1．民話学者の冒険

ヨイク・アールトは初めて旅立つとき、父親にこう諭された。

「ヨイク、世の中には女の仕事というものがある。それを放棄しては世の中が成り立たないのだ。お前の好きな民話だってそうだ。妖精が妖精の仕事をしなくなったら困るだろう。誰が子供をさらうんだ」

ヨイクは鼻にもかけなかった。

「お父さん、人類の半数は女よ。女の仕事は彼らに任せて、私は私の、私にしかできない仕事をするわ。私ほどの民話学者は、人類の中にも二人といないんだから」

その後、彼女は自分の言ったことの正しさを証明した。一年かけて北欧諸国を周り、知られざる民間伝承を集めて本にまとめたのだ。『北欧伝承余話』は二カ国語に翻訳され、イギリスやフランスを中心にベストセラーになった。

だが、二度目の冒険に出るとき、彼女は婚約者にこう懇願された。

「君は女にしてはずいぶん自由に生きてきたんだ、もう充分だろう。お願いだから、危険な旅も難しい研究も今すぐ全部やめて、僕と結婚してほしい。君を必ず幸せにすると約束するから」

これにはさすがの才女も弱りはてた。彼は子供のころからの親友だったし、彼ならば約束通りヨイクを幸せにしてくれるだろうと思う。しかも二人とも結婚適齢期の十八歳である。だが、ヨイクは自

分が望むものが何か、よく分かっていた。彼もそうならいいのに。ヨイクは幼馴染みの青年を憐れむように見ると、言葉を選んでこう答えた。

「あなたが私を待てないというなら永遠にさよならよ。私にはまだ、やりたいことがたくさんあるの。見たいものも、知りたいことも、触りたいものも山のようにある。匂いをかいだり、肌で感じたり、自分の耳で聞いたり、そういうことをするために私は旅に出るのよ」

「僕が君を待てないならさよならだって?僕はいつだって君を待ってた!この前だって、半年で戻ると言って旅立った君を一年も待ち続けたよ!君が危ない目にあっているかもしれない、病気になっているかもしれない、大怪我をしているかもしれない、もしかしたら命を落としたのかもしれない、僕はそんな不安を抱えて、来る日も来る日も君を待っていた!僕にもう一度、あの地獄のような生活をしろというのか!君には分からないかもしれないが、あの時、僕は狂い死んでしまいそうだったんだよ!」

婚約者の熱い眼差しを真正面から受け止め、ヨイクは初めて自分の心が揺れ動くのを感じた。それまでは罪悪感を覚えることはあっても出発を迷ったことなど一度もなかったというのに。いつも穏やかな彼がこんな風に感情を露にしたのも初めてのことだった。どきどきと高鳴る胸を拳で抑え、ヨイクは迷いを振り払った。

「心配かけたことは謝るわ、ごめんなさい。でも今旅に出なければ、きっと私は後悔する。あなたと幸せになっても後悔する。どんなに不幸になったっていい、誰に馬鹿にされてもいい、私は私が生きる意味と喜びが欲しいわ。一生それを追い続けるわ、たとえ今あなたを失っても」

ヨイクは自分が震えているのではないかと思った。もしかしたら、自分は道を間違えようとしているのかもしれない。もしかしたら、この最後通牒を後々悔むことになるもしれない。これは身勝手な自分をずっと待ち続けてくれた愛情深い彼へ恩を仇で返すような行為だ。己のあまりの傲慢さに改めて気がつき、ヨイクの良心は痛んだ。だが、腹から出した声はヨイク自身がびっくりするほど冷静だった。

「明朝、村を出るわ。今度の旅は特別な旅で、恐らく、私はエディンバラ教会に追われる身になる。それでも私の帰りを待っていてくれるか、私と別れるか。出港までにあなたの答えを聞かせて」

翌朝、彼は港へ来なかった。代りに、彼の友人が彼からの手紙を持って現れた。ヨイクはその手紙の封をまだ開けていない。

峻険な地形、過酷な自然。それがスコットランドの代名詞だ。町から町への移動は困難で、直線距離ではそう遠くない隣町へ、山を越え、川を渡り、谷や湖を迂回してようやくたどり着くということがザラにある。

だから、エディンバラ近郊の深い森の中を三日も歩き続け、へとへとになってリラ城にたどり着いた人物がヤケクソになってしまっていても仕方がない。降り積もった雪が辺り一面をほのかに白く照らす夕闇に、陽気なバイオリンの音が響き渡ったのはその時だ。

「ジャグリングをします」

のたまったのは背の高い赤毛の男だった。

「困ります」

答えたのは城の執事だ。

「始めます」

赤毛の男は仏頂面で言うと、持っていたバイオリンを地面に置いてジャグリングを始めた。密かな宴会芸として月に数回披露しているだけあって手慣れたものだ。

「突然困ります、お引き取りを！」

「まあまあそう言わず、見て下さい、あらよっと」

「え、衛兵！」

「まあまあまあまあ」

その押し問答はリラ城というロマンチックな城の正面入口で繰り広げられている。強引にジャグリングを始めた赤毛の男のもとへ衛兵が集まり、メイドが集まり、しまいには城主まで現れた。それを確認してから、立派な庭園の木のしげみで動き始めた人影があった。少女から大人に変わる年頃の女性だ。

俊敏で身軽な彼女はあっという間に北の別塔にたどり着く。見上げると最上階の窓の隙間から橙色の明かりが漏れている。彼女はその窓に向って、慣れた手つきで縄梯子の先端を放り投げる。縄を投げるのは子供のころから大得意だ。おかげで民話学者ヨイク・アールトが捕まえたトナカイの数は父より多い。彼女はノルウェー生まれのサーメ人で、自称純真無垢な十八歳の乙女だ。

「ちょろいもんだわ」

縄梯子がかかると、ヨイクはすいすいと梯子を登り、あっという間に塔の最上階にたどり着いた。木の窓をそっと開けて中を覗くと、暖かな暖炉のそばに座り込んだ少女が、眼を丸くしてヨイクを顧みた。

「こんばんは」

ヨイクは寒さでこわばった頬をむりやり動かしにっこりと笑う。悲鳴を上げられたりしては面倒だから、まずは警戒を解いてもらわなくては。窓枠に両肘をつき、民話学者は被っていた赤い帽子を取った。

「びっくりさせてごめんなさいね。はじめまして、私はヨイク・アールト。民話学者よ」

ヨイクが言うと、少女はその場に立ち上がった。彼女の歳は十四五歳に見えた。痩せていて手足が長く、まるで少年のような体形だったが、腰まで届く明るい茶色の髪や愛らしい目鼻立ちが彼女を女性らしく見せており、足首が隠れる丈の白いドレスが妖精のような雰囲気を醸し出している。

「とりあえず中に入れてくれると嬉しいんだけど、どうかしら」

少女がこっくりと頷き、ヨイクはひょいと窓枠を飛び越えた。ブーツを履いた両足で軽やかに着地する。暖炉に燃えさかる炎のおかげで室内は暖かかった。部屋の中をぐるりと見渡すと、大きな寝台や壁の絵画、マントルピースなどを始めとして、はっきり言ってギーヴ・バルトロメの幽閉されていた部屋より格段に豪華である。ヨイクは複雑な心境で縄梯子を回収した。

「わたし、ヒリール・バルトロメ。ヒベルニア王マキシムの孫だよ」

言いながら、ヒリールは大きな茶色の瞳で珍しそうにヨイクを見つめた。ヨイクの服装は生まれ故郷の民族衣装だ。大きく波打つ長い金色の髪に青い瞳の民話学者は、藍色の膝丈ワンピースの上にトナカイ革の上着とブーツと鞄を身につけている。ワンピースの下に履いた細身のパンツや大小の布袋を付けた腰のベルトもトナカイ革だ。ワンピースには赤色の糸で独特の刺繍がほどこされていて、彼女が手に持っている耳まで覆う帽子もその赤い糸で頑丈に織られている。斜め掛けの小ぶりの鞄からは地図やメモの束が盛大にはみ出していて、これもやはりトナカイの皮でつくられたものだ。

「ヒリール……アイルランド神話の海神の名前ね。ギーヴ猊下から聞いてると思うけど、私は彼に頼まれて、あなたを迎えに来たの、すぐに支度して欲しいんだけど構わないかしら？」

少女は諸手をあげて歓声を上げた。

「あなたがギーヴおじいさまの言ってた人ね！良かった！これでヒベルニアへ帰れるんだ！」

嬉し泣きしそうな勢いの少女にヨイクは思わず笑ってしまった。

「話が早くて助かるわ。今、正面玄関で仲間が城の人たちの気を引いているから、今のうちに逃げましょう」

「わたし、あなたが来てくれるのをずっと待ってたの！すぐに支度する！荷作りもだいたいできてるから本当にすぐだよ！」

ヒリールが狭い部屋の中を行ったり来たりしながら支度するのを、

ヨイクはぼんやりと見ていた。本当はヒベルニアについて質問したり、自分や相方のことを話すべきなのだが、少女の発した「あなたをずっと待っていた」という言葉に、婚約者のことをつい思い出してしまったのだ。

ヨイクは斜め掛けの鞄を開け、婚約者からの手紙が入っていることを確かめてからヒリールをちらりと見た。ヒベルニア王の孫娘は興奮しているのか独り言を言いながら忙しなく身支度しているが、その傍らにはまとまりそうにない私物がごろごろと転がっている。リラ城の主は彼女にずいぶん贈り物をしたようだ。もうしばらく彼女を待つことになるなら。ヨイクは婚約者からの手紙を鞄から取り出した。

『ヨイクへ。カームスより』

封筒に踊るその文字だけは、今まで何度も読み返してきた。ヨイクは思い切って封を切った。中からは二つ折にされた一枚の紙が現れる。

一枚。ヨイクは手を止めた。たった一枚の手紙で、彼は私との縁を切ったのだろうか。いや、まだ別れの手紙と決まったわけではない。だが、ヨイクの出発する朝、彼が港に現れなかったことを思い出すと、自然と手紙の内容は想像できた。

「ごめんなさい、お待たせ、ヨイク」

支度を終えたヒリールに声をかけられ、ヨイクは我に返った。読んでいない手紙を鞄にしまい込み、ヨイクは暖炉の火に灰をかけるのを手伝った。ヒリールはミルク色の毛皮のコートを羽織り、裏地に毛皮を張った温かそうなブーツを履いている。手には何も持って

いない。

「あら、荷物は？着替えとか、金目のものはあって困らないわよ」

「うん、そういうの、全部身につけたから、平気」

ぽんぽんとミルク色のコートを叩き、ヒリールは無邪気に笑った。なるほど、毛皮のコートの下に持ち物を着ているということか。そういえばコートのポケットから飛び出しているのはヘアブラシの柄のようだった。

ヨイクは窓に近づき、鞄にくくりつけていた長い縄をほどいて城壁の向こうの大木に投げた。石のついた縄の先端はぐるぐると太い枝に巻きつく。こちら側の先端を豪華な寝台の足に結ぶと、夜の闇の中に一本の縄がピンと張った。ヨイクは窓枠に立ち、への字型の金属を取り出すと青い目を輝かせて言った。

「さて、忘れものはないわね？」

知らず知らずのうちにわくわくと心を躍らせている自分がいる。これだから冒険はやめられないのだ。ヨイクは悪びれもせずにそう思うと、脳裏にちらつく婚約者の面影を丸めて暖炉に投げ込んだ。

すべてが終わるまで、彼のことは考えない、そうするわ。

「うん！」

緊張した面持ちで頷いたヒリールにヨイクは自分の赤い帽子を被せた。

「しっかり私に捕まって、行くわよ！」

張りつめた縄にへの字型の金属をかけ、皮手袋をした手でその両端をつかむと、ヨイクは思い切り窓枠を蹴った。ヨイクの身体に後ろから抱きつくヒリールが押し殺した悲鳴を上げる。

「ヨイクぅうう！」

二人の少女の体が闇に踊る。ヨイクの持つ金属が縄を滑り、それにぶら下がった二人は冷たい夜の空気を突っ切って緩やかに下降していく。ヒリールがヨイクの背中に顔を押し付けると、民話学者は心底楽しそうに白い歯を見せて笑った。

「目を開けないと後悔するわよ！」

雲の向こうに薄らと月が光る。その月明かりに、降り積もった雪や真っ白な深い森やリラ城が浮かび上がる。

ヨイクは思う。

夜の闇は優しい。民話や物語が語られるのは、こんな夜が、ふさわしい。

2．ロンドンの書籍商

リラ城は女性的な城と言われている。いくつかの灰色の円塔の上に三角形の薄青いとんがり屋根がのり、窓が小さく、壁が厚い、典型的な中世の城だ。この城は約三百年前、エディンバラ王の愛妾の城として建てられた。男女の愛憎と欲望と人血にまみれた数々のエピソードを持つ城だが、建物自体は小じんまりとして可愛らしい。

「ようし、うまくいったな」

その城壁の外側で、北の別塔から縄をつたって滑り降りて来る人影を満足げに眺める男がいた。神秘的な月光を背に、少女たちの影が太い枝のひとつにたどりつくと、彼はその大木に向って走り出した。

森の中は暗く、足元がおぼつかなかったが、明かりをつけるわけにはいかない。ユアン・リプトンは木の根や切り株を飛び越え、行く手を阻む小枝を掻き分けた。一面に積もる雪がほのかに明るく、そのおかげで怪我をすることはなさそうだ。

「ユアン、ここよ、ここ！」

聞き慣れた声が頭上から降ってきたところでユアンは足を止めた。木の上にヨイクの姿を見つけ、ユアンはほっと息をついた。ヨイクの傍らには髪の長い痩せた少女がいた。この派手な脱出劇のせいか青冷めた顔は、どことなくギーヴ・バルトロメに似ている。

「救出作戦大成功よ！やっぱり私が救出役、ユアンがおとりで正解だったじゃない！」

ヨイクが腰に両手をあててふんぞり返ると、ユアンは深刻な顔をつくって応じる。

「威張ってないで降りて来い。足を滑らせても、あんたのその重さに耐えられる自信は……」

「無礼者」

振り下ろす拳とともにヨイクが枝から飛び降りた。鉄拳を受けたユアンは頭を抱えてその場にうずくまる。サーメ人の女は強い。ヨイクは枝に残してきてしまったヒリールを見上げた。可憐な少女は、枝にしがみついたまま声も出せない様子だった。

「ヒリール、これは私の仲間のユアン・リプトン。ユアン、ヒベルニア王の孫娘のヒリール・バルトロメよ」

「よろしく。無事でよかった」

ユアンが微笑みを向けるとヒリールの頬がほんのりと朱に染まった。

「ヒリール、ちょっと高いけど思い切って飛んじゃうのが一番よ。雪が積もってるから怪我する心配もないわ」

無茶を言う。相手はお姫様だ。おてんば者の民話学者と同じというわけにはいかないだろう。躊躇するヒリールを見かねて、ユアンは木の幹に近づき両手を広げた。

「大丈夫だ、頭から落ちてこない限り受け止める」

「ヒリール、安心して。無礼で無愛想だけど、どさくさに紛れてお尻を触ったりしない程度には紳士な男よ」

「……誉めてるのか？」

ヒリールは大きく息を吸い込むと、眼をつぶって飛び降りた。落ちてくる細い身体をユアンが両腕で抱き止める。少女の両足を雪の上にそっと下ろし、ユアンは少女の表情をうかがった。ゆっくりと開かれたヒリールの目はとろんしていて夢見心地のようだ。

「あ、ありがとう、ユアン」

ギーヴ・バルトロメの血縁者なら少々ぼんやりしていても不思議はない。何故か顔をひきつらせているヨイクに一瞥をくれてからユアンはリラ城を見た。

「どういたしまして。さあ、さっさと逃げるぞ。まだ騒ぎにはなっていないようだが、君が消えたことがばれるのは時間の問題だ」

ヒリールがいなくなったことが分かったら、リラ城の城主は血眼になって彼女を探すだろう。ヒベルニアから流れ着き、エディンバラ教会に保護された彼女は、リラ城の城主にとって教会からの大事な預かりものなのである。事態がエディンバラ教会に伝われば、教会は教会で追手を差し向けるはずだ。それまでに何とかエディンバラ近郊から逃れなければ。

三人は頷きあってその場を離れた。

街道に出て馬車に乗るべく、三人は夜を徹して森の中を歩いた。ところが思った以上に雪が深く、雪道を歩くことに慣れないヒリー

ルが遅れたため、予定していた行程の半分ほどで夜が明けてしまった。ヨイクやユアンの疲労もピークに達しており、彼らは森の中で見つけた小屋で休むことにした。

自分が足手まといになったことを詫びるヒリールに、ヨイクは焦っても仕方がないわと言って笑った。追手から逃れるために少しでも距離を稼ぎたい気持ちは山々だが無理をしてヒリールが倒れてしまっては大変だと。

追手もまだここまでは来ないだろうと言って火をおこし、ユアンは暖炉で野菜スープを作り、凍ったパンを火のそばに並べて温めた。ヨイクはユアンの傍らに座り、口を出すでもなくうとうととまどろんでいる。

この二人はどういう関係なのだろう。ヒリールは小さなテーブルにつき、寄り添う二人を観察していたが、やがて視線はユアンだけに向いた。後方に撫でつけられた長めの髪は赤く、髪よりもワントーン暗い赤茶色の上着とパンツをまとい、黒いブーツを履いている。茶色の目は切れ長で、薄い唇は冷たい印象を与えるが、優しく響く彼の低い声は聴いていてとても気持ちがいい。こんなに素敵な人に出会ったことはないわとヒリールは頬を染めた。

「さあ、召し上がれ。――ほら、あんたも起きろ」

ユアンは出来立てのスープの皿をヒリールに手渡し、暖炉の前で膝を抱えて居眠りするヨイクを揺さぶった。ヨイクは大きく伸びをしながらヒリールの向かいに腰を下ろし、手を合わせてからパンとスープを食べ始めた。椅子が二脚しかないため、ユアンは薪用の丸太に座った。

「神々の恵みに」

ヒリールは手を組んでつぶやくとスープを口に運んだ。それはヒリールにとって人生で何度目かの粗末なもてなしだった。最初に経験したのはスコットランド北部の漁村での食事だ。ヒベルニア島の沖で嵐に逢い、船から投げ出されて流れ着いたのがその村だった。数日後にエディンバラ教会が迎えに来てからは淑女としての待遇を受けたが、あの漁村で人々から親切にしてもらったときのことは忘れられないいい思い出だった。

「私がいなくなったこと、そろそろリラ城の人たちも気が付く頃かな」

毎朝、ヒリールを起こして身支度を手伝ってくれたのは侍女のローゼリットだった。真面目な彼女だ、ヒリールの不在を知ったらすぐに城主へ報告するだろう。もし彼らに捕まれば、エディンバラ教会はヒリールをもっと厳重に幽閉し、ヨイクとユアンは何らかの処罰を受けることになるに違いない。

「大丈夫よ。私たちが絶対に守ってあげる。あなたを必ずヒベルニアへ送っていくわ」

ヨイクが朗らかに大きく頷いたので、ヒリールの心は少しだけ軽くなった。リラ城の侍女たちは優しかったが、こんな風に誰かと親しく話をするのは久しぶりだった。

「ありがとう」

「どういたしまして。ねえ、ヒリール。疲れてるところ本っ当に悪いんだけど、少しだけ聞かせて欲しいの、ヒベルニアのこと」

ヒリールは温まった心が急速に冷えるのを感じた。

「――気象兵器なんてないよ」

唇からこぼれ出たヒリールの言葉は氷のようだった。ヒリールはヨイクとユアンがどんな反応を示すかじっと窺った。ところが、ヨイクは喜びと興奮が極まったような目でヒリールの両肩をつかんだ。

「そんなのどうでもいいわ！私が知りたいのはヒベルニアに通じる海流のこととか！一角獣湾のこととか！人魚の入り江のこととか！火の山の洞窟のこととか！花砂漠の嵐のこととか！」

勢いに任せてまくしたてながら、ヨイクは鞄の中から筆記用具を取り出した。ヒリールは彼らを警戒していた自分が恥ずかしくなり、同時に嬉しくなって思わず腰を浮かした。

「な、なんでそんなにヒベルニアのことを知ってるの？今までにお話した人たちの誰もそこまで知らなかったのに」

「私はヒベルニアの研究をしてるの。エディンバラ教会の付け焼刃的知識なんて、たかが知れてるでしょうね」

暖炉にかけていた鍋が沸騰した。ユアンが紅茶のポットに湯を注ぐ。

「ヒリール、あなた、船が難破してヒベルニアから流されて来たのよねえ。私は、ヒベルニアへ続く海流は一方通行だって聞いてるんだけど、違うの？」

「わたしも一方通行だって聞いてたよ。でも、わたしはこうしてスコットランドへ流れ着いたし、どういうわけか、ときどきヒベルニ

アの方角からの漂着物が海岸に打ち上げられることがあるって、わたしを助けてくれた漁村の人が言ってた。マキシムおじいさまなら、その理由を知っているかもしれない」

二人のやり取りに、ユアンが紅茶を入れる手を止めた。凶悪な顔でヨイクを睨んでいる　。

「ちょっと待て、そこの民話学者」

ヨイクはうるさげにユアンを振り向いた。

「何よ、ユアン。あたしの学者生命がかかった大事な話をしてるときに」

「口を挟まずにいられるか！ヒベルニアへ続く海流が一方通行だなんて聞いてないぞ！」

「誰にも言ってないもん。そんなこと言ったら、誰もヒベルニアへ行きたがらないでしょ？」

「当然だ！あんたはともかく、おれはヒベルニアに骨を埋めるなんて御免だからな！」

「やあね、私だって嫌よ。まあ何とかなるでしょ、現にヒリールはこうしてヒベルニアからこっちへやって来てるわけだし」

偉そうにふんぞり返るヨイクとぷりぷりと怒るユアンを交互に見ながら、ヒリールは唇を尖らせた。

「ねえ、ヨイクとユアンは夫婦？」

「はあ？そんなわけないじゃない。名前だって違うでしょ、私はヨイク・アールト、彼はユアン・リプトン」

「じゃあ、恋人同士？」

「はあ？」

「違うの？」

「当っ然！第一、私には婚約者が……」

ヨイクは言いかけて口ごもり、それから忌々しげに頭を振った。すると彼女の波打つ金髪がふわふわと揺れ、ヒリールの興味はヨイクの髪形に向いた。ヒリールの髪は真っ直ぐなので、ヨイクのようにウェーブのかかった髪が少し羨ましかった。金色というのも魅力的だ。祖父マキシムが金髪だからヒリールがそれを受け継いでいてもおかしくないのだが、残念ながら彼女の髪は明るい茶色である。

「おれたちはビジネスパートナーだ」

嘆息と共に言ったのはユアンだった。ヒリールは聞き慣れない言葉に首をかしげた。

「ビジネスパートナー？」

「彼女は民話学者で、おれは書籍商、つまり本屋だ。おれは彼女の旅と研究に出資、つまり金を出していて、彼女の本をロンドンで印刷したり、世界中の書店に売りさばいたりして利益を得ている。そして利益の一部で、彼女の次の旅と研究に出資する、その繰り返しだな」

「そういうこと。私はお金の計算とか、製本とか、書店との交渉とかできないからね。面倒なことは全部ユアンにやってもらってるの」

ヨイクとユアンを交互に眺め、ヒリールは腑に落ちないものを感じた。彼らは合理的な協力者というだけではないような気がするのだ。

ヒリールがうっかり欠伸をすると、ヨイクが立ち上がって小屋の

隅に毛布を敷いてくれた。彼女に促されるまま眠りに落ちていく途中で、ヒリールは久しぶりにいい夢が見られそうだと思った。

3．ヒベルニアの姫

ヨイクは正午頃に目を覚ました。ぐずぐずと鼻をすする音が聞こえたのだ。身体を横たえたまま耳を済ませていると、誰かが声を殺して泣いているようだった。ヨイクは起き上がった。

「ヒリール？」

隣で寝ているのはヒベルニアのお姫様だ。細い体を粗末な毛布で覆っている。

「どうしたの？」

ヨイクは毛布を身体に巻きつけて立ち上がり、暖炉に薪をくべて火力を強めた。

「平気。大丈夫。夢を見ただけ」

少女は毛布を被ったまま首を振った。声が震えている。ヨイクは沈黙で応じ、半分ほど水の入った薬缶を暖炉の火にかけた。彼女は窓辺に立ち、テーブルの上のポットへ茶葉を入れる。カップとポットを火のそばへ置いて温めておくことはユアンから教わった。

「ねえ、ヒリールは私達がヒベルニアに行くことについてどう思うの？」

ヒリールが何かを悩んでいるとしたら、故郷である秘密の島へ異邦人であるヨイクたちを連れ帰ることに違いない。ヨイクは沸いたお湯をポットに注ぎつつヒリールの様子をうかがった。

「ヒベルニアはクラシック教徒の秘密の島だもの。教会関係者はもちろん、誰にも知られちゃまずいわよね。もしかしたら、どうして帰って来たんだ！ってヒベルニア王マキシムの怒りを買うことになるのかも」

ヒリールは毛布の中でびくりとした。

「マキシムおじいさまは厳しい方なの？」

「……うん。マキシムおじいさま、夢の中ですごく怒ってた。わたしのせいでヒベルニアの秘密が暴かれて、わたしのせいでクラシックが教会に滅ぼされるって」

すすり泣くヒリールにヨイクは胸を張って自身満々に答えた。

「よし、分かった。もしもヒベルニア王マキシムがあなたを怒ったら、私がちゃんと言ってやるわ！ヒベルニアが見つかるのは時間の問題だってことをね！」

ヒリールは毛布をはねのけて起き上がり、ヨイクを睨んだ。頬や長い茶色の髪が涙で濡れている。

「でも！それだって、わたしのせいでしょう！わたしがスコットランドに流れ着いて、教会に保護されたからでしょう！わたしのせいでヒベルニアの秘密が暴かれて、わたしのせいでクラシックが滅ぼされるんだ！」

とうとう声を上げて泣き出したヒリールにヨイクは慌てて駆け寄った。

「ほらほら、まだユアンが寝てるから、ね、ヒリール。それに大丈夫よ、ヒベルニアへ行けるのは選ばれた人だけなんですって。教会が押し寄せて来るようなことにはならないわ」

ヨイクはヒリールの頭を抱きかかえ、背中をさすってやる。小さく細い身体は頼りなく、彼女の境遇にヨイクは同情した。とはいえ、ヒリールがいようがいまいが、ヨイクがヒベルニアを目指すことはもう決まっている。ヒリールがどうしても帰りたくないと望むなら彼女を置いていくこともできるが、そういうわけにもいくまい。

「わたし、マキシムおじいさまに嫌われてるの。わたしの両親も、わたしのおばあさまも、マキシムおじいさまに嫌われてる。わたしたちはマキシムおじいさまとは別の離宮に住んでいて、おじいさまには年に数回しかお会いできない。おじいさまのことを昔から知っている人たちは口をそろえて言うわ。『マキシムはアンジェラを忘れられないんだ』って。ギーヴおじいさまとシスター・アンジェラを連れて行ったら、マキシムおじいさまは喜ぶでしょう。その横で、わたしはおじいさまから叱責されるんだわ」

堰を切ったように胸の内を語るヒリールをヨイクはなだめた。

「考え過ぎよ、ヒリール」

「考え過ぎじゃないもん」

「だとしても、疲れている時に考えることはロクなことじゃないわ。悪い方へ悪い方へ、下へ下へ、考えが落ちて行くの」

もう少し出発を延ばしてもいいだろう。ヨイクはヒリールを横たわらせ、傍らに腰を下して少女の髪を撫でた。

「ひとつ、北欧民話を聞かせてあげましょうか。霧山の王というお

話よ。目をつぶって」

ヨイクが促すとヒリールは目を閉じた。

「むかしむかし、ある村に一人の娘がおりました。ある日娘は仲間と森へキノコ採りに出かけましたが、仲間とはぐれ道に迷ってしまいました。夜が訪れ心細くなった娘は、遠くの山頂に光を見つけ、それを目指して歩いて行きました。

光は焚火の炎で、そのそばには一人の老人が座っていました。娘はなぜだか恐ろしい気持ちになって、岩の陰に隠れて老人の姿をよくよく観察しました。すると、老人は一つの目の妖怪だったのです」

ヒリールは目をつぶったままわずかに息を飲んだ。

「娘は逃げようとしました。しかし、そっと立ち去ろうとする娘に老人は言いました。

『逃げるんじゃない。逃げればこのナイフでおまえの目玉をくりぬいてやる。大人しくここへ来て、焚火にあたれ』

娘は恐る恐る老人の言う通りにしました。娘が黙って座っていると、老人は杖を取り出して地面を叩きました。すると、叩いた地面から一人の女が現れ、母親のように娘を抱き締めました。老人は再び地面を叩きました。今度は地面から一人の女の子が現れ、自分は老人の娘だと名乗りました」

ヨイクはヒリールがまだ起きていることを確認して話を進めた。

「村娘は老人の娘と仲良く遊び、夜は母親のような女に抱かれてぐ

っすりと眠りました。村娘は時を忘れて数日を過ごしましたが、やがて家が恋しくなって、村に帰る道を女に訊ねました。女は村娘の帰宅を残念がりましたが、帰り道を教えてやりました。そして女は銀のブローチを村娘に渡し、こう言います。

『またここへ来たくなったら、このブローチに息を吹きかけなさい。そのかわり、ここで見たこと聞いたことについて誰にもしゃべってはいけないよ』

一つ目の老人と女と老人の娘に別れを告げ、村娘は自分の村に帰ってゆきました。すると、たった数日村を離れていただけなのに、村の様子がすっかり変わっていて、すれ違う村人は見知らぬ人を見る目で娘を見ました。自分の家に入ると両親までもが娘にこう言いました。

『人の家に黙って入ってくるなんて、あんたは一体誰なんだい?』

娘も訊ねます。

『お母さん、お父さん、どうしてそんなに年を取っているの?』

そこで両者は気がつき、母親が叫びました。

『なんということだ、あんたは七年前に森でいなくなったあの子だね!』

……あら」

ヒリールはすやすやと眠っていた。ヨイクは彼女を起こさないようにそっと腰を上げた。

「眠ったか？」

小屋の入口の脇に横になっていたユアンが身を起こした。

「ごめん、起こしちゃった？」

ヨイクは小声で謝ると、暖炉で蒸気を上げている薬缶を下して紅茶を淹れた。

「いや。霧山の王か」

「まだ続きがあるんだけど、眠っちゃったわ。あんたも紅茶飲む？」

「ああ、頼む」

ユアンは眠っているヒリールの顔をそっと覗き、それから暖炉のそばの椅子に腰を下した。

「かなり取り乱していたな」

「あの年頃の女の子はこういうものよ。あんたは十四歳の時、何してたわけ？」

ヨイクはカップに紅茶をそそぎ、ユアンに差し出した。

「何かな。アメリカに行ったのが十五歳の時だったから、故郷のグラスゴーで草鞋（わらじ）を二足も三足も履いていたはずだ」

二十六歳のユアンにとって、それは十年以上も前のおぼろげな記憶だ。

「はあ、根っからの商人なわけね」

「まあな。『稼いで貯めろ』が親父の口癖だった」

ヨイクはユアンの向かいに腰掛け、両手で紅茶のカップを包んで冷えた掌にその熱を受け止める。

「人生は何があるか分からないから蓄えは大切だと。そう言った次の日に親父は姿を消した。六歳のおれとお袋と幼い弟妹を放り出してな。どこへ行ったのやら、未だに連絡の一つもないから生死さえ不明だ」

ユアンは紅茶を一口すすって苦笑した。紅茶にはブランデーを垂らしてある。身体が温まるはずだ。

「おれは思ったよ。ああ親父、本当に人生は何があるか分からないってな。だけど、おれたちの誰も親父を憎まなかったから不思議だ。もしかしたらお袋は腹の中で何か思っていたのかもしれないが、そのことで腐ったり、おれたちに当たり散らすことはなかった。いつもと同じように店を開けて、おれたちにパンを食わせて、涙の一つも見せなかったな」

ユアンはスコットランドの商業都市グラスゴー市の貧しい雑貨屋に生まれたという。一つ年下の弟と四つ下の妹がいるが、もう何年も会っていないらしい。

「苦労したのね。じゃあ、あんたが商人になったのは家族を養うためだったんだ」

「そうでもない。それなら実家の雑貨屋を盛りたてて稼げばいいだけだ。だがおれは自分の力を試したくて、八歳の時に外へ働きに出たんだ。雑貨屋の仕事は読み書きと計算さえできれば誰にでもできる退屈な仕事だったから」

様々な仕事を渡り歩いた後、彼は十五歳でアメリカへ向かい、十九歳で自分の貿易会社を設立した。そして二十三歳の時にヨイクと出会い、ヨイクのスポンサー兼書籍商となった。ヨイクは彼の人生の波乱万丈ぶりに感心するが当の本人は何とも思っていない様子だから不思議だ。

「こんな話、退屈だろ？もうひと眠りしたらどうだ？」

今さら照れたようにユアンが言ったのでヨイクは思わず笑ってしまった。

三人は遅い昼食を済ませるとすぐに小屋を出て、真っ白な深い森の中を歩き続けた。

「この厳しい環境にイングランドやヴァイキングの脅威が加わって、スコットランド人を防衛的にさせたって言われてるのよ、知ってた？」

そう言ってヨイクはコンパスを取り出した。目指している方角に間違いはない。そろそろ街道に出てもいい頃なのだがそれらしいものは見えない。

「あんたが防衛的かどうかは知らないけどね」

青い目をくるりと動かし、ヨイクはユアンの背中に笑って見せた。

「おれも自分が防衛的かどうかは知らないが、まあ氏族同士の内紛は絶えないようだな」

ユアンはそう言って、後ろを歩くヨイクを顧みる。三人の先頭を歩くユアンは銃を背負い注意深く辺りの様子をうかがいながら歩みを進める。熊はすでに冬眠中だが、狼や大鹿がときどき現れるので、注意を怠れないのだ。最後尾のヒリールは疲れた顔で眠そうに歩いていた。

「ねえ、変だと思わないの？『防衛的』なスコットランド人がお互いに争うなんて」

ヨイクの指摘にユアンは苦笑した。彼は生粋のスコットランド人だが、商業都市で生まれ育った彼には、地方でおこる氏族同士の争いごとは遠い話だった。ヨイクは顔をにやつかせる。

「攻撃的な奴もばっちりいるってことよね？」

「そりゃあな。だが名目上は侵された自分の権利を守るために立ち上がるのさ。誇り高いスコッツの戦士はね」

「あら、じゃあ、あれも戦士かしら。誇り高いスコッツの」

ヨイクが言ったとき、三人の行く手を阻む者が現れた。ナイフを持った五人組だ。いかにもごろつきという風体の中年男たちである。ヒリールが小さく息を飲んだ。

「へっへっへ、お嬢ちゃんたち、綺麗な顔に傷つけられたくなけりゃ大人しく……」

男が言い終わる前にヨイクが男の股間を蹴り上げ、ユアンが銃床を打ちつけて別の二人を失神させた。一瞬の出来事に虚を突かれた

残る二人の男たちは、雪の上に倒れた三人の仲間を見下ろしていきり立った。仲間がやられると闘争心に火がつく、実にスコッツらしい行動とも言える。

二人の男はナイフを構え、ヒリールに狙いを定めた。銃を持った長身のユアンや素早く短剣を抜いたヨイクを避け、武器を持たない少女を標的にしたのは見事だった。咄嗟にヒリールの前に飛び出したヨイクが二人の男から突き出されるナイフを受ける形となり、彼女はひょいひょいと身軽にそれを受け流す。

「おのれ小娘！」

苛立たしげに歯噛みする男たちをせせら笑い、ヨイクは自分の短剣を一閃させた。

「ぐわっ！」

男の一人が腕を抑えて雪の上に膝をつく。もう一人がそれに気を取られている隙にヨイクは鞄から縄を取り出してそれを男に投げつけた。縄は男の両足に絡み、それを思い切り引くと男は派手に転倒した。転がった男の腕をブーツの底で力いっぱい踏みつけ、ヨイクは男の手からナイフを取り上げた。

「お見事！」

ヒリールをかばいつつ感心するユアンにヨイクは胸を張って見せた。

「こんなもんよ！」

「街の失業者かな？山賊ではなさそうだ。人里が近いのかもしれな

い」

転がった男たちを手早く縛り上げ、ユアンは腕組みした。その後ろでヒリールが小刻みに震えている。民話を集める長い旅をしてきたヨイクたちにとって賊の襲撃など大したことではないが、ヒベルニアの城で大切に育てられてきたヒリールにとってこれは恐ろしい出来事だったのだ。

「ヒリール、大丈夫？びっくりしたわよね？」

少女に駆け寄り、ヨイクはヒリールの頭をそっと撫でた。思い出してみれば、ヨイクも初めて旅に出た頃、よく宿屋や街道でガラの悪い男に絡まれたものだ。誰に助けを求めるでもなく、己の力で徹底的に撃退していたが、あとから震えが止まらないことがあった。

「大丈夫、怖くないわよ。どんな奴が来たって、私とユアンがぶちのめしてやるからね」

ぎゅっとヒリールを抱きしめ、ヨイクは自分の胸に誓った。何があってもこのお姫様を護るのは自分だと。だが、ユアンは案外冷たかった。

「ヒリール、酷だと思うが慣れてくれ。当分は男ひとりに女ふたりの旅だ、おれたちは道を歩いているだけであああいう連中に絡まれる」

確かに一理あるとヨイクは頷いた。

「美女と美少女が並んで歩いていれば仕方がないわ。シュクメイってやつよヒリール」

「美女がどこにいるかは知らないが、そういうわけだ。君はおれか

ら離れないように、ヒリール」
「……はい」
「こら、ユアン！いま何て言った！」

ユアンのキザなセリフに瞳を輝かせ頬を染めるヒリールの隣でヨイクは拳を振り上げたが、足元で伸びている男のポケットから一ポンド紙幣がのぞいているのを見て手を止めた。ユアンも眉をひそめる。こんなごろつきが持つ金としては不自然だ。

「一ポンドといえばうちの印刷工の一週間分の給料だ。……おい、誰の差し金だ？」

意識のある者の襟首をつかみ、ユアンはぐらぐらと揺さぶった。まともな言葉をつむいだのは五人の中で一番の大男だった。

「し、神父だ。見かけねえ顔の神父だよ。お、おまえらに荷物を奪われたから、取り戻して欲しいって言われたんだ。荷物さえ渡せば女は好きにしていいと」
「なんっつー野郎よ。聖職者の風下にもおけないわね」

腰のベルトに短剣を戻し、ヨイクは地図を広げた。

「どうして荷物なの？エディンバラ教会はわたしを連れ戻すのが目的じゃないの？」

首を傾げるヒリールにヨイクは事も無げに答えた。

「こいつらを差し向けたのは教会の連中じゃないってことよ。聖職者の服なら誰でも手に入るわ。おそらく、私たちのことをあまり知らない連中が私たちの実力のほどを見るためにこいつらに金を渡し

たのよ。その連中は今もこっそりと私たちを見ている、かも?」

リラ城の城主に追われ、エディンバラ教会に追われ、さらに何者かに狙われている。ヨイクは薄ら寒い気持ちになった。

「早く行きましょう」

4. 劇団潜入

三人は街道に出た。目指すは西、商業都市グラスゴー、ユアンの生まれ故郷である。彼らはそこでギーヴと落ち合う約束をしていた。エディンバラとグラスゴーは運河でつながっているので船での移動が楽だが、関所の検問に引っかかることを考えると交通量の多い陸路の方が安全だ。どさくさに紛れて関所を通過することができる。

ユアンは疲れて眠ってしまったヒリールを背負い、ヨイクの横を歩いていた。考えることは色々とあったが、彼の第一の仕事は金の工面である。頭の中で諸経費の計算をしながら黙々と足を動かしていると、やがてヨイクがおかしそうに笑った。

「まだヒベルニアに骨をうずめる心配してるの？」

そういうわけではないと言おうとしたが、ユアンは思い直した。確かに、それも心配ごとのひとつだ。

「ヒベルニアからこちらへ帰る方法が分かったとしても、果たしてヒベルニア王はおれたちを帰してくれるだろうか。おれたちはヒベルニアの秘密をあまりに知りすぎてしまったと思わないか？」

「ギーヴ猊下がヒベルニア王を説得してくれることになってるけど、どうなるかしらねえ」

ユアンはギーヴ・バルトロメの暢気な顔を思い出し、いまいち期待できないなと思った。

「ま、あんたは自分の望みのことだけを考えていればいい」

暮れなずむピンク色の空を見上げ、ユアンはヨイクを追い越した。

「おれは何があっても、あんたを裏切らない。あんたが誰を敵にまわしても、おれだけはあんたの味方だ」

ヨイクは彼の後ろでふふっと嬉しそうに笑った。

「そんなこと、とっくに知ってるわ」

ヨイクは雪道に小さな足跡を作りながらさらにユアンを追い越した。その姿勢のいい真っすぐな後ろ姿に、ユアンは心を奪われ目を細めた。民話学者になると言って家出してからずっと、ヨイクは常にそうやって自分の求めるものを追いかけてきたのだろう。ユアンは彼女の情熱が眩しかった。

「……ううん」

ユアンの背中でヒリールが身じろぎした。

「目が覚めたか？」

「うん」

ユアンはヒリールを背中から下し、その眠たげな顔を覗きこんだ。

「歩けるか？」

少女はこっくりと頷いたが、それから不安そうな顔でヨイクとユアンを交互に見た。

「もしかして、グラスゴーまでこの道をずうっと歩くの？」

それは無理、と少女の顔には書いてある。旅慣れない彼女の足では難しいだろうことはユアンも予測していた。

「大丈夫だ、馬車に乗る。三人でいると目立つから、団体様の中に潜り込むんだ」

「団体様？」

「今に分かるわ」

小首を傾げるヒリールにヨイクが胸を張った時だった。午後四時過ぎ、すっかり暗くなった街道を、ごとごとと何かが近づいてくる音がした。音はどんどん大きくなり、地平線の向こうから何かがやって来るのが見え始めた。

「あれは……？」

ヒリールが怯えた顔でヨイクとユアンを見上げたので、二人はつい笑ってしまった。

「大丈夫、あれはユアンのお友達の馬車よ」

馬車は三台連なって走って来た。どれも大きな幌馬車で、それぞれ二頭の馬が車を引いている。三人の前で馬車が急停車すると幌の中から大柄な男が飛び降りて来た。

「よう、リプトンの旦那！言われたとおりの時刻にエディンバラを出発してきたぜ！」

「助かった。グラスゴーに着いたら約束の金のもう半分を払うよ」

ユアンは大男に応じつつヒリールの手を取って幌馬車の荷台に彼

女を乗せた。続いてヨイクも乗り込む。幌の中には様々な衣装と小道具が詰まっていて、彼女たちは興味深そうに荷台をぐるりと見回した。

「彼らは旅の劇団で彼とは昔からの知り合いだ。エディンバラでたまたま会って、グラスゴーに行くというから乗せてもらう約束を取り付けたんだ」

ユアンがヒリールに教えてやるとヨイクは彼女に囁いた。

「ユアンは多方面に無駄に知り合いが多いのよ」

無駄にとは失礼な。ユアンも荷台へ乗り込み、大男もそれに続く。やがて馬車は走り出した。

「これまでに検問に遭ったか？」

適当なところに腰を落ち着け、ユアンは大男こと劇団長に訊ねる。ヒリールをリラ城から連れ出してからもうすぐ丸一日経つ。教会がどの程度追手を差し向けているか気になるところだ。

「エディンバラを出る時に一回あったきりで後は静かなもんだぜ」

教会はまだ本格的に動いていないのだ。それも時間が経てばどうなるか分からないが、まだ安心していられるようだ。

「ねえ、旦那、今度は何する気なんだい？」

荷台の奥の方に座っていた数人の女の中の一人が煙管をくわえた唇で気だるげに訊ね、ユアンに近づいて来る。名前は忘れてしまっ

たが、以前からの知り合いの女だ。ユアンは唇の端を上げて答えた。

「ちょっとばかし、教会に喧嘩を売ろうと思ってるんだ」

「まあいやだ」

いやだと言いながら女は楽しそうにユアンの腕を取った。

「男って無茶ばかりするんだから」

流し目をくれる彼女に言葉を返そうとした時、馬車が速度を落とした。

「心配すんな、今夜の宿に着いたんだ」

敵襲か検問かと思わず腰を浮かせたヨイクとユアンに劇団長が笑った。街道沿いにつくられた隊商宿に到着したのだ。三台の馬車に乗った劇団員たちは隊商宿に入ると馬を休ませ、食事にありついた。ユアンたちも彼らと食卓を囲み、男女別の大部屋で眠りに着いたのだった。

ちらちらと雪が降る。グラスゴー近郊の険しい森の中の街道を、三台の幌馬車が音を立てて駆けていく。演劇団の馬車だ。

白い森の中に、娘たちの朗らかな歌声が響く。

「彼の故郷は青い釣鐘草の咲き乱れる美しい邦（くに）」

戦地へ赴いた恋人を想う歌だ。

「真実の愛で彼を守る、この私の命をかけて」

三台のうち、真ん中の馬車に若い娘たちが乗っている。歌いながら、衣装や小道具を作っているのだ。前後の馬車に乗った男たちは景気の話をしながら、彼女たちの歌う声に耳を傾けている。

曲目が変わった。緩慢だが陽気な歌だ。ライ麦畑のカップルを冷やかすスコットランド民謡である。

「あっはっは、何よこの歌？」

大口を開けて笑い、ヨイクは訊ねた。

「うふふふ、乙女の青春の歌よ」

「スコッツの女もたくましいわ」

娘たちと笑い合いながら、ヨイクは手を動かした。メモに歌詞を書いているのだ。ヒベルニアのことが済んだら、こうして民謡を集めるのも面白いかもしれない。

「ねえ、リプトンの旦那って、本当はあんたのいい人なんじゃないの？」

隣の娘がヨイクの腕をつついた。ユアンは先頭の馬車に劇団長と一緒に乗っている。他の娘たちも興味深げに頷いた。ヨイクは鞄にメモをしまい、舞台衣装の刺繍の手伝いに戻った。

「違うってば、あいつはただの友達よ」

「えー、またまたあ」

ヨイクとユアンとヒリールは、劇団員と同じような服を着ている。すでに二度ほど検問にあったが、怪しまれもしなかった。彼らが劇団に潜伏してもう四日目だ。三人は劇団員たちとともに馬車に揺られて街道を進み、夜は隊商宿で眠った。

「午後には森を抜けてグラスゴーに着くだろうから、荷物をまとめておけよ。ただし、服はそのままにしておけ。恐らく市門の前で検問に遭うだろうから」

昼の休憩の際、ユアンはヨイクとヒリールにそう囁いた。

「おおい、みんな、そろそろグラスゴーに着くぞ！」

先頭の馬車の御者が叫んだ。ヨイクが幌の中から顔を出したそのとき、馬車が森を抜けた。辺り一面に広大な雪原が広がり、地平線にぽつんと町が見える。立派な屋根と鐘楼を持った大聖堂がある町だ。街道はその町へ向かって真っすぐに敷かれていた。

「ヒリール、起きなさい。グラスゴーに着くわ」

ヨイクは幌の中に戻り、荷台の隅っこで丸くなっていたヒリールを揺さぶった。

「ううううん、起きた」

目をつぶったまま上半身を起こし、ヒリールは頭から毛布を被った。それをはぎとり、ヨイクは一喝する。

「こら、目を覚ましなさいっての。しっかりして、最後の検問よ。これを抜ければ無事に故郷に帰れるんだからね」
「ううううん」

そうこうしているうちに馬車はグラスゴーの市門にどんどん近付いていた。馬車が速度を落とした時、最後の検問が始まったとヨイクは腹に力を入れた。

「何だかえらく時間をかけてるみたいね」

劇団員の娘がヨイクに言って指さしたのはグラスゴーの市門と、それに向かって伸びる行列だった。徒歩の者も馬の者も馬車も、雪の中で辛抱強く並んでいる。劇団の三台の馬車も静かに行列の最後尾に着いた。

「いつまで待たされるかしら」
「日が暮れるまでに中へ入れるといいわね。今夜はまた一段と冷え込みそうだもの」

娘たちはそう言ってのんびりと笑い合い、再び刺繍を始める。ヨイクとヒリールも緊張を抑えてそれを手伝った。

しばらくして、先頭の馬車に憲兵の声がかかった。

「全員の首札を改める。一人ずつ馬車を下りて来い」

ヨイクとヒリールは緊張しながら馬車を下り、首札を手に憲兵の前に立った。とはいえ、ヒベルニア人のヒリールはユアンの用意した偽造の首札を使っているし、ユアンもグラスゴーではお尋ね者なので偽名と偽造首札で今までの検問を通過した。まともな旅行者は

ヨイクだけだったが、彼女は彼女で著名人なので「あ、新聞広告の民話学者のヨイク・アールト?」と役人に訊ねられては恥をかいていた。

劇団員全員が検問を終えると、馬車は市門をくぐってグラスゴー市に入った。ちょうどそのとき、グラスゴー大聖堂の鐘が鳴った。馬車は中央広場で止まり、三人は服を着替えて劇団と別れた。

「ぶ、無事に辿り着いた……!」

ヨイクは万感の思いをしみじみと口にした。ここまで来ればヒベルニアは目前だ。ヒリールもほっとしたように微笑む。

「わたしもどきどきしちゃった」

意気投合する女子たちに、冷や汗ひとつかいていないユアンが背を向ける。

「先に『鷲獅子亭』へ行ってくれ。おれも野暮用を片付けたらすぐに行く」

ユアンは言い捨て、通りかかった辻馬車に颯爽と乗り込んでいずこかへ去って行った。残された二人は荷物を背負って歩き出す。

「仕方ないわねえ。ヒリール、行きましょう。ああいう勝手な男を夫にしちゃダメよ」

「ユアンは勝手?」

「そうね、勝手。というより自由、かな」

十五歳で渡米し、十九歳で自分の会社を設立し、二十三歳で書籍

商に暖簾変えをしたユアンが、ヨイクは羨ましい。彼は心のままに生きているのだ。

「ここ、ユアンと初めて会った場所だわ」

ヨイクがつぶやいたのは劇場前の広場だった。貴族や商人の馬車が行きかい、カフェやレストランが賑わっている。三年前にヨイクの目の前で起こった惨劇が嘘のようだったが、彼女の胸はちくちくと痛んだ。

「ユアンとヨイクはこの町で出会ったの?」

「私があの店でカフェオレを飲んでたら、ユアンの家の使用人が貴族に因縁つけられて殺されたの。で、あいつってばその貴族のことを拳でぶん殴った」

自分の拳を固め、ヨイクは空を殴る。ヒリールは目を丸くして頬に両手をあてた。

「うわあ」

「世の中にはすごい奴がいるもんだと思ったわ。ユアンはその貴族に銃を向けられて、ああ助けなくちゃって思った時には私も引き金を引いてた。幸いその御貴族様は死ななかったけど、どうやらカスリ傷を負わせてしまったらしくて、私もここでは半分お尋ね者よ」

ヨイクは足早に劇場前を通り過ぎた。

「私とユアンが出会ったころの話をしましょうか」

5．追憶1　―入道雲―（前書き）

今回から数回にわたっては過去のエピソードとなります。
ヨイクとユアンの出会いから、ギーヴのエディンバラ脱出まで。

5．追憶1　―入道雲―

ユアン・リプトンがヨイク・アールトに出会ったのは三年前、ユアンが二十三歳、ヨイクが十五歳の時のことだ。

ユアンはスコットランドの商業都市グラスゴー市の貧しい雑貨屋に生まれ、八歳で初めて給料を手にしてから様々な仕事を渡り歩いた。やがて自分の才能を試そうと十五歳でアメリカへ、十九歳で自分の貿易会社を設立した。扱っていたのは紅茶や砂糖、煙草など儲けの大きい嗜好品が中心で、ユアンは一代で大きな富を得た。

一方、その頃のヨイクはヒベルニアに関する民間伝承を集めるために旅を始めたばかりだった。父親の反対を押し切って村を出た手前、路銀は自分のトナカイを売り払って得た分しかなかった。それがとうとう底をつき始めていた。

運命の日、ユアンは大切な商談に向かうべく馬車に乗り込んだ。機能的ながら美しい自家用の馬車だ。真夏の汗ばむ陽気ではあったが老舗の仕立て屋に作らせた新品のスリーピースを着込み、母親譲りの赤毛を整髪料で後方にきっちりと撫でつける。商談に臨む時は見た目も肝心だ。

屋敷を出て十数分後、ちょうど劇場の目の前にさしかかった時だった。馬車が何かにぶつかって急停止した。座席で新聞に目を通していたユアンは驚いて扉を開けた。御者は興奮する馬を落ち着かせようと手綱を引きながら青ざめた顔でユアンを顧みる。

「だ、旦那様、すみません」

ユアンの馬車は並走する別の馬車にぶつかってしまったようだ。相手が辻馬車なら窓から顔を出して謝れば済むのだが、馬車を見る限り相手は貴族だ。ユアンが馬車を飛び降り、貴族の馬車に駆け寄ると、劇場の前の石畳に尻もちをついた若い男が従者に助け起こされながら何か喚き散らしていた。ユアンは彼を知っていた。フォション侯爵だ。麻薬や武器の密貿易で荒稼ぎしていると商人仲間から聞いたことがある。

「おまえ、ユアン・リプトンだな！商人の分際で侯爵の馬車にぶつかるとは何事だ！あまつさえ、このボクに怪我を負わせるとは無礼千万！」

ユアンは地面に膝を折り、面倒なことになったと内心で舌打ちした。ユアンの馬車は芝居見物にやってきた貴族の馬車にぶつかり、ちょうど馬車を降りようとしていたフォション侯爵閣下を転倒させてしまったのだ。知人や下々の見ている前で恥をかかされた侯爵は顔を真っ赤にして怒り狂っている。彼の転び方がよっぽど滑稽だったのか、傍らに立つ若い娘は幻滅した様子で侯爵を見下ろし、見物人は何か囁き合いながらくすくす笑っている。

「誠に申し訳ございません。下男の無礼は主人である私が責任を負います。どうか広いお心でお許しください」

ユアンと御者は並んで深々と頭を下げた。汗水たらして働く商人が、先祖から譲り受けた特権と財産でのうのうと生きている貴族に対して膝を折るなど悔しくてたまらなかったが、こうするしかない。

「おまえのせいで皆に笑われたじゃないか」

フォション侯爵がつぶやいたかと思うと、大きな破裂音がして御

者の身体が傾いた。地面にどさりと倒れた彼の額から大量の血が流れ出し、あっという間に血だまりをつくる。あちこちから女性の悲鳴が聞こえ、ユアンはフォション侯爵を見上げた。侯爵は白煙を上げる短銃を今度はユアンに向ける。二連銃だ。

「おまえのせいで皆に笑われたじゃないか。おまえのせいで婚約者の前で恥をかいたじゃないか。おまえのせいで、おまえのせいで」

血走った目でフォション侯爵が引き金の指に力を込めた時、ユアンは死を覚悟した。短い人生だったが、やりたいことはやったと思う。心残りは今日の商談くらいだ。詳細は知らされていないが、きっとユアンが喜ぶ話だと言って知己がセッティングしてくれた商談だった。

「まったく、イカレてるな」

何もかも諦めて思わずつぶやくと、それまで金縛りにあったように動かなかった身体が自由になった。すると自分の頬や服に御者の血が付いていることに気が付き、ユアンの胸に怒りが湧き上がってきた。彼には妻子がいた。年老いた両親がいた。彼には長い人生があり、たくさんの喜びや悲しみを手にするはずだったのに、それが身勝手な一人の男の手で、無情にも断ち切られたのだ。

「な、なんだと?!」

ユアンがすっくと立ち上がると、背の低いフォション侯爵はたじろいだ。ユアンは顎を突き出し、侯爵の顔をじっと見下ろし、拳を固く握った。向けられた銃口が恐ろしくなかったといえば嘘になる。それでも我慢できなかった。こんなに怒ったのは生まれて初めてかもしれなかった。身体が火の玉のようだ。そもそも、麻薬や武器の

売買でぼろ儲けしているこの男が、ユアンは大嫌いだったのだ。

「おまえは、イカレてる」

大きく振りかぶり、全体重をかけて突き出したユアンの拳がフォション侯爵の左頬を直撃した。侯爵は数歩よろけて地面に倒れこむ。彼は頬を押さえ、目を丸くしてユアンを見上げた。貴族である自分が庶民に殴られるなんて想像したこともなかったのだろう。もしかしたら今までの人生で殴られたことが一度もなかったのかもしれない。

「お、お、お、おまえ、殴ったな！商人のくせに、このボクを！ど、どうなるか分かってるんだろうな！」

「分ってるさ。おれはおまえみたいな阿呆じゃない」

最期にやってやったぞという清々しい思いと若干の後悔の念が胸をよぎり、ユアンは今度こそ死を覚悟した。フォション侯爵は立ち上がり、常軌を逸した怒りの形相で真っ黒の銃口をユアンの眉間に向ける。次の瞬間、劇場前広場に銃声がこだました。うめき声を上げたのは侯爵だった。彼は叫びながら右手を押さえ、短銃を下ろした。ユアンは周囲を見回す。誰かが侯爵を狙撃したのだ。それが誰なのかはすぐに分かった。

「まったく、イカレてるわね」

凛とした張りのある声がして、その場にいた誰もが彼女を振り返った。どこからともなく現れ、呆然とするユアンに駆け寄ったのは藍色のワンピースの少女だった。珍しい身なりと背中に大きな荷物を背負っているところを見る限り、異邦からの旅人のようだ。彼女は短銃を腰のベルトに挟み、波打つ金色の髪を揺らして、ユアンの

腕を強い力で引っ張った。

「殺されてやることなんてないわ」

少女はユアンの手を引き、人の群れを縫ってその場を逃げ出した。背後から侯爵の怒鳴り声が聞こえてきたが、二人を止める者はいなかった。ユアンは引きずられるがままに走りながら、自分の手が震えていることに気がつく。ついさっき、自分は本当に殺されるところだったのだ。あと、ほんの一瞬で。心臓がどくんどくんと音を立てて鳴り響いている。生まれてこの方、こんなにも生きているということを実感したことはなかった。

しばらく走ると、少女は何も言わずに路地裏の建物と建物の間に飛び込んだ。当然、腕をつかまれたユアンも引きずりこまれる。大人がすれ違えない程の狭い通路を進み、角をふたつ曲がったところで彼女は足を止めた。二人とも汗まみれだ。

「あのイカレ侯爵の馬車は往来の激しい場所で急停車したのよ。あなたの馬車はそれを避けようとしたけどだめだった。あなたの御者は悪くないわ」

薄汚れた地面にしゃがみ込み、息を整えながら少女は言った。ユアンは上着とベストを脱ぎつつ建物の壁に寄りかかり、大きく肩で息をする。だらしなく地面に座り真上を見上げると、建物と建物の間から、青い空と入道雲が見えた。

「当然だ」

二人はそれきり口を利かず、息をひそめて騒ぎが収まるのをただ待ち続けた。やがて日が傾き始めた頃、ユアンは懐中時計を取り出

して頭を抱えた。商談の約束をすっぽかしたことに気がついたのだ。そして、自分を助けてくれた少女にまだお礼のひとつも言っていないことにも。少女はユアンの隣に座り、膝の上に広げた紙に何か文章を書いていた。

「なぜ、おれを助けてくれたんだ？」

ユアンの声は掠れていた。自覚している以上におれは参っているのかもしれない。彼が心の中で自嘲したと同時に少女は顔を上げた。青い両目がきらりと光る。それは若きビジネスマンをはっとさせるほど意思の強い瞳だった。

「お金に困ってるからよ、リプトンさん」

「……何だって？」

ふふふ、と少女は破顔した。

「あなたの馬車があのイカレ侯爵の馬車にぶつかった時、劇場前のカフェにいたの。他の客があなたの顔を見るなり『リプトンさんなら上手いこと金で解決するだろう』って言うもんだから、あなたを助ければ礼金がたんまり貰えるんじゃないかと思って」

少女は自分の背中の後ろから大きなボストンバッグを取り出した。ユアンは額を抑えた。それは今日の商談のために用意した金だった。馬車に積んでおいたものを彼女が持ってきたのだろう。

「言っておくけどな、それひとつで貴族の年収に相当するんだぞ」

「見れば分かるわよ。だから騒ぎの隙にそれを馬車の荷台からいただいて、かといって泥棒するのも気が進まなかったら、あなたを助けたのよ」

金が絡むとユアンの頭は冷静に思考を始める。確かに少女はユアンの命の恩人だ。自分の資産に見合った礼金をはずむべきだろう。それに、商談にはもう行けない。フォション侯爵は自分の頬を拳で殴った商人のことを市長に報告するだろう。彼は影響力のある人物だから、この町で商売することも暮らしていくことも難しくなる。だったら、もう一度どこか別の町で、何もかも一からやり直しだ。

「分かった、礼金ははずむ。だが、その金はあんたにやれない」

ユアンは商談のために新調したズボンの汚れを払いながら立ち上がる。髪の乱れを直し、ベストに腕を通す。

「どういうこと？」

少女は腰を浮かし、静かに首を傾けた。彼女が憤慨するのではないかと思っていたユアンは、この子は案外賢いのかもしれないと目を見張る。

「事情はうちに来れば分かる。おれはここに隠れているから、そこの通りで辻馬車を捕まえて来てくれ」

少女はボストンバッグを置いて表通りへ出ていくと、すぐに辻馬車で戻ってきた。ユアンは大金を抱えてみすぼらしい辻馬車に乗り込み、平静を装って自宅の住所を御者に告げた。御者は何かに気がついたかのように片眉を上げたが、何も言わずに馬の尻へ鞭を振るった。

6．追憶２　―タベの光―（前書き）

前回のすぐ後の話です。

6．追憶2　―夕べの光―

辻馬車は新興住宅街の一角に佇むリプトン家に、二十分で到着した。西の空が薄いオレンジ色に染まり始めていたが、まだ暑い。ユアンは上着とボストンバッグを手に馬車を降りた。彼の命の恩人である少女もそれに続く。二人は裏門の扉を開けて素早く中に滑り込んだ。

「あなた、本当に金持ちなのね」

下級貴族の屋敷より大きな住居を前にして、少女は感心したように口を開けた。

「それも今日までだ。こっちだ、ええと」

「ヨイクよ。ヨイク・アールト」

口を開けてリプトン邸を見上げていた少女が、ユアンに向き直って微笑んだ。波打つ金色の髪が揺れる。瞳は海のように青い。肌は陶器のように白く滑らかで、頬や唇は薔薇色だ。若きビジネスマンは突然居心地が悪くなり、わざとらしい咳払いをした。明るいところで、きちんと彼女の顔を見たのは初めてだった。

「そうか、じゃあこっちだ、アールト嬢」

ユアンは勝手口を開けてヨイクを厨房へ招く。背後を気にしながら自分も建物の中に入ると、ドアを閉めて鍵をかけた。厨房は無人だった。いつもなら使用人が夕食の支度をしている時間なのだが。

「静かね。誰もいないのかしら」

「執事はいるはずだ。ここで待っていてくれないか？」

ヨイクを厨房に残し、ユアンは居間と応接間を覗き、階段を上って自室や使用人の部屋や客室を見て回った。どの部屋も荒され、目のつくところにあった金目のものがなくなっている。そして誰の姿もなかった。屋敷にはユアンの他に六人の使用人が住んでいる。

「旦那さま、ここです、上ですよ！」

もしやと思って屋根裏部屋の隠し扉の真下へ行くと、案の定、扉の隙間から執事が顔を出した。

「みんなそこに隠れてるのか？」

「ええ、フォション侯爵の私兵と市の衛兵がやってきたものですから、ここに隠れておりました。何があったか聞きました、ご無事で何よりです、旦那さま。今、はしごを下しますから」

「頼む。ああ、それと客が来てるんだ。おれの命の恩人だから、できる限りのもてなしをしてくれ」

「承知しました」

親子ほど年の離れた執事が恭しく応じると、ユアンは厨房にヨイクを迎えに行った。彼女はユアンが戻ってきたことに気が付かず、窓から差し込む夕べの光の中にひっそりと立ち、庭師の整えた広い庭を眺めていた。藍色のワンピースに包まれた細い身体は彼女の瞳のように堂々としていて、ユアンは不思議なものでも見るように、しばらくヨイクの背中を見つめていた。

「あら、執事は見つかったの？」

ヨイクが振り向いた。ユアンははっとして、誤魔化すように懐中時計を見た。午後九時。夏のスコットランドは日が長く、まだ日は沈まない。

「あんた、いったい何者なんだ?」

口をついて出た質問にユアンは自分で驚いた。そんなことを聞いてどうする。

「民話学者よ」

ヨイクは天気の話でもするように答えた。

「ヒベルニアって知ってる?」

「御伽噺の島だな」

「私はそれが本当に存在すると思っているの。色々な町を訪ねて、色々な人から話を聞いて、いつかヒベルニアの真実を突き止める。それが私の仕事」

ユアンは身を乗り出した。彼はそれまで飾り立てて踊る女と身を粉にして働く女しか知らなかった。ヨイクは自分と同じ、前に進み続ける種類の人間だ。

「そうか。おれも十五の時に家を出てアメリカへ渡った。最初は辛かったが、商売の流儀やモノや金の流れが分かるとすぐに貿易に夢中になった」

「私はまだ不調よ。この前もエディンバラの名誉司教との意見交換会に応募して落選したし。まあ、大学出の一流学者ばかりが応募する中で無名なのは私だけだったって話だけど」

ユアンはエディンバラ名誉司教などという地位は聞いたことがなかったし、民話の研究とエディンバラ教会がどう関係しているのかも分からなかったが、ヨイクが困っていることは分かった。

「あんたは大学に行くつもりはないのか？」

「私の知りたいことは誰も知らないことだもの」

ヨイクは途方に暮れた顔で西の空を見つめた。夕日の沈んでゆくその向こうに、恋焦がれる何かがあるかのように。

「だからエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメにどうしても会いたいの。私の知りたいことの一番近くにいるのが彼だから」

彼女はユアンを顧みてにっこりと微笑んだ。

「ああ、ごめんなさい。――執事は見つかった？」

屋根裏部屋には屋敷中の金目のものが集められていた。衛兵たちに奪われないよう、慌てて隠したのだろう。現金、宝石、銀食器、高価なランプ、その他にも小さくて持ち出しやすそうなものが並んでいる。リプトン家の面々は暗く天井の低いその部屋で車座になり、ヨイクは少し離れたところに腰を下した。

ユアンは五人の使用人の顔を順に見つめた。毎日顔を合わせている彼らの、一人が欠けている。御者だ。ユアンの胸は改めて痛んだ。

「みんな、聞いてくれ。おれはこの町を出る。この屋敷も引き払うつもりだ。みんなには本当にすまないと思ってる。特にクレア、おれはあんたの亭主を死なせてしまった」

ユアンが話を切り出すと、ひとりの女が堪えていたような嗚咽を漏らして泣き出した。胸に乳飲み子を抱いているクレアという名の女は死んだ御者の妻だ。

「いいんですよ、旦那さま、全部うちの亭主のせいですから。うちの亭主がもっとしっかりしていれば……」

「彼は何も悪くない」

「そうよ、悪いのはあのイカレ侯爵だもの」

ユアンの言葉をヨイクが援護する。クレアは泣き崩れたが、ユアンは話を進めた。

「今からこの金と、そこにある金目のものを分配する。そうしたら、みんなもここを出るんだ。行くあてのないものはグラスゴー公園通りのおれの弟を訪ねてくれ、会社も彼に託すつもりだ」

ユアンは商談のために用意した金をボストンバッグから取り出し、それを貴金属類と一緒に平等に分け、自分の取り分をクレアにやってしまった。

「こ、こんな大金を?!旦那さまの分は?」

「葬式代にするといい、おれのことは心配するな。それより急げ、みんな、どうか元気で」

主人との別れを惜しみつつ使用人が出ていくと、屋根裏部屋には

ユアンとヨイクだけが残された。少女は頬を膨らませてユアンを見上げた。

「私に礼金をはずむ話は？」

がらんとした屋根裏部屋を眺めていたユアンは我に返ってヨイクを顧みた。

「札束を持って旅するのは危険だろう？こっちへ来い」

二人は梯子を下りてユアンの寝室へ向かった。ヨイクはわずかに警戒したようだったが、黙ってユアンについてきた。窓の外は薄闇に包まれており、黄色く丸い満月が東の空に浮かんでいる。その月の光を頼りに、ユアンはカーペットをめくり、床板をはがした。

「現金より便利で確実なものもある」

ユアンが床下から取り出したのは四本の金の延べ棒だった。ヨイクは難色を示した。

「こんなに重いものを持って旅するのも大変よ。換金するのも面倒だし」

「札束は所詮、紙きれだ。それに、国境を越えるたびに両替していたら損をする、貴金属や宝石の方がいい。ほら、これはどうだ？これなら軽いだろう」

続いてユアンがヨイクに手渡したのは数百粒のダイヤモンドが入った革袋だった。それを床に五つ並べ、彼はヨイクの顔を見た。彼女は困ったように唇を尖らせる。

「宝石の価値は知らないわ。これでどれだけのお金になるの？」
「五千ポンドにはなるだろうな。足りないか？」
「……あの鞄にはもっと入ってたんでしょう」
「ばれたか。あの半分だ」

恨みがましそうなヨイクにユアンは笑ってしまった。彼は鈍くない人間が好きだった。

「いいわ。そんなに沢山持てないのは事実だし、これだけ頂戴するわね」

ヨイクは腰のベルトに革袋を結びつけ、床から立ち上がった。

「あんた、いつまで旅を続ける気なんだ？」

立ち去ろうとするヨイクを引き留めるようにユアンは訊ねた。ヨイクは扉に向かいかけていた足を止め、ユアンを振り返らずに答えた。

「故郷を出たのはほんの数ヶ月前なの。知りたいことを全部知るまで旅はやめないわ」
「じゃあ、次に路銀がなくなったらどうする気だ？また金持ちの命を救って礼金をせびるのか？」

ユアンは窓際の机の椅子を引き、ヨイクの方を向いて腰を下した。少女は月光の中にじっと立ち続けている。ユアンからは彼女の背中しか見えなかったが、ヨイクが真剣に考えていることは分かった。彼女は自分の未来や、自分の望みや、これからどうしていくべきかということを真剣に考えている。指針を求めている。目標へ到達するための一歩をどこへ踏み出すべきかを探している。

「さっき膝の上で書いていたものを見せてくれないか」

劇場前広場から命からがら逃げ出した後、路地裏でヨイクがしていた書き物のことがユアンはずっと気になっていた。ヨイクは一瞬何のことか分からなかったようだが、すぐに鞄から紙の束を引っ張り出した。

「これは故郷の民間伝承を文章にしただけのものよ」

ヨイクから紙の束を受け取ると、ユアンはそれを月明かりの下でゆっくりと読んだ。ヨイクの字はとても綺麗で、彼女のように堂々としていた。民間伝承は神秘的で、幻想的で、何より彼女の語り口がおもしろく、情景描写も美しかった。

「なあ、お嬢さん、エディンバラ名誉司教に会う方法を教えてやろうか」

一通り読み終わると、ユアンは座ったままヨイクに声をかけた。

「え？」

ユアンの本棚から『ガリバー旅行記』や『東方見聞録』を抜き取ってページをめくっていたヨイクは驚いてその本を閉じた。

「ついでに研究費用も少なからず手に入る。悪くない話だと思うがね」

「あなたに何がわかるのか知らないけど、教えてほしいわ」

机の上に転がっていたペンを手に取り、ユアンはこつこつと机を

たたいた。それから紙を取り出し、実家の雑貨屋を継いだ弟へ手紙を書いた。『おれの会社をおまえにやる。ついでにおれの家の処分を頼む。ユアン・リプトン』

「エディンバラ名誉司教に会うには、あんたが学者として有名にならなければならない、そうだろう?ではどうしたら有名になれるか?大学を出ていないあんたには学者同士のネットワークがないだろうし、老いも若きも学者たちはあんたを相手にしないだろう。となると、学者たちを当てにはできない。じゃあ誰の間で有名になるか?」

かたん、とペンが机の上に落ちた。ユアンは立ち上がって真正面からヨイクを見た。ヨイクはユアンの次の言葉を待つようにじっと彼を見つめ返した。ユアンは唇の端を吊り上げた。

「庶民も貴族も、御伽噺は大好きなんだよ」

一歩、二歩とユアンはヨイクに歩み寄った。そうしながら、彼女を焚きつけるように早口で語る。

「あんたが集めた民話を女子供にも分かるような本にする。英語版は庶民をターゲットに安価で刷り、フランス語版は貴族のために立派な装丁で出版する。目新しいものをテーマにした方が売れるだろうから、北欧辺りの民話がいい。もちろん、それを全国の書店に売りさばくのはおれだ」

「あなたが?」

ユアンの勢いに付いて行けず、ヨイクは疲れたように声を裏返した。ユアンは尚も身を乗り出し、部屋の中を行ったり来たりした。

「これはビジネスだ。採算がなければやる気も起きないが、これは儲かる。あんたの本は売れる。英語版はイギリスやアメリカで、フランス語版ならヨーロッパ中で売れるだろう。そうすれば、あんたの名はヨーロッパ中に広まるぞ」

呆れかえるヨイクの周りを行き来していたユアンが、その時ぴたりと動きを止めた。彼はヨイクの顔を覗きこみ、一語一語をゆっくりと発音した。扇情的な言い回しだった。

「おれはあんたに賭ける。あんたもおれに賭けてみないか？」

ヨイクは腹を抱えて笑いだした。

「あっはっは、あなたはペテン師ね。おまけにキザ。あなたが言うことはみんな本当に聞こえるわ、リプトンさん」

ユアンは憤慨した。

「みんな本当のことだ」

「そう？じゃあ本棚のこれは何？」

言いながらヨイクが指したのは本棚に収まる一冊の本の背表紙だった。『相手をその気にさせる交渉術、ペテン師一歩手前編』

「……」

「ま、いいわ。私も現状を打開したかったから」

おかしそうに笑い、ヨイクは大きく深呼吸した。憮然としているユアンに向き直り、彼女は静かに告げたのだった。

「私はあなたに賭けない。私はあなたを信じるわ」

ふわふわと揺れるヨイクの金髪を、黄色の月影がぼんやりと輝かせていた。海のように青い瞳もきらきらと光る。人間の目というものは、こんなにも美しく輝くものだったのか。ユアンはヨイクの瞳に見入り、一瞬、我を忘れた。この瞳を輝かすためなら、何でもしてやろうという気になった。

「……あんたも十分ペテン師みたいじゃないか」

ユアンがやっとのことで絞り出した悪口に、ヨイクは再び声を立てて笑った。ユアンもつられて笑い、それが収まると身を正してこう言った。これからは忙しくなりそうだと思いながら。

「まあ、ペテンだろうが何だろうが、これだけ覚えておいてくれれば上手くいくさ。世の中にうまい話なんてありはしない。おれはあんたの書いたものを必死で本にするし、必死で売りさばく。だからあんたは必死で考え、必死で書いてくれ」

それから一年後、ヨイク・アールトの本はヨーロッパ中でベストセラーになった。その才能が認められ、彼女がエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメに会うことができたのはさらに一年後、彼女が十七歳の時であった。

7．追憶3　―春に―（前書き）

ヨイクとユアンの出会いから二年後。

7．追憶3　―春に―

ヨイク・アールトがギーヴ・バルトロメに初めて会ったのは、雲ひとつないよく晴れた春の日のことだった。処女作の『北欧伝承余話』がベストセラー入りしてから一年後、彼女はようやくエディンバラ名誉司教との意見交換会に招待された。

エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメはエディンバラの聖ピーター大聖堂の鐘楼に幽閉されている知る人ぞ知る高位の聖職者である。彼は弾圧の末にヨーロッパ中に身を潜めたクラシック教徒の象徴的人物であり、エディンバラ教会にとっては大事な人質だ。彼は週に一度だけエディンバラ大学図書館を訪れる権利と、そこで月に一度だけ様々な学者と話をする権利を持っている。ギーヴ・バルトロメ自身が研究しているのは教会やクラシックの歴史だったが、彼はこれまで多くの分野の学者と語らってきた。

そしてその日、とうとう民話学者ヨイク・アールトが彼のもとに馳せ参じたのだった。

と言っても、実際にヨイクの出る幕はなかった。意見交換会に招かれる学者は二種類いて、意見交換会に毎回招待される老練の学者と、たった一度だけ会の見学を許される若手の学者だ。ヨイクはもちろん後者である。その日もエディンバラ大学図書館の一室で円卓に座ったギーヴ・バルトロメと老練の学者八人の間で議論が進められ、壁際に並んで腰を下した若手学者七人は彼らの見解に耳を傾けるだけであった。

「仕方ないとは思うけど、そんなに緊張しないでね。ほら、みんなアールトさんを見なよ」

ギーヴ・バルトロメが若手学者に各々の研究テーマについて訊ねたのは、意見交換会の最後だった。緊張する面々のせいで引き合いに出されたヨイクは慌てて背筋を伸ばした。この日のために遥々生まれ故郷のノルウェーからエディンバラへやって来た彼女は、あまりの疲労と眠気に欠伸を噛み殺していたところだった。

「アールトさん、君の本は俺も読んだよ。すごくおもしろかった。次はどの辺りを研究するの？このまま北欧を極める？」

ギーヴは気さくに柔らかく微笑んだ。若き研究者たちは、初めて自分たちを顧みてくれたギーヴの姿に恍惚とした。当然ながら彼らはギーヴの正体など知らない。三十代前半の容姿を持つ彼が実は百八歳の老人であることも。

彼の端正な顔立ちや背中で緩くまとめた金褐色の髪や緑色の瞳はヨイクから見ても魅力的ではあったが、その時の彼女の頭の中はギーヴと言葉を交わすチャンスを棒に振るまいという思いでいっぱいだった。おそらく最初で最後のチャンスだ。

「次はヒベルニアを狙ってます。ヒベルニアへ行って、ヒベルニアの住人からも話を聞きたいと思っているんですよ」

これで百八歳とはねと思いつつ、ヨイクはギーヴに満面の笑顔を向けた。「あなたの仲間のクラシックが隠れ住んでいることは分かっている」と言外に含ませて。ヨイクは、ギーヴが約六十年前からクラシックの象徴であったことも、ヒベルニアにクラシック教徒が隠れ住んでいることも、とあるクラシック教徒の遺した長い日記から知った。

その場にいた学者たちは失笑をもらし、これだから御伽噺に現を抜かす非科学的な奴はと小声でヨイクを馬鹿にした。笑わなかったのはギーヴだけだった。いや、笑わないどころか、彼は張り詰めた表情でヨイクの瞳を覗きこんだ。

「……そう。またお話できたらいいね、アールトさん」

意見交換会が終わり、ヨイクが図書館を出るとユアンは中庭のベンチに腰掛けてヴォルテールの小説『カンディード』を読んでいた。楽観主義の主人公が不運に見舞われ、しかしその不運のおかげでより大きな不運から逃れ、さまざまな登場人物と交わり、世界中を旅するのだとユアンはヨイクに教えてくれた。

口にこそ出さないがユアンが異邦を旅する物語を好んで読んでいることに、ヨイクは最近気が付いた。彼は利益になるからと言ってヨイクの本を出版し、それをヨーロッパやアメリカの書店へ売りさばいているが、実は彼自身も御伽噺や冒険小説が好きなのではないかとヨイクは密かに思っている。

「どうだった？」

ヨイクが現れたことに気が付き、ユアンは本から顔を上げて訊ねた。彼はいつものように赤毛を後方に撫でつけ、白いシャツの上にベストと上着を身につけている。折り目のついたズボンも染み一つない襟元のクラバットもユアンが自分で手入れをしているらしく、全くマメではないヨイクは感心してしまう。それとも、二十五歳の独身商人というものは皆こうなのだろうか。

「とりあえずカマかけてきたけど、だめね。ヒベルニアはクラシックが落ち延びた秘密の島だもの、そう簡単に情報を漏らしちゃくれ

ないわ。謎を解き明かせば私が本を書くことはばれてるし」

ユアンの隣に腰を下し、ヨイクは膝を抱えて深いため息をついた。

「まだまだ分からないことだらけね。ヒベルニアの場所、ヒベルニアへ向かう海流の場所、ヒベルニアには選ばれた者しか入れないというけど、その条件。ギーヴ猊下に会えたら少しは解き明かされると思って今まで頑張ってきたけど、そんなに甘くないか」

ヨイクは両手を振り上げて空を仰ぐ。

「貯えがなくなる前に謎を解き明かしてくれよ」

眉を上げて微笑み、ユアンは目を細めてヨイクを見下ろした。時々、ユアンがそんな風に自分を見つめることをヨイクは快く思っている。

「あ……」

ヨイクは声を漏らして腰を浮かせた。図書館から濃紺の法衣をまとった金褐色の髪の男が出て来たのだ。エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメは四人の護衛に前後左右を守られながら図書館前の階段をゆっくりと下りる。すると、すぐに四頭立ての立派な馬車がやって来た。大学内に馬車が出入りすることはまずないので、学生たちは一様にギーヴを振り向いた。

「ずいぶん厳重だな。あれがギーヴ・バルトロメ猊下か」

「ええ、聖なる妖怪ギーヴ・バルトロメ。とても百八歳には見えないでしょ？」

ヨイクとユアンは苦虫を噛み潰したような顔を見合わせた。ギーヴが囚われの身であることは知っていたが、それを目の当たりにするのはやはり気分が悪かった。

「彼に会うチャンスはもうないでしょうね。会えたとしても教会の監視があるもの。教会関係者の前で彼がヒベルニアの話をするとは思えない」

言いながら、ヨイクははっとした。馬車に乗り込もうと身をかがめたギーヴと目が合ったのだ。護衛に悟られないようにするためか、ギーヴは静かに目を伏せ、懐からさっと何かを取り出して石畳の上に落とした。彼はもう一度ヨイクに目配せしてから馬車の中に消えた。ギーヴの乗った馬車が門の方へ走り去ると、ヨイクとユアンは図書館に向かって駆け出した。

「これかしら？」

図書館前の石畳からヨイクが拾い上げたのは一枚のカードだった。クリーム色の紙に茶のインクで文字とリンゴのマークが印刷してある。

『王室御用達、菓子はニュートン。ロイヤルマイル通り白馬亭のとなり』

周囲の足元を見まわしつつヨイクは首をかしげる。ゴミ以外に落ちているものは他にない。二人は額を寄せてカードを見下ろす。

「どう見ても菓子店のカードだな。裏は白紙、メッセージがあるでもなし。ギーヴ猊下おすすめの店か？」

「王室御用達の菓子店を私におすすめしてどうすんのよ」

「じゃあ帰りに寄り道するからここで会おう、とか？とりあえず行ってみないか？ロイヤルマイルの白馬亭ならここからそう遠くない」
「そうね。行きましょう」

二人は辻馬車を拾い、街の中心を貫くロイヤルマイルというエディンバラ旧市街きっての大通りを目指した。

エディンバラはスコットランドの首都であり、ヨーロッパの宗教首都、つまりエディンバラ教会の総本山である。

街のほぼ中央には急峻な岩山がある。これは大昔に氷河によって削られた死火山で、その西側の頂上に建てられたエディンバラ城にはスコットランド王が、東側の崖の聖ピーター大聖堂にはエディンバラ教皇が鎮座している。

「複雑な地形と頑健な地盤を持ってはいるが、エディンバラ城はこれまで何度もイングランドに占領されてきた」

辻馬車を下りたヨイクとユアンは、人の往来の激しいロイヤルマイルをゆっくりと下っていた。商用でエディンバラを訪れたことがあるというユアンがヨイクに蘊蓄を話して聞かせている。

「クロムウェルもエディンバラ城を占領したのよね。中世の魔女狩りや一七〇五年のクラシックの処刑にも使われたんでしょう」
「ああ。そのエディンバラ城を起点として、なだらかな坂道が旧市街を貫いている。それがこれだ。ホリルード宮殿まで一マイルほど

続いていることから、この坂道はロイヤルマイルと呼ばれている」
「へえ」

「エディンバラは険しい谷に挟まれているから、この通り、狭い道路の両脇に五階建てや六階建ての住居が次々と建てられた。中世の香りの残る街路といえば聞こえはいいが、高層住宅の住人が窓から生活排水や残飯を投げ捨てるせいで年中悪臭が立ち込めている。特に夏場は地獄だな」

ヨイクは鼻にしわを寄せつつ高層住宅を見上げる。嗅覚がおかしくなりそうだった。

「窓の下へ何でも捨てるのはパリの模倣ね」
「ああ、捨てやすいように、上の階に行くほど窓が通りにせり出しているだろ」
「なるほどねえ」
「ははは、感心している間も頭上への注意は怠れないぞ、おっと」

ユアンが飛びのいた場所に林檎の皮が降ってくる。ヨイクは腹を抱えて笑った。

パブ兼宿屋の『白馬亭』はロンドン行きの駅馬車の発着地としても有名であるため、ヨイクとユアンはすぐに『菓子店ニュートン』を見つけた。

「おう、入んな。今しがた猊下から注文が来たとこだ。しかし今回限りにしてくれよ、うちだって教会に睨まれたかないんでね」

ヨイクとユアンが店先を覗くなり、威勢のいい中年男がヨイクの腕をつかんで店の中に引っ張り込んだ。厨房へと連れ去られるヨイ

クをユアンが慌てて追ってくる。

「お、おい、待ってくれ、悪いがこっちは事情を知らないんだ」

菓子職人でごったがえす厨房を抜け、食糧庫のようなところへたどり着くと、中年男はクリーム色のエプロンをヨイクに渡した。胸に『菓子店ニュートン』と刺繍されている。

「何を言ってやがる。さあ、それを着な。ぐずぐずするな、パイが冷めちまうだろう。そら、しっかり持て、落っことすなよ、猊下の好物のアップルパイだ」

ヨイクがエプロンを身につけ、籐かごの持ち手を握ると、中年男は床に生えた取っ手を引っ張り地下への扉を開いた。足元から吹き上げる風は勢いがよく、菓子店の地下がどこかと通じていることが分かる。ヨイクは納得した。

「ユアン、合点がいったわ」

「……おれも分かった気がする」

中年男からランプを受け取り、ヨイクは地下室を覗きこんだ。階段の下の方は真っ暗で、どこからかネズミの鳴き声や風の唸り声が聞こえて恐怖心を煽る。

「いいか、階段を下りて少し歩くとY字路がある。右が大聖堂とエディンバラ城方面、左は劇場に行っちまう。迷うと危険だから寄り道せずに右へ行け。突き当たりをもう一度右に曲がると長い階段がある。そこを上れば見張りの衛兵がいるから、猊下に菓子を届けに来たニュートンだと言えばいい」

「わかったわ、ありがとう」

ヨイクは中年男に礼を述べ、取り残されて不満そうなユアンに任せなさいと頷いてから地下への階段を下りた。Y字路にたどり着いた時、ヨイクの背後で菓子店の入り口が閉められてしまった。賑やかな街から切り離され、頭からつま先まで静寂と闇に包まれる。急に心細くなり、ヨイクは心を落ち着かせようと深呼吸した。

「右が大聖堂と城、左に行くと劇場」

ヨイクはそれぞれの道をランプの明かりで照らした。高級菓子店が城や劇場と地下でつながっているという話は聞いたことがある。王侯貴族のパーティーや観劇のために、つくりたての菓子をいち早く届けるべく作られたのだそうだが、まさか大聖堂にも通じているとは。

ヨイクは右の道を足早に進み、しばらく黙々と歩き続ける。寄り道もしたかったが、限りある時間を無駄にするわけにはいかなかった。道は急こう配の上り坂で、ロイヤルマイルを上っているのだと分かる。間違いなく大聖堂方面だ。

突き当たりを右に曲がると、果てしなく長い螺旋階段の下に着いた。ヨイクは覚悟を決めて階段を上り始めるが、上れども上れども終わりが見えない。何しろ、エディンバラ城もエディンバラ大聖堂も急峻な岩山の上にあるのだ。くじけそうになるたびに、この先にエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメがいるのだと自分に言い聞かせる。足が棒になりかけた頃、ようやく頭上に光が見えた。正方形の光の枠だ、扉に違いない。

折しも、ヨイクの真上で鐘楼の鐘が鳴った。エディンバラ大聖堂の鐘楼に辿り着いたのだ。

8. 追憶４　―無数の星―（前書き）

前回のすぐ後の話です。

8．追憶４　―無数の星―

ヨイクは螺旋階段を一気に駆け上り、木の扉を下からどんどんと拳で叩いた。扉はすぐに開いた。

「あ、ニュートンさん。いつもご苦労様です」

「おお、今日は女の子だ、可愛い」

扉を開け、地下を覗きこむなりヨイクに手を貸してくれたのは、スコットランドの正装のキルトを着た二人の衛兵だった。上半身はタキシード、腰にはタータンと呼ばれる伝統的なチェック柄の織物をスカートのように巻きつけて、膝下丈の毛糸の靴下を履いている。彼らに引き上げられつつ、ヨイクは周りを見渡した。そこは衛兵の詰所のようで、窓の外を見る限り鐘楼の地階に位置しているようだった。

「どうもありがとう。猊下の前でケーキの仕上げをすることになっているから、ちょっと時間がかかるんだけど、構わないかしら？」

ヨイクは籐かごを胸の前で持ち、上目遣いで訊ねる。衛兵たちは顔を見合わせ、困惑したように首をかしげた。

「いいんじゃないか？」

「猊下は天辺の部屋にいるよ。その階段の先だ」

「ご親切さま！」

ヨイクは衛兵たちににっこりと微笑み、疲れた体に鞭打って螺旋階段を上り始める。菓子店の店員はいつもこんな苦労をさせられているのだろうか。汗だくになり、肩で息をしながら頂上まで上ると、

木の扉の前に衛兵が一人立っていた。

「ニュートンさん、ご苦労様です、猊下が中でお待ちですよ」

「ど、どうも……」

ヨイクは部屋に通されるなり、不覚にも床の上に倒れこんだ。螺旋階段ですっかり目が回ってしまったのだ。冷たい石畳には絨毯の一枚も引かれていない。暖炉には小さな火が燃えていた。

「やあ、来たね。そろそろ来るころだと思って、ちょうどお茶を入れたところだよ」

柔らかい声が聞こえ、ヨイクは顔を上げた。夕日の差し込む部屋の中央に質素な木のテーブルが置いてある。そのテーブルの傍らに背の高い男が立っていた。濃紺の法衣をまとい、金褐色の髪を背中で結んだ男だ。

「アップルパイをありがとう、ニュートンさん」

ギーヴは緑色の目を冗談ぽく細め、ヨイクの手からアップルパイの入った籐かごを受け取った。ヨイクは床に倒れたまま、まじまじと彼を見上げる。クラシックの象徴であり、エディンバラ教会の人質であるギーヴ・バルトロメと、今、自分は二人きりだ。ヨイクは今さら胸がどきどきした。

「紅茶で構わない？俺はコーヒーも酒も飲まないんだ」

ギーヴはヨイクを助け起こし、椅子を引いて彼女を座らせた。彼はまだ湯気の立つアップルパイを籠から取り出し、それを八等分に切り分ける。ティーポットを手に取り、ふたつのカップに紅茶を注

ぐ。ゆっくりとした動作はまるで老人のようで、彼が百八歳の聖なる妖怪であることをヨイクは思い出した。

「そうだ、さっきから君の恋人が睨んでるんだよ。後で誤解を解いておいてほしいなあ」

ギーヴが窓の下を指して言うので、ヨイクは腰を浮かせて外を見た。大聖堂前の広場にユアンの姿があった。何故だか分からないが彼は不機嫌面でヨイクとギーヴを睨んでいる。だが、ヨイクは彼の背後に広がるエディンバラ市街に目を奪われた。夕焼け色に染まる赤屋根の街は美しく、鐘楼の天辺から見るとそれはミニチュアのようだった。

「こんな辺境に宗教首都が置かれ続けてきた理由が分かったわ。ここはまるで天界ね」

ヨイクは立ちあがって窓から身を乗り出し、鐘楼に隣接する聖ピーター大聖堂を見た。黄昏色の日差しを浴びるゴシック建築は、どんよりとした陰惨な雰囲気を醸し出している。エディンバラ教皇の住まいはその裏にある。

「こんな安全地帯に本拠地を置いているんじゃ、エディンバラ教会が威張り散らすわけだわ」

ヨイク自身にはエディンバラ教会に対して大きな恨みなどないのだが、教会はしばしばヒベルニアに関する情報収集の妨げになっていた。

「まあ、まずはいただこうよ。ここのアップルパイは本当に美味しいんだから。――神々よ、いただきます、と」

あまり時間がないことを忘れていた。ヨイクは席に着いてフォークを持ち、つやつやと輝くアップルパイを一口頬張った。ヨイクとギーヴは顔を見合わせる。

「これ、やばいでしょう」
「これは、やばいわね」

黙々とアップルパイを平らげ、紅茶を飲み干し、一息ついてからようやく二人は会話を始めた。外はすっかり暗くなり、空には無数の星が輝いている。

「君に聞きたいことがあるんだけど、俺ばかりが質問するのはフェアじゃないでしょう。だからお互いに同じ数だけ質問するって言うのはどうかな」
「いいわ。お先にどうぞ」

ヨイクは紅茶のカップを受け皿に戻し、椅子の背に寄り掛かってギーヴを促した。

「じゃあ聞くけど、君はどこでクラシック教徒や俺のことを知ったの？教会やクラシックたちは女神信仰と俺の存在を世間から隠したのに」

予想通りの質問にヨイクは用意していた答えを取り出す。

「クラシックがヨーロッパ中へ散らばったのはあなたも知っているでしょう。私の村にも弾圧から逃れて来たクラシック教徒の老人が住んでいたの。もちろん、彼が死ぬまで誰も彼の正体を知らなかった。それが分かったのは彼のお葬式の後、身寄りのなかった彼の遺

品を村の女たちで整理していたら、彼の古い日記が出て来たのよ。それはフランス語で書かれていて他の誰にも読めなかったものだから、フランス語を勉強していた私が貰ったの。生前の彼は無口で身の上の話をしなかったから、彼がどこから来た何者だったのかを知りたかったしね。翻訳をしながらゆっくり読み進めて驚いたわ。彼はフランスのオンフルール村出身の元修道士で、四人の女神を崇めるクラシック教徒だった。一七〇五年の大行進ではクラシックのリーダーであるマキシム・バルトロメやあなたと行動を共にしていた」

ギーヴは天井を仰いだ。

「そういうことだったのか、どうりで詳しいわけだ。ねえ、その日記の持ち主の名前は？」

「ミシェルさんよ。姓は分からないけど」

「ミシェル！うわあ懐かしいなあ！そうかあ、あいつも死んだんだあ」

しみじみと独りごち、ギーヴは頬杖をついて遠い目をした。

「本当は、その日記は死ぬ前に処分するべきだったんだろうけど……彼にはそれができなかったのかもしれないね。俺たちの信仰は焚書や弾圧で歴史から葬り去られてしまったから、せめて、この世に何かを書き残しておきたかったのかもしれない。今まで散々エディンバラ教会に――あ、耳、塞いだ方がいいよ」

ギーヴの警告の直後、鐘楼の鐘が足の下で鳴り始めた。その金属的な大音響に、テーブルや本棚が揺れ、食器がカタカタと震える。こんなものが十五分ごとに鳴ったらさぞ煩かろう。ヨイクは耳を塞ぎ、歯を食いしばって甲高い音色がやむのを待った。ギーヴは平然と紅茶のおかわりを飲んでいる。

「もうひとつ聞いていいかな？君はなぜヒベルニアを目指すの？」

鐘が鳴りやみ、ヨイクが耳を塞いでいた手を下すとギーヴは矢継ぎ早に訊ねた。手元を見れば二個目のパイに手を出している。

「ヒベルニアがあるからよ」

ヨイクは背筋を伸ばし、きっぱりと答えた。

「あの地平線の向こうにヒベルニアがあるから、だから行くの」

「それだけ？」

「十分でしょ。ミシェルさんの日記を読んで、御伽噺のヒベルニアが本当にあるなら行ってみたいと思ったの」

疑わしげに顔をしかめるギーヴにヨイクはすまして見せた。実際、本当にそれだけなのだ。

「じゃ、約束通り、私も質問を二つするわね」

「ちょっと待って、その前に断っておこうと思うんだけど、俺の立場上、話せないこともあるということを理解してほしい。君が大衆向けの本を書いている民話学者である以上、クラシック教徒にとって脅威となるような情報は教えられない」

それは最初から分かっていたことだったので腹は立たなかった。だが、ヨイクは少し意地悪を言いたくなる。

「私が知りたいのはヒベルニアの場所と行き方よ。それを教えてくれないというなら、あなたに聞くことはあまりないわね」

ヨイクが顎を上げて睨みつけると、ギーヴは申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんね」

「じゃあ、そうね。ヒベルニアへは選ばれた人しか行くことができないってミシェルさんの日記に書いてあったけど、選ばれるための条件って何なのかしら？」

日記には誰もが行ける場所ではないと記されていたが、詳しいことは書かれていなかった。ギーヴは迷う素振りを見せ、思い切ったように一息で答えた。

「ヒベルニアは極光の女神の加護を受けた者しか入れない。島の周りを女神の結界が覆っていて、それを通り抜けられるのは俺やマキシムだけだと思う。だからヒベルニアを探しても無駄だよ、アールトさん」

ギーヴはヨイクを諦めさせるために言ったのだろう。だが、それを聞いてヨイクは両の拳を突き上げて満面の笑みを浮かべた。

「つまり、あなたを誘拐すればヒベルニアの場所も行き方も分かる上に、ヒベルニアを覆う結界を通過することもできるってわけね！よし、一石三鳥！」

「え」

面食らって瞬きするギーヴにヨイクは吹き出して笑い、苦笑しながら両手を下した。

「冗談よ。あのね、あなたも学者なら知ってるはずだけど、情報っ

ていうのはそのまんま信じちゃだめなのよ。ミシェルさんの日記も、あなたの言葉も、本当ではないかもしれない」

「それを言っちゃあ、おしまいじゃない？」

「でも、そうでしょ。あなたたちはエディンバラ教会に弾圧されてきたクラッシックの生き残りよ。そんな人たちがほいほいと簡単に、しかも赤の他人に大事な情報を与えるかしら。疑う必要は大いにある、だから私はヒベルニア探しをやめない」

ヨイクは強い口調で宣言し、不安そうな面持ちのギーヴを真っすぐに見つめた。

「ヒベルニアはマキシム・バルトロメたち以外の誰も行ったことのない島だもの。つまり、あなたも行ったことがない。結界があるなんて嘘かもしれない。私はヒベルニアを探すわ」

「……そう」

ギーヴは意味深な瞳でヨイクの目を覗きこみ、くすっと笑って椅子から立ち上がった。

「そろそろ帰った方が良いかもしれないね、アールトさん。恋人も睨んでることだし」

彼につられてヨイクも窓の外を覗く。ユアンがさっきより凶悪な顔をしてこちらを睨んでいた。

「苛々しちゃって、どうしたのかしら。あ、ちなみに、あれは恋人じゃなくて、私の本の版権を持ってる書籍商よ」

「ああ、君の後ろに凄腕の書籍商がついてるって聞いたことがある。

もちろん本の中身も面白かったけど、処女作のヒットには彼の才能が貢献したんじゃないかって学者仲間が噂してたよ、特にあの新聞広告」

ヨイクはユアンのせいで頭の血管が切れかけたことを思い出して拳を握った。

ヨイクの処女作『北欧伝承余話』の印刷や製本はロンドンで行われた。ユアンの旧友がロンドンのパタノスタ・ロウという書籍街で書店を営んでおり、彼の持つ器材や人脈を借りたためである。原稿が仕上がった後、ヨイクは故郷の村へ一年ぶりに帰り、ロンドンのユアンと手紙のやりとりをしながら本が出来上がるのを待っていた。その時の自分の心境は何とも表現しがたい、そわそわと落ち着かない気分だったのをヨイクは覚えている。そんなヨイクの元にある日ユアンから届けられたのは数日分のロンドンタイムズだった。

『明々々後日、天才美少女民話学者、現る。――リプトン書店』

広告欄の最も小さな一枠いっぱいに、大きな太い活字が躍っていた。ヨイクは卒倒しかけたが、力と勇気を振り絞って翌日の新聞を見た。

『明々後日、天才美少女民話学者、ヨイク・アールト、現る。――リプトン書店』

さらにその翌日、翌々日と新聞をめくって広告欄を見る。

『明後日、天才美少女民話学者、ヨイク・アールト、ついに処女作を……――リプトン書店』

『昨日までの広告には誤りがございました。おとぎばなしと民話が好きなヨイクの本が出ます。明日です。――リプトン書店』

最後の広告だけはまともだった。

『本日発売、ヨイク・アールト『北欧伝承余話』――リプトン書店』

最初の発売はロンドン市内だけだったが、やがて郊外やイギリスの地方都市からも本の注文が殺到した。英国内での販売が軌道に乗ると、ユアンはヨイクと約束した通り、アメリカやヨーロッパ大陸への発送を始めたのだが、そこでも似たり寄ったりの手法で新聞広告を出していたらしく、ヨイクは世界的に「あの新聞広告のヨイク・アールト」と言われるようになってしまったのである。

「同じ書籍の広告なのに、毎日違う宣伝文句が載るというのは話題性が高いよね。もうロンドンで君の名前を知らない人はいないんじゃない？」

一生ロンドンには行けないわと心の中で悪態をつきつつ、ヨイクはギーヴに右手を差し出し、丁寧な社交辞令を述べた。

「ごちそうさま。私は故郷に帰って研究を続けるけど、いつかまたお会いしたいわ、ギーヴ猊下。私にはもう一つ質問をする権利があるわけだし」

ヨイクの手を握り返し、ギーヴはじっと彼女の目を見つめた。何か目に見えないものを見通そうとするかのような眼差しだった。

「たぶん、君とはまた会えると思う。次に会う時、君はヒベルニアを見つけているような気がするよ」

予言めいた不思議な口調で別れの言葉を述べると、ギーヴはヨイクの背を押して扉までエスコートする。ヨイクはそっとギーヴの顔を盗み見たが、彼の真意は読めなかった。

「だといいわね。おやすみなさい」

ヨイクの背後で扉が静かに閉ざされた。彼女はしばらくその場に立ち尽くしていたが、キルトを着た衛兵が迷惑そうに顔をしかめたので螺旋階段を下りて鐘楼の外に出た。菓子店ニュートンのクリーム色のエプロンをはずしながら、ヨイクは待っていたユアンへ駆け寄った。彼はむっつりと唇を結び、黙ってヨイクを見下ろした。

「お待たせ。どうしたのよ、何怒ってるのユアン」

「べつに」

そういえば最初の旅を終え、ヨイクが帰郷する際にも彼はこんな顔をしていた。容姿がいいので少年のようにふてくされた姿が可愛らしく見えないこともない。ヨイクは八歳の年の差を忘れてしまうくらい保護欲をそそられた。

「べつに、って怒ってるじゃない」

ヨイクは腕を伸ばしてユアンの頭を乱暴に撫でた。後方に撫でつけた赤毛が乱れ、ユアンはヨイクの手をつかんだ。彼はため息をついて顔の筋肉の緊張を解き、途方に暮れたような遠い目でヨイクを見下ろした。その悲しげな表情に彼女は一瞬どきっとした。

「それは、あんたがあんまり鈍……」

「アールトさーん、忘れものだよー」

ユアンの声に被さるように、頭上からギーヴの間延びした声と菓子店ニュートンの籐かごが降って来た。籐かごは鳥のようにゆっくりと石畳に着地する。ユアンはヨイクの手を離し、籐かごの横にひっそりと片膝をついてうなだれた。

「いけない、忘れてた！ありがとう猊下！」

ヨイクがギーヴと手を振り合っているうちに、ユアンは階段を下ってロイヤルマイルへ向かい始めていた。冷たい夜風に首を縮めながらヨイクはユアンの背中を追った。彼と彼が手に持った菓子店の可愛らしい籐かごは果てしなく似つかわしく、ヨイクはつい吹き出してしまったが、幸い彼は気が付いていないようだった。

「ユアン、ありがとね」

大股で階段を下りていくユアンにちっとも追いつけず、ヨイクはかなり遠くから声をかけた。ユアンは歩調を緩め、いつも通りの仏頂面で彼女を振り向いた。機嫌が直って良かった。ヨイクはユアンに追いつき、彼の持つ籐かごにエプロンを押し込みながら続けた。

「あんたがいなかったら、私、まだギーヴ猊下に会えてなかったと思う。これまであんたの言う通りにやってきて良かったわ」

ヨイクはしみじみとつぶやき、足を止めて大聖堂の鐘楼を見上げた。ユアンも立ち止まり、ギーヴ・バルトロメの住まう塔を見やる。次にギーヴと会えるのはいつだろう。その時こそはヒベルニアへ行けるのだろうか。ヨイクは目を閉じて肩を落とし、それから腹に力を入れた。

「だからといって、あの新聞広告の件を許したわけじゃないけどねええええ！！」

階段の高低差を利用して、ヨイクは長身のユアンの脇腹に右膝をぐりぐりと打ちこんだ。ユアンは笑いながらよろけ、落ちるように階段を数段下る。

「しつこいな、あんたも。あれはあれで好評だったんだぞ」

二人はしばらく笑い続け、人通りの減ったエディンバラ旧市街を月明かりに頼って歩いた。そういえばユアンに会うのは久しぶりだった。数えてみると実に一年ぶりだ。ヨイクが帰郷している間もユアンはマメに手紙を送ってくれたし（広告の載ったロンドンタイムズも送ってくれた）、あまり離れていた気がしなかったのだが。

「これからは私の戦いなんだと思う。ヒベルニア行きの手掛かり、絶対に見つけるわ」

にっこりと笑って意気込んで見せるヨイクを、ユアンは目を細めて見下ろした。ヨイクは居心地の悪さと快さを感じて彼から視線をそらし、何かを誤魔化すように菓子店ニュートンのクリーム色のエプロンをユアンに着せてはしゃいだ。

数日後、ヨイクは船に乗って故郷へ帰り、ユアンは駅馬車に乗ってロンドンへ戻った。二人が再会し、ギーヴを連れてエディンバラを脱走するのはその一年後である。

9．追憶5　―雪の村―（前書き）

前回から一年後。

9．追憶5　―雪の村―

ロンドンはパタノスタ・ロウに店を構えるリプトン書店にギーヴ・バルトロメからの手紙が届いたのは一七六五年の九月末だった。三月地震が起き、空が雲で覆われ太陽光が遮られて半年が経ち、水不足、凶作、飢餓などという不吉な言葉が現実味を帯びてきた頃だった。ロンドンにおける本の売れ行きも右肩下がりで、せめて貸本屋にでも転身した方がいいのではないかと書籍商たちが愚痴をこぼすこともしばしばだった。

ギーヴからの手紙の宛名はミスターリプトンとなっていたので、ユアンは迷わず封を切った。中から出て来たのは演劇のチケット一枚のみ。シェイクスピアだ。どう考えても、ユアンがエディンバラ名誉司教と二人で観劇に出かけるとは考えにくい。ヨイクに渡してくれということだろう。

チケットに印字された日付は十一月二十七日だった。まだ二カ月近く時間があったが、ユアンはすぐにヨイクに手紙を書き、封筒にチケットを入れてその日のうちにポストに投函した。今度こそ、ギーヴがヨイクに何か教えてくれる気になったのかもしれない。善は急げだ。

四週間後、ヨイクからの返事が届いた。

『ヒベルニアへ旅立つ時が来たわ。船を用意してエディンバラへ向かって。私も十一月二十五日までにはエディンバラへ行く』

話の飛躍に付いていけず、ユアンは何度も手紙を読み返した。ヒベルニアへ旅立つ時が来た?ヨイクはヒベルニア行きの手がかりをついに見つけたのだろうか。ユアンは急いでグラスゴーの弟に手紙

を書き、三年前にグラスゴーを追われた時に預けた貿易船をエディンバラまで運んでほしいと頼んだ。そして翌々日にはリプトン書店を友人と従業員に任せ、ロンドン中央銀行で貯金の半分を下してエディンバラ行きの駅馬車に乗りこんだ。エディンバラへ着くとすぐにヨイクへの手紙を投函した。

『あんたの村まで船で迎えに行く』

エディンバラの船着き場へ向かうとすぐに自分の船が分かった。歴戦の貿易船の前に見知った人物が立っていたからだ。

「旦那さま、お久しゅうございます」

感極まったようにしみじみと目礼したのはかつてユアンの執事を務めていた老人だった。ユアンは彼の肩に手を置いて彼をねぎらい、船内に足を踏み入れた。すると、三年前に別れた四人の元使用人たちがユアンを出迎えてくれた。フォション侯爵に射殺された御者の妻クレアは三歳になった娘を連れていた。あの時の乳飲み子がこんなに大きくなったのかとユアンは大喜びした。

かつての主従は再会を喜び合い、船室の改装や航海のための積み荷について綿密に話し合い、共に食卓を囲った。もちろん、船内の厨房で腕を振るったのはリプトン家の元料理人である。夜が更け、楽しい宴が終わるとユアンはロイヤルマイルの宿に引き返した。夜は物騒だからと執事が無理やりついてきた。

「あれだけ良くしていただいてこんなことを申し上げるのは憚られますが、旦那さま、あなたは全てお見通しだったのではないですか？私たちを解雇した時、手厚い報奨を与えて送り出せば、私たちがいつかご自分の元に進んで戻ってくるであろうことを」

入り組んだ暗い夜道を歩きながら、執事は訊ねた。エディンバラの道は複雑怪奇だ。ロイヤルマイルから一歩奥に入ると、トンネル状の細い路地がどこまでも広がっている。

「あなたはこんな日が来ることを知っていたのではないですか？あのお嬢さんと出会った時にはもう、彼女と一緒に御伽噺の国へ行くことを確信していたのではありませんか？だからあなたは自分の貿易船を一隻だけ残しておいた。他の船はみんな弟さまに譲り渡してしまったのに」

ユアンは答えなかった。

「恐ろしい方だ。けれど私たちはあなたに感謝しています。感謝してもしきれないほど。このご時世に屋根の下で眠ることができるのはあなたのおかげです。あなたもご存じでしょうが、今、裕福だった者は貧しく、貧しかった者はより一層貧しくなり果てています。路地裏には餓死者とも浮浪者とも区別のつかないものが溢れ、誰もが明日は我が身と震えています」

ユアンの暮らしているロンドンも酷い有様だった。日照不足で作物が育たずパンの値段がつり上がると、貧乏人は食べ物を得るために様々な物を売り払い、家賃が払えなくなればアパートから追い出された。豊かな商人や貴族が食べ物の買い占めを始めると、物価はますます上がり、飢えた人々によってパン屋が襲撃されることも珍しくなくなった。

執事は静かに続けた。

「私たちが再びあなたの元に集まったのは、あなたを信じているか

らですよ、旦那さま。御伽噺の国を目指すなどという馬鹿馬鹿しい航海を前に私たちが逃げ出さないのも、あなたを信じているからです。あなたが私たちを悪いようにはすまいと堅く信じているのです」

細い路地を抜け、二人はロイヤルマイルに出た。そこここの宿やパブが明かりを灯し、不景気に負けずに賑わっているが、一年前にヨイクとその道を歩いた時より遥かに寂れてしまっている。三月地震以来、世の中全体がおかしくなっている。

「こんな時代にあなたのような主を持てた私たちは幸せです」

野兎亭という宿の前でユアンは執事と別れた。トンネル状の路地に消えていく老人の後ろ姿を見送り、ユアンは何とはなしにロイヤルマイルの賑わいを眺めた。

「信じるということは知ることを拒むということだ。それは無責任なことだと思わないか？人から信用されるということは喜ばしいことだ。だけどそれは、責任を負わされているということじゃないのか？」

小さくつぶやき、ユアンはクラシックのリーダー・マキシム・バルトロメのことを考えた。クラシック教徒たちから厚い信頼を寄せられ、老若男女問わず人望が厚かったというマキシムは責任の重みに耐えきれなくなったりはしなかったのだろうか。

ふと、ヨイクなら今のつぶやきに何と答えるだろうとユアンは思った。二人が初めて会った日、ヨイク自身もユアンを信じると断言したのだ。

貿易船の改装を終え、ユアンがヨイクの故郷に辿り着いたのは十一月十七日だった。小さな船着き場に貿易船を泊める場所はなく、ユアンは沖に錨を下して小舟で岸に降り立った。雪に覆われたノルウェー北部にある彼らの村は決して豊かではなかったが、都市部で見られるような餓死者や浮浪者はいない。ある程度の貧富の差はあっても、人々が助け合って暮らしているのだ。

雪がちらつく灰色の空の下、ユアンは出迎えてくれたヨイクの案内で村を一回りした。ヨイクたちは半定住、半遊牧の暮らしをしており、白樺の木で作られた家屋十数棟が船着き場を中心に点在している。彼らのように海辺に住むサーメ人もいれば、森の中や山の中や湖畔で暮らすサーメ人もいるのだという。

「私たちには漁業をやる家と放牧をする家があるの。漁業をやる家の男は海が凍らない限り船を出して漁に行くし、海が凍れば氷に穴を開けて魚を釣るの。放牧をやる家の男は交代で放牧生活をしていて、うちの父も先月は丸々一ヶ月留守にしていたのよ」

ユアンはまだ会っていないが、ヨイクは父親と祖母と三人暮らしだと言っていた。一ヶ月男手がないのはさぞ不便だろう。それとも、不足した男手も貸し借りするのだろうか。

「じゃあ、あれは何だ？放牧に出かけないトナカイもいるのか？」

真っ白な息を吐きながらユアンが指差したのは村の外に囲われた数十頭のトナカイの群れだった。

「あれは放牧から帰って来た屠殺（とさつ）されるトナカイ。秋になるとトナカイの肉を町へ売りに行ったり、自分たちの食料として保存したりする作業が始まるのよ。冬を越すトナカイだけを春まで森に放すの。森は風をさえぎってくれるから冬でも少し暖かいのよ」

二人はものの数十分で村を一周してしまった。ヨイクはトナカイに近づいてみようとユアンの腕を引いて誘った。立派な角を持ったトナカイを柵越しに眺めユアンの胸はわくわくしたが、彼らの方はユアンには目もくれず、実に悠然としている。

「トナカイの主食は苔。苔は日光がなくてもある程度は育つから、彼らは元気よ。私たちも森や海で取ったものを食べているから暮らしていけてる。物価が上がったせいで町ではロクな買い物ができなくなっちゃったけどね」

ヨイクは肩をすくめ、柵に背を預けて自分の村を眺めた。故郷を愛おしむような彼女の目を、ユアンは吸い込まれるように見つめた。

「一年中村にいるトナカイもいるわ。運搬用の雄のトナカイは町に出かける時の必需品なのよ。この村には郵便夫が来ないから、私たちの方から町へ郵便物を取りに行くんだけど、あんたが送ってくれた本やなんかも、みんなトナカイが引いてくるんだから」

ユアンはリプトン書店から新刊を出すたびにヨイクへ一冊ずつ進呈していた。ほとんどが児童書や冒険小説や古典の類で、ヨイクは村人の誰でもが読めるよう図書室を作ったと手紙で教えてくれた。それからは古書店で買った評判の本なども送っていたのだが、そうすると郵便物を取りに行った村人は重い本を何冊も持って村に帰らなければならなかったに違いない。

「かえって悪いことをしたな」

「まさか。あんたの本が来ると子供たちが喜ぶのよ。文字が読める人は少ないし、英語も難しいけど、挿絵を見ればだいたいの話は分かるからね。外国語に興味を示して少しずつ言葉を覚える人も増えてるし。今、誰があんたを自分の家に泊めるか争奪戦をしてる。みんな英国紳士からロンドンの話を聞きたいって何日も前からそわそわしてるのよ」

ヨイクがユアンに視線で示した方に彼女と同年代の娘が四人立っていた。ヨイクと同じ藍色のワンピースに赤い帽子を被っている。彼女たちは木陰からこちらの様子をうかがっていたようだが、ユアンが振り向くと黄色い声を上げて走り去った。何度もユアンを振り返り、互いの顔を見合わせてくすくすと笑い合いながら。ユアンは居心地の悪い気持ちになり、話題を変えた。

「そうだ、そろそろ教えてくれ。ヒベルニアの場所を突き止めたのか？」

顔を合わせたらすぐに訊いてやろうと思っていたのに、ヨイクの顔を見たら忘れてしまった。思わず身を乗り出したユアンに、ヨイクは満面の笑みを浮かべて頷いた。

「見つけたって言ったら、信じる？」

三か月前に十八歳になったヨイクの唇がユアンの耳元でそっと囁いた。身を切るような寒さで冷たくなった耳に彼女の温かい吐息がかかり、ユアンは一瞬言葉を失くした。

「……信じるさ」

絞り出した言葉にユアンは自分で驚いた。無責任で浅墓で、嫌いな言葉だと思っていたのに。

「できれば暖かいところで話したいけど、適当な場所を思いつかないからここで言っちゃうわ。ここならトナカイしか聞いてないもの」

ユアンはうなずいた。

「あのね、実は私、一年前から、隔月で二週間くらい、エディンバラ大学で生活してたの。ギーヴ猊下の意見交換会に出席したことがあるって言ったら、エディンバラ大学図書館が出入りを許可してくれて、ついでに学生寮にも住まわせてくれたのよ。ただし、父や婚約者の遊牧当番中に行っているから、彼らはそのことを知らない。彼らは、私が勉強や研究をやめて花嫁修業に精を出してると思ってるの。今度の旅のこともまだ言ってない。彼らにとっては寝耳に水」

エディンバラにいたのなら連絡してくれれば会いに行ったのに。ユアンはそう思ったが口には出さず、代わりに非難がましいく訊ねた。

「こそこそするなんて、あんたらしくないな」

ヨイクは柵に預けていた背を放し、うつむいて深いため息を吐き出した。

「覚悟が決まらないんだと思う」

若き民話学者はきっぱりと言った。ユアンは、自分が躊躇していることをこんなにはきはき口にする人間を初めて見た。思わず口から笑いが漏れた。

「覚悟が決まらない？明日出港するっていうのに、やっぱり、あんたらしくないな」

笑うユアンを軽く睨みつけ、ヨイクは静かに語る。

「あんたが思っているほど、私は勇敢じゃないわ。むしろ私は臆病者だと思う。最初の旅に出る時だって、本当は何度も迷った。自分が何か取り返しのつかない選択をしようとしているんじゃないかって怖くてたまらなかった。それでも私が旅に出たのは、私が負けたからよ」

「負けた？」

「私の中の恐怖が、湧き上がる好奇心に負けたのよ、私はいつだって私の好奇心に負けて負け続けてきた。あんたに本を出そうと誘われた時も、エディンバラの地下道を通ってギーヴ猊下に会いに行った時も、私はいつだって負けてたのよ。決して勇敢なわけじゃない」

「言いかえると、あんたの好奇心は何物にも負けないってわけだ。根拠のない勇気より、その方が分かりやすくて頼もしい。あんたの好奇心や探究心は、全ての恐怖に打ち勝ってヒベルニアへ出かけるべきだと言ってるんだろう？だったら、今までのように負けてやればいいことだ、今さら何を躊躇う必要があるんだ？」

ユアンはさも当然という口ぶりで言ったが、ヨイクは煮え切らない表情で地平線の彼方を見た。西の方角だ。空を覆う分厚い雲が、うっすらと橙色に染まっている。時刻は午後三時半、もう日が沈むのだ。

「ヒベルニアの本を出せば私たちは教会に追われることになるわ。ここが教会に知られたら、ここを出て行かなければならない。もしかしたら、一生戻って来られないかもしれないわ」

ヨイクは言いながら、腕を上げて誰かに大きく手を振った。彼女の視線の先をユアンが目で追うと、一人の青年がこちらへ手を振っていた。ヨイクと同じ金髪碧眼で、背の高い男だ。他の村人同様に藍色の民族衣装を着ていて、ヨイクと並んだらさぞ似合うことだろう。ユアンは直感的に、彼がヨイクの婚約者なのではないかと思った。

「婚約者や父や祖母とも別れることになるかもしれない」

ユアンはようやくヨイクのため息のわけを理解した。当然だが、彼女は旅立つことをとっくに心に決めている。だが、彼女は故郷や家族を捨てる覚悟が決まらないのだ。

「こんな時、普通の娘なら父親や婚約者を放って旅になんか出ないはずだわ。それなのに私は、薄情ね。父親に育ててもらった恩を忘れ、幼馴染の婚約者を裏切り、故郷を捨てても知りたいことや見たいものがあるなんて」

ヨイクは優しいのだ、とユアンは思った。ユアンなら自分が薄情だなどと一瞬も考えずに旅に出るだろう。実際、ユアンはアメリカへ渡る際、母と弟妹をグラスゴーに残して旅立ったのだ。当時はエネルギーと好奇心のあり余る十五歳の少年だったとはいえ、今から思えば少々薄情だったのかもしれない。しかし、そのことで家族に非難されたことはない、一応、今のところは。

「別に普通だ。あんたは学者だろ」

「そうね、私は学者よ」

青年がこちらへ近づいてきたので、ヨイクは早口で話を終わらせた。青年は柔らかい笑顔をヨイクに向け、それからユアンに向かってはにかんだ。男にはにかまれても嬉しくはないが、ユアンは目礼を返し、ヨイクの顔を見下ろした。

「私の婚約者のカームスよ。カームス、こちらがリプトンさん」

「はじめまして、リプトンさん」

カームス青年は片言の英語でそう言うと、イギリス式に右手を差し出した。ユアンはそれを握り返し、失礼だとは思ったがつい彼の頭の上からつま先まで視線を走らせてしまった。半遊牧生活で鍛え上げられた肉体は立派なものだが、おれの方がテントウムシ一匹分だけ背が高い。ユアンは精一杯の微笑を浮かべた。

「はじめまして、カームス君」

カームスは赤ん坊のように無邪気に微笑み、それからヨイクの腰にたくましい手をまわした。ユアンが作り笑顔を崩さなかったのは奇跡だった。

「ヨイク、僕らの結婚式にはリプトンさんにも来てもらおう。リプトンさんには本当にお世話になったんだ」

「結婚式?!」

声を裏返して訊ねたのはユアンではなくヨイクだった。カームスは怪訝な表情でヨイクを見下ろし、彼女の波打つ髪をそっと指に絡めた。

「何を驚く必要があるんだ?僕たちだって、いずれ式を挙げて正式な夫婦になるだろう。その時はリプトンさんもぜひお越しください」

本人に悪気がないことは一目瞭然だったが、ユアンは喧嘩を売られている気がしてならなかった。怒りを鎮めようとする理性に逆らい、ユアンの眉頭がぴくりと動き、知らず知らず唇の端が不自然な形につり上がる。ヨイクがいなければ、この餓鬼と言ってつかみかかるところだった。

「ごめんなさい、カームス、今、リプトンさんと大事な話をしてたの。私の本の売れ行きが良くて、また再版されるんですって」

ヨイクはさりげなく話題をすり替え、カームスの背に手を触れて彼をそっと押し返す。

「そう、良かったね。でも、頼むから二冊目を書くなんて言わないでくれよ。じゃあ、リプトンさん、また後で。夕食の時にロンドンのお話を聞かせて下さいね」

カームスは雪の中を颯爽と去って行った。ユアンはカームスの若者らしく野性的な立ち居振る舞いに羨望の眼差しを向けつつ、小声でヨイクに囁いた。

「今おれに話したように、あんたが考えていることを彼らに率直に話すんだな。人の良さそうな男だ、一緒に教会から逃げてくれるかもしれないぞ」

そう言ってはみたが、ヨイクの婚約なんて解消されてしまえばいいのにとユアンは腹の底で思っている。そうなることを間違いなく期待している。

「言われなくても説得するわよ。だから、あんたのお得意の交渉術を教えてくれてもいいんじゃない？」

ヨイクはユアンを拝むように見上げた。その仕草がどんなに可愛らしく見えようと、ユアンは協力するつもりなど毛頭ない。なかったはずだった。

「……端的に二択を出して時間を与えてやればいい。たとえば、『私と一緒に教会から逃げてくれるか、それとも私と別れるか。出港までにあなたの答えを聞かせて』」

「それだけ？あんた、他人事だと思って適当なこと言ってない？これでも一応、私の人生がかかってるのよ！」

「明日はさぞかし感動的な船出になるだろうな、彼がどちらを選んでも」

「まあまあ、友達甲斐のない奴！」

ユアンはあさっての方へ鼻を鳴らした。

「あんた、本当にあいつを愛してるのか？」

「はあ？」

「もし、本当にあいつを愛してるなら、必勝の交渉術を教えてやろうか？」

「教えてよ」

「夜這いしろ」

ヨイクの右手がユアンの頬に飛んだ。

１０．追憶６　―焚火―（前書き）

前回のすぐ後です。

１０．追憶６　―焚火―

サーメの村では客人を村人総出で歓迎する。広場で焚火を囲み、トナカイの肉を焼いて強い酒を酌み交わす。ユアンの周りにはカームスや、英語やフランス語を知る青年が集まり、彼にいくつも質問を浴びせては感嘆し、周囲のみんなに通訳してやっている。ユアンはかなり酔っているようで、隣に座ったカームスの肩に腕をまわし、時々説教などを垂れている。

ヨイクはそれを遠巻きに眺め、宴が終わったら、まずはカームスに話をしようと思った。アルコールが入って彼はいつも以上に陽気だが、それが吉と出るか凶と出るか、ヨイクには分からない。

「リプトン君は誠実な男だな、ヨイク」

声をかけられて振り返ると父が立っていた。ヨイクは座っていた横倒しの丸太の上で腰をずらし、父が座る場所をつくった。彼は杯を片手に娘の隣に腰を下した。

「彼と行くんだろう」

単刀直入に訊ねられ、ヨイクは飲んでいた牛乳を吹き出しそうになった。村では牛を飼い、酪農をして暮らす村人が増えた。この村はいずれトナカイを手放し、普通のノルウェー人のように農業と漁業だけで生計を立てることになるだろう。そうすれば、サーメ人にだけ課せられた税金も払わずに済むのだという。

「分かるさ。おれはこれでもおまえの父親だからな」

父は照れくさそうに微笑むとユアンに向かって拍手した。ユアンは彼が密かな宴会芸としているジャグリングを披露し始め、宴は興奮に包まれていた。しんしんと雪が降っているというのに誰もが燃えんばかりに顔を赤らめ、大笑いしていた。

「お父さん、私、いつかこの村のことを本にしたいわ。この村は十年後もきっと今のままよ、でも、三百年後には変わってしまっている。その時に、私の記録を誰かが読んで、ここにはこんな素敵な人たちが暮らしていたんだって、知ってほしいの。そうすれば私たちは失われた民族の民話として、未来の人々の心の中で生き続けられるのよ」

ヨイクはこの村が好きだった。世界中に見たい国や町がどんなに沢山あっても、帰ってくる場所はこの村以外にない。生まれ育った家、愛する家族、友達、トナカイのにおい、雪の白さ、森を吹きわたる風、どれもこれも、世界中のどこをどんなに探しても、この村にしかないのだ。

「行け。おまえはこうと決めたら、おれの話なんて聞かないんだから」

父は静かに言った。ヨイクは驚いて彼を見上げた。彼は髪をかきむしり、不機嫌そうに頬杖をついて足元の雪を睨む。

「正直、おれにも分からん、おまえが選ぼうとしている道が茨の道なのか、そうでないのか。女が結婚もせず独りで学問なんかやって、果たして死ぬまで食っていけるのか。母さんは死んじまったし、ばあさんやおれだって、いつまでもおまえと一緒にはいられない。おれは自分が死んだ後のことを考えるとおまえに早く嫁に行ってほしかったんだが……いや、もうよそう。母さんのところに行ってくる」

父は言葉尻を濁して立ちあがり、とぼとぼと森の方へ歩いて行く。ヨイクはひとまず胸をなでおろした。こんなにあっさりと父が旅立ちを許してくれるとは思ってもみなかった。それと同時に何とも言えない寂しさが胸に去来した。ヨイクは早く結婚してほしいという父の望みを裏切ろうとしている。そればかりか、教会から追われ、二度とこの村へ帰って来られなくなるようなことをしようとしている。

「ヨイク、リプトンさんが！」

カームスの声でヨイクは我に返った。泥酔したユアンがカームスに背負われている。ヨイクは慌てて立ちあがり、ユアンに近づいて彼の顔を覗きこむ。気持ち良さそうな顔で眠りこんでいる。気分が悪くなったわけではなく、飲み過ぎて意識が飛んだようだ。

「ごめん、飲み慣れないもの飲むと、時々やるのよ。こら、ユアン！何でもかんでもビールと同じ感覚でぐいぐい飲むなって言ってるのにもう！」

耳元で怒鳴り、ヨイクはユアンの尻を叩いた。カームスは目を丸くしてぎこちない笑みを浮かべた。

「まるで彼の女房みたいだね」
「そう？普通よ、いつものこと」

ユアンは今夜カームスの家に泊まることになっていた。ヨイクはユアンを背負ったカームスを彼の家まで送って行くことにした。宴の続く広場を後にして雪の上を並んで歩く。しばらくしてカームスが口を開いた。

「ヨイク、僕はさっき、嫌味を言ったんだよ」
「嫌味？」

ヨイクがカームスを見上げると、彼は悲しげな瞳でヨイクを見ていた。「気は優しくて力持ち」という言葉が彼以上に似合う男をヨイクは知らない。彼は強く優しい。だが、それだけだ。婚約者といえども、ヨイクにとって彼はそれだけだった。ユアンは夜這いしろと言った後、「できっこないだろう」とヨイクをせせら笑ったが、まさにその通りだ、ヨイクにはそんなことはできない。彼のことを幼馴染の親友以上に考えたことはなかったのだ。

「まさか、私とリプトンさんのことを疑ってるわけじゃないわよね？」

ヨイクはユアンと一年間一緒に旅をした。そのことを変に勘ぐる人物は少なくない。

「みんなは疑ってるみたいだけど、僕は君を信じてる。でも嫉妬はしてるよ。もう一度一緒に旅に出るなんて言ったら僕は今度こそ発狂する」

ヨイクは答えなかった。十秒後、沈黙の理由を悟り、カームスは取り乱した。背中のユアンがずり落ちそうになるが、彼は構わずヨイクに詰め寄った。

「まさか、ヨイク、嘘だろ？」
「ごめんなさい。でももう決めたの。行かなくちゃ」
「君は女にしてはずいぶん自由に生きてきたんだ、もう充分だろう。お願いだから、危険な旅も難しい研究も今すぐ全部やめて、僕と結

婚してほしい。君を必ず幸せにすると約束するから」

ヨイクは大きく息を吸い込み、それをゆっくりと吐き出す。そして彼女は覚悟を決めた。

「あなたが私を待てないというなら永遠にさよならよ」

帰宅してベッドに入るとヨイクはすぐに眠ってしまった。精神的に疲れていたせいかもしれないが眠りは浅く、夜明け前に目が覚めた。家の前の道で物音がしたのだ。この小さな村に泥棒などいるわけがない、きっと父が酔っ払って転んだのだろう。ヨイクは起き上がって服を身につけ、上着を着て外に出た。

雪はやんでいたが吹きわたる海風は氷のように冷たい。ヨイクは首を縮めて物音がした方へ足を進める。暗くてよく見えないが、案の定、道端に誰かが倒れていた。

「大丈夫?」

ヨイクは積雪に足を取られながら人影に近づく。すると、倒れていた人物がむくりと起き上がり一目散に駆け出した。

「ちょ、ちょっと!待ちなさい!」

走り去る人影を反射的に追いかけ、ヨイクは全速力で村の小道を駆け抜ける。怪しい人影は船着き場へ向かい、そこで行方をくらま

した。ヨイクは夜が明けるまで船着き場に停泊した小舟や漁船の周りをしつこく捜索したが、怪しい人物を見つけることは出来なかった。

ヨイクは諦めて一度家に戻り、出かける支度をして祖母に別れを告げた。祖母は暖炉の前に座って燃え盛る炎を見ていた。

「ヨイク、嵐よ。あなたの行く手には嵐が見える」

ヨイクの祖母はシャーマンだ。昔は毎日の狩猟運を占っていたらしいが、今は現役を退いて隠居生活を送っている。

「嵐の向こうには何があるの、おばあちゃん」

ヨイクは躊躇いなく訊ねた。どんな悪いことを言われても、ヨイクは占いを信じないたちだ。

「あれは……島よ。嵐の向こうに、光り輝く美しい島が見える」

「そう、だといいわ。ありがとう」

父がヨイクの大きなトランクを持ち、ヨイクはトナカイ革の鞄を斜めに掛けた。二人は歩き慣れ、見飽きた道を通って船着き場へ向かう。しばらく無言で歩き続けてから、父が口を開いた。

「人類の半数は女だ。女の仕事は彼らに任せて、ヨイクはヨイクの、ヨイクにしかできない仕事をしなさい。おまえほどの民話学者は、人類の中にも二人といないんだろう?」

ヨイクは不覚にも胸が詰まった。誰かに認められたくて研究をしてきたわけではなかったが、父の口からそんな言葉が聞けるなんて

思ってもみなかった。

「そうよ。だから、行くわ」

もしかしたら、父とはもう会えないかもしれない。この村にも戻れないかもしれない。ヨイクは泣きそうになるのをこらえて強気に微笑む。父も大きくうなずいた。

船着き場には小舟に乗ったユアンが待っていた。ヨイクは彼に近づき、お待たせと言いながら周囲を見回した。カームスの姿はない。

「ヨイク、これ、カームスがおまえに渡してくれって」

小舟に乗り込もうとしたヨイクにそう言って一通の手紙を差し出したのはカームスの隣の家の青年だった。

「ありがとう。彼はどこ？」

「さあ」

「おい、そろそろ行くぞ。――ああ、出してくれ」

ユアンはヨイクを急かして船に乗せ、船頭役の乗組員に指示を出してさっさと離岸してしまった。小舟は沖に停泊するユアンの貿易船を目指し、ゆっくりと波に揺られて進む。

「永遠にさよなら、か」

ヨイクは手の中の手紙を握りしめ、自分のしたことの重大さに改めて気がついた。それが正しいことだったのか、間違ったことだったのかは分からない。ただ、それは必要なことだった。頑なにそう思う自分がいた。避けて通ることはできなかった。仕方なかった。

私にはやりたいことがあるのだから。

この手紙の封を切るのはもう少し先にしよう、ヨイクはカームスからの手紙を鞄の奥にしまいこんだ。遠ざかる故郷の村に別れを告げ、手紙のことも彼のことも頭の中から叩き出してしまうと、これから始まる冒険への期待で胸がわくわくした。

ヨイクがギーヴ・バルトロメと再会したのは、エディンバラの劇場のボックス席だった。先に来ていたギーヴの隣にヨイクはどさりと腰を下す。

「いかがわしいところねえ」

二人掛けの椅子には弾力のある滑らかなクッションが用いられていた。劇場内は暗く、半個室のボックス席は、まさしく貴族の逢引きのためにつくられたような空間だ。

「密談をするにはもってこいでしょう」

ギーヴはヨイクの耳元で柔らかく微笑んだ。肩が触れるほど近い。

「久しぶり。また会えて嬉しいよ、アールトさん」

「私も嬉しいわ。お招きありがとう」

二人が手を握り合った時、開演を知らせる鐘が鳴った。ギーヴがヨイクを招待してくれたのはシェイクスピアの『リア王』だった。

芝居が始まると間もなく、あちこちのボックスから恋人たちの囁き声や忍び笑いが聞こえてくる。

「エディンバラ教会にマキシムの孫娘が保護された」

生まれて初めて観る芝居にのめり込みかけていたヨイクはギーヴの言葉に驚いて腰を浮かせた。

「なんですって?!」

「しっ。あんまり大きな声を出さないで。隣のボックスにいる護衛が聞き耳を立ててる」

暗闇の中でギーヴの緑色の瞳が鋭く光る。ヨイクはこっくりと頷いた。

「船が難破して、彼女はたった一人でスコットランドに流れ着いたらしい。俺も一度だけ会って話をしたけど、マキシムのことや、六十年前にマキシムと一緒にヒベルニアへ渡ったクラシック教徒のことをよく知っている。ヒベルニアからやって来たというのは嘘じゃないと思う」

ギーヴはヨイクの耳に唇を寄せ、低く語る。傍から見れば恋人同士に見えるかもしれないとヨイクは頭の隅で思った。

「彼女の話によれば、ヒベルニアには太陽が照っているらしい」

「……世界中の空が雲で覆われているのに?」

舞台の上では父娘喧嘩が繰り広げられ、オーケストラは切迫した音楽を奏でている。ヨイクは鞄の中からフルーツビールの瓶を二本取り出し、ひとつをギーヴへ手渡した。

「そう。そこで教会はこの異常気象の原因がヒベルニアにあると確信してヒベルニアを探し始めた。御伽噺に出てくる気象兵器があるに違いないなんて言ってね。彼女が教会の手の内にある以上、ヒベルニアが発見されるのは時間の問題だと思うんだ」

ギーヴが何を言わんとしているか、ヨイクにはすぐに分かった。いや、この芝居に招待された時点で、彼がヨイクの求める情報を教えてくれる気だということは分かっていた。

「アールトさん、君たちに迷惑をかけることを承知の上で頼むけど……俺を連れてヒベルニアへ行ってくれないかな？」

ギーヴを連れてヒベルニアへ行くということは、エディンバラ教会の人質をさらうということだ。だが、ヨイクもユアンも教会を敵に回す覚悟はすっかりできていた。

「こっちはとっくにそのつもりよ。でも……本当にいいの？ヒベルニアへ行ったら、私は何もかも本に書いて、それをヨーロッパ中に売りさばくのよ？」

「もちろん構わない、それは俺の望みでもあるんだ。君こそいいの？教会は自分たちのスキャンダルを暴いた君をきっと許さない。故郷や平穏な生活には戻れないかもしれない」

「覚悟はできてるわ」

「じゃあ決まりだ。教会の歴史の闇に、君のペンで光を当ててくれ」

ヨイクは大きく頷いた。

「私の相棒は今、あなたを連れてヒベルニアへ行く準備をしてるわ。

マキシムの孫娘も連れて行くなら、船室をもうひとつ用意しなくちゃならないけど」

ああ、あの書籍商の相棒か、とつぶやきギーヴは微笑んだ。

「実はマキシムの孫娘の他に、もう一人連れて行きたい人がいるんだ」

「連れて行きたい人？」

「ミシェルの日記にアンジェラという女性が出てこなかったかな？」

ヨイクは記憶を探り、数秒後に思い至った。

「ああ、アンジェラ・グランディエね。あなたたちと同じ林檎修道院にいたシスターの。彼女もまだお元気なの？」

「うん。彼女はこちらに残ってマキシムの子供を産んだんだ。今はアイルランドで曾孫と暮らしてる」

「マキシムの子供？！」

ヨイクは素っ頓狂な声を上げた。ヒベルニア王マキシムが子孫を残していても不思議はないが、修道士時代のマキシムに子供がいたとは初耳だった。

「二人は結婚してたんだ。クラシックは修道士の婚姻を認めるから。彼女はこちらへ残り、ヒベルニアへ渡らなかったクラシックたちを無事に逃がした後、アイルランドに修道院をつくった」

ギーヴは遠くを見ながら愛おしそうに目を細め、それから少しだけ悲しそうな顔をした。

「分かったわ、船室はもうふたつ用意する。私もシスター・アンジ

エラと話がしてみたいわ」

ヨイクは頷き、頭の中でシスター・アンジェラとマキシムの孫娘を思い浮かべた。シスター・アンジェラは八十歳前後、マキシムの孫娘は二十歳くらいだろうか。どんな旅になるやら、楽しみでも不安でもある。

ヨイクの心中など知らぬギーヴは満面の笑みを浮かべて囁いた。

「俺はエディンバラ大聖堂の鐘楼から脱け出して、アンジェラを迎えにアイルランドへ行く。君たちはマキシムの孫娘ヒリールを助けに行って。彼女はエディンバラ郊外のリラ城というところにいるから」

「了解。鐘楼からはどうやって脱出する気？あそこには見張りの衛兵がたくさんいるでしょう？」

「うん。君にも手を貸してもらいたいな」

ギーヴはフルーツビールに口をつけ、思い切り顔をしかめた。酒は大嫌いなんだとぼやいた五分後、彼はヨイクの隣で寝息を立て始めた。

十二月一日、夕刻。

「どうも、菓子店ニュートンでーす！ギーヴ猊下にアップルパイをお持ちしました！」

暗い地下道からエディンバラ大聖堂の鐘楼に出るなり、ヨイクは叫んだ。菓子店ニュートンに頼み込み、再びギーヴへ菓子の配達をさせてもらうのはひと苦労だった。地下道のあちこちに爆弾をしかけ、長い導火線に火をつけて地上へ這い上がったヨイクは衛兵たちに笑顔を向けつつ螺旋階段を上り始める。あと数秒で爆発だ。

「きゃああ！！！」

足の下で爆発音がして、ヨイクは力いっぱい悲鳴を上げた。地下への入り口から白い煙がもうもうと湧き立つ。

「な、何だ、何事だ！！」
「地下だ！地下道で何かあったんじゃないか？！」
「よし、おまえ、見に行って来い」
「え、俺？！やだよ、おまえが行けよ！」
「おおい、変な音がしたけどどうした？」

あちこちから持ち場を離れた衛兵たちが集まり、地下への入り口に人だかりができる。ヨイクはそれを尻目に鐘楼を出て、アップルパイの籠を持ったまま見張りのいない無人の広場を駆け抜け階段を下りた。ロイヤルマイルから脇道に入ったところで一台の辻馬車が待っていた。

「うまく行ったわね！それにしても猊下って只者じゃないわ。あんなに高い鐘楼の天辺から飛び降りて無事だなんて」

ヨイクが息を切らせて辻馬車に乗り込むと、同じように肩で息をしながらギーヴが笑った。

「よく言われるよ」

港まで行ってほしいと御者に告げ、ヨイクは固い椅子にもたれて深いため息を吐き出した。窓の外は黄昏時だ、この闇にまぎれて船着き場まで行かなければ。

「でも、アールトさんも只者じゃないと思うよ」
「ヨイクでいいわ。これからヒベルニアまでずっと一緒に旅するんだもの」
「いいの？君の恋人に睨まれるのは避けたいんだけど」
「だから恋人じゃないって」

ユアンはヨイクの婚約者カームスとも相性が悪い様子だったが、ギーヴともそうなのかもしれない。思えば、カームスとギーヴは少し雰囲気が似ている。長身で体格がいい割に柔和で優しいところなどそっくりだ。

「どうぞ、ようこそいらっしゃいました。ユアン・リプトンです。あなたやシスター・アンジェラのお部屋を大急ぎで作らせました。ご不満ご要望は何なりと申しつけてください」

港で二人を待っていたユアンはギーヴが辻馬車から下りるなりそう言って大げさに一礼した。なぜか喧嘩腰で、慇懃無礼のお手本のような態度だ。

「ありがとうリプトン君。よろしく、仲良くしようね」

ギーヴはあくまで穏やかに受け答えた。百九歳の成せる技だろうかとヨイクは思う。三人はユアンの貿易船に乗り込み、ヨイクはギーヴを彼の部屋に通した。乗客が乗客なので全て個室を設置したものの、一部屋一部屋はかなり狭い。寝台と机と椅子を置いたら他に

スペースはない。

「猊下ならこれでも我慢してくれると思ったんだけど、どう？」

ヨイクが訊ねると、ギーヴは苦笑した。船内は天井が低いので、ぶつけた頭をさすっている。

「そうだね、俺ならこれでも我慢できるよ。今まで暮らしてきた塔よりは狭いけどね」

「そう言ってくれると思ってたわ。シスター・アンジェラやヒベルニアのお姫様の部屋もこんな感じよ。私やユアンの部屋はハンモックだけどね」

「へえ。俺もハンモックで寝てみたいなあ。後でリプトン君に頼んでみようかなあ」

羨ましそうに言うギーヴにヨイクは乾いた笑いを漏らした。狭い部屋に苦労してベッドを運び込んだ書籍商は一体何と言って怒るだろうか。

三人は食堂に集まり、菓子店ニュートンのアップルパイをつつきながら最後の作戦会議を簡単に済ませた。決定事項の最終確認だ。

「私とユアンはエディンバラ郊外のリラ城へ向かい、ヒベルニア王マキシムの孫娘ヒリールを助け出す。猊下はこの船でシスター・アンジェラを迎えにアイルランドへ行く。目的を果たしたら、グラスゴーの『鷲獅子亭』で合流、間違いないわね？」

１０．追憶６　―焚火―（後書き）

これで回想は終わりです。

11．グラスゴーの鷲獅子亭

『鷲獅子亭』という名前のパブ兼宿屋はグラスゴーが誇る運河沿いにあった。鷲の翼を背中に生やした獅子の絵が描かれた看板が目印だ。

「こんにちは、二部屋空いてるかしら？それと待ち合わせしてるんだけど、金髪の男とおばあさんの二人組が泊ってない？」

入店してカウンターの中年男に声をかけると、彼は読んでいた新聞を閉じてペンをヨイクに差し出した。彼はヨイクとその後ろのヒリールを一瞥してから無愛想に応える。

「部屋はあるが、金髪の男とおばあさんは来てないよ」

ヨイクは宿帳に自分の名前とユアンとヒリールの偽名を書いてチェックインを済ませると、店主の案内で部屋に荷物を運んだ。部屋の鍵をヨイクに渡しつつ、店主は首をかしげた。

「ヨイク・アールトって、どっかで聞いたことがあると思ったら、あんたもしかして新聞広告の民話学者の？」

「……同姓同名の他人よ」

「ヨイクは有名人なんだねえ」

ヨイクは両手の拳を握りしめ、ユアンめ、と歯ぎしりした。不在でなければ足くらい踏んでやるところだ。

店主が部屋から出ていくとヒリールは感心したように言った。

「不本意ながらね。あ、ヒリール、窓から運河が見えるわよ」

ヨイクは窓を開け、身を乗り出した。ヒリールも彼女の隣に並び、二人は運河を行き来する船をしばらく眺めていた。

ヨイクはふと視線を宿の前の通りに移した。すると、路上からこちらをじっと見上げていた何者かがさっと建物の陰に身を隠したような気がした。人影は二つ。

「ヒリール、私はちょっと出かけてくるけど、あなたはこの部屋を出ちゃダメよ」

「え、わたし一人で留守番？」

「大丈夫よ、ユアンもすぐに戻るって言ってたし。じゃあね」

ヨイクは短銃に弾丸を入れ、ヒリールを残して宿を出た。案の定、怪しい人物の一人がヨイクについてくる。もう一人はヒリールを監視するために残ったのだろう。

歩くスピードを速め、ヨイクは突然曲がり角を曲がって尾行者を待ち伏せる。尾行者は慌てて角を曲がり、身を潜めていたヨイクに胸倉をつかまれた。

「エディンバラ郊外の森からずっと私たちをつけてたのはあんた？」

ヨイクは尾行者の顔を正面から睨んで驚いた。尾行者は若い女だった。しかも目鼻立ちの整った美女だ。男装をしている。

「離しなさい！」

美女はヨイクの手から難なく逃れ、彼女と距離を取った。ヨイクはすかさず短銃を構える。

「教会関係者には見えないわね。私たちを尾行しているのは何故？」

「素直に言うと思う？」

鼻で笑い飛ばし、男装の麗人は踵を返して逃げ出した。ヨイクは舌打ちしてそれを追う。狭い路地を二人の若い女が疾走する姿を見て不審がる者は多かったが、ヨイクは構わず尾行者を追いかけた。

「ミスティック、相手をしておあげ！」

――御意。

美女が叫ぶと同時に、ヨイクの目の前に黒い霧が広がった。

ヨイクたちと別れた後、ユアンは馴染みのパブに向かった。

「ユアン！ユアンじゃないか！」

「ユアン・リプトンか！」

「生きてたのか、ユアン！」

ユアンが店内に足を踏み入れるやいなや、真昼間から酒を飲んでいた三人の男たちは口々に彼の名を口にし、カウンターの奥の女店主は仰天して口元をおさえた。三十歳前後の若い女だ。

「よ」

ユアンは彼女に片手を挙げた。三年ぶりの再会だが、改めて挨拶するのは少し照れくさい。

「よ、じゃないわよ、まずいわよ！」

そう言いながらカウンターの奥から飛び出してきて、彼女はユアンの胸倉を捕まえた。連れ立って裏口から店を出ると、女店主は目を釣り上げる。

「どうして戻って来たの！あんたはこの町じゃお尋ね者なのよ！」

「分かってるさ、でも、あのイカレ侯爵のフォションはどこだかに婿入りして町を出たって聞いたぜ。おれを指名手配した市長も三月地震で死んで、今じゃ若い奴が市長の座に収まったらしいじゃないか」

そうでなければグラスゴーには来なかっただろう。そして彼女に会う必要がなければ、やはりこの町には来なかった。

「だからって、あんたがまだ罪人扱いされていることに変わりはないわ。あんたの顔は有名なのよ、自覚しなさい」

年上の女性にぴしゃりと言われ、ユアンは肩をすくめて両手を挙げる。

「すいませんでした」

女店主は満足げに微笑み、ユアンの頬を軽くたたいた。

「分かればいいのよ、分かれば」

店を閉めてくると言って身をひるがえし、彼女は店の中へ消えた。何も言わずとも、彼女はユアンの目的を察しているのだ。危険を冒して来たのだから当然と言えば当然かもしれないが。

十分後、ユアンはパブの二階にある女店主の住居に通された。彼女はユアンを居間の椅子に座らせ、紅茶を出すと、食器棚から大きな四角い箱を取り出した。

「亭主はどうした？留守なのか？」

店にも家の中にも彼女の夫の姿が見えず、ユアンは首をかしげた。

「三月地震で死んだわ。落ちてきた店の看板から、私をかばってね」

彼女は箱をテーブルの上に置き、蓋を開けた。中には札束がぎっしり詰まっている。

「さあ、三年前にあんたが私に預けたお金よ。一ペニーたりとも手をつけてないわ」

ユアンは五年前、彼女に委任状を手渡し、「おれに何かあったら、すぐにおれの銀行口座から金を下ろしてくれ」と頼んでいたのである。ユアンが指名手配される直前、彼女はグラスゴー銀行に駆け込んでユアンの財産をすべて自宅に隠した。ユアンが死亡するか、五年経っても金を取りに来なければ全額を彼女に進呈するという約束だったのだが。

「もう少しで五年だったのに、悪かったな」

ユアンは椅子から立ち上がり、持ってきたボストンバッグに五百ポンドだけ詰めた。ユアンがグラスゴーに寄ろうと思ったのは、船の改装費が思いのほか嵩んだからだった。ギーヴ一人を乗せるつもりで船を改装した後、ヒリールとシスター・アンジェラも同行することになり、費用が予算の倍近くかかったのだ。乗客が増えるということは船に積み込む水や食料も増えるということである。計算してみたら思いきり赤字だった。

「助かったぜ」

箱の中にもう五百ポンド残したまま、ユアンは蓋を閉じた。ユアンの一挙手一投足を眺めていた女店主は微笑んで首を振った。

「いいのよ。それより、全額持って行きなさい、もうこの町には来ちゃだめ」

「いや、あんたには世話になったし、本当に半分で足りるんだ。あんたが使ってくれ」

ユアンは一旦腰を下して紅茶を飲み干し、立ち上がってバッグを手に戸口へ向かった。彼女は嘆息を漏らして腰を上げた。

「そういえば、あんた、よく言ってたわね。『恩を着せ、恩を着て、恩を返すのが一番の金儲けだ』って」

「ああ、今も恩返しの途中でね」

屋外の階段を下り、ユアンは彼女と向き合った。改めて彼女を見ると、当然ながら記憶の中の彼女より年老いて見えた。きっと、自分もそう見えるんだろうとユアンが思った時、彼女がユアンの頬を両手で撫でた。

「いい仕事をしてるのね。あんた、すごくいい顔になって来た。あんたはもう、私の愛したユアン坊やじゃないわ」

三年前、ユアンは追われるようにして町を出た。だからそれは彼女からの正式な別れの言葉だった。彼女との関係は全く過去のものだと思っていたのに、何故だかユアンの心には薄らと影が差した。きっと彼女には新しい男がいる。そう、多分、さっきパブにいた男の誰かだ。あの時の彼女の慌てようは少し度が過ぎていた。

「あのお金は生涯預かっておくわ。老後の生活に困ったら寄りなさい」

「本当に使ってくれていいんだけど、ま、いいか、あんたに再会することを老後の楽しみにしておく」

二人は友人同士のように微笑みあい、ユアンは彼女に背を向けた。

「じゃあな」

路地裏を何歩か歩き始めた時、ユアンの背中に女店主が駆け寄って頬を寄せた。彼女の両腕がユアンの胸に触れる。

「ひとつ、言い忘れてた。楽しかったわ、ありがとう、ユアン」

どうしてか、その言葉をヨイクに言われたような気がして、ユアンの胸はずきんと痛んだ。ヨイクと別れる日が必ず来ることは分かっている。だが、自分はそれに耐えられるだろうか。

思わず女店主の手を握ってしまったユアンは彼女を振り返った。その時だった。

「あ！ユアン！そいつ捕まえて！」
「はあ？！」

すっとんきょうな声を上げつつ、ユアンの身体は命の恩人の命令通りに動いた。目にも留らぬ速さで近づいてきた人影に体当たりを食らわせ、地面に押し倒す。それは男装した女だった。

「ナイス、ユアン！」

もがく男装女を押さえつけるユアンのもとに、息を切らしてやって来たのは、ヨイクと見知らぬ少年だった。

1．ハートフルな宿屋（前書き）

今回から第三章です。
再びコルガーとギーヴのお話に戻ります。

1．ハートフルな宿屋

コルガー・バルトロメはハートマーク型の看板がぶら下がる宿屋の前で脱力した。両手両足に力を入れて、湧き上がる何かをこらえる。夕暮れの繁華街だ。

「げ、猊下、あれの意味、分かってます？」

先を歩いていたギーヴは、木枯らしに吹かれ、揺れるハートマークの看板とコルガーを見比べて小首を傾げた。

「え、ハートフルな宿屋ってことだよね。一昨日泊ったけどとても親切な宿だったよ。だめ？」

「……もういいです、何でも。くたくたなので」

ベルファストを旅立ったコルガーとギーヴはバンゴールという港町を目指していた。バンゴールはベルファスト湾に面する小さな港町で、そこに船を停泊させているのだとギーヴはコルガーに教えてくれた。

「ささ、いらっしゃいませ。とっておきのお部屋をご用意しますよ！」

客引きに導かれるままにコルガーとギーヴは宿の扉をくぐった。

「おや旦那、一昨日もお泊りでしたね」

店主がごますりポーズで現れギーヴの荷物をさっと受け取る。前回の宿泊でよっぽどチップを弾んだのだろうか。コルガーは黙って

ギーヴの後ろを歩くことにした。

「うん、また来るって約束したでしょう」

「へへへ、毎度ごひいきに」

通された部屋には大きなダブルベッドが鎮座していた。粗末ながら天蓋付きだ。頭を抱えるコルガーを尻目に、ギーヴは椅子に腰を下してテーブルの上のマドレーヌをつまみ始める。店主は暖炉に火をつけるとすぐに出て行った。

「あなたはこれを見て何も思わないのか！」

吠えるコルガーを見下ろし、ギーヴは何度か瞬きを繰り返し、ダブルベッドに目をやった。

「二人で寝るにはちょっと狭いかな？でも君は小柄だし、俺も寝相はいい方だよ」

そういう問題か、と言おうとしてコルガーはやめた。ギーヴはコルガーを男だと思っているのだ。それにギーヴは聖職者で、しかも六十年間も塔に幽閉されていたと言っていた。

「猊下って結構、世間知らずですか？」

「自分ではそんなことないと思うんだけど、他人からはそう言われるなあ」

「ご自分でもそう思ってください」

コルガーは部屋の隅にソファがあるのを見て、今夜はそこで眠ろうと諦めた。明日はバンゴールに着く。そうすれば船の中で生活することになるから、ギーヴと同じ部屋で眠るのも今夜限りの辛抱だ。

「猊下、バンゴールに泊めてある船って、寝室はどうなってるんですか？冒険小説に出てくるような、ハンモックが沢山ぶら下がった大部屋で雑魚寝とか？」
「いや、全部個室だって言ってたよ。俺の部屋にはベッドがあるし」
「へえ」

コルガーは気のない返事をしながらこっそりと胸を撫で下ろした。それなら男ばかりの船の中でも女だとばれずに生活できそうだ。

「今日は風が強かったから髪が砂だらけだ。お湯を持ってきて貰って、湯浴みしてもいいかな？」

マドレーヌを頬張っていたギーヴが何気なく言って法衣を脱ぎ始めたので、コルガーはのけぞって悲鳴を上げる。

「ええっ？！」
「え」
「いや、どうぞ、オレ、ちょっと出かけてきます！」

フィドルのケースだけを背負い、コルガーは宿屋を飛び出した。懐中時計を見ると時刻は六時。夕食はギーヴと二人ですでに済ませているから、パブを探して一杯ひっかけるか。コルガーは最初に目にとまった『キーホーズ』というパブに入り、カウンター席に座った。

「やあ」
「よう、見ない顔だな」

カウンターの奥から言ったのは壮年の太った男だった。おそらく

彼が店主のキーホーだろう。パブの店名は店主の名前と相場が決まっている。時間が早すぎたのか、客は一人もいなかった。

「ベルファストから来たコルガーだ、よろしく。ギネスを頼むよ、一パイント」

「よし、待ってろ、コルガー」

キーホーは気さくに笑い、杯にギネスビールを注いだ。しばらく時間を置いて泡が落ち着いてからもう一度注ぎ足す。

「おまえさん、一人旅か？」

「連れがいるけど、今は別行動中だよ。彼、下戸なんだ」

杯をコルガーに手渡し、キーホーはカウンターに両肘をついた。

「おや、フィドル弾きか。どうだ、一曲演奏してくれたら一パイント奢るぜ」

「よし、乗った！」

喉を鳴らして杯のビールを一気に飲み干し、コルガーはフィドルを取り出して肩に乗せた。どんな曲を弾こうかと考えた時には弦が歌い始めていた。コルガーはアンジェラがよく口ずさんでいた歌を思い出しながら弾き続けた。哀愁漂うメロディーを奏でるうちに、店は満席になっていた。

「ブラボー！」

「いいぞ坊主！」

演奏を終えると拍手喝采に包まれ、コルガーは頭をかいた。キーホーは約束通りギネスのおかわりをコルガーに差し出した。

コルガーが宿に戻るとギーヴは天蓋付きのダブルベッドの真ん中で大の字になって眠っていた。ほのかに石鹸の香りが匂いたち、金褐色の長い髪が湿っている。艶めかしい光景だと思いながらコルガーは彼に毛布をかけてやった。

「オレのひいじいちゃんの、弟か」

ギーヴの寝顔を見下ろし、コルガーは胸の前で腕を組んだ。目の前で眠る美丈夫が曾祖父の弟だとはやはり信じられなかった。もちろん、百九歳の老人にも見えない。

「……アンジェラ」

突然、ギーヴの唇から寝言が漏れて、コルガーはびくりとした。ギーヴの表情は柔らかく、口元がわずかにほころんでいる。

「なあに、猊下？」

コルガーが戯れに答えると、ギーヴの手がコルガーの手をつかんで強く引き寄せた。つんのめってギーヴの上に倒れ込み、コルガーはギーヴに抱きしめられた。ギーヴは思ったより力がある。

「お、おい、猊下、起きろ！」

コルガーはギーヴの腕の中でもがきつつ、熟睡中の彼に抗議した。

だめだ、起きない。深いため息をついて抵抗を諦めると、耳の下でギーヴの心臓の音が聞こえた。それを聞いているうちに不思議と心が落ち着いた。

ギーヴの腕の力がゆるんだ隙に彼から逃れ、コルガーはベッドを抜け出した。大きな桶にギーヴの使った湯が残っていたので、暖炉で沸かした湯を足して湯浴みの準備をする。

服を脱いで髪や身体を清めながらコルガーは改めて自分の身体を見下ろした。普段はさらしを巻いて隠している膨らんだ胸、ひきしまったウエスト、三月地震以来すっかり痩せてしまったがそれでも丸みを帯びた腰、毎日の肉体労働のせいで硬い筋肉の付いた腕や脚。男なのか女なのか分からない、なんてアンバランスな身体なんだと彼女は自嘲した。

身体がさっぱりするとすぐに眠くなり、コルガーは暖炉の前まで長椅子を引きずり、その上で丸くなった。上着のポケットから一枚の紙を取り出し、顔に近づけて描かれた文字を声に出して読む。

「ごはんを食べる、体に気をつける、無茶はしない、飲み過ぎない、自分を過信しない。あなたの上にいつも光が差しますように」

修道女たちが作ってくれた弁当の中に入っていた手紙だ。コルガーは恋しいアンジェラの字で書かれた手紙を胸に抱き、彼女や修道女たちのことを思った。きっと今頃、彼女たちもコルガーのことを考えてくれているに違いない。

空間を越えて彼女たちと思い合っている錯覚から目覚めると、コルガーは手紙を大事に折りたたんで上着のポケットに戻した。手の届くところにギーヴの法衣があったのでそれを被ると、あっという

間に眠りに落ちて行った。

翌朝、ギーヴはなかなか起きてこなかった。毛布で全身をすっぽり覆い、コルガーに顔さえ見せない。チェックアウトの時間が迫っていたのでコルガーが無理やり毛布をはぎ取ると、ギーヴは真っ赤な顔で言った。

「げほげほ、死ぬ……。俺はきっとこのまま死ぬ……」

「……昨夜、ちゃんと髪を拭かなかったから風邪を引いたんですよ」

コルガーはギーヴを部屋に残し、ハートフルな宿屋を出てパブ『キーホーズ』を訪ねた。どこか長期滞在に適した安宿を知らないかと訊ねると、キーホーは知人のパブの屋根裏が空いているはずだと親切に教えてくれた。宿代はハートフルな宿屋の半値だ。

二人は小さなパブ兼宿屋の屋根裏部屋に移った。今度はベッドが二つある。ギーヴは引っ越しが済むとすぐにベッドに潜り込み、コルガーは傍らの椅子に胡坐をかいて繕いものをしながらエディンバラ名誉司教の看病をすることにした。

「俺はねえ、今まで刺激の少ない生活を送ってきたんだよう」

毛布の中から恨めしそうなギーヴの声がする。コルガーは顔をしかめて首をかしげる。

「……だから？」

「だからだよ！」
「意味が分かりません」

コルガーは針に糸を通した。膝には洗い上がったばかりギーヴの服がある。コルガーは慣れた手つきで裾のほつれを直し始める。ギーヴが毛布の隙間からちらりとコルガーを見た。

「……わけわかんないぜ」

ちょうどいい機会だから後で彼の靴の修理もしよう、それから病人食も作らなくちゃ。コルガーは今後の段取りをあれこれ考えたが、ふと、大切なことを思い出した。

「グラスゴーで待ってる民話学者って、どんな人なんですか？二三日ここで療養してても怒らない人？」
「ヨイクは怒らないと思うけど、ユアン・リプトンはどうかなあ」

ごほごほ、とギーヴは咳き込んだ。

「ユアン・リプトン？」
「ヨイクの本を出してる書籍商だよ。ヨイクのことが大好きで、あれは彼女に近づく男に片っ端から喧嘩を売ってるねえ、きっと」
「へえ」

笑いながら、コルガーは手を動かした。黒の詰襟の上下と濃紺の法衣が、新品のように蘇っていく。毛玉を丁寧に取り去り、すそや刺繍のほつれを直しているだけなのだが、「それだけに神業だね」とギーヴは言った。

「あなたは、病気になるんですね」

しばらく会話が途切れた後、コルガーは言った。昨夜よっぽどよく眠ったのか、ギーヴは眠る気配がない。

「俺の体は時間が止まってるけど、死なないわけじゃない。風邪も引くよ」

「へえ。オレは病気も怪我も無縁です」

何でもない風に相槌をうつコルガーに、ギーヴは嬉しそうに微笑んだ。

「君はあんまり、俺のことをあれこれ聞かないねえ。ヨイクなんて好奇心のカタマリだから、根堀り葉掘りだったのに」

コルガーは縫い物を続けながら明るく応える。

「だって、自分の不思議体質を説明するのって億劫でしょ。自分にだってよく分かんないんだから」

「そうだね」

「そいやオレ、同じような体質の人に会ったの初めてだ」

ぷつん、と歯で縫い糸を切り、コルガーはギーヴを見た。

「そう。俺も滅多に会わないねえ。でも、君といると気が楽だよ。負い目を感じたり、好奇の目にさらされることもなくて」

二人は目を合わせてくすりと笑い合った。

「ああそうだ、ゆっくり話をするには今がちょうどいいね。俺やマキシムやアンジェラのこと、君にも聞いておいてもらおうかな。昔

むかし、六十年以上も前の話」

ギーヴは静かに話し始めた。

2. 林檎修道院の思い出（前書き）

ギーヴの思い出語りです。

2. 林檎修道院の思い出

マキシム・バルトロメとギーヴ・バルトロメが生まれたのはフランス北西部ノルマンディー地方の漁村オンフルールだった。そこはセーヌ河口の小さな村で、彼らはごく普通の漁師の家に生まれた。

六歳の時、彼らは近所の古い教会の聖歌隊へ誘われ、その歌声の美しさと見目の麗しさから、たちまち天使のような双子と村中で噂されるようになった。村はずれの修道院長ゴールが二人に目をつけたのはその頃だった。

『おたくのご兄弟をぜひ、我が修道院へ迎え入れたいのです』

ゴールは彼らの両親を熱心に説得した。修道院の禁欲的な生活が恐ろしく、マキシムもギーヴもそれを拒んだが、両親は二人を修道院へ引き渡した。彼らは信心深く、天使だの神童だのという噂をすっかり信じ込んでいたのだ。また、マキシムとギーヴの下には弟妹が四人いて生活は苦しく、二人は両親に従わざるを得なかったのである。

「君も知ってると思うけど、修道院では自給自足の生活をしなくちゃならない。畑を耕し、収穫し、粉をひいてパンを作る。薬草を育て、牛を飼い、酒をつくる。うちの修道院は林檎のジャムや酒が村の人たちから好評で、それで林檎修道院と呼ばれていたんだ」

ギーヴが言葉を切ると、パブ兼宿屋の屋根裏に、暖炉の薪がはぜる音と窓の外を吹き荒れる風の音だけが聞こえた。

ギーヴは目を閉じ、当時のことを思い出そうとする。林檎の木の

下で昼寝をすることに至福の喜びを感じていたあの頃。兄と毎日顔を合わせ、ともに暮らしていた青年時代。与えられた聖典の教えを疑いなく信じ、自分がクラシック教徒と呼ばれる希少な信徒だということを知らずにいた。

「俺とマキシムの時間が止まってしまったのは、三十歳のとき。ゴール院長が引退し、俺たちの両親も亡くなった後だった」

エディンバラから使者が訪れて二人の身に起こったことを『奇跡』と認め、彼らを福者の末席に加えた。すると遠方から巡礼者が訪れるようになり、林檎修道院へ入る者も増加した。

「アンジェラと出会ったのはその頃だ。彼女はまだ十代で、父親と兄と三人で巡礼の旅をしている途中だった。彼女とマキシムは一目で恋に落ち、アンジェラは間もなく林檎修道院で暮らし始めたんだ」

その頃のアンジェラにそっくりなコルガーが興味深そうに「へえ」と言った。

「グリンヒル公会議でクラシックが異端とされたのはその五年後、今から六十一年前の一七〇四年のことだったよ。修道院へ届いたお触れを読んで、俺たちは愕然とした」

ギーヴは運命の日のことを思い出す。それは夏の暑い盛りだった。正午過ぎ、林檎畑から戻ったギーヴに、アンジェラが一通の手紙を差し出した。差出人はエディンバラ教皇で、手紙にはクラシックの教義を否定し、改宗しなければ修道院を閉鎖する旨が書かれていた。

手紙を机に叩きつけ、ギーヴは修道院を飛び出した。ぎらぎらと輝く太陽の下を走っている間に、事の次第がようやく飲み込めて、

後から後から涙がこぼれた。わけが分からないままノルマンディーの海に飛び込んで、沖を目指してがむしゃらに泳いだ。苦しくなって水面から顔を出すと、気の遠くなるほど青い空が見えた。しばらくの間、海に浮かんで空を見ていた。

「それまで、俺たちは何も考えずに神々を信じていた。与えられた聖典を読み、与えられた規則に従って、ただただ従順に暮らしていた。だから、自分たちの信じる神々が否定されたとき、どうしていいか分からなかった。とても悲しくて、悔しくて、けれども何を考えたらいいかということさえ、何を悩んだらいいかということさえ、本当に分からなかったんだよ」

情けなかったよ、とギーヴは額を押さえた。あのとき、誰よりも狼狽していたのは自分だった。それだけ、ギーヴは信仰というものに確固たる信念や考えを持っていなかったということだ。

「それからすぐに、『改宗か死か』というスローガンの下に、クラシック教徒の弾圧が始まった。俺たちは林檎修道院の連中や他のクラシック教徒との会合をこっそり開いて、色々な考えや不安を話し合った。自分たちの信じていた神々が、ある日を境に抹消されてしまうなんて、俺たちは許せなかった。神々とはその程度のものなのか、神々とは人間の都合で創られたり消されたりするものなのか。俺たちは憤ったよ。だからそこで出た結論は、クラシックの教えを守り抜こうというものだった。その頃に改宗しようとする者は少なかったんだ、まだ教会を甘く見てたんだね」

コルガーは神妙な表情で黙って話を聞いている。

「弾圧が厳しくなったのは年が明けてからだった。教会は唯一神だけを崇めることを強要した。神から人間味は失われ、神は絶対無敵

の英雄になった。そうすることで、科学に傾倒し信仰を蔑ろにする人々をもう一度振り向かせることが出来ると教会は本気で思っていたんだ。オンフルールにエディンバラから特使が派遣され、教会や修道院の監査を始めたのは三月、とても寒い日だったよ」

特使として派遣されてきたのは二人の聖職者だった。彼らは林檎修道院の隅から隅まで調べ上げ、禁じられた書物や絵画を見つけて取り上げた。

没収されたものは村の中央広場に集められ、無造作に積み上げられて火をつけられた。集まった数百の人々は拳を握り、黙って耐えるしかなかった。教会の掲げた『改宗か死か』というスローガンがはったりではないことを、人々はこの頃には思い知っていたのだ。

ところが、群衆の中からマキシムが飛び出した。鬼のような形相だった。かつて天使と呼ばれ、神童と呼ばれ、奇跡と呼ばれ、福者と呼ばれた男の、本当の姿だとギーヴは思った。マキシムは誰よりも情熱的で、誰よりも人間らしい人間だった。

『やめろ!!神々への冒涜だ!!』

脱いだ上着で聖典の山をたたき、マキシムは火を消し止めた。焚書を邪魔された特使の二人は僧兵に命じ、マキシムを取り押さえさせた。

『神々なんてものはいない。この世の神はお一人だ』

特使の言葉に、マキシムは朗らかに笑った。その笑顔の裏には表現のしようのない怒りが見え隠れしていた。

『馬鹿を言う。我々人間ごときに、そんなことは断言できない。神々は天にいる、おまえに天のことが分かるのか?』

『それを言うなら貴様とて、天のことなど分かるまい』

『そうだ、だから俺は自分が信じたいように信じる。女神はいる』

『たわごとを。特使への反逆罪だ、異端の悪魔め、エディンバラへ突き出してやる』

特使に命ぜられ僧兵はマキシムの両腕を背中で縛り上げる。マキシムは顔をしかめた。

『人間のものさしで何が分かる。おまえたちのやろうとしていることは中世への逆行だ。俺の言っている意味が分かるか?エディンバラ教会は退化してるんだ。盲目的に人々が教会を信じていた時代に帰りたいのは分かるが、それは人類そのものの発展の妨げにしかならないし、中世の闇を払拭してみせたルネッサンスの時代の人々に申し訳が立たないことだ』

『黙れ、悪魔め!おい、この減らず口を早くふさげ!決して耳に入れるな、悪魔の言葉だ!』

『ふん、黙るものか。天には神々の世界があって、彼らは我々と同じように面白おかしく暮らしている。それを信じて何が悪い』

『こいつを連れて行け!早く!』

特使が僧兵を怒鳴りつけたとき、小柄な女性がマキシムに駆け寄った。彼女の名はアンジェラ・グランディエ。二十歳の若き修道女はエディンバラ教会の特使を気丈に睨みつけた。

『お引取りを』

特使は嘲るようにアンジェラを見下ろした。

『改宗か死か、おまえたちにはそれしかない』

『では、これで、お引き取りを』

アンジェラがさっと特使に握らせたのは金の包みだった。特使はにやりと笑ってマキシムを解放させた。その時、晴れていた空から急に雨が降り出した。くすぶっていた火がじゅっと音を立てて消える。マキシムとアンジェラは手を取り合い、顔を見合わせた。

『ふん、この天気では焚書もできん』

特使はそう言いながら、仲睦まじい修道士夫婦の姿に嫌悪感をむき出しにした。聖職者の婚姻の許されない正統派に比べ、人間らしさを追求するクラシックの規律は緩く、聖職者や修道士の結婚も許されている。

『覚えてろよ』

陳腐な捨てゼリフを残し、特使たちは引き揚げて行った。そして、夜が明けないうちにオンフルール周辺のクラシック教徒を引き連れ、マキシムはエディンバラへ抗議の大行進を始めた。行進に参加するものは徐々に増え、船に乗ってスコットランドへ渡る時には数十隻に別れることになったほどだ。

「スコットランドへ上陸すると、すぐに教会側の軍隊との戦闘が始まった。大陸では石を投げられることがあっても、武器を向けられたことがなかったから、それは俺たちにとって最初の戦いだったんだよ。俺たちは素人同然で、ロクな武器もなく、文字通り惨敗した。予想以上の死傷者が出た上、大行進から抜けて改宗を選ぶ者が現れ

始めると、マキシムも教会への抗議運動に限界を感じるようになった。そこで、教会の手の届かない所へ落ち延びようということになったんだ。選ばれたのがヒベルニアだ」

「マキシムはどうしてヒベルニアの場所を知っていたんですか？」

ギーヴの話を大人しく聞いていたコルガーが目を瞬く。

「ヒベルニアの場所を知っていたのは極光の女神だよ」

「極光の女神が？」

「そう。彼女がマキシムを誘導し、それに多くのクラシックが同行したんだ」

ギーヴは疲労を感じて瞼を下した。

「ああ、何だか眠くなっちゃったよ。続きはまた今度にしようね」

どこまでもマイペースな男である。コルガーはがっかりしたように息をついて立ち上がった。

「じゃ、オレ出かけますんで、夕飯の時間になったらシチューの残り、食べて寝ててくださいね」

コルガーは椅子の背にギーヴの服をかけ、アイリッシュシチューの入った小鍋を暖炉のそばに置いた。ポケットの小銭を確かめフィドルのケースを背負い、うきうきと扉へ向かうので、ギーヴにもコルガーの行き先が分かった。またパブに行くのだ。

「ねえ、君って、苦手なことや不得意なことはあるの？」

足取り軽く扉を開けたコルガーに、ギーヴは訊ねた。どちらかというと不器用なギーヴとしては、何でも器用にこなすコルガーはヒーローのようだった。コルガーは不意をつかれたように両目を開き、それから苦く笑った。

「そりゃありますよ。例えば……諦めることとか」

静かに扉を閉め、コルガーは出て行った。ギーヴは寝転んだまま頬杖をつき、憮然としてつぶやいた。

「……かっこ良すぎやしませんか」

ギーヴには、コルガーの心の闇が見えなかったのだ。

3．アイリッシュパブの風景

午後七時、ギーヴは落ち込んだ気分で、パブ『キーホーズ』のドアノブを握る。

「いらっしゃい」

扉を開けるや否や、店主が友好的な笑顔で言った。同時に、全員の客がおしゃべりを止め、「いらっしゃい」と異口同音に言った。異邦人としては、一瞬、奇妙な感覚にとらわれる。奏でられていた陽気なフィドルの音も止んだのだ。

「神父さんもギネス？それともキルケニー？ロンドンのポーターなんかも入ってるよ」

店主はてきぱきと働きつつ、ギーヴに訊ねる。黒い詰襟だけを着ているので、神父と間違われたのだ。これはいつものことである。

「酒はいらないんだ」

「神父さん、パブに慣れてない？もしかして異邦の方？」

パブに入るのは初めてだった。ギーヴはうなずいた。

「まあね」

そう答えた瞬間、一番近くにいた若者が、ギーヴの背中をばしばしとたたいた。

「えー！それなら旅の話を聞かせて下さいよ」

「え？」
「そうだよ、どこから来たんですかー？」
「は？」

若者たちに群がられ、ギーヴは目を白黒させる。その輪へ、中年親父や老人たちも加わった。

「旅の神父さん、あんたもこっち来て、わしらの武勇伝を聞いていきなさい」
「そうじゃ、このロイじいさんときたら、こう見えて若い頃はぶいぶい言わせてたんじゃよ」
「何を、わしじゃって」

これがアイリッシュパブか！ギーヴは心の中で叫んだ。

もともと人懐っこいアイルランド人が、最も心おきなくフレンドリーになるのがパブだ。たとえ相手が初対面でも、一見であっても、彼らは躊躇しない。客人を自分たちの輪の中に入れ、話をさせ、話を聞かせるのだ。決して放っておいてなどくれない。

「あ、猊下。すいません、気がつきませんでした。大丈夫なんですか、病み上がりなのに」

ギーヴが出口に向かって逃亡を図ろうとしたとき、老人たちの向こうからコルガーが顔を出した。彼の前には空の杯とフィドルが置かれていた。さっきまで演奏していたのはコルガーだったのだ。

「神父さん、あんた、コルガーの友達なのかね？」
「あ、じゃあコルガーが言ってた、病気で寝込んでるって人？もう治ったのかい？」

「あんた、楽器はできるの？コルガーの腕は大したもんだったよ、歌もうまい」
「まったくだ。おまえさん、このままここに住んだらどうだ？」
「なあ神父さん、この前うちに双子が生まれたんだけどさ」

ギーヴは愛想笑いを浮かべ、彼らに会釈だけ返した。そして、一向にこちらへやって来ないコルガーに向かって、「早く来て」と目で合図する。

「これはいったい、何事なんだい」

やってきたコルガーに、ギーヴは顔をしかめてみせた。コルガーはすっかり辟易しているギーヴを不思議そうに見上げ、それから納得したように笑った。異邦人の困惑を察してくれたらしい。

「こんなもんなんですよ、ここはアイルランドの、パブですから」
「これじゃ話ができないよ。出よう」
「オレまだ全っ然、飲み足りないんですけど」
「頼むよ」

人に頼まれたら断れないのもアイリッシュだ。コルガーは男たちに別れを告げ（懐っこい割りに、別れるときはさっぱりしている）、ギーヴとともに店を出た。

二人は細い運河沿いの小道を選び、暗く湿った空気の中を歩いた。しばらくの間、二人とも黙って河の音を聞いていた。いつまでもふ

さぎ込んでいても仕方がない、そう決心してギーヴは口を開いた。

「バイオリン、上手いんだね」

悩み事を抱えていると、自然と声が固くなるものだ。ギーヴが思わずぶっきらぼうに言うと、コルガーはくすりと笑った。

「バイオリンは歌う、しかしフィドルは踊る」

ギーヴは眉をひそめた。コルガーは背中のケースをこつこつと叩く。

「これはバイオリンじゃなくて、フィドルですってば」

「同じでしょう?」

「同じだけど違うんです。歌うバイオリンは音色が命、踊るフィドルはステップが命。アイルランド人もそう。誇り高く胸を張って、楽しく踊ればオレ達はそれでいい。美しさとか価値とか、そんなもの、少なくともオレは要らないなあ」

陽気で人懐こくて誇り高い。大酒飲みで音楽をこよなく愛している。コルガーはとてもアイルランド人らしいアイルランド人だとギーヴは思う。

「この国は、肌に合いませんか?」

言いながら、コルガーはフィドルケースを背負い直す。十六歳の若者に気を遣わせたことに気がつき、ギーヴは頭をかいた。苦笑して、なるべく冗談ぽく答える。

「合わないねえ。こんなに合わない国もないねえ」

コルガーは小さく笑った。

「せめてお酒が飲めれば良かったですねえ」

「酒なんて、あんなもん」

頑固にそう言いながら、ギーヴは生まれて初めて、本当に初めて、酒が飲めればよかったのにと思った。

もし酒が飲めれば、コルガーと毎夜でも杯を傾けたのに。色々な話をしながら、笑いながら。

「じゃあ何でまた病気の身でパブに？」

話が本題に移り、ギーヴは胃の辺りを抑えた。

「……夕飯が味気ないから、ちょっと買い物に出て」

「味気ない夕飯で悪かったですね」

「甘いものが食べたかったんだ。それで、カフェでスコーンとジャムの代金を払おうとしたら――」

ギーヴは詰襟のポケットを裏返した。

「――さいふがない」

自分の財産を持たないギーヴの財布にはユアン・リプトンから支給された旅費が詰まっていた。それも四ポンド、およそ二人の一週間分の旅費に相当する。

「えっそれは大変だ」

「……君、いくら持ってる？」
「ちょっと待って下さい。よいしょっと」
泣きそうなギーヴとは対照的に、コルガーは落ち着き払っていた。上着の内ポケットとパンツの尻のポケットとブーツの底から紙幣やコインをかき集め始める。
「ええと、五十七ペンス。大丈夫、今夜の宿代は払えます」
コルガーがにっこり笑うと、ギーヴはホッとため息をついた。
「良かった。でも、また偉くバラバラに持ってるねえ」
「そうじゃないと、一発でごっそり丸ごと持っていかれるでしょう。あなたも、そんなところに全部入れといちゃだめです」
「聖職者から財布をする奴はいないと思ってたんだ」
「このご時世ですからね。しかも、あなたの場合は異邦人だし、それに」
とろくさいし、という言葉をコルガーは半分ほどで飲み込んだが、ギーヴの耳にはしっかり届いている。
「それより、どうします？これじゃ、明日には宿を引き払わなければならないし、バンゴールへ行く馬車にも乗れませんよ。あなたの体調を考えると、歩いて行くのはやめた方がいいだろうし……」
頭を抱えるコルガーに申し訳なさを感じ、ギーヴは腹を決めた。
「――よし、ここは俺が一肌脱ごう」

人通りの多い中央広場へ出ると、ギーヴはコルガーのフィドルケースを開いて足元に置き、中身を持ち主に返して大きく息を吸った。

「過ぎた日々はただ懐かしく
振り返ることしかできないけれど」

ギーヴが歌い出すと、コルガーが息を飲んだ。道行く人々も次々に足を止める。かつて神童と呼ばれ、天使のような歌声と讃えられたギーヴの歌声は健在だ。低く安定した柔らかい声が小さな町の広場に響き渡り、ギーヴの調子は上がっていく。

「ただ心だけで　この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

そこでコルガーがフィドルを肩に乗せた。ギーヴの歌の邪魔にならない程度の音量で、瑞々しい旋律を奏でる。

「愛を告げる勇気も　己の非を認める強さも
運命に立ち向かう覚悟もなかった
あなたが許してくれるなら
他にはもう何もいらない
ただ心だけで　この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

気がつくと、二人の周りに人だかりができていた。

「この心だけで　この魂だけで
あの場所へ　あの時へ　あなたのもとへ」

歌い終わると拍手喝采とともにコインが投げられた。ほとんどが一ペニーコインだったが、この不景気である。音楽などという腹の足しにもならないものに金を投げてくれるだけでありがたい。

人だかりがなくなった後、二人はフィドルケースの中の金を数えた。四十ペンス以上もあった。これなら乗り合い馬車でバンゴールへ行けるだろう。二人は顔を見合わせて破顔し、それから声を立てて笑い合った。

4. 美味い酒に釣られる

「見つけましたよ、ギーヴ猊下」

その背後からの声に、コルガーは飛び上がった。広場はいつの間にか閑散としていて、他人の気配を感じなかったのだ。コルガーの助言を受けてあちこちのポケットに小銭をしまっていたギーヴもはっと顔を上げた。

「うわ、まずい！」

ギーヴはコルガーの手を取って逃げようとしたが、すでに周囲を囲まれていた。黒い詰襟に身を包んだ四人の男たちが、両手を広げて彼らへにじり寄る。

「猊下、こいつらは？」

とても仲間には見えなかったが、コルガーは訊ねた。ギーヴは不快感を露わに答える。

「俺の護衛、もとい監視役。エディンバラ教会の連中だよ」

ギーヴとコルガーは背中合わせに立ち、四人の護衛たちを睨み返す。真っ先に動いたのは豊かな黒い口髭のある中年の男だった。彼はコルガーの腕をつかんで己の方へ引き寄せ、額に短銃を押し付けた。小柄で非力そうなコルガーを人質にしようという魂胆だったのだろうが、コルガーは怯えるでもなく肩をすくめただけだった。

「なんだよ、エディンバラ教会の連中だっていうから、もっとすご

いことしてくると思ったのに、残念！」

そう言い放つや否や、コルガーは口髭の男を片腕で跳ね飛ばした。彼の身体は数メートル上空まで舞い上がり、虹のようなアーチを描いて広場の端に落下した。うろたえる残りの男たちが一斉に発砲したが、弾丸がコルガーの身体を傷つけることはない。

「勘弁してよ。裁縫は得意だけど、あんまりつぎはぎだらけじゃ格好悪いだろ」

三人ともコルガーの心臓を狙って撃ったのだろう、左の胸元がぼろぼろになった自分の上着を指でつまみ、コルガーは男たちを迷惑そうに見た。エディンバラ教会の護衛たちは恐怖の表情を顔に張り付けて後ずさりし、互いに目配せし合うと、倒れている口髭の男を背負って逃げ出した。

「やれやれ」
「弱えー」

ギーヴはほっと息をつき、コルガーは退屈そうにぼやいたが、彼らは背中合わせのまま警戒を緩めなかった。広場の端に別の誰かが立っていた。二人組の男だ。

「ひゅー。大したもんだなー、惚れちまうぜ」

朗らかに言ったのは身なりのいい黒髪黒目の白皙の青年だった。背後に四十歳くらいの黒ずくめの男を従えている。コルガーはその黒ずくめの男から、エディンバラ教会の護衛とは比較にならないほどの殺気を感じた。まるで猛獣のような気配だ。

コルガーはギーヴを守るように数歩前に出た。青年は乗馬用のブーツで一歩一歩を踏みしめるようにゆっくりとコルガーに歩み寄り、少女に顔を近づけて囁いた。

「目の保養にゃいいんだけどよ、ちぃっと隠した方がいいんじゃねえか、その美乳」

ばちん、という小気味よい音とともに、青年の頬にコルガーの手形がつく。コルガーは穴のあいた胸元を隠し、余裕の表情を浮かべる青年を睨みつけた。

「喧嘩なら買うぜ、優男」

コルガーが啖呵を切ると、青年はくすりと笑った。まるで王子様のような笑顔だった。彼に裸の胸を見られたと思うとコルガーの頬は恥ずかしさで熱くなる。そんな乙女心を面白がるように、青年は目を細めた。

「威勢のいい嬢ちゃんだな。でも争う気はねーよ、今はまだ」

彼はコルガーの肩に自分の上着をそっとかけ、身をひるがえして黒づくめの男とともに颯爽と立ち去る。と、思ったら、広場の端にある溝に落ちた。

「……なんだろうねえ、あいつら」

ギーヴがつぶやき、コルガーが頷いた。

翌日、ギーヴの熱も下がり、二人は乗り合い馬車に揺られて港町バンゴールへ向かった。馬車の乗客はコルガーとギーヴの二人きりで、彼らは気兼ねなく足を伸ばしたり談笑したりしながら移動を楽しんだ。

「あなたはどうして六十年間もエディンバラ教会に囚われていたんですか？あの護衛たちは無茶苦茶弱いし、幽閉されていた塔から逃げ出すのも簡単だったんでしょう？逃げようと思えば逃げられたと思うんですけど」

昼食のパンをかじりつつコルガーが訊ねると、車窓の景色を眺めていたギーヴはコルガーを振り向いて微笑んだ。

「何だかんだ言って、エディンバラでは自分のしたい研究ができていたからね。幽閉生活は窮屈だったけど、働かずして食べるものや寝る場所を保障されている生活だもの、贅沢は言えないよ。それに、逃げ出したところで行くあてもないからねえ」

ギーヴは窓の外の景色に視線を戻した。きっと外出することも少なかったのだろう。何でもない田舎の風景を愛おしげに眺める彼の姿に、コルガーの胸は少し痛んだ。

港町バンゴールに到着すると夕刻だった。船着き場へ向かうと上品そうな白髪の老人が二人を迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、ギーヴ猊下」

白髪の老人はギーヴの荷物を恭しく受け取りながら、コルガーを

見た。ギーヴがすかさずコルガーを紹介する。

「こちらはコルガー・バルトロメ。シスター・アンジェラの曾孫で、彼女の代わりにヒベルニアへ行くことになったんだ。コルガー、こちらはユアン・リプトンの優秀な執事だよ」

「コルガー・バルトロメです、よろしく」

コルガーはリプトン家の執事に手を差し出した。老人は大好きだ。

執事は二人を船内に通し、紅茶を入れながら夜が明けたらグラスゴーへ向けて出港すると告げた。天候や海の状態にもよるが、グラスゴーには一泊二日で到着するという。コルガーにとっては初めての異邦旅行である。その晩、コルガーはうきうきと胸を躍らせながらバンゴールのパブに向かった。

「くー！うまっ！」

コルガーが三パイント目のギネスを飲み干した時だった。

「次の酒は俺が奢るぜ」

がたっと音を立ててコルガーの隣に腰を下した男がいた。「おかわり！」と叫ぼうとしていたコルガーははっとして顔を赤らめた。昨夜、裸の胸を見られた青年だった。彼の黒い目が至近距離で魅惑的に細まる。

「できれば、静かなところで飲み直さねえ？いいウイスキーを出す店があるんだ」

いい酒と聞いて心が傾かないわけがない。コルガーは青年ととも

に店を出た。彼は明らかに怪しい男ではあったが、自分の身を守れる自信はある。コルガーは青年の隣を歩きながら、彼の横顔を見上げた。

眉目秀麗とはこういう顔のことを言うのだろうとコルガーは思った。彼は上質な服を身につけている。昨夜コルガーの肩にかけてくれた上着もとても高価そうなものだった。言葉づかいからして貴族には見えないので、豪商か何かだろうか。

「そういや、まだ名前を聞いてなかったなあ。俺はジャック・ロッキンガムだ。嬢ちゃんは？」

ふいに青年が名乗った。ジャック・ロッキンガム。コルガーは口の中で彼の名前を反芻する。

「オレはコルガー・バルトロメだ」
「なんだよ、男名じゃなくて本名を教えてくれよな」
「男名も本名もねえよ。オレはコルガー・バルトロメだ」

ジャックの気さくな口調に釣られ、コルガーの言葉も砕ける。荒くれ男ばかりの仕事場ではいつも汚い言葉を使っていたものだ。

「しゃーねーなー。じゃあ、コルガーちゃんはどうして男装なんかしてんだ？ドレス着たらお人形みたいで絶対可愛いぜ？」
「うるせーな、やっぱオレ帰る」
「あ、ここだ、ここ。この店」

踵を返すコルガーを無視してジャックは店の中に消えた。なんというマイペースな男だ。そしてコルガーはマイペースな男に弱いのだった。小さくため息をつき、コルガーは仕方なく扉をくぐった。

客は身なりのいい紳士ばかりで、着飾った女性の姿さえある。街中のパブとは雰囲気が全く違い、コルガーは急に自分の服装が恥ずかしくなった。

「いらっしゃいませ、お席にご案内いたします」

恭しく目礼し、ウェイターが二人をカウンター席に案内する。高級レストランみたいだ、とコルガーは本気で緊張した。緊張しながら一番高いウイスキーを頼んだ。

「で、どうして男装なんかしてんだ？教えてくれよ」

カウンターに頬杖をつき、ジャックはコルガーの顔を覗きこむ。コルガーは彼を睨みつけて顔を背けた。なぜだかジャックの顔を正視できない。きっと昨日、胸を見られたからだ。

「何でそんなこと聞くの？」

「俺のダチも男装してるから」

その時、コルガーの心の中で何かが引っ掛かったが、それが何なのかは分からなかった。

「コルガーちゃんにはどんな事情があるのかなっと。どーしても教えてくれねっていうなら、連れの金髪の人に実は女の子だぜってバラしちまうかなー」

「あんた、鬼だな」

コルガーが顔をしかめて見せると、ジャックは余裕の表情で微笑んだ。

「俺はコルガーのことが知りたいんだ」

少女は大きなため息を長々と吐き出した。

「コルガーっていうのは三月地震で死んだ兄の名前だ。兄は二つ年上で、三人兄弟でたったひとりの男子だった。オレたち兄弟は庶子で母も早くに亡くしていたから、兄が親代わりみたいなものだったんだ。いつもオレたちを守ってくれた」

ウェイターがウイスキーのグラスを二人に差し出した。コルガーはジャックとグラスを合わせ、それを話の合間に煽った。うまい。安酒も愛しているが、高級な酒も好きだ。コルガーは感動した。

「彼が死んだ時、チャンスだと思った。働かなきゃ飯は食えないけど女の姿じゃ仕事は限られる。でもオレ、建築家になりたいんだ。幸いオレは力持ちだから、今は復興現場で下積みしながら建築の勉強をしてる」

話し終え、コルガーはぐびりとウイスキーを飲み下す。ジャックは首をひねり、胸の前で腕組みした。

「つまり、建築家になるために男装してるってことか？兄貴とすり替わって？」

「……一番の理由はそれじゃない。けど、説明すんの面倒くさいから、そういうことにしといて。それより、おかわりしていい？」

ジャックは頷き、ウェイターに目配せした。

「わかったぜ。なーんか、とりあえず生きて行くのに都合が良かったんだな？兄貴にすり替わった方が」

「その言い方、適当でいいね」

コルガーはできる限り朗らかに笑った。同調するようにジャックも笑った。それから二人は互いの身の上を話した。ジャックはイングランドの商人で、アイルランドへは仕事で訪れているのだと言った。彼の家は豪商だが、祖父や父の栄光から離れ、一人の商人として、自分だけの力で一から勝負したいのだとジャックは語った。

コルガーは小旅行の途中だとお茶を濁し、復興現場のレンガ積みや石畳の補修について話して聞かせた。コルガーが建築について熱く語り出したのはウイスキーを四杯飲み干した頃だった。

「オレ、グラスゴー大聖堂は絶対見るんだ！」

これから向かうグラスゴーの有名な建築物のことをコルガーは考えた。それだけで魂がとろけ、妄想の世界に旅立ってしまいそうになる。

「きっとすっごく美しいんだろうなあ！」

一人で語りつつ身もだえするコルガーを眺め、ジャックは楽しそうに目を細めた。少し前から彼はじっとコルガーを見つめ、聞き役に徹している。彼は時々相槌を打ってくれるし、退屈そうには見えなかったが、自分一人ではしゃぎ過ぎてしまったかもしれない。コルガーは頭をかいた。

「ごめん、オレ、建築のこととなると興奮して。つまんなかっただろ？」

恐縮するコルガーに、ジャックは顔を寄せた。

「全然。コルガーを見てると退屈しないし、建築の話をするコルガーは可愛いぜ」
「か、かわ？！」

ぎょっとするコルガーの頬に、ジャックの指が触れる。その長い指は流れるような動作でコルガーの顎をつかみ、ジャックは少女の――唇を奪った。

唇が離れるや否や、コルガーは店中に響くような声で叫んだ。

「お、お、表に出やがれ！！！ぶっ殺す！！！」
「へいへい。じゃ、先に出ててくれ」

ジャックは顔色一つ変えずに懐から財布を出す。コルガーは彼に奢られるのが癪に思えて全財産の十五ペンスをカウンターに叩きつけて店を出た。外は寒かったが、コルガーは活火山のごとく怒りに燃えていた。

「待たせたな。宿まで送るぜ」

店から出て来たジャックは何事もなかったかのように平然と言った。コルガーはますます激怒して、固く握った拳を足元の石畳に叩き下した。ずん、という音がして、コルガーの半径一メートルが二十センチ陥没した。これにはさすがのジャックもうろたえた。

「お、おいおいコルガー？」
「……オレはこれがあったから生き延びられたんだ。これがあったから誇りを失わずに済んだんだ」

コルガーの身体を淡い緑色の光が覆う。コルガーはジャックを睨みつけ、上着の袖で唇をぬぐった。

「オレに触るな」

何度も、何度もぬぐう。

「コルガー、悪かったよ、だから……」

ジャックは眉をひそめて申し訳なさそうに詫びたが、コルガーの耳には入らない。

「オレがこんな恰好をしてる三番目の理由を教えてやろうか」

コルガーは拳を握った。その拳から、ゆらりと緑色の陽炎が立つ。

「あんたみたいな金持ちには関係ないだろうけど、大きな災害が起きた時、社会の底辺がどうなるか知ってるか？ユーカイ、ジンシンバイバイ、キョーセイロウドウ、バイシュン、ゴーカン。餌食になるのは子供と女だ。老人はまだいい、路傍で骨になるだけだから。ベルファストの警察はほとんど機能してない。地震で刑務所が倒壊して囚人も野放しだ。行政も司法も麻痺してめちゃくちゃになった街で、家族と家を失った十六歳の女の子が無事に生き延びられると思うか？オレが何度危険な目に遭ったと？だからエド・バルトロメには死んでもらった。オレはコルガー・バルトロメだ。十八歳の、一人前の男だ」

緑色の陽炎はコルガーの全身を包み、燃え盛る炎のようにコルガーの身体を取り巻いている。コルガーが拳を振りかぶっても、ジャックは逃げなかった。彼はただ、悲しげな目でコルガーを見つめ返

した。

「オレに、触るな」

コルガーの拳がジャックの腹に突き出される、まさにその瞬間、建物の陰から黒ずくめの男が現れコルガーの前に立ちふさがった。

5．悪魔1　―牡山羊―

「若旦那、下がりなさい！」

黒づくめの男はコルガーとジャックの間に割って入ると、コルガーの迫力に負けて呆然としていたジャックを低い声で怒鳴りつけた。男の腹にはコルガーの拳が打ち込まれているが、彼は眉一つ動かさない。よく見ると、コルガーの拳は男の身体に指一本分届かず、空中で止まっていた。

「な、なんで?!」

コルガーは訳が分からず後退した。黒ずくめの男は嘲笑う。黒い髪に黒い目、黒い服、夜のような男だ。

「おまえにおまえを助ける者がいるように、私にも私を助ける者がいる。私と悪魔の契約は、おまえとおまえを助けるものの繋がりより強い、それだけだ」

「悪魔？」

男は困惑するコルガーを冷たい目で見下ろした。

「姿を見せてやれ、アザゼル」

――御意。

烏のようなしわがれた声が男の言葉に応え、次の瞬間、コルガーの目の前にどす黒い人型の闇が現れた。頭には山羊の角が生え、身体は獣のように濃密な毛で覆われ、先のとがった長いしっぽを持っ

ている。

「なんだよ、これ……！」

さすがのコルガーも思わずうろたえる。己の従える悪魔に恐れ慄くコルガーを見て、男は実に満足そうに笑った。

「はっはっはっは！さあ、アザゼル、遊んでやれ！」

――御心のままに。

アザゼルと呼ばれた悪魔は気まじめに答え、太い腕をコルガーへ伸ばした。コルガーは軽い動作でそれをよけ、アザゼルに思い切り拳を突き出した。緑色の陽炎に覆われたコルガーの拳はアザゼルの腹に命中したが、悪魔は痛がるそぶりがない。続けざまに回し蹴りを入れてもびくともしなかった。

「どうすりゃいいんだよ、いったい」

手ごたえのない戦いに恐怖を感じ、コルガーは助けを求めるようにジャックを見た。ジャックは黒ずくめの男に抗議するように言った。

「パーシヴァル、やめろ、まだ争う必要はねーだろ！」

『まだ』か。そういえば初めて会った時も彼はそう言っていた。最初から敵だと分かっていたはずなのに、美酒に釣られてジャックにのこのこついてきてしまった自分が今さら腹立たしい。コルガーは頭に血が上るのを感じた。

「てめえら、エディンバラ教会の奴らか？」

パーシヴァルと呼ばれた黒ずくめの男は胸の前で両腕を組んだ。アザゼルも同じポーズをとる。

「教会関係者が悪魔と契約しているわけがないだろう」

「じゃあ何者だよ。どうしてオレたちを狙う？」

「アヤ・ソールズベリについて来いと言ったのはそちらのはずだったと思うが」

どこかで聞いた名前だ。コルガーは三秒後に気がついた。

「おまえら、あの男装女の仲間か！」

叫ぶと同時に、コルガーの身体は吹き飛ばされた。アザゼルの吐き出した灰色の息がコルガーを襲ったのだ。コルガーは数メートル後方のレンガの塀に叩きつけられた。

「ぐえ！」

せき込みつつ起き上がろうとするコルガーに、アザゼルがのしかかってくる。喧嘩で相手に押されたのは生まれて初めてのことで、コルガーはどう対処していいか分からなかった。いつもの怪力も発揮できず、それどころかアザゼルに触れられると全身から力が抜けて行く。

しゅーしゅーとアザゼルが呼吸した。鋭い爪を持った悪魔の手がコルガーの細い首に伸びる。血のように赤い瞳と目があった。殺される。コルガーはぎゅっと目をつぶった。

「――我が声は神々の御声」

りん、と錫杖の輪が鳴る音がした。

「悪しきものよ、光によって打ち払われよ」

りん。再び鳴る。アザゼルが苦しげな動きをしてコルガーの身体の上から退いた。パーシヴァルが舌打ちする。コルガーは瞳だけを動かして声のした方向を見る。背の高い男の影が見えた。

「悪しきものよ、光によって、打ち、払われよ」

穏やかな音楽のような声に続いて小さな水音がした。アザゼルに何かの液体を――恐らく聖水のようなものをかけたのだ。悪魔は醜い悲鳴を上げながら転がるようにパーシヴァルの足元の影の中に姿を隠した。

「君、大丈夫？」

コルガーの顔を覗きこんだのはやはりギーヴだった。コルガーは彼の緑色の瞳を見上げた。言葉が出なかった。本当に殺されると思った。バケツの水をかぶったように、全身に冷汗をかいていた。

コルガーは震える手を無理やり動かし、ギーヴの濃紺の法衣をつかんだ。家族以外の誰かに守ってもらったのも、家族以外の誰かにすがったのも、初めてのことだった。そして、なぜだか頭の隅で、女に生まれて良かったと思う自分がいた。

「……死にそうです」

コルガーはやっとのことで答えた。

「だめ、死なないで」

大まじめに答え、ギーヴはパーシヴァルとジャックに向き直った。

「まったくもう、いたいけな十代に何してくれるんだい」

「うちの若旦那に手を上げたのは彼の方だ」

パーシヴァルが鼻を鳴らすとギーヴは首を傾げてコルガーを見た。

「そうなの？」

「だってあいつ、オレの唇にキスしたんだ！」

コルガーは石畳に倒れ込んだまま、改めて唇を服の袖でぬぐって顔をしかめる。あんな男に初めての口づけを奪われたなんて屈辱だった。

「それにあいつら、あのアヤ・ソールズベリの仲間なんです」

「ふうん」

コルガーの怒りを察したのか、ギーヴも不機嫌そうに眉をひそめる。

「コルガー、悪かった、一生の無覚だ。本当にヒベルニアへ着くまで争うつもりはねえんだよ。いや、もっと言っちまえばヒベルニアへ着いてからも、俺はコルガーと争いたくねえ」

そう言って、ジャックは葛藤するような表情で唇を引き結んだ。

コルガーはこんな時にわけのわからない言い間違いをするジャック

を睨み返しつつ、パーシヴァルの様子をうかがった。

ジャックの思惑と彼の思惑はしばしばずれているように思える。ひょっとしたらパーシヴァルはジャックの意向を無視して今すぐに決着をつけようなどと言い出すかもしれない。だが、パーシヴァルはコルガーの予想に反してあっさりと頷いた。

「その通りだ、坊やをからかったに過ぎない。利害が一致している以上、我々に争う意思はない」

悪魔に殺されかけたコルガーとしては異論大ありだったが、ギーヴはコルガーを両手で抱き上げると、非常にあっさりと二人の男に背を向けた。

「そう。じゃあさようなら、おやすみなさい。――コルガー、君、ちょっと軽すぎない？」

「は？え？あの、いいんですか、あいつら放っておいて」

コルガーはギーヴの腕に抱かれてジャックとパーシヴァルを顧みた。ギーヴならば彼らに勝てたはずだ。

「それは、決着をつけて、できればトドメを刺した方がいいっていう意味？」

困惑するコルガーにギーヴは厳しい声で応える。コルガーは彼の露骨な表現に腹の奥が冷たくなるのを感じた。違う、ギーヴに人殺しをしてほしいなんて思ってはいない。だが。

「だって、あいつらヒベルニアに着いたらオレたちに危害を加える気ですよ！」

「俺は腐っても聖職者だ。人殺しはしないし、君にもさせたくないよ。火の粉が降りかかれば払うけれど、それ以上のことはしない。争いが何も生み出さないことは六十年前に思い知ったんだ」

コルガーは黙るしかなかった。ギーヴはクラシックの大行進の時のことを言っているのだろう。大行進に参加したクラシックの多くが、エディンバラ教会の僧兵との戦いで命を落としたのだ。もしかしたら死者の中には彼の大切な人がいたのかもしれない。愛する人を失う悲しみをコルガーは痛いほど知っていた。そして――この手で人を殺める罪深さも。

「それより、どうして彼と一緒だったの?」

口を閉ざしたコルガーにギーヴは非難がましい声で言った。

「……ジャックが美味い酒を奢ってくれるって言うから」

正直に答えたものの、自分で言っていて情けなくなってきた。コルガーは肩を落とし、ギーヴはため息をついた。

「君は、自分の力を過信してるよ。知らない男に一人でついていくなんて、だめ」

女の子じゃあるまいし、と言おうとしてコルガーはやめた。いつも穏やかなギーヴの瞳が怒りに燃えていたからだ。

「あの、怒ってます?」

恐る恐る訊ねると、コルガーを抱くギーヴの腕の力が強まった気がして、コルガーは彼の顔をさらにまじまじと見つめた。身長差の

大きな二人がこんなに顔を寄せ合ったのは初めてだった。コルガーは唐突に、ギーヴの長い髪や頬の産毛や金褐色の眉や睫毛に触れたいと思った。

「怒ってるよ。でも君にじゃないよ。あのジャックって男に怒ってるんだ」

さっきまでコルガー自身もジャックに怒り狂っていたが、ギーヴが歯噛みしながらそう言うのを聞いて少し気持ちが和らいだ。自分のために誰かが怒ってくれるのは嬉しいものだ。

「何笑ってんのさ」

知らずに微笑んでいたコルガーにギーヴが唇を尖らせる。コルガーは今度こそ声を漏らして笑ってしまった。じわりと温かい何かが胸の中に広がり、凍っていた心の一部をゆっくりと溶かしてゆく。

「助けてくれてありがとうございます」

家族以外の誰かに助けられたのは初めてだった。家族以外の誰かがコルガーのために怒ってくれたのも初めてだった。自分が、自分以外の誰かに大切にされていると思うと、もう少しだけ己を大切にしようと思える。

コルガーは目を閉じて、想像する。

もしもあの時、あの残酷なまでに赤い夕焼けに染まる河原にギーヴがいたら、彼はどうしただろう。腐っても聖職者だと言って、あの男たちを許したのだろうか――。

6．悪魔２　―黒霧―

コルガーとギーヴがグラスゴーに辿り着いたのは翌々日の正午過ぎだった。ヨイクたちと待ち合わせた鷲獅子亭という名のパブ兼宿屋を訪ねると、彼女たちもちょうど同じ日に到着したようだった。何はともあれ一刻も早くグラスゴー大聖堂が見たいというコルガーは荷物を置いて出かけてしまい、ギーヴは宿の主人の案内でマキシムの孫娘ヒリールと再会した。

「ギーヴおじいさま、お久しぶりです！」

ギーヴが扉を開けるやいなやヒリールは彼に飛び着いてきた。

「やあ、元気だったかい、ヒリール。ヨイクたちとの旅は楽しかった？」

「はい！」

ギーヴはにこにこと破顔してヒリールの小さな頭を撫でた。コルガーといい、ヒリールといい、血縁者はやはり可愛いものだ。だが、コルガーに抱いている気持ちとヒリールに感じる親しみには何か大きな違いがあるような気がして、ギーヴはぎくりとした。瞼の裏に蘇る官能的な光景を振り払い、ギーヴは室内を見た。ヨイクとユアンの姿はなく、ヒリールは一人で留守番をしていたようだった。

「ヨイクとリプトン君は？」

「ヨイクはたった今出て行ったところ。ユアンは野暮用だって」

「行き違いになったか。仕方ない、俺たちはここで大人しくしお茶でも飲んでようね」

ギーヴは錫杖を壁に立てかけ、荷物を置いて椅子に腰を下す。ヒリールは暖炉の火にかけていたやかんをとってお茶の支度を始めた。

「あの、おじいさま、シスター・アンジェラが一緒に来るって聞いたけど……」

ヒリールはカップをテーブルに並べながら、様子をうかがうようにちらりと上目遣いでギーヴを見た。アンジェラに対してヒリールが複雑な気持ちを抱いているのは分かる。ヒリールにとってアンジェラは祖父の妻で、しかもマキシムはまだ彼女を愛しているらしいのだから。

「彼女はちょっと……ね。代わりにマキシムとアンジェラの曾孫のコルガーを連れて来たよ。そのうち戻ってくるから紹介するね。年も君に近いんだよ」

それから二人は紅茶を飲みながら、ギーヴはエディンバラの塔から脱走してアイルランドまで行ったことを、ヒリールはヨイクとユアンとともにリラ城を抜け出し劇団に紛れてグラスゴーまで旅してきたことを話した。世間知らずの二人にとってそれは大冒険だったので、どちらも興奮して互いの話を聞いていた。

「ヨイクもリプトン君もすごいよねえ」

ギーヴがしみじみと言うと、ヒリールも大きくうなずいた。彼らの助けがなければギーヴもヒリールも今ここにはいない。

「うん。二人とも強いし、かっこいい。ユアンは料理も上手だよ」

「コルガーもね、かっこいいよ。頼もしくて、たくましくて、賢くて、何でも器用にこなせて、優しくて。建築おたくだけど」

苦手なことは諦めること。コルガーはそう言っていた。

「顔はアンジェラにそっくりだけど、性格はマキシムに似てるんだよ」

ギーヴは窓から見えるグラスゴー大聖堂の尖塔を眺めた。今頃コルガーはグラスゴー大聖堂に辿り着いただろうか。ギーヴがコルガーを褒めちぎると、マキシムの孫娘は眉をひそめて目を伏せた。

「じゃあ、わたしあんまり会いたくない」

ギーヴはきょとんとして瞬きした。

「どうして？ヒリールはマキシムが嫌いなの？」

「……嫌い。だってマキシムおじいさまもわたしのこと嫌いだもの」

ヒリールはカップの中の紅茶に視線を落とし、小さな声で言う。ギーヴは椅子の背にもたれ、天井を見上げて考え込んだ。

「マキシムが自分の孫を嫌うなんて、俺には信じられないなあ」

六十年前に別れたきりとはいえ、マキシムはギーヴの双子の兄である。彼のことはよく知っているつもりだった。

「マキシムおじいさまは変わってしまったってみんな言ってる。ギーヴおじいさまとシスター・アンジェラがヒベルニアへ来て下さらないから、あなた方が約束を違えたから、マキシムおじいさまは全てのことに絶望してしまったって」

顔を上げたヒリールの瞳は涙で潤んでいた。ギーヴはテーブルに身を乗り出し、兄の孫娘と正面から向き合った。

「マキシムが怒るのも無理はないと思う。俺はきちんと謝るつもりだよ。でもその前に俺は君に謝らなきゃいけないね。俺やアンジェラのせいでマキシムを悲しませてしまったこと、マキシムのせいで君を悲しませてしまったこと」

ギーヴがヒリールの瞳を覗きこむと彼女は顔を背けて窓の外を見た。大きな茶色の瞳から今にも涙がこぼれ落ちそうだった。

この六十年の間に、マキシムに何があったのだろう。

ギーヴは窓の外の運河の流れに目をやって、遠い地の兄のことを思った。

コルガーはグラスゴー大聖堂を目指して市街地を歩いていた。少しでも自制心のたががはずれたらスキップでもしそうな勢いだ。初めての異邦というだけで胸が躍るのに、それに素晴らしい建築物が付いてくるとなればフルコースディナーをいただくようなものだ。

「おっと！」

夢見心地のコルガーを現実に引き戻したのは鼻先を横切った人影だった。コルガーはたたらを踏み、疾走する人影をよけた。が、直後にもう一人鼻先を横切る。

「ごめんなさい！」

二人目は早口で謝罪し、わずかにコルガーを振り向いた。波打つ長い金髪を揺らした青い瞳の少女だ。藍色のワンピースをまとい、赤い帽子をかぶっていて、どことなく異国情緒漂う不思議な女の子だった。

コルガーが藍色のワンピースの少女に目を奪われていた時、先にぶつかりそうになった人影がコルガーをちらりと顧みた。その顔には見覚えがあった。

「あ！てめ、あの時の、アヤ・ソールズベリ！」

ウイスキー修道院へ現れたあの男装の麗人である。コルガーはアヤと藍色のワンピースの少女を追って駆け出した。アヤには果樹園に火をつけられた恨みもある。

「あの男装女を知ってるの？！」

コルガーが少女に追いつくと、彼女は青い瞳を見開いて訊ねた。

「名前だけ！とっ捕まえて素性を吐かせてやる！」

「なるほど、目的は同じね」

「よし、オレが先回りする。二人ではさみうちだ」

コルガーはスピードを落とさずに民家の壁を駆け昇って屋根の上を走り始めた。足元一面に広がる赤いレンガ屋根は壮観だった。

「ちょ、ちょっと、何者なのあなた？！」

口をあんぐりと開けて驚く少女を見下ろし、コルガーは不敵に笑って見せた。右足にぎゅっと力を入れると、太ももから靴先までが緑色の陽炎に包まれる。その足で踏みきると、コルガーの身体はたった一歩で十メートルを進む。

「観念しろ！」

アヤの姿を見つけたコルガーは屋根から飛び降り、彼女の目の前の路地に着地した。アヤは方向転換しようとしたが、背後からは藍色のワンピースの少女が追いかけてくる。

「しつこい連中。私たちが争うのはまだ先なのに、死に急ぐこともないでしょう」

苦々しげにつぶやき、アヤは細い脇道へ入った。コルガーと少女も慌ててそれを追いかける。

「よし、チャンス！」

コルガーは指を鳴らした。細い路地の行く手で、一組の男女が身体を寄せ合い見つめ合っているのだ。それを見て藍色のワンピースの少女が「あっ！」と声を上げた。

「ユアン！そいつ捕まえて！」
「はあ？！」

少女の命令に、佇んでいた男女のうち男の方がこちらを見て声を上げた。彼は素早い動作でアヤの行く手を阻み、体当たりを食わせる。アヤは地面に押し倒され、男の腕から逃れようともがいた。

「ナイス、ユアン！」

コルガーと少女はユアンと呼ばれた男と、うつ伏せになったアヤに駆け寄った。

「何なんだ、この女は」

ユアン青年が顔をしかめて訊ねる。少女はアヤのそばに膝をつき、辺りの様子をうかがった。

「油断しないで、おかしな術を使うやつよ、鷲獅子亭の前で私たちを監視してた。たぶん、あんたをつけてる奴もどこかに……きゃ！」

案の定、建物の影から何者かが顔を出し、煙幕弾が投げられた。白い煙が視界を埋め尽くす。コルガーは咳きこみながら姿勢を低くし、目を凝らしてアヤを見た。目が合った。彼女は薄らと気味悪く笑った。

「ミスティック！力を貸して！」

――御意。

アヤの周囲に黒い霧の竜巻が生まれ、道端の落ち葉を撒きあげた。ユアン青年は藍色のワンピースの少女を守るようにして後ずさり、遠巻きに彼らを見ていたパブの女店主風の女性に彼女を預けた。

「あんたも悪魔と契約したのか！」

コルガーはパーシヴァルの悪魔アザゼルと戦った時のことを思い出した。コルガーの人知を越えた力が、悪魔アザゼルには敵わなか

った。今度も勝てないかもしれない。喧嘩の前から弱腰になる自分にコルガーは驚いた。こんなことは初めてだ。

「そうよ、私はミスティックと契約したの。ヒベルニアの地を踏むためにね」

アヤは黒い竜巻の中心で女王のように笑った。コルガーは背筋が凍るような思いで後退した。以前会った時の彼女にはこんな邪悪さはなかったはずだ。

「戦いの時はまだよ。ヒベルニアで会いましょう」

女王の哄笑を合図に黒い竜巻はコルガーたちを襲った。膨らみ、勢いを増した竜巻に吹き飛ばされ、コルガーは民家の壁へ背中を打ちつけた。

「待て！」

コルガーはすぐに飛び起きたが、アヤの姿は消えていた。

「くそ！ジャックといい、パーシヴァルといい、あいつといい、何者なんだよ！」

「あなたこそ何者よ」

地団太を踏むコルガーに言ったのは藍色のワンピースの少女だった。彼女は頬や額に小さな傷を負い、乱れた長い金髪を撫でつけながら眉をひそめた。彼女をかばったせいだろう、その背後のユアン青年にいたっては民家の壁にめり込んでいる。アヤから一番離れた場所にいたパブの女店主風の女性が表通りへ助けを呼びに走っていった。

「普通じゃないけど人間だ」

胸を張って言ったものの、コルガーはかすり傷ひとつ負っていない。藍色のワンピースの少女は厳しい表情でコルガーを見つめた。

「あの男装女はヒベルニアへ行くために悪魔と契約をした、ヒベルニアで会おう、そう言ったわ。あなたにはその言葉の意味が分かるの？」

そこでコルガーは合点がいった。

「ヒベルニアのことを知ってるってことは、あんたが民話学者のヨイク・アールトか。ってことは、あれが書籍商のユアン・リプトン？」

「どうして私たちのことを？それにヒベルニアのことを知ってるのは何故？」

警戒するように身構え、少女はコルガーを睨む。コルガーは大きなため息をついて民家の屋根の向こうに見える立派なとんがり屋根を見上げた。

「嗚呼、真っ先にグラスゴー大聖堂が見たかったんだけど、仕方ないか。ひとまず戻ってお話ししようぜ、鷲獅子亭で」

7．グラスゴーの鷲獅子亭2

ヒリールが鷲獅子亭の一室の扉を開くと、ギーヴ、コルガー、ヨイク、ユアンがすでに集まっていた。ヒリールは落ち込んだ気持ちで黙って丸テーブルに着く。すると、ギーヴが妙に改まった顔で言った。

「ええと、改めまして、紹介するね、彼がマキシムとシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメ。アンジェラが来られないので彼が代理なんです」

「よろしく！」

ギーヴの隣でコルガーは朗らかに笑った。いかにも人懐こいアイルランド人らしいとヒリールは淡々と思う。ヒベルニアにもアイルランド出身者が数多くいるが、コルガーの打ち解けようは彼らにそっくりだった。

「そしてコルガー、こちらが民話学者のヨイク・アールト、書籍商のユアン・リプトン、それからマキシムの孫でヒベルニアからやって来たヒリール・バルトロメだよ」

ギーヴの紹介にヨイクは気さくに微笑み、ユアンも好意的に頷いた。ヒリールはどんな顔をしたらいいか分からず、目の前の少年をじっと見返すことしかできなかった。

「いやーまさか、あんたがあのヨイク・アールトだなんて思いもしなかったよ。新聞広告にはクレオパトラ級の美女って書いてあったから、正直がっかり」

コルガーが歯に衣着せずに笑うと、ヨイクは真っ赤になって隣席のユアンの胸倉をつかんだ。

「ユアン、あんたアイルランドの新聞に何てこと書いてんのよっ！」

「さあ記憶にないな。――よろしく、コルガー。君は女を見る目がありそうだ」

ユアンは腰を浮かせて向かい側のコルガーと握手する。その時、扉が開いて宿の主人が夕食を運んできた。

羊の内臓とジャガイモを煮込んだシチューとパンだけの食事だったが、全員が不平を言わずにそれを食べ始める。ギーヴがウイスキー修道院で起きたことを話し、コルガーがジャック・ロッキンガムのことを話すとヨイクが納得したようにうなった。

「ほほう、ある組織に雇われてヒベルニアの気象兵器を狙ってる連中、か」

「アヤとパーシヴァルはともかく、ジャック・ロッキンガムというのはリヴァプールの豪商一族の出だな。確か現当主ジョージ・ロッキンガムの孫がジャックという名だったと思う」

ユアンが眉をひそめて言うと、コルガーが手を打ち合わせた。

「そういや、ジャックはパーシヴァルに若旦那って呼ばれてた」

ロンドンに書店を構えるユアンは情報通だ。特に、商人同士のネットワークには精通しているようだった。ユアンはひとつ頷いて続ける。

「やっぱりな。となると、アヤとパーシヴァルはロッキンガム家に雇われているんだろう」
「つまり、豪商のロッキンガム家がヒベルニアの気象兵器を狙ってるってこと？商人が気象を操って何か良いことがあるのかしら」
ヨイクが首をかしげる。彼女の疑問に答えたのはやはりユアンだった。
「ロッキンガム家は英国王室に植民地の一部の統治を任されているんだ。確かインドのどこかに領地を持っていて、もちろんそこでは農業が営まれている。ヒベルニアだけに太陽が照っているという話を聞いて目の色を変えた連中は、自分の国や自分の領地にだけ太陽を輝かせようと企んでいるんだろう。そうすれば自分たちの作物が、他の国や他の土地で高く売れるし、気象を操ることができれば外交の交渉にも戦争にも使うことができる。そう思ってるのさ」
気象兵器なんてないのに。ヒリールは内心でつぶやく。
「なるほどね。で、そのロッキンガム家の人たちはどうして悪魔だの何だの物騒なものを使えるわけ？それとも商家の用心棒ってのはみんなあんなもんなの？」
嫌悪感を露わにヨイクが訊ねると、それまでのんびりと食事しながら話を聞いていたギーヴが口を開いた。
「悪魔と契約を結ぶことは難しいことじゃないよ。ただ、彼らと出会うのはかなり難しい。普通に生活していたらまず遭遇しないだろうね。おそらく、ロッキンガム家はエディンバラ教会の有力者と通じていて、悪魔払い師が封じて横流しした悪魔を従えてるんじゃな

いかな」

「なるほどねえ。教会もかんでるわけか」

「大丈夫、大した悪魔じゃないから。後でみんなに聖水を渡すよ。――君も、そんなに落ち込むことないよ」

ギーヴは微笑み、意気消沈しているコルガーに優しく声をかける。人知を超える運動能力を自慢としているコルガーは、二度も悪魔に歯が立たなかったことを気にしているらしい。ヒリールはスプーンをおいて食事を終えた。皿の中身は半分以上も残っていたが、食欲がわかない。ヒリールの様子がおかしいことに気がついたのはコルガーだった。

「ヒリール、もう食べないの？なんだか顔色も悪くないか？」

コルガーに覗きこまれ、ヒリールは顔を背けた。馴れ馴れしい男の子は嫌いだ。まして、コルガーはマキシムとシスター・アンジェラの曾孫だ。ギーヴがコルガーを気に入っているように、マキシムもコルガーを好きになるだろう。そうしたら、ヒリールは立つ瀬がない。マキシムはヒリールを嫌っているのだ。

「あら、ヒリール、どうしたの？さっきから大人しいと思ったら。どっか具合でも悪い？」

ヨイクに問われ、ヒリールは我に返った。

「ん、ちょっと」

「そういうことは早く言わなきゃ駄目よ。ユアン、私たちの部屋の鍵！」

ヨイクがヒリールの腕をとって立ち上がる。ユアンは懐から三つの鍵を取り出し、ひとつをヨイクに手渡した。

「女性陣で一室、コルガーとおれで一室、ギーヴ猊下はお一人でどうぞ」

「ええっ?!」

叫んだのはギーヴだった。一同は彼を見つめ、ユアンは何とも言えずに首をかしげた。

「……は?」

「そんなのだめ!リプトン君、君は俺と寝るんだ、いいね?」

ユアンから鍵を奪いギーヴは部屋を出て行った。自然とコルガーに仲間の視線が集まる。

「え、ってことはオレ一人部屋?何で?いいの?」

わけがわからず瞬きをくり返すコルガーに、ユアンは黙って鍵を渡した。

こつん、と窓に小石のぶつかる音がした。パブが閉まり、街が寝静まった深夜のことだ。

グラスゴー大聖堂を見に行くべく身支度していたコルガーは不思議に思って窓を開けた。裏路地に面した暗い窓で、ささやかなバル

コニーがついている。

「やあ、ジュリエット」

ちらちらと降る粉雪の中に立っていたのは毛皮のコートをまとったジャック・ロッキンガムだった。カーテンを閉めていなかったから、コルガーの姿が見えたのだろう。

「て、てめえ敵だろ！悪者だろ！何でいるんだ！消えろ！絶滅しろ！もしくは沈め！でなきゃ潰す！」

コルガーはバルコニーから身を乗り出した。冷たい風とともに雪が吹きつけてきたが、さっきまで鷲獅子亭一階のパブでユアンと飲んでいたので身体はぽかぽかしている。

「しぃー！誤解を解きたかったんだよー、俺は君に危害を加える気はねえ」

人差し指を立ててジャックは申し訳なさそうに顔をしかめた。コルガーは聞く耳を持たない。

「うるせえ、てめえんとこのパーシヴァルだのアヤだのはヒベルニアに着いたらオレたちを始末する気なんだろ！」

「んなことさせるか！俺は君が大好きだ！」

「オレが好きなのは老人だ！」

「ギーヴ猊下も見た目は俺と同じくらいじゃねーか」

何にもわかっちゃいないな、とコルガーは得意げに鼻を鳴らした。

「てめえ、ギーヴ猊下がどんだけじじくせえか知らねえな！あの鈍

さ！あのとろくささ！」

コルガーが拳を握りしめて熱く語る。その時、隣の部屋の窓が開いた。

「こんな夜更けに大声で悪口言われてる俺ってば、いったいどうすればいいの？」

寝ぼけ眼のギーヴの登場にコルガーもジャックも一瞬言葉を失くしたが、ジャックは慌てて駆け出した。

「さ、さよならー！」

取り残されたコルガーとギーヴは顔を見合わせた。

「ご、ごめんなさい、起こしちゃいました？あ、あいつが勝手に訪ねて来たんですよ？」

弁解するコルガーにギーヴは目をこすりながら応じる。

「分かってるよ。君はジャック・ロッキンガムに気に入られたみたいだね。ところで、どうして出かける支度なんてしてるの？」

「えっと、グラスゴー大聖堂を見に……」

「はあ、建築おたくなんだから。俺も行く、ひとりじゃ危ないよ」

ギーヴは寝間着のボタンをはずし始める。

「オレは自分の身は自分で守れます」

「悪魔と喧嘩するのは俺の方が得意でしょう」

パーシヴァルの悪魔アザゼルに殺されかけ、アヤの悪魔ミスティックにも歯が立たなかったコルガーとしては二の句が告げない。

二人は鷲獅子亭を出て夜の街を並んで歩いた。しんしんと降る雪を見上げながらのんびりと歩を進めていると、すぐにグラスゴー大聖堂の前に辿り着いた。

「やばい、どうしよう、気絶しそうだ」

外灯の灯る真夜中の広場で、コルガーは首が折れそうになるほど大聖堂を見上げた。興奮して寒さを忘れているが、そわそわと落ち着きなく足踏みする。ギーヴは冷めた目でコルガーを見た。

「お願い、気絶はしないで」

グラスゴーの大聖堂は十二世紀から約二百年かけて建てられた重厚なゴシック建築である。バシリカ式の建物は圧倒的な迫力と歴史の重みを感じさせる。

城を中心に町ができたエディンバラとは異なり、グラスゴーは大聖堂を中心に交易で発展した根っからの商人の町だ。行政や宗教の中心都市であるエディンバラとは対照的である。グラスゴー商人の取引先は国内だけに留まらず、イングランドやアイルランドはもちろん、北欧やフランス、果てはアメリカ大陸にまで及ぶ。

「中に入りたいなー入れないかなー」

うろうろと徘徊しつつ、コルガーは考えをめぐらせる。当然だが、正面の扉は閉ざされ、辺りに人気はない。ギーヴは「ここで待ってるから好きなだけ見て来て」と言って広場のベンチに座り込んでし

まった。

「そうだ！」

コルガーは両手を打ち合わせた。

建築おたくは建物の裏手にまわり、息を潜めて大聖堂の側面を登り始めた。目指すは鐘塔の窓。そこには木戸もガラスもなかった。

「ステンドグラスが見たい、天井が見たい、祭壇が見たいし、床のタイルも見たい」

ぶつぶつとつぶやきながら、コルガーは軽々と壁を登る。

「側廊の柱も見たいし、ついでに絵画も見たいもん。よいしょっと」

あっという間に、コルガーは四階建てほどの高さの窓に到達した。窓を乗り越え、鐘塔内の螺旋階段に着地する。真っ暗で、うっかりすると脚を踏み外しそうだった。

「せっかくだから、塔の頂上から町を見てみようかな」

暗闇に目が慣れてから、コルガーは階段を上り始めた。一段飛ばしでひょいひょいと上っていくが、一段一段の高さはかなりある。加えて頂上までの距離も長い。常人なら五分近くかかってやっと上りきるような塔だ。

「着いたー！すげー！かっこいいー！」

一分とかからず頂上に到着したコルガーは大鐘を触り、四方に開けた窓のあちこちから何度も顔を出す。建築おたく、興奮の極みで

ある。

「さすがにステンドグラスが大きい分、すごいバットレスが付いてるなあ。これは五百年以上持つんじゃないかな？すごいなーすごいなー。ブルネレスキのルネッサンス建築が一番好きだけど、こういうゴシックも良いなー」

大聖堂を眺め終えると、コルガーはようやくグラスゴーの夜景に目を向けた。深夜だというのに、まだところどころに明かりが見える。そのぽつぽつとした橙色の光の群に、コルガーはため息を吐き出した。

「でっかい町。ここ異邦なんだよな」

石の窓枠に頬杖をつく。そのひんやりとした感触に、忘れていた寒さを思い出す。

「ばあちゃん、元気かな」

急に心細くなって、コルガーは故郷を思い浮かべた。緑いっぱいのウイスキー修道院、優しいシスター・アンジェラ、修道女たちや老人たち、行きつけのパブや仕事場の仲間たち……。

「元気だと思うよ、よいしょ」

足元で声がしたと思ったら、ギーヴが現れた。

「猊下！まさか壁を登って来たんですか？！」

「そんなに驚くことないでしょう。俺は君と同じだもの、君にできることは俺にもできるよ。それより、せっかくだからステンドグラ

スを見ようよ」

ギーヴはそう言ってさっさと階段を下り始めた。六十年間エディンバラの塔に幽閉されていた彼は、高い所には飽き飽きしているのかもしれない。コルガーは彼を追って階段を下り、真っ暗な大聖堂へ足を踏み入れた。

8．生きるための道具（前書き）

後半部分がややダークです。ご注意ください。

8．生きるための道具

「当たり前だけど、暗いね」

先に大聖堂内部を眺めていたギーヴが残念そうに笑った。せっかくのステンドグラスは当然ながら夜の闇に包まれている。ステンドグラスに描かれた聖人の顔さえ悲しそうに見えた。

「猊下、聖水なしでオレが悪魔に勝てる方法って何かないもんですか？」

ふと思い出して訊ねながら、コルガーは大聖堂には珍しい木造の天井を見上げて陶然とため息を漏らした。ギーヴは説教台の前に立ち、ステンドグラスを背に大聖堂内部をぐるりと見回す。

「俺や君の持つ不思議な力は、極光の女神が与えてくれている。もともとは、八十年前に俺とマキシムが彼女と出会ったことから始まるんだ。出会った時、彼女はこの世に生まれたばかりの赤ん坊で、まるですり込みみたいに、俺とマキシムによく懐いたんだ」

ギーヴは長い睫毛をふせて懐かしそうに語った。

「女神は俺やマキシムに力を貸すついでに、君に力を与えている。ヒリールが嵐の海から、たったひとりで生還したのも女神の加護のおかげじゃないかと俺は踏んでいるよ。何しろ、ヒベルニアからスコットランドまでかなりの距離があるからね」

音楽のようなギーヴの声が大聖堂に反響する。

「君が悪魔に敵わないのは、女神の力が悪魔に劣るからじゃない。君の心が女神の方を向いていないからだ。悪魔に勝ちたければ、極光の女神の存在を信じればいい」

コルガーは笑ってしまった。

「信じる？オレは極光の女神なんてついこの間まで知らなかったのに？」

「君は俺のことだってついこの間まで知らなかったでしょう？それでも、ここに俺がいることを疑ってなんかいないでしょう？遠く離れていても、アンジェラがこの世から消えてしまったなんて思わない。目に見えるものがすべてじゃない。女神はいる。それを信じればいい」

そう言ってギーヴは胸の前で手を組み合わせた。すると、彼の背後のステンドグラスが突然きらきらと輝き始めた。色とりどりの光が大聖堂の壁や床や天井や長椅子を這い、ギーヴの顔や金褐色の髪や濃紺の法衣の上を遊ぶ。

彼が両腕を広げると、掌の中にゆらゆらと緑色の陽炎がたなびいた。

「ほらね」

極彩色の光が大聖堂の内部を踊る。その光の中でギーヴは微笑んだ。コルガーは目の前で起きたことに戸惑いを隠せず、輝くステンドグラスを見回しながらギーヴに訊ねた。

「女神って、神様って、本当にいるんですか？」

それは長い間ずっと疑問に思っていて、誰にも聞けずに胸の中に収めて来た疑問だった。ギーヴは即答を避け、柔らかな表情で首を傾けた。

「君はどう思うの？」

「神様は――いない。もし本当にいるとしたら、世の中はこんなに目茶苦茶にならないはずだ。教会は三月地震を神の与えた試練だと言ってるけど、そんなのは嘘だ。神様がいないから、世界はこんなことになってるんだ」

言いながら、コルガーは自分の声と指先が震えているのを感じた。自分が畏れ多い大胆なことを口にしたということは自分でもよく分かっている。だが、コルガーの人生には悲しいことが多すぎた。若くして死んだ母、三月地震で死んだ父や兄妹。もし神様がいたら、彼らを救ってくれたに違いない。

「そうだね。少なくとも、エディンバラ教会の言うような唯一神や、クラシック教徒の信じる神々はこの世にいないんだろうね」

ギーヴは行儀悪く説教台に頬杖をつき、ステンドグラスを見上げてさらりと言った。

「え」

コルガーの目が点になる。ここはエディンバラ教会の大聖堂であり、ギーヴが立っているのは説教台であり、彼は聖職者である。他でもない彼がそこであっさりと無神論を唱えるとは思ってもみなかった。ぽかんとしているコルガーに、ギーヴはおかしそうに笑った。

「あはは、こーんな格好してるけど、俺は熱心な信徒ではないんだよ」

ギーヴは頬杖をはずして説教台から離れ、自分の法衣を両手でつまんでにこにこと微笑む。

「じゃ、じゃあ何でヒベルニアへ行かずに、ずっとエディンバラにいたんですか？あなたはエディンバラ教会にクラシックの教えを認めさせるために残ったんじゃないんですか？」

コルガーはてっきり、ギーヴが揺るぎない信心を持っていて、四人の女神の存在やクラシック特有の寛容な教えをエディンバラ教会に認めさせるためにエディンバラに残ったのだと思っていた。暢気でおっとりしているギーヴだが、本当は胸の内に固い信念と熱い情熱を抱いているのだと。

「俺はねえ、人が何を信じようと、何を信じまいと、どうだっていいと思うの」

かつん、かつん、とギーヴの靴が大聖堂の床を打つ。彼は長椅子の間をのんびりと歩きながら静かに言葉を続ける。

「問題は、人が、宗教の違う他人を信じられるかどうか、じゃないかと思う」

「人が、宗教の違う他人を信じられるかどうか？」

コルガーはギーヴの言葉を噛みしめるようにそのまま復唱した。ギーヴの言うことを少しでも理解したいと強く望んでいる自分に気が付いてコルガーは内心で驚いた。

「そう。俺はエディンバラ教会にクラシックの教えを認めさせたいわけじゃない。クラシック教徒がクラシックの教えを守って生きて行くことを認めてほしいだけなんだ」

「それは、つまり、クラシックのことは放っておいてくれ、ってことですか？」

コルガーの理解を得られたことに満足したのか、ギーヴはにっこりと微笑み頷いた。ふっと前触れもなくステンドグラスの輝きが消え、大聖堂は再び暗闇に包まれた。

「うん。それができれば人類の発展は果てしないと思うよ」

「人類の発展？」

「この世界には色々な神様がいて、色々な宗教があるでしょう。そして、ひとつの宗教の中にも様々な宗派がある。いちいち弾圧したり、戦争したり、喧嘩したりしていたら、たくさんの命が犠牲になる。宗教は人の命の灯を消すものであってはならないし、人類の発展を妨げてはならないと俺は思う。なぜなら宗教とは、人と人が団結して、たくましく生き延びるためにつくられたものだからだ」

ギーヴは力強く語りつつ闇の中を歩く。コルガーはぼんやりと見える彼の影を目で追いかけた。穏和なギーヴが強い口調でものを言うのは珍しいことだった。

「生きるための道具が人を死に至らしめるなんて本末転倒だ。だから俺は、人が、宗教の違う他人を信じられる世の中を作りたい。そのためにはエディンバラ教会やクラシックやほかの宗教について客観的かつ学術的に研究するのが近道だと思った。俺がエディンバラに残った理由はそれだよ」

ギーヴはコルガーの目の前で足を止めた。彼はいつになく固い表情でコルガーを見下ろした。どうしてか、コルガーの胸はどきどきと高鳴った。

この人は、なんて途方もないことを考える人なのだろう。

「……猊下がその考えに至ったのは、六十年前のクラシックの弾圧や大行進のせいですか？」

さっきユアンとしこたまビールを飲んだのに、口の中がからからに乾いて声が掠れる。もっと彼の言葉を聞きたい。彼の考えていることが知りたい。彼が抱えているものを見たい。それはきっと誰も見たことがない、けれども誰も彼もが救われる、温かい光に違いないのだ。

「うん。あんな悲しいことがもう二度と起こらないように、マキシムはヒベルニアへ身を隠すことを選んだけど、あんな悲しいことがもう二度と起こらないように、俺はエディンバラで研究をすることにした。エディンバラ教会の歴史、クラシックの歴史、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、世界中の神話、色々なことを学んで、信じる神の違う色々な人たちと意見を交わしたよ」

ギーヴが長椅子に腰を下したので、コルガーも彼の隣に座った。コルガーがギーヴの顔を盗み見ると、彼はじっと祭壇を睨んでいた。その横顔は普段の柔和な彼とは別人のように凛々しかった。

自分でもよく分からない、経験したことのない不思議な衝動に駆られ、それを抑えるためにコルガーは拳をぎゅっと握った。そうしなければ、手を伸ばしてギーヴの白い頬に触れてしまいそうだった。

「猊下はエディンバラ教会がクラシックを放っておいてくれる日が来ると思うんですか？」

コルガーが遠慮がちに訊ねると、ギーヴは振り返って破顔した。

「もちろん！いつかきっとね」

いつかきっと。途方もない夢を追いながら、それが実現されることを信じてやまない彼がコルガーには眩しくもあり、羨ましくもあった。

「ところで、この世に神も女神もいないってことは、マキシムと一緒にヒベルニアにいる極光の女神って何なんですか？」

ギーヴは「マキシムとギーヴが極光の女神に出会った時、女神は生まれたばかりだった」と言っていた。人ならざるものには違いなかろうが、まるで生き物のような言い方だ。

「俺たちに力を貸してくれている極光の女神は……」

ギーヴが言いかけた時、大聖堂の裏手の方角から人の声が聞こえた。二人の侵入者は口をつぐんで顔を見合わせ耳を澄ませた。聞こえてきたのは女の泣き声だった。

三月地震以来、教会の墓地で故人を想って泣く女性と言うのは珍

しいものではない。コルガーもウイスキー修道院で暮らしていた時は墓地の土を涙で濡らしていたものだ。

放っておいてやるのが親切だろうかとも思ったが、こんな時間に人気のない墓地に女性が一人でいるのはあまりよろしくない。二人は、彼女はどうやって大聖堂の敷地に入って来たのだろうと首をかしげながら再び鐘塔を登って窓から外に出ると、草をかき分けて建物の裏側の墓地に向かった。

「おっと、ごめん」

途中でぶつかりそうになりつつすれ違ったのは女ではなく中年の痩せた男だった。男はコルガーを突き飛ばす勢いで逃げるように大聖堂を後にする。その背中が随分小さくなってからコルガーはようやく気が付いた。同時に震える女の声がした。

「誰かいるの？」

草むらの中から涙に濡れた若い女の顔が見えた。引き裂かれた衣服で胸元を覆っていたが、細く白い肩がむき出しだった。長い黒髪が乱れ、気の強そうな黒い目が屈辱と怒りに燃えていた。

「あいつ捕まえて！捕まえて殺してよ！殺して……！」

悔しそうに泣きわめく女の声に、コルガーの心臓がどくんと大きく鳴り響く。心が命ずるまでもなく、コルガーは踵を返して逃げた男を追いかけていた。

一瞬、泣き崩れる女に駆け寄るギーヴが視界の端に見えた。殺意を抱いて痴れ者を追う自分と、痛めつけられた女を気遣う聖職者の

彼。

オレたちは何て対照的なんだろう。

大聖堂前の広場を走り抜け、鳴り響く靴音を頼りに細い路地を全力で駆ける。コルガーの俊足をもってすれば、事を終えたばかりの男を捕まえるのは簡単だ。間もなく彼女は浮浪者の集まる路地裏で男の後ろ姿を見つけた。薄汚い地面に寝転ぶ老人たちを避けたり飛び越えたりしながら彼女はみるみる男に近づいていく。

男は荒い息を吐きながらちらりとコルガーを顧みた。汚れた顔も伸ばし放題の乱れた髪も脂ぎって汚れていたが、目の奥だけがぎらりと光っている。コルガーはぞっとした。人殺しの目だ。あの時、もしコルガーたちが墓地に足を踏み入れなければ、あの若い女はあの場で殺されていたかもしれない。

二人の距離が縮まり、コルガーが男の上着の襟に手を伸ばした時、追いつめられた男は踵を返してコルガーにつかみかかった。突然のことにコルガーは男の攻撃を避けられず、窮鼠の体当たりをまともに食らって背中と後頭部を建物の壁に打ち付けた。

「……おまえ、女だろ」

出し抜けに真実を言い当てられ、コルガーは一瞬抵抗するのを忘れた。男とは大聖堂の墓地ですれ違っただけだ、どうしてばれたのだろう。男の顔が近づき、生臭い息が彼女の顔にかかる。いつの間に抜いたのか男の手には短剣が握られていて、その刃の先はコルガーの首に当てられていた。男の目が放つ暗い光はコルガーの視線にねっとりと絡みついてくるようだった。

「このご時世だ、男装してる女は結構いるぜ。おまえはうまく化けてる方だけどな、においで分かる」

短剣を突き付けられた首筋をざらりとした舌先で舐められる。足がすくんだ。

男の言う通り今はこんなご時世だから彼女も危ない目には何度となく遭っているし、その度に襲いかかって来た男たちを虫の息になるまで叩きのめしてはいるが、欲望にぎらつく男の視線にさらされる恐怖だけはいつまで経っても慣れることができない。

「おまえからは牝の匂いがするぜ」

コルガーは目を閉じた。落ち着いて息を整え、足の裏から湧き上がる恐怖を何とか打ち負かそうとする。――瞼の裏に、あの日の河原の赤い空が見えた。

「どうした、図星を指されて声も出せねえのか?」

自分を捕まえようと勇ましく追いかけて来た娘が大人しくされるがままになっている様子を不審に思ったのだろう、男が訝しげにコルガーの顔を覗きこんだ。その時、コルガーの膝が男の股間を的確に蹴り上げた。

「おまえは生きてる価値がない」

コルガーは静かに言い放ち、股間を押さえて地面に転がり苦痛に顔を歪ませている男を見下ろした。男は恨めしそうにコルガーを睨み、取り落とした短剣へ手を伸ばした。その手を靴の裏で素早く踏みつけ、コルガーは悠々と短剣を拾い上げた。暗闇の中でも、その

短剣がいかに磨き上げられているかが分かる。ろくに身繕いもしない男が短剣の手入れだけはせっせとしていたらしい。コルガーは鼻で笑った。

「おまえみたいな奴を見るのは胸糞が悪いけど、同時に安心するよ」

手の中で短剣を弄びながら、コルガーは自分の心がひどく穏やかになるのを感じた。女を凌辱した虫けらのような男の命を、自分が握っている。何とも言い表しがたい素敵な気分だ。冷静なもう一人の自分はそんな自分を非難したが、コルガーはそれを無視して淡々と続けた。

「少なくともオレは、おまえよりマシだ」

「お、お願いだ、助けてくれ、あの女をやったのは俺じゃない、濡れ衣だ！」

男は地面に這いつくばった格好で掌を返したように命乞いを始めた。だが、情けなく媚びるような顔でコルガーを見上げながら虎視眈々と逃げるチャンスと反撃の機会を窺っている。彼はコルガーのことを少しばかり護身術に長けただけの無力で甘い女だと思っているのだろう。コルガーが男に情けをかけたり、少しでも隙を見せたりすれば形勢逆転できる気でいるのだ。

「おまえ馬鹿だな。オレの方が強いってこと、まだ分かんないのか？」

コルガーは男の手を踏みつける足に力をこめた。人間離れした力が加わり、男の手の骨が粉々に砕ける音がする。

「ぎゃあああ！！ひ、ひいいい！！」

男は踏まれている方の手首を抑え、断末魔のような叫びを上げながら石畳の上をのたうちまわった。

「やめてくれええ、頼む、やめてくれええ……！」

いつものパターンだ。これまで彼女に襲いかかった男たちは彼女の人知を超えた暴力を目の当たりにすると一瞬パニックに陥り、その後に己の敗北を悟るのだ。コルガーは嘆息をついて男の青ざめた顔と下半身を交互に見た。男は化け物を見るような目でコルガーを見上げている。

「殺しはしないし、オレはいつも本人の希望を聞くことにしてる。おまえは、切りとられるのと潰されるの、どっちがいい？」

男は恐怖を顔に張り付けて絶句した。

「どっちでもいいなら、オレの気分で決める」

短剣を逆手に持ち直し、コルガーは唇の端を上げて笑って見せる。すると痛みのせいか恐怖のせいか、男は白目をむいて意識を失ってしまった。ごろりと力なく転がった男の手から足をどけ、コルガーは短剣の刃を丸めて闇の向こうに投げ捨てた。

「神様は――いない。もし本当にいるとしたら、世の中はこんなに腐ってないはずだ。だから野放しの無法者には誰かが手を下さなきゃならないんだとオレは思う」

それは間違いかな、猊下。コルガーは重い気持ちで暗い空を仰ぎ、大きな白いため息を吐き出した。

9．アイラブユー

泣き続ける女に法衣を着せてやり、肩を抱いて優しく宥めているうちに、彼女はギーヴの腕の中で大人しくなった。墓地の草むらに座り込み、彼女の痩せた背中をさすり続けながらギーヴはコルガーが捕まえた男をどうするか少しだけ不安に思っていた。

痴れ者をここまで引きずって来たとしても可哀想な女の屈辱が晴れるわけでもあるまい。警察に突き出したところで警察はまともに機能していない。かといってあの男を殺してしまうわけにも、無罪放免にするわけにもいかない。

「遅くなってすみません」

疲れた顔をしたコルガーがひとりで戻ってきたのは十数分後だった。女は落胆したような目で少年を見上げ、小さくしゃくりあげた。ひとりで戻ってきたコルガーを見て彼が犯人を取り逃がしたと思ったようだが、彼に限ってそんなことはないだろう。

「犯人を捕まえたんでしょう？」

ギーヴが問うと、コルガーは暗い表情で頷いた。

「金玉潰すぞコラって脅したら気絶しやがった」

怖いことをさらりと言う。

「……で、どうしたの？」

「男に二言はないです」

コルガーは偉そうに胸の前で腕を組み合わせ、ふんぞり返って見せた。本当に男の睾丸を潰して来たのだろう。ギーヴは腕の中で女が肩の力を抜いたのを感じた。コルガーが男を殺さなかったことに安堵したのか、彼が復讐してくれたことで少しは恨みが晴れたのか、ギーヴには分からない。

「君って可愛い顔して恐ろしい子だね」

この子を怒らせるのはやめようと心に誓い、ギーヴは女の肩を抱いたまま彼女を立ち上がらせる。いつまでもここでこうしているわけにもいかない。

「家まで送るよ。この時間じゃ辻馬車もないだろうから徒歩だけど」

女は涙をぬぐって頷き、自宅の場所を簡単に説明する。グラスゴーの地理がさっぱり分からないギーヴの隣でコルガーがあの辺りかと呟き、二人を誘導して歩き出す。女は大聖堂の柵が壊れている場所を教えてくれた。彼女は毎夜そこから墓参していたらしい。募石の下で眠っているのは彼女の恋人だと言う。

「君、今日初めて来た街なのによく分かるねえ」

大聖堂前の広場を通り過ぎ、集合住宅の広がる地域を歩きながらギーヴは数歩先を歩くコルガーの背中に言った。コルガーはギーヴを顧みることなくどこか神経質な声で応じる。

「普通ですよ。町の地図を一度見たし、こっち方面は昼間にちょっと来たし」

女を気遣いながらゆっくりと歩く少年は自分の肩をきつく抱いている。どうもコルガーの様子がおかしいと思いつつ、女を自宅まで送り届けるまでギーヴは口をつぐんでいることにした。女は三月地震で家族を失い、今は集合住宅の一角で同じように家族を亡くした少女と暮らしているという。何をして稼いでいるかは訊ねなかった。

女と別れて二人きりになるとコルガーは女の家の前から無言で歩み去った。ギーヴは早足で帰路に着くコルガーを小走りに追いかけ、隣へ並んで彼の顔を覗きこんだ。コルガーはギーヴが見たこともないほど顔をしかめて唇を噛んでいた。まるで泣くのを我慢しているようだった。ギーヴは思わず彼の茶色の頭髪に手を伸ばした。

「君、大丈夫？」

ギーヴがやわらかな髪を撫でた途端、コルガーはその手を振り払った。コルガーは初めて会ったときと同じ鋭利な刃物のような目つきでギーヴを睨んだ。

「触らないでください」

コルガーはギーヴから距離をとり、再び自分の肩をきつく抱きしめた。手負いの小さな獣が必死で身を守ろうとしているような姿にギーヴの胸は痛む。

「ねえ、どうしたの？」

「猊下には分かりません」

二人の間に厚い壁を築くようにコルガーは低い声でつんけんと言い放つ。

「うん。君がどうしてそんなに怒ってるのかも、何で俺が君に冷たくされてるのかも俺には分からない」

ギーヴはなるべく非難がましくならないように、だが率直に言った。やがてコルガーは自分の振る舞いを恥じるように頬を染めて俯いた。

「すみません、怒ってるわけじゃないんです。ああいう奴が嫌いなんです」

月明かりも星明かりもない闇に包まれた街に、二人の足音が響く。冷たい風が吹いて木の枝や家屋の戸や窓を揺らし、路上の落ち葉を寂しく舞い上げる。まるで、地上から幸福という幸福が取り上げられてしまったような夜だ。出口の見えないトンネルを歩いているような気分だった。

「もし俺があいつを殺そうとしたら、猊下は止めますか」

しばらく続いていた沈黙を破ったのはコルガーだった。

なぜそんな質問をするの？ギーヴは頭を殴られたような気持ちで疑念を飲み込み、迷うことなく即答した。

「止めるよ。殺人鬼や強姦魔が相手でも、君に人殺しはさせない。させたくない」

「どうして？どうしてオレに人殺しをさせたくないんですか？」

コルガーは顔をうんと上げてギーヴの顔を食い入るように見た。その目が期待している答えが何なのか、ギーヴには分からない。ギーヴは早鐘を打つ胸を抑えて逡巡する。

「それは……」

ひょっとして、彼はあの男を殺してしまったのではないか。疑惑が首をもたげ、ギーヴは言葉に詰まった。気が付くと鷲獅子亭の前だった。コルガーは鍵を取り出して鍵穴に差し込み、がちゃりと音を立てて扉を開ける。

「それは、きっと君が、苦しむと思うから。君みたいな優しい子はきっと一生、罪の意識に苛まれ続けると思うから」

受付もパブのカウンターも無人だった。コルガーは玄関の鍵を閉めると、黙って階段を上り、自分の部屋の扉に鍵を差す。

「待ってよ、コルガー、待って。君、まさかあいつを……殺した？」

ドアノブをひねり、コルガーは滑り込むように自分の部屋に入る。ギーヴが追いすがると、コルガーの茶色の瞳が扉の隙間からギーヴを睨み、形のいい唇が拒絶を示すようによそよそしく皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「いいえ、殺してません。――あいつは」

鼻先で扉が閉まりかけ、ギーヴはいつになく俊敏に右足を扉の隙間にねじ込んだ。勢いよく挟まれた足首は飛び上がるほど痛かったが、それよりも背筋が冷たくなる。あいつは殺していないということは――。

「じゃあ、君は誰を殺したの……？」

薄く開いた扉の隙間から訊ねると、コルガーは傷ついたような目

でギーヴを睨んだ。知らない方がいいことが世の中には山ほどある。俺は知らない方がいいことを無理やり聞き出そうとしているのかもしれない。挙句、この子との関係を取り返しがつかないほど悪くしてしまうかもしれない。ギーヴは早くも湧き上がってきた後悔の念と戦いながらコルガーの返事を待った。

「……なぜそんなことを聞くんですか？自分がしたことの責任くらい、オレは自分で負えます。オレが何をしたかなんてことを猊下が気にする必要はないし、猊下に迷惑はかけません」

コルガーはギーヴとの間に一線を引くように冷たく言った。彼の心から締め出されたように思えて、ギーヴは胸が苦しくなる。

「でも俺は君を――」

支えたい、守りたい、救いたい。いろんな言葉が思い浮かんだが、どれも適当ではない気がして言葉にはならない。

「君を、愛してるんだ！！」

ようやく腑に落ちる言葉が見つかったと思った時、ギーヴは気づいた。コルガーが顔をひきつらせている。ギーヴは自分の頭に血が上るのを感じた。

「はい？」

「い、いや、変な意味じゃなくて！俺は君のことを遠い親戚の可愛い子だと思ってて！俺が守ってあげなくちゃとか、俺が面倒みてあげなくちゃとか、可愛がりたいとか、甘やかしたいとか、そういう風に思ってて……！」

ギーヴは慌てて弁解を試みながら自分の胸の内に存在していたもやもやとした気持ちの正体が半分だけつかめたような気がしていた。だが、残りの半分の気持ちについて考え始めた途端、ギーヴはぎくりとした。

「あの、あのさ、ほら、顔を知ってる血縁者って、君とマキシムとヒリールくらいしか残ってないからさ。中でも君のことは目に入れてもきっと痛くないよ。俺には父親代わりなんて大役は務まらないと思うけど、親戚のおじさん程度のことはしてあげられると思うんだ。だから君は俺のことをもっと頼ってくれていいんだよ」

いつになく早口でまくしたてるギーヴの言葉は彼の心底からの本心であり、けれども嘘でもあった。

ギーヴはコルガーの手を取った。小さな手は細く温かく、ギーヴは思わずその手を両手で強く握りしめた。

「お願い頼って。時々でもいいから、俺に甘やかされてやってよ」

ギーヴが懇願するとコルガーは諦めたように肩をすくめて微笑んだ。扉を閉めようとしていた手がドアノブを離れて茶色の短い髪をかく。

「分かりましたよ。……ありがとう」

ギーヴは父親が我が子にするようにコルガーの頭をくしゃくしゃと撫で、顔を近づけて彼の額にキスをした。コルガーは照れたように視線をあちこちへ泳がせたが嫌がる素振りは見せなかった。

「ところで君、あいつに何もされなかったでしょうね？」

コルガーは鼻で笑って胸を張った。

「はっ女の子じゃあるまいし、されてませんよ」

ギーヴがそれを口に出してしまったのは今世紀最大の失敗だったかも知れない。

「でも君、女の子でしょう」

10．あなたのような場所

「でも君、女の子でしょう」

ごく自然に言ってから、ギーヴは慌てて自分で自分の口をふさいだ。

「あ、しまった、言っちゃった」

コルガーの心臓はどくどくと大きな音をたてて鳴り響いた。どうしてバレたのか、いつからバレていたのか、ともすれば真っ白になりそうな頭の中をギーヴと過ごした数日間の記憶が駆け巡る。女であることを匂わせた心当たりはないし、コルガーが女であることを彼が気付いている様子もなかった、たぶん。

「も、もしかして、匂いで分かった?!」

コルガーは痴れ者の言葉をはっと思い出して訊ねたが、ギーヴは困ったような顔で首を傾け彼女の襟元の匂いを嗅いだ。

「は?匂い?いい匂いはするけど、匂いで性別は分からないんじゃ?」

「じゃ、じゃあなんで分かったんですか?」

一瞬、コルガーの頭にアンジェラの顔が浮かんだ。だが、コルガーは自分の性別のことをギーヴに黙っておくつもりだと彼女に告げていた。コルガーの意思に反してアンジェラがギーヴに真実を教えるとは思えない。

「ひ、秘密。でも最初からおかしいなあとは思ってたよ。いくらアンジェラの身内でも、女子修道院で健康な男子が暮らせるはずないもの」

それもそうだ。だからコルガーは仕事仲間に住所を訊ねられてもウイスキー修道院で暮らしているとは決して言わなかったし、しつこく訊かれても曖昧にかわしてきた。

「……このご時世ですから、男の恰好している方が安全だし得なんですよ」

コルガーは気持ちが深い悲しみに沈みこむのを感じながら言った。

「うん。でも男装している女性の戸籍はあくまで女性だ。君の首札は男性のものでしょう」

コルガーは首から下げている首札を服の中から取り出した。木の札には「コルガー・バルトロメ、一七四七年生まれ、男」と彫られている。

「これは死んだ兄を騙って作ってもらった首札です。本当のコルガー・バルトロメは兄なんです」

彼女は諦めて本当のことを告げた。ギーヴは真剣な面持ちで唇を引き結び、じっとコルガーを見下ろしていた。コルガーは観念して語ることにした。

「オレの本当の名前はエド・バルトロメ、歳は十六」

彼女が兄のふりをして生きることになったのは些細なことがきっかけだった。それは三月地震の発生から数日後のこと。コルガーの教区の司祭が死去し、新しく就任した司祭は弔いや遺体の埋葬に追われていた。ろくな睡眠もとれずに昼も夜も働いていた司祭は死亡届を出しにやって来た男装姿の彼女を彼女の兄と間違えたのだ。

『コルガー・バルトロメだね、届を出しに来たのかな?』

彼女は訂正しようとして口を開きかけたが司祭は訳知り顔でそれを遮った。若くて頭が切れそうな司祭だったが、目の下に隈ができていた。

『何も言わなくていい。妹さんたちの冥福を共に祈ろう。君が悲しみを乗り越えた時、神は君に祝福と賛辞を下さるだろう』

司祭が一方的に話し続ける間に彼女は子供っぽく夢想した。もしこのまま兄として、十八歳の男として生きることになったらどうなるだろう。一人前の男のように己の身で稼ぎ、その金で毎晩パブに通い、ギネスビールを飲みながら楽器を鳴らして歌う。一人で遠くへ旅に出て見たこともない建物に出会ったり、街を大股で闊歩したり、走ったり跳んだり、馬に跨ったりする。それはとても楽しそうだった。

女に生まれてこなければよかったと思ったことはなかったが、女に生まれて良かったと思ったこともない。男として自由奔放に逞しく生きて行くことはとても魅力的に思えた。だが、兄になりすまし、男として生きて行くなどあまりに馬鹿馬鹿しい。とても現実的ではない。

『司祭様、私は長女のエド・バルトロメです』

彼女は言った。言ったつもりだった。

『司祭様、神は大切な妹たちを守れなかったボクをお許し下さるでしょうか』

口を突いて出た嘘に彼女は内心で愕然としたが、彼女の声は愛する妹たちを失った悲哀と果たせなかった責任への後悔に満ちていた。

『コルガー、自分を責めてはいけないよ』

司祭の慰めの言葉が我がことのように彼女の胸に沁み込む。彼女は「妹たち」の死を悼み、心を決めた。兄になりすまし、男として生きる。それはとても現実的ではないが、現実的ではないと言うならそもそも三月九日以降のこの世の全てが夢の中の出来事のようだ。それならいっそいいじゃないか。馬鹿馬鹿しくて滑稽な遊びに興じてみるのもいいじゃないか。

詐称がバレれば厳しい罰を受けるに違いないが、それもいいだろう。妹を守れなかった不甲斐ない己を土の下に埋め、狂人のような真似をして生きてやる。何もかも亡くしてしまった今となっては、もう、そんなことくらいしかやることがないのだ。

兄の死亡届をそっと服の下に隠し、彼女は妹の届だけを提出した。エド・バルトロメの届を忘れてしまったので後日持参すると言い添えて。

「だから、オレの首札は兄のものなんです」

コルガーの説明をギーヴは悲しげな顔で聞いていた。

「君は、辛い思いをしてきたんだね」

「でも、そんなのみんな同じでしょう。悲しい思いをしたのも、辛い思いをしたのも、オレだけじゃない。それに、仕事を探すにも男の方が楽だし、建築家を目指すなら女じゃ駄目だし、男の方が安全に街を歩けるし。ま、色々と都合が良いってことで」

コルガーは首札を服の中にしまい、皮肉っぽく笑った。

「オレ、胸あんまりないし」

「そんなことないよ」

「は？」

「いつの日か、もし君が女性に戻りたいと思ったら力を貸すよ。君の教区の司教に頼んで君の戸籍を復活させる。それくらいの力は俺にもあるから」

コルガーはきょとんとした。ギーヴは真剣な目をしていた。

「当分の間は男の振りをしていられるかもしれないけど、十年後には確実に無理だよ。これから君はもっと――綺麗になるよ」

歯の浮くようなギーヴの言葉に、コルガーは頬が火照るのを感じた。心臓がどきどきと音を立てて鳴りまくっている。

「オ、オ、オ、オレ、建築家になるまで男の振りするし！」

「じゃあ頑張って早くなってよ」

ギーヴに優しく頭を撫でられ、コルガーは思わず告白してしまった。

「……オレ、いつか教会を造りたいんです。どんなに小さくてもいいから、みんなが心から祈れて、みんなの心が救われる教会を」

ギーヴが聖職者だからだろうか。それとも、他に理由があるんだろうか。自分の心の中に秘めていたことが口からするりするりと零れていく。

「そこは荘厳だけど親しみやすくて、朝でも昼でも夕方でも、いつでも光がいっぱいに注いでいて、みんなが安らいだ気持ちになれる、だけどとっても神聖な建物で……」

コルガーが打ち明ける夢をギーヴは穏やかな緑色の瞳で受け止め、柔らかく微笑んだ。そしてコルガーは気づいた。

何より、そんな教会を求めているのは自分自身だと。

そして、ギーヴはコルガーの理想の教会そのものだと。

「そうだ……オレはあなたみたいな教会を造りたい」

ぽつりとコルガーがつぶやくと、ギーヴは意外そうに目を開き、おかしそうに笑った。

「俺みたいな教会？」

コルガーは照れ隠しに俯いて、くだらない冗談を言った。

「オレ、あなたの教会、造りますよ。何十年後かにあなたが死んだ

ら、聖ギーヴ教会を」

ギーヴは声を立てて笑い、コルガーの寝室から出るために後ずさりした。

「それはまた、楽しみだなあ」

深夜、ヨイクは目を覚ましてベッドの上に身を起こした。隣のベッドでヒリールが泣いていた。

「ヒリール？」

暖炉の火を消したのはもう何時間も前のことだ。ヨイクは冷え切った暗闇の中で声をかけた。その途端、泣き声がぴたりと止まった。

「ごめんなさい、ヨイク。わたし、また嫌な夢を……」

「いいのよ」

言いながら、ヨイクは床に転がしていたブーツを履き、自分のベッドから下りてヒリールのベッドに近づいた。ヒリールは頭まですっぽりと毛布をかぶって震えていた。

「この前のお話の続きをしましょうか、途中で眠っちゃったでしょ」

毛布越しにヒリールの小さな背をさすってやりながら、ヨイクはベッドに腰を下ろす。ヒリールはもそもそと毛布から顔を出した。

闇の中でも、涙で頬が濡れているのが分かった。

「……霧山の王のお話？」

ヒリールの声がわずかに弾んだのをヨイクは聞き逃さなかった。

「ええ。どこまで話したかしらね」

「娘が家に帰ることになって、女がブローチをくれたところ。『またここへ来たくなったら、このブローチに息を吹きかけなさい。そのかわり、ここで見たこと聞いたことについて誰にもしゃべってはいけないよ』って」

ヒリールが前回の話をきちんと聞いていてくれたことが嬉しくて、ヨイクは気分良く話し始めた。

「一つ目の老人と女と老人の娘に別れを告げ、娘は自分の村に帰ってゆきました。すると、たった数日村を離れていただけなのに、村の様子がすっかり変わっていて、すれ違う村人は見知らぬ人を見る目で娘を見ました。自分の家に入ると両親までもが娘にこう言いました。

『人の家に黙って入ってくるなんて、あんたは一体誰なんだい？』

娘も訊ねます。

『お母さん、お父さん、どうしてそんなに年を取っているの？』

そこで両者は気がつき、母親が叫びました。

『なんということだ、あんたは七年前に森でいなくなったあの子だ

ね！』

そうです、娘が一つ目の老人たちと数日を過ごしている間に、村では七年の歳月が流れていたのです。そして、どういうわけか娘の身体もいつの間にか七年分成長していました」

寒さを感じてヨイクはヒリールの毛布の中にもぐりこんだ。ヒリールは彼女のために場所を空け、二人はまるで仲の良い姉妹のように寄り添って顔を見合わせた。

「娘は自分の身に何が起きたのか確かめたくて、その晩、家族が寝静まってからブローチに息を吹きかました。娘は気がつくと、あの山頂の焚火のそばに立っていました。

『おまえが何を知りたいか、わたしは分かっているぞ』

焚火にあたっていた一つ目の老人は村娘を振り返ってそう言うと、杖で地面を叩きました。地面から女と老人の娘が現れ、村娘を歓迎しました。村娘は彼らに訊ねました。

『教えてください。あなた方は何者ですか?』

女は母親のように優しく微笑み、村娘の頭を撫でました。

『いずれ分かる時が来るでしょう』と」

ヨイクはヒリールの顔を見て彼女がまだ起きていることを確認した。

「何年か経ち、娘は村の若者と結婚しました。娘はお嫁に行ってか

らも女に貰ったブローチを大切にしていて、度々、真夜中にあの山頂へ出かけてゆきました。夫がそれに気がついたのは間もなくのことです。娘が真夜中に出かける姿を見て、夫は彼女の浮気を疑いました。娘は裁判にかけられ、魔女として火あぶりの刑を言い渡されます。処刑の日、娘は手足を縛られ、高い塔の上から、大きな大きな焚火の中に投げ入れられました」

「そんな！」

ヒリールが悲しげに声を上げた。ヨイクはにっこりと笑って続けた。

「しかし、娘が炎の中に落ちるすんでのところで濃い霧が風に乗って現れ、娘をさらっていきました。白い霧の中で目を凝らすと、娘を助けてくれたのは一つ目の老人でした。

『わたしの大事な養い子にした仕打ち、未来永劫悔やむがいい』

一つ目の老人は村人たちにそう言って、その村の作物をすべて枯らし、二度と草木の生えない土地にしてしまいました。老人の正体は霧山の王だったのです。そしてあの母親のような女は島原の母でした。娘は霧山の王とともにあの山頂に戻り、島原の母や王の娘たちと共に今でもまだ仲良く楽しく暮らしています。――おしまい」

語り終え、ヨイクはヒリールの瞳を覗きこんだ。ヒリールは微笑んで小さく拍手した。

「この民話はね、不器用な父親の愛のお話だと思うの」

ヨイクはヒリールの茶色の長い髪に手を伸ばし、そっと撫でながら、なぜ自分がこの民話を話して聞かせたのかを語り始めた。

「霧山の王は娘の愛し方が分からない人だった。何しろ出会いがしらにナイフで目玉をくりぬくぞ、だもの、娘も霧山の王を恐れてしまって島原の母と王の娘としか遊ばなかった。でもね、霧山の王は娘のことを大事に大事に思っていたの。自分の子供のように思って、ずっとずっと愛していたのよ」

勘のいいヒリールは眉をひそめてヨイクから顔を背けた。ヨイクは悲しい気持ちになって少女の肩を抱いた。

「ねえ、ヒリール。ヒベルニア王マキシムは霧山の王なんじゃないかしら?」

ヒリールは寝返りを打ってヨイクに背を向け、震える声で言った。

「そうだったら、いいね」

その頃、商人の町グラスゴーに堂々とそびえ立つロッキンガム東方貿易会社の商館では、外出から戻ったジャック・ロッキンガムが、彼を待ち構えていたアヤ・ソールズベリにつかまっていた。

「ジャック、どこへ行ってたのよ!」

鬼の形相のアヤに詰め寄られ、ジャックはごまかすようにへらへらと笑い、思わず後ずさりした。

「ちょ、ちょっくら野暮用」
「何が野暮用よ、鷲獅子亭を見張ってたトムとジェリーから聞いたわよ、あなたがコルガー・バルトロメと密会してたって！年端もいかない少年に現をぬかしている暇なんてないでしょう！」
控えていた使用人に二人分のコーヒーを頼み、ジャックは目を吊り上げて怒るアヤを宥めにかかった。
「まあまあ、いいじゃねえか、万歳、自由恋愛。それにあの子は女の子だ」
「どっちでもいいわ」
嘆息をつき、アヤは応接室の革張りのソファにすとんと座る。どこからか黒猫がやってきて、その膝の上にひょいと飛び乗った。
「とにかく、彼らが合流したからには近いうちにヒベルニアへ向けて出発するはずよ。私たちも準備を整えて、いつでも出られるようにしておきましょう」
ジャックもアヤの向かいに腰を下す。
「分かってる。備えあれば嬉しいなってやつだろ」
憂いなし、とアヤは歯ぎしりしながら訂正した。
「トムとジェリーは鷲獅子亭を見張ってるんだろ？パーシヴァルは？」
「彼はロッキンガム家の船に荷物を積んでいるわ。まったく、遊んでるのはあなただけよ、ジャック」

アヤは膝の上の黒猫の背を撫でながら小言を口にする。

「そういうアヤは？」

「私は留守番と、訓練よ」

アヤがにっと美しく微笑んだ途端、ごろごろと喉を鳴らして撫でられていた黒猫が全身の毛を逆立てて彼女の膝から飛び降り、部屋の隅で威嚇音を発した。アヤの足元から黒い霧がぞわりぞわりと現れる。

「……その悪魔、契約取り消しとかってできなのか」

ジャックは顔をしかめた。不気味に思うより、とにかく不快だった。大切な幼馴染が取り返しのつかないことに手を染めてしまった、そんな気分だ。だが、アヤは鼻で笑った。

「できたとしても、する気はないわ。だって私はミスティックのおかげで強くなれたんだもの。私の望みを邪魔するものは誰も彼もミスティックの力で排除できるのよ。そうよ、昔、私をいじめた義母や父に仕返しすることだってできるかもしれない！」

興奮して立ち上がり、笑いながら語るアヤは常軌を逸しているように見えて、ジャックは彼女に恐怖を覚えた。悪魔との契約を境に、アヤは変わってしまった。苦々しくそう思った時、悪魔が低く笑う声がジャックの耳に聞こえた。

――くっくっくっくっくっく。

11．あなたを攻撃したものは、私にただではすまされない

コルガーと飲んだ酒がまだ残っている。ユアンは軽い頭痛を感じながらベッドを出た。カーテンの隙間から淡い朝の光が漏れている。ギーヴが口を開けて眠っていたので、彼を起こさないように身支度を済ませて部屋を出た。

「おはよう。何よ、その顔。二日酔い？」

一階のパブの四人掛けの席でヨイクが朝食を食べていた。彼女の皿にはトースト、目玉焼き、ベーコン、二種類のソーセージ、ポテト、煮豆などが乗っている。朝から食欲旺盛だ。

「コルガーに釣られて飲み過ぎた。あいつ、とんでもないウワバミだぜ」

ユアンは紅茶だけでいいと宿の主に告げ、ヨイクの向かいに腰を下した。

「ヒリールは？」

「まだ寝てる。あの子、寝つきが悪いみたいね。昨日は結局霧山の王を最後まで話しちゃったわ。色々悩んでるみたいだから、あんたも相談に乗ってあげてよね」

「おれが？」

痛む頭を押さえてユアンが情けない声を出した時、ティーセットが運ばれてきた。ユアンはカップに紅茶をそそぎ、窓を開けて新聞売りの少年から新聞を買った。一面に、「英国議会にアメリカ反発」

「代表なくして課税なし」という見出しが躍っている。

「英国の財政難も深刻だ。新聞や証書はおろか、トランプからも印紙税を取ろうっていうんだから」

新聞に目を落としながら紅茶を一口すすり、ユアンは顔を上げた。生姜のしぼり汁が入っている。生姜は二日酔いや船酔いに効くのだ。宿の主はユアンと目が合うと、カウンターの奥でにやりと笑った。

「グラスゴーの新聞も英国議会の悪口を書くのが好きなのねえ。エディンバラの新聞より痛烈な記事だわ」

ヨイクはトーストを飲み込み、感心したように言う。

「アメリカとイギリスが戦争を始めたら、当然フランスもそれに乗っかるだろ。そうしたら大金が動く。それを虎視坦々と狙っている商人がいるってわけさ。それに、こう不景気で街に失業者が溢れていると、いっそ戦争でもやった方がいい。彼らは兵隊として雇われれば食うに困らないし、徴兵があると都市から犯罪が減るというデータもある。英国議会にはせいぜい悪者になってもらわないと」

ユアンがしゃべっている間にヨイクの皿は半分空になっている。民話学者は顔をしかめてユアンを睨んだ。

「ふうん。あんたって嫌なこと考えてるのねえ」

「おれだけじゃないさ」

「フランス王室の財政もそろそろ危ないって言うじゃない。太陽王が華麗に豪快に徹底的に財産を遣い切っちゃったって噂。いくら犬猿の仲のイギリスが相手でも、参戦どころかアメリカへ軍資金援助だってできないかもしれないわよ」

「かもな。だが、未来のルイ十六世は地味で民衆好きの心優しい少年だっていうじゃないか。今後は浪費に走ることもないだろう」

言いながらユアンは階段を下りてくるギーヴの姿に目をやった。金褐色の長い髪を首の後ろで適当にまとめながら欠伸をしている。

「その未来のルイ十六世の花嫁候補としてオーストリア皇女の名が挙がってるそうだよ。――おはよう。君たちはいつも朝からこんな話をしてるの？」

ヨイクの隣に腰を下し、ギーヴは紅茶とトーストを注文した。

「おはよう、猊下。今日はたまたまよ」

「おはようございます。オーストリア皇女というとマリア・テレジアの娘ですか。初耳だ」

眠そうに首を回しているギーヴに、ヨイクとユアンは身を乗り出した。エディンバラ名誉司教とは案外、名ばかりの地位ではないらしい。

「ああ、エディンバラとパリは昔からつながりがあるし、俺はフランス生まれだからパリの要人とも親しいんだ。フランスとオーストリアは同盟を強固なものにするために政略結婚を狙っているそうだよ。まあイギリスやプロイセンに対抗するにはそれしかないよね。特にフランスは、アメリカ大陸やインドやアフリカの植民地をイギリスやスペインに随分奪われてしまったから、どうにか挽回したいんだろうねえ」

ギーヴの紅茶とトーストが運ばれてきた。紅茶の受け皿には砂糖が五つ乗っている。宿の主は両眉を上げて微笑み、カウンターの奥

に下がった。

「俺が大の甘党だって、なんで分かったんだろう……」

ユアンは頷いた。

「実にいい宿です」

ヒリールが起きて来て朝食を食べ終わった頃、コルガーが外から帰って来た。誰よりも早起きして市内見物していたのだとコルガーは胸を張った。五人は荷物を持って鷲獅子亭を出て、船着き場に向かってのんびりと歩いた。

「市庁舎とか劇場とかすっごいのな！市場もベルファストより大きいし、ああ楽しかった！」

朗らかに笑うコルガーをユアンが呆れつつ見下ろす。

「……おまえ、元気だな」

昨夜、コルガーはユアンより飲んでいたはずだ。

「ヒリールもおまえくらい図太ければ楽だろうに」

本人に聞こえないようにつぶやき、ユアンはため息をついた。ギーヴとコルガーの神経の太さには共通するものがある。だが、楽天

的な彼らに対して、ヒリールは繊細過ぎる気がしてならない。

「ヒリールといえば、あの子、ちょっとオレに冷たくない？一応親戚だし、もう少し仲良くしたいんだけどなあ」

コルガーは背伸びをしてユアンの耳元で言う。聞き咎めたヨイクが困ったような顔をしてコルガーを顧みた。ヒリールはギーヴと並んでかなり先を歩いている。

「まあヒリールの気持ちも分からないでもないのよ。ヒリールの話によると、マキシムはシスター・アンジェラをまだ忘れられず、ヒベルニアで築いた家庭をあんまり大事にしてないんですって。要するに、ヒリールからしてみれば、コルガーは祖父が真実の愛をささげたたった一人の女性の曾孫ってわけ。ヒリール的には複雑でしょ」

コルガーは頭を抱えた。

「だったらオレの方が可哀想じゃねえか。オレはマキシムが外に作った曾孫で、しかも父親が外に作った子供だぞ。どこにも拠り所がないってことなんだからな」

「そうだとしても、不幸合戦やってるわけじゃないのよ。ヒリールのことも分かってあげて」

ヨイクがコルガーを諭しているうちに五人は船着き場に辿り着いた、街を貫く運河に大きな商船がずらりと停泊している様は圧巻だ。さすがは商業都市グラスゴーである。ユアンはこれから始まる冒険に胸が躍った。

「おはようございます、旦那さま」

一隻の商船の上から声がかかったのは間もなくだった。ユアンは顔を上げ、リプトン家の執事の姿を目に留める。

「おはよう。フレドリクソンは来ているな？」

「ええ」

執事は穏やかに微笑んだ。その背後から大男が現れ、船から飛び降りてくる。

「風向き、波の高さ、すべて良好だぜ、旦那！」

登場したのは筋骨たくましい大男だった。名前はフレドリクソン、年は三十代半ばで、この寒いのに長袖の服を一枚着たきりだ。彼は冗談みたいに馬鹿でかい手を振り上げて近くに立っていたコルガーの背中をたたいた。

「おまえさんがヒベルニアへ行こうっていう酔狂な民話学者かい！」

フレドリクソンの掌をまともにくらったコルガーは前のめりになる。

「いってえ！オレじゃねえ！民話学者はヨイクだ、オレはコルガー！」

「そうか、よろしくな、コルガー！俺はフレドリクソンだ！」

ばしばしとフレドリクソンは再びコルガーの背中をたたいた。コルガーは痛そうに背中をそらしながらギーヴの影に逃げ込んだ。

「また旦那とコイツと航海ができるって聞いてすっとんで来ましたぜ」

フレドリクソンはユアンの手を握り、眩しそうに貿易船を見上げた。メインマストは一本。胸部にはリプトン海運会社の紋章と、スコットランドの紋章、そしてエディンバラ教会の紋章が貼り付けてあった。威風堂々とした姿はなんとも頼もしい。

「彼はフレドリクソン。三十年以上船に乗っているベテラン船長だ」

「武装商船メルセデス号の船長だ、よろしくな！」

どんと自分の胸を叩いて言うと、フレドリクソンはからからと朗らかに笑い、ヨイク、ギーヴ、ヒリールと順番に握手すると船の中へ戻って行った。出港前にまだやることがあるのだろう。

「武装商船？」

フレドリクソンが行ってしまうと、コルガーはユアンを見上げて小首を傾げた。

「ああ、海賊や外国の海軍と戦うために大砲を積んでいるんだ。いざという時はおまえにも撃たせるからな」

「ええっ？！」

「当然だろ、男の仕事だ。帆船の操り方も教われ。フレドリクソンは厳しいぞ。あれはハンザ同盟一の船長。冬の海を渡るにはうってつけ、おまけに海賊だろうが海軍だろうが一瞬で沈めて見せる男だ。見ろよ」

ユアンはコルガーの肩をたたき、船の胸部を指差した。三つの紋章の下には鮮やかな赤いアザミの絵とラテン語の文字が踊っていた。

「“ｎｅｍｏ　ｍｅ　ｉｍｐｕｎｅ　ｌａｃｅｓｓｉｔ”」

ラテン語で書かれた文字を読み上げ、ユアンはその言葉をかみしめた。

「私を攻撃したものはただではすまされないという意味だ」

説明しながらユアンはヨイクの姿を瞳に映した。自分自身のことはともかく、おれはヨイク・アールトを攻撃したものをただではすまさないだろう。決してただではすまさない。

「野郎ども、出航の時間だ！碇を上げろ！」

数十分後、甲板にフレドリクソンの大声が響いた。フレドリクソンが連れて来た乗組員たちが野太い声で応え、甲板をばたばたと走り始める。五人が船に乗り込み、船が滑るように動き出したのは間もなくのことだった。

12．洋上会議（前書き）

お手元に世界地図があれば尚たのしいかと……。

12．洋上会議

潮騒の音、ぎらぎらと輝く太陽、カモメの鳴く声、真っ青な空。

「マキシムが行ってしまって、もう何年になるかしら」

いつになく穏やかなベルファスト湾の海面を、白いカモメの群れが滑空している。刺すような日差しに、ギーヴは額の汗をぬぐう。

「君が辺鄙な邦に住み着いて、もう五十数年。君の曾孫はいくつになったんだっけ？」

ギーヴの問いにシスター・アンジェラは口元に手をあてて笑った。灰色の修道着がばさばさとはためく。風が強い。

「一番上のコルガーは十二歳よ。この前、十歳のエドが聖堂の屋根を落としたの」

「屋根を落とした？あっはっは、昔マキシムもやったよねえ」

「エドはマキシムにそっくりよ。聖堂が暗いから、高窓を広げようとしたんですって」

「血は争えないねえ」

二人は微笑みあい、しばらく黙って海を眺めた。この海の彼方に、マキシムがいる。この打ち寄せる波は、彼の建てた果ての国へ繋がっている。そう思うと、二人は温かい気持ちになれた。そして少しだけ悲しい気持ちにも。

「ねえ、ギーヴ猊下」

アンジェラが被り物を取り去った。彼女が頭を軽く振ると、長い白髪が潮風にさらわれる。ギーヴは胸にほろ苦いものを感じ、彼女から目をそらした。昔むかし、まだ二人が同じ村の修道院で暮らしていた頃、ギーヴは彼女に想いを寄せていたのだ。

「私たちの選択は間違っていなかったわよね？」

訊ねてこそいるものの、アンジェラの声色にはわずかな迷いも感じられなかった。彼女はただ、肯定を求めているだけだ。ギーヴは答えなかった。それが彼の肯定だった。

「また来るよ。今度はもっとゆっくり、君と、君とマキシムの孫や曾孫たちに会いに」

ギーヴはうたた寝から目を覚ました。いつの間にかメルセデス号の甲板の欄干に寄り掛かって眠っていた。六年前、ローマの友人のところから戻る途中でベルファストに奇港した時の夢だ。水や食料を補給するわずかな滞在時間にアンジェラが会いに来てくれたのだ。

「おーい、猊下―！」

己を呼ぶ声に振り返ると、船内から飛び出してきたコルガーが揺れる甲板を身軽に駆けてくる。ギーヴは目を細めて微笑んだ。

「居眠りしていたら、アンジェラの夢を見たよ」

「へえ、ばあちゃんの夢？」

雲間から降り注ぐわずかな日光の下で、コルガーは太陽のように

破顔した。

「まだ君が子供の頃、そう、君が聖堂の屋根を落とした頃の夢」

「な、何でそんなこと知ってるんですか?!」

コルガーは頬を染めてのけぞる。ギーヴはそれを愛おしく思いながら声を立てて笑った。鳥の群れが上空を横切り、甲高い鳴き声を上げる。夢の中で見ていたカモメの飛び交うベルファスト湾を思い出す。

「アンジェラに聞いたんだよ。君はマキシムに似てるってね」

「若気の至りだから忘れて下さいよー。それより、ヨイクとユアンが会議しようって!早く来て下さいね!」

コルガーは船内へ続く扉に向かって走り出し、ギーヴもゆっくりと彼を追う。その時、一羽のカモメがギーヴの頭の上を追い越した。白い両翼をぴんと広げ、大空を自由に滑空する姿に、ギーヴは思わず足を止めた。

「――間違ってなんかないよ、アンジェラ」

マキシム、ギーヴ、アンジェラ。三人の選んだ道はすべて異なっていた。マキシムはヒベルニアへ。ギーヴはエディンバラへ。アンジェラはベルファストへ。望みさえすれば寄りそうこともできたはずなのに、誰もそうしなかった。その代わり、孤独だと思ったことは一度もない。他の二人もそうならいいとギーヴは思う。

「俺たちの誰の選択も、間違ってなんかいなかったよ、アンジェラ」

ギーヴは曇天を見上げた。

「だけど、こんなやり方はまずいよ――マキシム」

メルセデス号の操舵室の円卓にコルガー、ギーヴ、ユアン、ヒリール、フレドリクソンがそろったところで、ヨイクは立ち上がった。

「フレドリクソン船長と相談して決めた今後の予定をみんなにも話しておくわ」

言いながらヨイクは円卓に地図を広げた。中央に大西洋、右にヨーロッパ、左に北アメリカの描かれた地図だ。

「今、私たちはこの辺りにいるの」

波が高く、潮の流れが速い。ヨイクはバランスを取りつつ長い棒の先で地図を指した。スコットランドとアイルランドの間の海だ。

「そして、私たちはアイルランドの北の海を通って大西洋を目指す。この船には教会に追われている御方やお尋ね者が乗っているから、寄港は必要最低限に留めるわ。今のところの寄港予定地はアイルランド北西部の港ランズエンドだけ。西の果て、陸地の終わりと言われている、どん詰まりにある港町よ。だいたい三日から四日で到着する予定」

説明が終わるとヨイクはぐるりと仲間の顔を見渡した。ユアンとフレドリクソンはすべて了解済みという顔をしていて、ヒリールは

大人しくじっと地図を見つめている。ギーヴは心ここにあらずという風で聞いているのかいないのか分からない。口を開いたのはコルガーだった。

「質問。ヒベルニアがアイルランドの西、つまり大西洋にあるってことは御伽噺で聞いてオレも知ってるけどさ、正確にはどこらへんにあるわけ？ヨイクを信用してないとか、疑ってるとかってわけじゃないけど、それ、オレたちには教えてくれないの？」

腑に落ちないという顔でコルガーが頭をかく。

「そりゃ同感だ、ちったあ教えてくれてもいいんじゃないか？最終目的地について知らされずに航海するなんて初めてのことだぜ」

底抜けの明るさで笑ったのはフレドリクソンだ。ヨイクは「それもそうね」と呟き、ひとつ深呼吸した。

「ヒベルニアがあるのはここ」

ヨイクはちょうどベルファストの真西、アイスランドの真南を指した。それまで涼しい顔をしていたユアンも、眠そうにしていたギーヴも、うつむいていたヒリールもヨイクの指した場所を凝視する。

「その辺りは大昔から使われているアメリカ大陸への航路のひとつだ、おれも周辺を通ったことがある。こんなところに幻の島があるとは考えにくいんじゃないか」

ユアンは不安げにヨイクを見た。フレドリクソンも頷く。

「旦那の言うとおりだ。俺も近くを通ったことがあるが、ヒベルニ

アなんて影も形もなかったし、この海域で島を見たなんて話は聞かないぜ」

「そうよ、この辺りは昔から使われている航路のひとつ。北アメリカを『発見』したジョン・カボットも、ここを通って航海した」

「ジョン・カボットって誰？」

コルガーの問いに答えたのはユアンだった。

「ジョン・カボットは十五世紀の貿易商人だ。イタリアのジェノバで生まれ、後にヴェネツィアへ移り、コロンブスと同時代を生きた。コロンブス同様、王室から資金援助を受けて何度か冒険の旅に出ている」

ユアンが説明している間にヨイクは羽根ペンとインク壺を引き寄せた。

「そのジョン・カボットが、新しい土地を探しに出かけた時の針路がこれよ」

ヨイクは地図に素早く線を引いた。線はイングランドを出発し、北大西洋を抜けてグリーンランドに近い北アメリカ北部まで届く。

「ジョン・カボットの船はイングランドのブリストル港を出て西へ向い、アイルランド島を通り過ぎたところで北西を目指すの。性急に、真っ直ぐにね。変だと思わない？」

ヨイクはヒベルニアがある海域を丸で囲んだ。ジョン・カボットの船団はその丸をよけるように北へ向かっている。

「変？」

フレドリクソンが首をひねる。ヨイクはペンを置いて仲間の顔を見回した。

「あのね、この時、カボットはスポンサーであるイングランド王ヘンリー七世からこう言われて船を出したの。『東部・西部・北部のあらゆる方面で、未知の島や国や地域、地方を何なりと求め、発見し、見つけること』――そして貿易商だったカボット自身は、香辛料を直接東インドから仕入れるために東インドへの西回り航路を探してた。彼はアラビアを経由することで商品の値段が跳ね上がることを憂いてたのよ。新しい土地を見つけろと言われれば、当然、東インドへ向かう足がかりとなる土地を目指すはずでしょう。東インドを目指すのに、何故ここで北西へ針路をとるの？」

ヨイクはとんとん、と地図をたたいた。

「カボットの船団は、ある海流に嫌われたのよ。その海流はヒベルニアへ続く道。普段は船をよそへ押し流してしまうけれど、冬至の夜にだけ理想郷へ連れて行ってくれる」

「まさか！」

フレドリクソンは笑い飛ばしたが、その隣のユアンは真剣な顔つきで考え込んでいる。百戦錬磨の船長には信じがたいことだったのか、フレドリクソンはヨイクとユアンを交互に見やって困ったような顔をした。

「リプトンの旦那、まさかそんな御伽噺みたいなこと、信じるんですかい？」

ふうっと息を吐き、ヨイクはトナカイ革の鞄から紙の束を取り出

した。

「これはカボットの船団の航海日誌の写しよ。ここを見て、『羅針盤に従って船を進めようとするも、風と海がそれを拒む。再びの失敗を恐れ、針路を北西にとる』」

「再びの失敗？」

リプトン家の執事が運んで来た紅茶に大量の砂糖を入れつつ、ギーヴは首をかしげる。ヨイクはうなずいて、片手を腰にあてた。

「カボットにとって、これは二度目の挑戦だったの。一度目の航海を失敗していて、しかも既にスペインとポルトガルから出資を断られていたカボットとしては、まさに背水の陣だったってわけ。ヘンリー七世も新航路の価値については懐疑的で、失敗すれば次のチャンスがあるかどうか分からない。実際、この航海でイングランドは新しい領地を手に入れたけど、その後、新航路の開拓からいっさい手を引いたわ。だからカボットの三度目の航海は完全に自費」

ユアンがうなった。

「なるほど、失敗するよりは無理をせず、海流に流されて無難な針路をとった方が安全だな」

「そ。無理に流れに逆らって沈没したり、遭難したら洒落にならないでしょ」

「大航海時代の航海日誌か。ずいぶんとまた、うまい資料を見つけたもんだ。エディンバラ教会が血眼になって探しているクラシックの隠れ家を、一年やそこらで探し出すとはな」

「ヒベルニアについて書かれているものを探すんじゃなくて、ヒベルニアについて不自然に書かれていないものを探そうと思って調べてみたの。私たちの目指す理想郷は、人の目にそうそう触れてこな

かったんだもの」

椅子に腰を下し、ヨイクは背にもたれた。

「猊下、どう？私の推理、正解？」

「お見事です、さすがだね」

ほとんど紅茶味の砂糖水と化した飲みものをすすっていたギーヴがヨイクを褒めたたえると、ついにフレドリクソンが頷いた。

「わかった、そのヒベルニア行きの海流にはどうやって乗ったらいいんだ？」

「何が何でも十二月二十二日までにヒベルニア行きの海域付近に辿り着くこと。ランズエンドから五日くらいで行けるはずだから、十二月十五日までにランズエンドに着いていれば余裕よ」

フレドリクソンは頷きながらも渋い表情をする。

「しっかし、海流の流れが変わって、ヒベルニアへ行くことができるのが冬至の夜、ってのは確かなことなのか？」

「ヒリール」

ヨイクがヒリールの名を呼ぶと、それまで黙っていた少女が初めて口を開いた。

「ヒベルニアの海にヨーロッパからゴミが流れ着くのは決まって冬至の翌朝なの。船の残骸や酒瓶や色々なものが流れ着くから、海辺の村では家族総出で拾いに行くのが習わしだよ」

「マキシムたちがヒベルニアを目指したのも冬至の頃だったよ」

ヒリールを援護するようにギーヴが続けると、フレドリクソンは「よっし！」と言って、どんと自分の胸を拳で叩いた。

「任せろ！きっとヒベルニアへ連れて行ってやる！」

ヨイクはやれやれと口の中で呟き立ち上がった。ようやく納得してくれた。

「ランズエンドは辺境の地だから、早く着けば、お尋ね者のみなさんも少しは羽根を伸ばして陸地でゆっくりできるはずよ。それを楽しみに、これから三四日間は船内で大人しくしててね」

操舵室を出て、ヨイクは甲板に向かった。見渡す限りの曇り空と青灰色の海だ。フレドリクソンが連れて来た乗組員たちを労いつつヨイクは船尾へ歩いて行く。案の定、ヨイクたちを追跡する船の姿が遠くに見えた。

「ご丁寧に、ロッキンガム東方貿易会社の紋章がはためいてるぜ」

後ろから声がしてヨイクは振り返った。ユアンがヨイクに望遠鏡を差し出す。ヨイクはそれを受け取って右目に当てた。小ぶりの貿易船のあちこちにロッキンガム家やイングランドの紋章が見える。

「砲台があるわ」

「貿易船だからな」

「あいつら、本当についてくる気なのね」

「猊下がついて来いって言ったんだろ」

「そりゃそうだけど」

ヨイクは望遠鏡をユアンに返し、彼と並んで欄干に寄り掛かった。

風は冷たく、時々飛んでくる波しぶきは氷のようだ。ヨイクは水平線を見つめるユアンの横顔を見上げた。出会ってから三年が経った。実際に一緒に過ごした時間は短いが、ユアンはいつでもヨイクを助けてくれていた。

「浮かない顔をしてるわね」

ユアンはヨイクを顧みた。茶色の瞳がヨイクをじっと見下ろす。その瞳には喜びも悲しみも怒りも見えない。わずかに見えるのはヨイクに対する――強い興味。

「悪かったな。おれは元からこういう顔だ」

ヨイクは笑い飛ばし、ここ数日間、密かに考えていたことを口にした。

「ねえ、ヒベルニアから帰って来て、ヒベルニアに関する本を世に出した後のことって、あんた考えてる?」

「ヒベルニアから帰って来た後のこと?気が早いな。まあ、教会から逃げなきゃならないだろうから、逃げながらこそこそ本を売りまくる。あんたはどうするんだ?どこかに民話を集めに行くんだろう?」

ユアンは迷うことなくはきはきと言った。彼は思慮深いが即断即決の人だ。ヨイクはユアンから目をそらし、欄干をつかむ自分の手に視線を落とした。

「それが、分かんないのよねえ」

ふと、ヨイクは鞄の中で眠っている婚約者からの手紙を意識した。

別れの言葉が記されいているのか、ヨイクの帰り待ち、教会から共に逃げようという約束が綴られているのか、彼女には分からない。

「民話学者を辞めるのか？」

ユアンががっかりしたように訊ねたのでヨイクは我に返った。

「いいえ。いつかまた旅に出たいとは思ってるわ。でもどこに何をしに行くか、さっぱり」

「今までヒベルニアへ行くことだけを考えて来たんだ、仕方ないさ。時間はいくらでもあるんだから、ゆっくり考えればいい。暖かいリゾート地に行ってしばらくぼんやりするのもいいだろうな」

南の島の浜辺でぐうたらしているユアンというのは想像がつかない。ヨイクはふふっと吹き出してしまった。

「あんたにはやりたいことが沢山あるんでしょう？教会の手の及ばない遠くの国で好きなことをやりなさいよ。あんたはあのイカレ侯爵とやり合わなければ今頃きっと立派な豪商だったんだから」

ヨイクはユアンに微笑んで見せた。ユアンは寂しげな表情を顔に浮かべて水平線へ目を向けた。

「ああ、考えておく」

13．あいはぶあすとろんぐらばー

「うえー」

深夜、ヒリールはベッドから転がり下りた。暗闇の中で靴を履き、ミルク色の寝間着の上に毛織りのストールを羽織って自分の部屋を出る。ひどい船酔いをした挙句、数ヶ月前に嵐の海へ船から投げ出された時のことを夢に見てしまった。

「うえー」

しんと静まり返った廊下をよろよろと歩き、ヒリールは食堂の隣にある厨房の扉を開けた。明かりがついていて、大柄な男がかまどの前に立っていた。おそらくフレドリクソンの部下なのだろう、背が高く筋肉隆々の大男だ。

「あ、あの、こんばんは」

ヒリールが声をかけると大男はぎょっとしたように慌てて振り向いた。目深にかぶった鼠色の毛糸の帽子の下から綺麗な青い瞳が見える。現れた相手がヒリールだと分かると、彼はほっとしたように首を傾けて微笑んだ。

「ほわっつ？」

ヒリールは一瞬きょとんとしてしまった。

「えっと、そっか、あなた英語があんまり分からないのね」

「いえす」

「あの、お水がほしいの。できれば、お湯」

そう言った瞬間、数秒間忘れていた船酔いが戻って来た。ヒリールは前かがみになって近くにあった椅子に腰を下した。

「ほっとうぉーたー？おーけー」

大男は柔らかく笑って、かまどにやかんをかける。ヒリールは手で口元を覆ってしばらく石のように動かなかった。大男が目の高さを少女に合わせてカップを差し出してくれた時、ヒリールはやっと我に返った。

「ありがとう」

「ゆーあーうえるかむ」

ヒリールは熱いカップを受け取り、しばらく白い湯気をぼんやりと眺めた。お湯を一口すると、中に生姜のしぼり汁が入っていた。温かくて、優しい味だった。

「うーー！！！」

ヒリールは歯を食いしばった。何もかも堪えようとした。抑えて諦めて腹をくくって覚悟を決めて、全部飲み込んで平気な振りをしなければならないのに。両目から涙が溢れ、頬や顎を伝って床へ滴り落ちる。

大男はびっくりした様子で数秒間固まっていたが、おそるおそるヒリールの頭に手を伸ばした。大きな掌が慣れない手つきでヒリールの頭を撫でる。

「うわああん、もう嫌だよー！」

船酔いはひどいし、しょっちゅう悪夢を見るし、ヒベルニアに帰った後のことを考えると気が重い。どうしてこんなことになってしまったのだろう。

「うちに帰りたいよお。でも帰ったら、わたしのせいでヒベルニアの秘密が暴かれて、おまえなんて、あの嵐の夜に死んでしまえばよかったのにって言われるんだ。マキシムおじいさまは霧山の王なんかじゃないもの」

しゃくりあげるヒリールの頭を大男は不器用に撫で続けた。

「きんぐおぶみすてぃっくまうんてん？ちゃいるずすと一りー？」

「え？知ってるの？」

大男は頷いた。

「ヨイク、どこの国の民話だって言ってたかなあ。あなた、何人？ええっと、あなたの国、どこ？」

ヒリールは涙をぬぐい、生姜湯をすすりながら訊ねる。大男は一瞬青い瞳を泳がせた。

「……すうぇーでん」

「そうなんだ。こんな船に乗るくらいだから何か事情があるんだろうけど……あなたも故郷が恋しいよね」

「あいはぶあらばー」

何故か大男は照れ笑いして頭をかいた。

「あいはぶあすとろんぐらばー」

ヒリールは涙の止まった目で瞬きを繰り返す。

「強い……ゴム？」

「いえす」

大男が誇らしげに言った時、扉が開いてユアンが現れた。

「そこで何してる？」

ユアンはいつもと同じ立派な仕立てのスリーピースに身を包んでいたが、ヒリールは寝間着姿だ。少女は急に恥ずかしくなって毛織りのストールをきつく身体に巻き付けながらユアンを見上げた。

「船酔いがひどくてここへ来たら、彼が生姜湯を作ってくれたの」

ヒリールが大男を指すと、ユアンは彼をちらりと見下ろして片眉をひそめた。

「そういえば昼間から元気がなかったな。少しは良くなったか？」

「うん、楽になったみたい。どうもありがとう、ええと」

「彼はカールだ」

「ありがとう、カール！わたし部屋に戻る」

椅子から立ち上がり、微笑むカールに手を振ってヒリールは厨房を出た。ユアンが「送ろう」と言って彼女についてきたので、ヒリールは嬉しくて心が弾んだ。そういえばユアンはヒリールが昼間から具合が悪かったことに気がついてくれていたようだった。

「あ、あのね、ユアン」
「あいつと何か話したか？」

心配かけてしまったことへの謝辞と密かな好意を示す機会と思って口を開いたヒリールの言葉を遮り、ユアンは訊ねた。ヒリールはカールとの会話を思い出しながら答えた。

「ええと、彼はスウェーデン生まれで、故郷に強いゴムの木があるって」
「……スウェーデンにゴムの木は、ないんじゃないかな」
「そうかな、そうだね、暑い国にあるものだよね。あれ、じゃあ、スウェーデンじゃなかったのかな」

首をかしげているうちにヒリールの部屋に着いてしまった。

「ユアンはまだ寝ないの？」
「いろいろと仕事があってね」

ひらひらと手を振って立ち去るユアンの後ろ姿を見つめ、ヒリールは腑に落ちないものを感じながらベッドへ向かった。

グラスゴーを出発して四日目、十二月十四日の朝。
朝食の後、ギーヴは甲板に出て大きく息を吸い胸に手を当てた。

「私たちの小さな船は　あなたの腕に抱かれ」

ギーヴが歌い始めると周囲の乗組員も声を合わせた。航海の無事を祈る歌だ。

「あなたの御心のまま　揺られて進む」

遡ること四日前、乗船して間もなく、ギーヴはユアンにこう言われたのだ。

「あなたに力仕事をさせるわけにはいきませんが、何もすることがないのは退屈でしょう。猊下には歌を歌っていただきます」

ギーヴは首をかしげた。

「え？歌？」

「時間を知らせる歌ですよ。乗組員は時計を持っていませんから、時計が一時を指したら一時の歌を、二時を指したら二時の歌を歌ってください。それから起床の歌と朝の祈りの歌も」

「そんなに歌うんだ」

「あなたの歌に合わせて他の乗組員も歌います。全員で歌うことで乗組員の団結を固くするんです。ストレス発散にもなります」

「へえ」

「我々がしているような危険な航海の上で、事故の次に恐ろしいのが乗組員による暴動です。あなたやヨイクを人質に取られ、船を陸に戻せと脅されれば計画は全てパーですからね。船長をフレドリクソンに任せ、彼が信頼する部下を乗組員としたのも、そこに私の元使用人を混ぜたのも、最悪の事態を防ぐための手立てです」

ギーヴはなるほどと頷いた。

「分かった、心して歌うよ」

「ありがとうございます。念のため、お持ちの懐中時計の針を操舵室のものと合わせて下さい」

「時計は持ってないんだ。俺の体内時計はすごいよ。十五分おきに鐘が鳴る鐘楼で六十年も暮らしてたから」

航海が始まってから、ギーヴはその役目をきちんと果たしてきた。船はそろそろランズエンドに到着する予定だ。

「あなたよ　どうか安らかであれ
あなたよ　どうか穏やかであれ
あなたよ　どうか静かであれ」

歌い終わり、ギーヴは船室に戻ろうと揺れる甲板を歩きだしたが、船尾に小さな人影が見えてそちらに歩みを進めた。

「やあ、ヒリール。朝食の席にいなかったから心配したんだよ」

後ろから声をかけると、少女は青い顔で振り向いた。乗船してからずっと、船酔いがひどいらしい。

「ギーヴおじいさま、おはようございます。今朝もカールが生姜湯をくれたからランズエンドまでは何とか頑張るけど、食欲は全然ないの」

口元に手を当て、ヒリールは弱弱しい目でギーヴを見上げる。ギーヴは彼女の隣に並んで小さな背中をさすってやった。この年頃の女の子としてはやせ過ぎだ。

「そろそろ着くはずだってフレドリクソンも言ってたよ。もう少しの辛抱だ」
「はい」
ヒリールは従順に頷き、それから首を傾けた。
「ねえ、ギーヴおじいさまはどうしてマキシムおじいさまと一緒にヒベルニアへ行かなかったの？シスター・アンジェラも」
純真無垢な瞳に見つめられ、ギーヴは頭をかきながら本当のことを言った。
「俺もアンジェラもマキシムと離れ離れになりたくはなかったよ。だけど、俺はエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できる世の中を作りたいんだ。そのためにはヒベルニアへ隠れていたらだめだと思う。教会の歴史を知り、他の宗教を知り、人間と宗教について考える、それが今の俺の仕事。アンジェラは、こちらに残った仲間の世話をするために留まったんだ。仲間を見捨てたとマキシムが後ろ指をさされないようにね」
「じゃあ、ギーヴおじいさまとシスター・アンジェラは、愛し合っていたわけじゃないの？二人で示し合わせて残留したわけじゃないってこと？」
あまりにも率直な質問にギーヴは咳きこんだ。胸を抑え、どきどきしながら言葉を選んで否定する。
「あ、当たり前でしょう！アンジェラはマキシムの妻だよ！」

ヒリールはふうんと言って水平線に目を移した。本当に納得してくれたのだろうか。ギーヴは疑り深く少女を見つめたが、そうしているうちにいつか聞こうと思っていたことを思い出した。

「ヒリール、マキシムは俺たちを恨んでるの？」

ヒリールがギーヴを顧みた。茶色の髪が風にそよぎ、大きな目がギーヴをとらえる。その茶色の瞳はすぐに伏せられた。

「恨んでいるかどうかは分からないけど、とても悲しんでるのは本当だよ。マキシムおじいさまはギーヴおじいさまやシスター・アンジェラが来るのをずっとずっと待ってる。待っても待っても二人とも来ないから、マキシムおじいさまの心は凍ってしまったと言われてるの」

「心が凍った？」

「うん。昔のおじいさまを知る人はみんなそう言う。マキシムおじいさまは、昔は今のようじゃなかったって。マキシムおじいさまは、ギーヴおじいさまとシスター・アンジェラが自分を裏切ったと思っているんじゃないかと思うの」

誤解だ、とギーヴが眉をひそめた時だった。

「港だ！港だぞー！」

頭上の見張り台から嬉しそうな声がした。操舵室の扉が開き、フレドリクソンとユアンが姿を現す。ギーヴとヒリールが目を凝らして水平線を見ると、陸らしきものが見えた。

「間違いねえ！あれがランズエンドですよ、旦那！」

望遠鏡を覗きこみ、フレドリクソンは大声で笑った。ユアンは満足そうに微笑み、フレドリクソンのたくましい肩を叩いた。

「さすがだ、予定通り。――猊下、ヒリール、一時間後にはランズエンドに上陸します。荷物をまとめておいてください」

本人には言っていないが、ヒリールの体調を考慮して今夜は陸に泊まることになっている。ギーヴとヒリールは船室に戻った。彼らが荷づくりを済ませて甲板に戻って来た時、小島の多い行く手の海に、見張り役が不吉な船影を見つけた。海賊船だ。

1．大地の果て

青黒い波は渦のごとくうねり、武装商船のたくましい胸板に当たっては白いしぶきを大いに上げる。横殴りの風が吹き、帆船は小島の影から躍り出た。目の前には髑髏の旗をかかげた海賊船が無防備な様子で漂っている。

「ようし、コルガー、一発やりやがれ！」

フレドリクソンの野太い声が甲板に響き、コルガーは慎重に素早く大砲の照準を合わせる。

「――見てろよ、ど真ん中に風穴開けてやる」

狙いを定めたら、あとは点火するだけだ。一時的に聴力を失うほどの轟音とともに飛び出した真っ黒の砲弾が、わずかに弧を描いて海賊船のメインマストに命中したのは数秒後。

「よっし、やったぜ！」

それを皮切りに武装商船メルセデス号と海賊船の砲台から次々と砲弾が飛び出した。先手を期したメルセデス号はあっという間に海賊船の残りのマストを倒していく。一方、海賊船から放たれた砲弾は一向に当たらず、どぼんどぼんという虚しい音をたてて海中に沈んでいった。さすがの海賊も不意を突かれるとこの様だ。

ほぼ航行不能となった海賊船を残し、メルセデス号はランズエンド港へ向かった。海賊たちの戻ってきやがれコールが響き渡るのを

聞き、コルガーは歓喜の声を上げ、そばにいたカールと片手を打ち合わせた。

「どうして私を起こさなかったのよ！」

朝食の後、自室でうとうとしていたヨイクは海賊との戦闘を見逃したらしい。ヨイクが騒ぎを聞きつけて甲板に出て来た時には船はほとんど港に着いていて、彼女はたまたま近くにいたコルガーに八つ当たり気味に噛みついた。

「海賊なんてそうそう見られるもんじゃないのにー！！悔しい！！」

「んなこと言ったって、それどころじゃなかったもん」

怒り狂うヨイクに困惑しながら船を下り、コルガーは港町ランズエンドの地を踏んだ。「地の果て」を意味する名を持つこの町は、アイルランド島の北西部の突端に位置していて、アラン伯爵という人物によって治められている。

「それより、あの船長ただ者じゃないんじゃね？飛び石みたいな小島の影に隠れながら海賊船に近づいていって、後ろからずどん、だぜ。怖えよ」

コルガーはフレドリクソンを見くびっていた。豪快なだけの男だと思っていたが、冷静に迅速な指示を出し、あっという間に海賊をやっつけてしまったのだ。

「ユアンはユアンでオーラ出てるし、ギーヴ猊下も聖なる妖怪だし、ヒリールもお姫様だし、ヨイクも有名人だし、つくづく普通の奴が

いないっていうか」

コルガーはヨイクと並んで船着き場を進む。足元でざくざくと唸る積雪は数十センチに及び、午前十時をまわっているというのに雪で覆われた町は夜明けの薄明の中にある。カモメの群れが低空飛行する空には相変わらずの分厚い雲だ。

「おっしゃる通りだけど、自分のことを棚上げするのはいかがなもんかしらね」

ヨイクが言った時、真っ青な顔色のヒリールがユアンに支えられながら船を下りて来た。コルガーは辻馬車をつかまえ、自分とヨイクの荷物を荷台に放ると、ヒリールの手を取って座席に乗せてやった。その隣にギーヴが座り、さらにヨイクが乗り込んだ。

「おれは新聞社に行く、あとでこの宿で落ち合おう。フレドリクソンの知り合いの宿だ」

ユアンは言いながらヨイクにメモを手渡した。

「もし空き室がなかったら別の宿を紹介してくれるはずだから、とにかくその宿の親父に頼っていいそうだ。くれぐれも一人でふらふら出歩いて迷子になったりしないように」

「分かってるわよ。どうしたの、コルガー？」

馬車に乗ろうとしないコルガーに仲間たちの視線が集まる。コルガーは馬車から数歩後ずさり、にっこりと笑ってヨイクたちに手を振った。

「オレも野暮用」

コルガーはユアンから宿の地図を受け取って、軽い足取りでランズエンドの街を歩き始めた。フィドルケースを背負っているが、行先はパブではない。

ヨーロッパの冬はとにかく暗くて寒い。冬至を約一週間後に控えたこの時期のイギリスやアイルランドの日の出はおおよそ午前九時、日の入は午後三時半だ。一日の日照時間は六時間ほどしかなく、しかも太陽は南の低い空を通って沈んでしまうというサービス不振ぶりである。おまけに今年の冬の寒さと暗さは、三月地震以来太陽が一度も姿を見せていないせいで例年の群を抜いていた。

都市ではクリスマス市が盛況だが、異常気象がもたらした被害は大きく、どの町のマーケットも昨年と比べてはるかに寂れている。市場に並ぶ商品は質が悪い割に値段が高く、しかも慢性的な品薄状態が続いているので人々の購買意欲は下がるばかりだった。

十分とは言えない準備でクリスマスを迎えるのは惨めで腹立たしいことだ。ランズエンドは町全体がフラストレーションで満ちているかのようだった。

「さっみい」

コルガーは白い息を吐きだしながらコートのポケットをさぐった。ウイスキーが少量入った小瓶が指に触れる。こう寒いと酒がなければ生きていけない。だが、物価の高騰はコルガーの好物にまで及んでいる。

「ここで稼がなきゃ酒代がね」

ウイスキーをあおり、空になった瓶をコートのポケットにねじ込む。雪がちらつくオフィス街をうろつき、コルガーが目的地を発見したのは午前十一時だった。

ランズエンドの労働局はびっしりと雪に覆われたシンプルな三階建ての建物で、その中に足を踏み入れると、カウンターの向こうで紅茶を飲んでいた男がコルガーに目を留めた。

「やあ、仕事ある？」

コルガーは彼に気さくに話しかける。労働局は閑散としていた。日雇い労働者たちはすでに斡旋された仕事に取り掛かっているのだろう。

「おう、坊主、見ない顔だな。探しているのは午後からの仕事か？」

男は立ち上がり、オフィスの奥から陶器のティーカップを持ってくる。コルガーはそれを目で追い、毛糸の帽子と手袋をはずしながら答えた。

「ベルファストから来た。今すぐ出られるし夜まで平気」

「よそ者か、どおりで。首札はあるんだろうな？」

「もちろん」

帽子と手袋をコートのポケットに突っ込み、コルガーはマフラーの間から首札を引っ張り出して頭から抜く。男はそれを受け取り様に、コルガーの前のカウンターに白湯の入ったカップを置いた。

「紅茶じゃなくて悪いな、こっちも不景気でよ。俺はランズエンド

に住んで三十年だが、こんな寒さも雪も初めてなんだぜ」
「ありがと」

コルガーは背中のフィドルケースを下ろし、かじかんだ手でカップをとって白い湯気を顔に当てる。暖炉のある屋内とはいえ、無制限に燃料を使えるわけではない。冷え切った体を温める方法としては、酒か温かいものを飲むのが一番なのだ。コルガーとしては前者の方が好みなのだが、まあ、ここで贅沢は言えない。

「コルガー・バルトロメ、十八歳か。……十八には見えないなあ」
「悪かったな。気にしてるんだ」

コルガー・バルトロメが二歳年上の兄だということはもちろん黙っておく。コルガーが睨むと男はへらっと笑った。

「悪い悪い。それにしたって、おまえさんベルファストから何しに来たんだ?」

男は心配そうに訊ねつつ、手元の書類に何かを書きつける。コルガーはその質問を待ってましたとばかりにガクッとうつむき、なるたけ悲哀に満ちた口調で言った。

「アメリカの……病気のおっかさんのとこまで行くんだ……!」
「そ、そうだったのか……!!」

目頭を抑えて天井を仰ぐ情に厚い男を横目に、コルガーは書類にささっとサインした。これでランズエンド市内での今日の労働が許されたことになる。

「で、現場はどこになるの?直すのは何?市壁、市門、石畳、街道、

橋、船着場、堤防、牧農地の柵に住宅街、何でも直せるよ。でもできればお城とかお屋敷とか教会とかに触りたいなあ」

うへへと一瞬夢を見てしまった建築ばかの若者とは裏腹に、男は同情の眼差しで彼を見た。

「近頃じゃ、そういうまともな仕事はなかなか入ってこないのさ。入ってきたとしても、家族持ちのランズエンド市民が優先なんだ」

「ちぇ。じゃあ雪かき？薪用の木の伐採？それとも泥炭掘り？」

あまり期待をかけずに訊ねたコルガーに、男は朗らかに笑った。それはそれは朗らか過ぎてコルガーが怪しむほど。

「心配するな、おまえさんにピッタリの仕事がある」

2. 妙に素敵な夜更け

白一色の町の中心には一本の運河が走っていて、凍りついた川面を複数の人夫が長い棒で懸命に砕いている。氷は気持ちのいい音を立てて割れ、ゆらゆらと川下へ流れてゆくが、人夫たちの顔には諦めのような表情が浮かぶ。

「これ以上寒くなれば港は凍るね」

橋の上から作業を見守っていたギーヴは近くにいた中年の痩せた人夫に声をかけた。

「こりゃ神父様。ええ、こんなに寒いランズエンドは初めてです」

しわがれ声で人夫が応じる。

ランズエンドはもともとあまり寒くなる町ではない。それはベルファストやエディンバラも同様である。もちろんアルプスや北欧などと比較した場合ではあるが、外洋に周りを囲まれたアイルランドやグレートブリテン島は、例年ならばこの時期でも零下を下回らず、降雪量も少ない。

「おまけに税金は上がるわ、雪かきや運河の砕氷は義務と言う名のただ働きだわで、まったく今度のアラン伯爵にはうんざりでさあ」

「今のアラン伯爵は厳しい方なのかい？」

欄干に寄りかかるギーヴの金褐色の髪と濃紺の法衣が雪混じりの風になびく。人夫は片手を頬に当てて顔をしかめた。

「ここだけの話、今度のアラン伯爵はちょいとここがイカレてまし

てね。もともとはどこぞの侯爵家の御曹司だったのが領地で問題を起こして婿入りしてきたって噂です。先代のアラン伯爵はその侯爵家に大金を借りていたとかで、仕方なく今度のアラン伯爵を娘婿にしたとか」

「それはまた気の毒な」

「へへ、そう言って下さるのは神父様くらいでさあ。そんでは」

中年の人夫は肩をすくめて笑い、おもむろに川下へ歩いていった。ギーヴは欄干に頬杖をつき、砕かれた氷の塊が運河を流れていくさまを見つめた。しばらくそうしていると橋の下を何隻かの小型商船が通過した。

「一刻も早く太陽を取り戻さなくちゃ」

ヨーロッパの寒暖は緯度の高低以外に外洋に面しているか否かで決まる。そのため一般的には東へ行くほど寒いとされている。アイルランドがこの有様なのだから、スウェーデンやフィンランドなどはどうなっていることか。

「この冬を終わらせなくちゃ」

つぶやいて顔を上げ、ギーヴは濃紺の法衣をはためかせ橋を渡りきった。

ギーヴは途中で何度か滑りそうになりながら、人々が踏み固めた雪の上をのんびりと歩いた。かつては滑らない靴を求めて雪国の数々の靴屋の靴を取り寄せたものだが、何を履いても結局は滑るという結論にたどり着いてからは「安全な滑り方」とか「楽しい滑り方」とかをもっぱら特訓中である。

西の曇り空がわずかに赤く染まっているが、時刻はまだ午後三時だ。目的の場所はロングウォークという大通りから裏道に入った場所にあった。赤レンガの階段を下り、『ダブリン』と書かれた看板を通り過ぎて、カラマツ材の厚い扉を開けるとその上部に取り付けられたベルが小気味よく鳴った。牛が首につけているベルに音が似ている。

「こっちよ、こっち」

壁に灯されたランプは黄昏時のようなムーディな暗さを店内につくり出していた。その薄闇の中で手を振ったのはヨイクだ。彼女はステージに近いブナの木の丸テーブルについてた。

ギーヴは靴の裏や法衣についた雪を入り口で落とし、ヨイクに近づいた。彼女の隣にはヒリールの姿もあった。

「コルガーとリプトン君はまだ来てないの？」

アイリッシュウイスキーを傾けていたヨイクはギーヴの問いかけに頷いた。テーブルの中央でキャンドルの炎が揺れ、彼女の明るい金髪や青色の瞳を照らす。広い店内に他の客の姿はない。考えてみれば、日が暮れたとはいえまだ夕刻にもなっていない時間だった。

「宿の親父さんにはここに来るように、って伝言を預けて来たんだけど、殿方はみなさんお忙しいようねえ」

「コルガーあたりは夜中まで帰って来ない気がするねえ」

注文をとりに来たウェイターに紅茶を頼み、エディンバラ名誉司教はため息をつきながら椅子に座る。ヨイクはおかしそうに笑い、長い脚を組みかえるついでにウイスキーのグラスを置いた。

ギーヴは改めてヨイクの姿を見る。身長はギーヴより低いが、極寒の地で生まれ育った彼女には得体の知れない底力のようなものを感じる。特に青い瞳に宿る燃え盛る炎は、どんな男の目にも見たことがなかった。

「あら、ユアンと船長が来たんじゃない？」

カラマツの扉が開き、勢いよく吹き込む雪とともに現れたのはユアンとフレドリクソンだった。ヨイクは腰を上げ、ギーヴにそうしたように彼らへ手を振った。店内は徐々に客が増えつつある。

「宿でゆっくり休みたかったでしょうに、悪かったわね。たまにはみんなでこういうところに来るのも楽しいかと思って」

「四日間船の中で窮屈に過ごしてきたんだ、パーッとやればいいんじゃないか？」

熊の毛皮のコートと帽子を椅子にかけユアンは腰を下した。

「そうそう、今頃乗組員たちも安酒場で大騒ぎしてるはずだぜ」

フレドリクソンもウールのコートを脱いで笑う。しばらくすると、ステージに無数の明かりが灯され、袖から十人ほどの楽団と踊り子がぞろぞろと現れた。

ギーヴの紅茶とユアンのスコッチウイスキー、フレドリクソンのビスマル産ビールが運ばれてくると、間もなく演奏が始まった。イーリアンパイプスと呼ばれるバグパイプの一種やフィドルやハープなどの賑やかな舞曲の音色に乗って、アイルランドの民族衣装を着た少女たちがリズミカルに踊りだす。にわかに明るくなった店内は

いつの間にか満席に近い。

「ところで、コルガーは？」

ウイスキーを傾けつつ、ユアンが辺りを見回す。

「行方不明。どうせどっかで飲んでるんだよ」

興味ない風を装ってギーヴが言ったとき、背後からよく知った声がした。

「ええっ、本当ですかああ。じゃあ、とりあえず、ギネスビールとキルケニービールとツボルグビールを一パイントずつとアイリッシュウイスキーとニシンの酢漬けとチーズと、あ、あとアクアヴィットも頂戴！アクアヴィット！」

そのきゃぴきゃぴとした甲高い声が聞こえたのは壁際のカウンター席だった。さっきまで舞台で踊っていた民族衣装の少女が、恰幅のいいゲルマン系の中年商人に肩を抱かれてウェイターに酒を注文していた。深く被った黒髪のカツラで横顔が半ば隠れ、顔に濃い化粧がほどこされてはいるが、勝気な茶色の瞳は間違いなくギーヴの兄の曾孫のものである。

「ｃ'ｅｓｔ　ｉｎｃｒｏｙａｂｌｅ……！」

ギーヴは母国語でつぶやき、テーブルの上で握った拳を震わせてうなだれた。ヨイクとフレドリクソンは大口を開けて笑い転げ、沈黙するギーヴに代わって立ち上がったのはユアンだ。ヒリールは民族衣装の乙女がコルガーだと分かっていない。

「ちょっとからかってやるか」

意地悪そうな笑みを浮かべるユアンの顔には本領発揮と書いてあった。

数時間前のこと。

「えっこれ着るの?!オレが?!」

労働局で指定された店に着くなりコルガーは地下の小部屋に引っ張り込まれ、出し抜けに服を着替えろと言われた。その部屋には窓がなく、壁際に鏡台と椅子がずらりと並び、奥には様々な衣装がぶら下げられている。

コルガーに衣装を手渡した女はぴしゃりと言い放つ。

「お金が必要ならつべこべ言わない!お客からもらったチップは自分のものにしていいし、アンタそれなりに可愛い顔してんだから、おめかしすればじゃんじゃんお酒をおごってもらえるわよ?」

「酒?!ハイ!やります!!」

女が楽屋を出て行くと、コルガーは白いブラウスの上に緑のワンピースを着て白のエプロンをつけるという典型的なアイルランドの民族衣装に着替え、鏡台に据え置かれた化粧品の箱を探った。それは、子供のころ、母の化粧品で遊んで以来、手にすることのなかったものばかりだった。

「……本当なら、オレも化粧くらいしてるはずだったんだよな。三月地震がなければ、きっと」

鏡の中の十六歳の自分は、どう見ても痩せっぽっちの少年だ。三月地震の前は長く伸ばしていた髪も、今ではすっかり短くなっている。コルガーは白粉を手に取り、見よう見まねで顔にはたいた。茶のアイシャドウで目元を色どり、頬紅を薄く両頬にのせる。口紅は控えめにピンク色のものを塗った。

二十分後、自分なりに研究して作った顔を色んな角度から確認しつつ、コルガーは鏡の前でポーズを取った。我ながらいけてるんじゃないか？最後に緑の帽子をかぶる。

「これでただ酒が飲めるなら、こんな良い商売はないよな」

そう独りごちたとき、扉が開いてどやどやと四人の女の子が入ってきた。この寒いのに薄いブラウスとスカートに使い古したエプロンをつけているだけの貧しそうな少女たちだ。

「あ、新しく入った子？」
「わあ可愛い。よろしくねえ」
「ねえ髪短いわ、カツラ着けなよカツラ、これなんてどう？」
「えー、だったらそっちじゃなくてブロンドじゃない？」
「ばかねえ、そこをあえてブルネットにするんじゃないのお」

きゃあきゃあと笑いながら女の子たちはコルガーに何種類ものカツラを被せる。コルガーは顔を真っ赤に染めて大人しくしていたが、「あなたはどれがいいと思うの？」と意見を求められると、楽屋の隅に飾られていた黒髪のカツラを選んだ。特に理由はない。

白粉を塗りたくった顔と色が違うといって首を塗られ、化粧が薄いといって睫毛に何かをつけられ、ようやく楽屋を出たときにはコルガーは疲れ果てていた。

「今日は新しい子がいるからね。一度みんなで合わせようか」

地下一階に位置する開店前のパブは寒く、夜のように暗かったが、その舞台に勢ぞろいした四人の楽団員も踊り手の女の子たちも明朗快活なアイルランド人で、コルガーは久しぶりに故郷に戻ったような気分になった。

二人のフィドル奏者が賑やかな曲を奏で始め、それに合わせるようにハープとイーリアンパイプスが鳴る。横一列に並んだ女の子たちがタップを踏んで踊り始め、コルガーもそれに習って体を動かす。全員の息がそろったところでリーダー格のフィドル奏者が雄たけびを上げ、曲のテンポを倍の早さに変える。一同は楽しげに大声で笑い、お互いに顔を見合わせながら踊った。

「くううう、ギネスビール、天才!!」

一パイントを一気に飲み干したコルガーに、隣席のゲルマン系の中年商人は一瞬目を丸くしたが、すぐに豊かな黒髭の下でにやにやと笑い出した。

「がっはっは、アイルランド人は女の子でも酒が強いんだなあ」

その笑みからは脂ぎった下心がちらりと見えたが、コルガーは気

にせず二杯目に口をつける。あいにく、酔いつぶれない自信は大いにあるのだ。

「ええっそんなあ、あたしなんて大したことないですう」
「そうなの？まあどんどん飲みなさい」
「きゃーいただきまあす！」

天職、天職だ、これがオレの天職に違いない。コルガーは愛想笑いの裏でそう確信した。こんなにおいしい仕事があったなんて、今までの自分は何をしていたんだろう。

だが、至福のときは長くは続かなかった。ニシンの酢漬けを頬張り、キルケニービールを空にしたとき、背後から声をかけられた。

「失礼、お嬢さん」

そう断り、コルガーの肩に手をかけたのは上品な赤毛の商人だった。コルガーはビールを噴き出しそうになり、それからカウンター奥のウェイターが差し出したアクアヴィットを目に留めて、その衝動をこらえた。騒ぎを起こせば、これが飲めなくなるかもしれない。

一方、中年商人の方もアクアヴィットのグラスに目をつけている。これはじゃがいもの焼酎で、アルコール度数は四十度を越える。可愛い女の子を酔い潰すなら是が非でも飲ませたい酒だ。

「彼女はわしと話してるんだ、邪魔しないでもらえる？」

中年商人は赤毛の商人を振り返って凄んだが、ほとんど呂律が回っていないので迫力はない。むしろ涼しげな表情で彼を見下ろす赤毛の商人の方が迫力満点だ。

「お嬢さん、私と踊ってくれたら一ポンド差し上げよう。それに好きなだけ酒もおごりましょう」
「ええっ」
コルガーの目がにわかにダイヤモンドの輝きを放つ。赤毛の商人は意地悪く微笑み、中年商人を横目で見た。どんなもんだと顔に書いてあり、この人こういうところは子供だなあとコルガーは一瞬我に返った。
「ほざきやがって。さあさ、お嬢ちゃん、こんな奴は無視して飲みなさい。そうだベルファストの話を聞かせてよ」
中年商人がそう言ったとき、舞台で新しい曲の演奏が始まった。ひときわ明るく、アップテンポな曲だ。持参した楽器で演奏に加わる客が何人もいて、もう舞台も客席も、演奏者も観客も境界線がない。お祭り騒ぎだ。
「さあ」
赤毛の商人はコルガーのワンピースの胸元に一ポンド札を差し込み、脇の下に手を入れて少女の体を強引に抱き上げる。
「踊ろうか、美しいお嬢さん」
びっくりして声も出ないコルガーに構いもせずに彼は楽しげに笑った。悪意のない少年のような笑顔だった。
「もとい、コルガー・バルトロメ君。おまえ本当に男か？」

ユアン・リプトンの言葉に、抱きかかえられたままコルガーはのけぞった。

「ななな何でオレだって分かったの?!」

「バレないとでも思ったのか?見ろ」

ユアンが指した先にはギーヴやヨイクの姿がある。ギーヴは呆れ顔で脱力し、ヨイクとフレドリクソンは笑いすぎて涙を流している。ヒリールはきょとんとした顔でこちらを見ていた。

「さあ、準備はいいか?おれはアイリッシュダンスがハイランドダンスの次に得意なんだ」

「な、なんでオレがユアンと踊らなきゃなんないんだ!」

「一ポンド払っただろ」

「返す!」

コルガーが一ポンド札を突き返すとユアンは愉快そうに笑い、紙幣を再び彼女の胸元に戻した。どうやらからかわれたようであるとコルガーが悟ったときだった。

「嬢ちゃん!!」

大声とともに舞台の上からフィドルが放られて、コルガーは慌ててそれを受け止める。見上げると、満面の笑みのフィドル奏者が拳を振り上げて叫んだ。

「いっちょ弾いたれ!」

コルガーはフィドルを肩の上に構え、冗談めかしてフィドル奏者を睨み上げる。

「こら、バイオリン投げる奴がいるかよ！」
「そいつはバイオリンじゃない、フィドルさ！ビールをこぼしたって泣く奴ぁいない！」

期待通りの答えに破顔し、コルガーは楽器をかき鳴らした。音色よりステップ、美しさより誇り、価値より楽しさ。同じ血の流れる人たちと一体になる幸せと故郷への懐かしさや愛しさがこみ上げる。

「アイルランド万歳！」

3. パーティーしましょう

「君、何をやってるわけ？」

コルガーがテーブルに着くなり、ギーヴはぐったりとした様子で訊ねた。宴は続き、人々の熱気と暖炉の炎によって、パブの中は春が訪れたように暖かかった。コルガーは頬を赤らめつつビールの杯に口をつける。

「この間、ジャックと飲んだ時に有り金全部、遣っちゃって、稼がないと今夜の酒代もないんですもん。で、労働局に行ったら、このご時世じゃ、こんな仕事しかないって言われて仕方なく」

日照不足による不作、失業者増加による治安の悪化、物価の高騰、食料難。職を失くした男たちが街路に溢れ、人知れず売られていく女子供も後を絶たないという。

唯一、好調なのが林業や炭焼き業で、例年以上に寒く長くなると予測された冬に備えて薪や泥炭が飛ぶように売れているのだった。そういった真っ当な仕事は養うべき家族を持つランズエンド市民へ優先的にまわるようになっている。

「だからオレみたいな、よそ者にまわってくるのはパブのダンサーくらいなんですよ」

情けない思いで説明するコルガーに顔をしかめたのはフレドリクソンだった。

「労働局も信用ならねえ時代になったもんだぜ。ここはただのパブ

じゃねえ。――なあ学者先生よ、この店は誰かの紹介だったのか？」

フレドリクソンがヨイクに目を向けたちょうどその時、裏口の戸が開いて太った男がこそこそと店に入ってきた。先ほどまでコルガーにちょっかいを出していたゲルマン系の中年商人だ。彼は白い息を荒く吐き出しながらズボンの中にシャツのすそをしまい、カウンター席に着いてウェイターと言葉を交わす。

少し間をおいて、後から民族衣装の少女が店に入って来た。出番前の楽屋で、コルガーにブルネットのカツラを薦めてくれた女の子だ。彼女は着衣の乱れを直しながら、紙幣を握りしめた手で長い髪を何度か整えた。

「……ええ。地域密着の小さなアイリッシュパブには入りにくい気がして、旅行者や商人が集う酒場がないか、同じ宿に泊まっている客に聞いたのよ」

ヨイクは苦虫をかみつぶしたような顔でウイスキーを飲み干した。

「ここはいいショーを売り物にしているが、踊り子や楽団員の売春でも有名なんだ。ランズエンドに来たことのある商人の間では有名だ」

ビスマル産ビールを飲み下し、フレドリクソンがステージの上の少女たちを指す。民謡に合わせて踊る瑞々しい身体は売り物でもあったのだ。コルガーはショックを受けた。

「知らなかったとはいえ、こんな店に連れて来て悪かったわ。でもまさかコルガーがこんなところで小金を稼いでいるとはね」

「オ、オレはいかがわしいことなんてしてないぞ！てゆうかオレ、

男だし！」

コルガーが弁明するとユアンがおかしそうに笑ってコルガーをからかった。

「世の中には少年を愛好する奴もいるんだぜ。労働局はそれを見越しておまえさんをここにやったんだろうな」

「げえええ！何だよそれ！」

一同はのけぞるコルガーをひとしきり笑い、気を取り直して大いに酒を飲んだ。船酔いが落ち着いたヒリールも久しぶりにきちんとした食事を取れたようだ。

「ちぇーオレまんまと騙されたってわけか。猊下、オレのこと馬鹿だと思ってるでしょう」

隣のギーヴを睨み、コルガーは唇を尖らせる。真剣な顔でタラのフライをナイフで切り分けていたギーヴは首を傾けて応じた。

「まあねえ。でも、君はすごいよ」

「嫌味ですか？」

コルガーはじとりとギーヴを睨む。ギーヴはそんなコルガーを横目で振り返り、愛おしげに微笑んだ。

「あのね、俺は君を一人の人間として尊敬してやまないよ。教養があって力仕事もできて、頭が良くて手先が器用で、家事だって得意だ。俺は神学以外の教養がないし、不器用だし、歌は歌えるけど楽器や舞踊の才能は無い。君にはほとんど嫉妬してるよ」

ええええっと大げさに驚くコルガーの姿を見下ろし、ギーヴは声を立てて笑った。

「今だって慣れない旅にあっという間に順応してるし、海の男たちと一緒に大きな帆船を操って、船員の仕事を人一倍こなして、大砲を撃って海賊をやっつけて、アイリッシュダンスを踊ってフィドルを奏でる。君は、すごい」

コルガーは身体がかっと熱くなるのを感じた。他人からここまで褒められたのは生まれて初めてだ。

「まあああ猊下ってば口説き上手なんだから！ユアンも見習いなさいよ、まったく、ねえ、ヒリール？」

見つめ合うコルガーとギーヴに茶々を入れたのはヨイクだった。急に話を振られたユアンは迷惑そうに顔をしかめてヨイクに文句を言い始めたが、ギーヴは彼らに構わずコルガーの耳元で囁いた。

「でも君に負けたと心から思ったのはね」

ギーヴはコルガーの民族衣装をちらりと見て、いたずらっぽく微笑んだ。

「この女装を見たときだったね」

きょとんとするコルガーに、ギーヴは妖艶に目を細めてみせた。コルガーには彼の言葉の真意が分からなかった。

時計の針が九時を回り、そろそろお開きにしようかとユアンが言いかけたその時、店の扉がばあんと開いてベルがけたたましく鳴り響いた。入って来た一人の商人が息せき切って叫ぶ。

「おおい、大変だ!!」

その場にいた客や店員がほぼ一斉に入り口を振り向いた。

「港の倉庫や船が襲われてるぞ!!」

「か、海賊か?!」

「違う!貧乏人どもの暴動だ!!棒きれやフライパン振り回して襲って来やがる!!」

客の多くが商人だ。彼らはあっという間に入り口へ殺到し、自分の船や倉庫を守るべく店を駆け出て行く。一同も緊張した顔を見合わせ、すぐにユアンが立ち上がった。

「船が心配だ。フレドリクソン、港へ行くぞ」

フレドリクソンがユアンに大きく頷き、続いてギーヴも立ち上がる。

「リプトン君、俺も行くよ。コルガー、ヨイクとヒリールを連れて宿に戻っていて」

コルガーもヨイクも同時に「自分も一緒に港へ行く!」という顔をしたが、ヒリールを安全な場所に連れて行かなければならないことを思い出し、すぐに力強く頷いた。

「了解。ヨイク、ヒリール、ちゃんとオレについて来いよ！」

コルガーは女性陣に向かって胸を張る。

「頼もしいね。二人のこと、頼んだよ」

ギーヴに頭を撫でられ、コルガーは被っていたかつらに手をやった。

「いけね、オレ自分の服とって来る！ヨイク、ヒリール、ちょっと待っててて！」

「コルガー、待って！」

駆け出したコルガーをギーヴが引きとめた。二人はしばし見つめ合い、やがてギーヴはこんな時だというのに穏やかに微笑んだ。

「言い忘れてたよ。――すごく綺麗だ」

「……は？！」

「さあ、早くお行き」

耳まで赤くなったコルガーがよろよろとステージ裏へ消えて行く。その後ろ姿を名残惜しそうに眺めていたギーヴの肩をユアンはそっと叩いた。

「猊下、行きましょう」

ヨイクとヒリールを残し、ギーヴとユアンとフレドリクソンは店の表に出た。港の空が赤く、焦げ臭いにおいが町を包んでいた。三人は右往左往する人々にぶつかったり謝ったりしながら何とか港ま

で辿り着いた。船や倉庫を襲う人々は皆、怒りの形相で棒きれや箒やフライパンを手にしている。中には女性や子供の姿もあった。

「猊下、旦那！俺たちの船が荒らされてますぜ！」

フレドリクソンが指差したのは停泊しているメルセデス号だった。甲板で乗組員と暴徒が争っている。三人は人の群れをかき分けて船に駆け寄り、タラップを渡って船に乗り込んだ。額から血を流した執事と、彼を支えるカールの姿がユアンの目に飛び込んでくる。

「大丈夫か！しっかりしろ！」

「だ、旦那さま……申し訳ありません」

ユアンは執事の青白い顔を覗きこみ、眉をひそめた。ふつふつと怒りがわき上がるのを感じ、ユアンは眼下の暴徒たちを、憎しみをこめて見下ろす。――いや、冷静になれ。ここに悪人は一人もいない。みんな、貧困や不安に足を取られただけなのだ。

「……フレドリクソン、カール！彼らを丁重に陸へ返してやれ！」

「おうよ！」

「いえっさー！」

フレドリクソンとカールが元気よく応じると、ユアンは荒らされた操舵室のソファに執事を横たえた。見たところ額の傷は浅い。そばに転がっていたアクアヴィットで傷口を洗い、ハンカチを押し当ててやる。

「旦那さま、本当にすみません……」

「気にするな。しばらくここに隠れていろ」

ユアンは執事に微笑み、操舵室を出た。ここまでくると目の前に広がる乱闘騒ぎに飛びこみたい気分だった。実際、商人や船乗りは暴徒にかなり手こずっている。助太刀してやろうかと一歩足を踏み出した時、ユアンの胸に小さな頭がぶつかった。

「わっごめん、ユアン！」

「コルガー！」

ユアンの前に風のように現れたのは民族衣装姿のコルガーだった。着替えたり化粧を落としたりする暇がなかったのだろう、緑色のワンピース姿の可愛らしい少女はえらく場違いに見えた。コルガーの後ろからやってくるヨイクとヒリールの息が上がっているところを見ると、宿から港まで真っすぐ走ってきたようだ。

「私たちの宿も襲撃されていて酷い有様だったのよ。それより褒めてよ、何とかみんなの荷物を持ち出したわ」

ヨイクは肩で息をしながら手に持った荷物を持ち上げてみせる。ユアンは苦笑して荷物を受け取った。

「大したもんだ。よし、コルガー、荷物を置いたらちょっと手伝ってくれないか。船から部外者を叩き出したい」

ユアンは勇気がわいてくるのを感じた。この状況でコルガーが傍らにいるということが、何だかとても心強かった。

「いいよ、気は進まないけどな」

コルガーはユアンを見上げて頷いたが言葉通り表情を曇らせる。

「どうして気が進まないんだ？」

「オレは平民の、労働者だからな。どん底の暮らしを知ってる。それに、もしまだ故郷にいたとしたら、オレだって彼らのように暴動を起こす側だったかもしれない。オレがユアンに武器を向けたかもしれない。そう考えると、あんまり気が進まないだろ」

ユアン自身も貴族ではないが、彼は裕福な商人だ。コルガーの見ているものと自分の見ているものが違うことに気が付き、ユアンは複雑な気持ちになった。そんなユアンを安心させるようにコルガーは気さくににっこりと微笑んだ。

「でも、ま、しゃあねえよな。彼らの目を覚まさせてやるのも、愛」

4．因縁と未練

投げ飛ばし、蹴り飛ばし、ねじ伏せ、たたきつける。相手が人間なら、どんな喧嘩もお手の物だ。コルガーは戦意喪失していく暴徒たちを眺めつつ、舌先で唇をぺろりとなめた。余裕の笑みさえ浮かべてみせる。

「やい、てめえらみんな弱っちいじゃねえか！このオレを倒せる奴はいないのか！」

民族衣装姿のコルガーは暴徒に啖呵を切った。どいつもこいつも弱すぎる。勇気だけはあるようで、コルガーは飛び出してきた血気盛んな青年の棒きれを軽々とよけ、回し蹴りで彼を吹き飛ばす。青年は数メートル先の波間にダイブした。

「さあ、次は誰が相手だ？」

最初の攻撃が収まり、コルガーはぐるりと周囲を見渡した。暴徒の中にはコルガーと同じ年頃の少年の姿もあった。もしベルファストで暴動が発生していたら、自分もこの暴徒の中に入っていたかもしれない。コルガーは拳を下した。

「なあ、この辺で仲直りしようぜ。あんたたちが腹を立ててるのは税金を上げたアラン伯爵なんだろ？港町が商人を敵にまわしたらお仕舞いだぜ。それとも――」

宥めるように言いつつ、コルガーはファイティングポーズをとる。コルガーは向かい合った群衆の中にアイリッシュパブで出会った楽団員を見つけた。フィドル奏者とハープ奏者だ。

「――まだやるか？」

極光の女神のことを意識すると、コルガーの体をじんわりと緑色の光が優しく包みこんだ。

「お、おい、なんだ、こいつ、体が光ってる……！」

「オーロラみたいだ……！」

暴徒たちは化け物でも見るような目でコルガーを見つめ、後ずさりして武器を下ろした。ユアンやフレドリクソンも驚いてコルガーを見た。コルガーは緑色の光をまとった手で暴徒から銃をもぎ取り、両手で軽く握りしめた。銃は簡単にぐにゃりと曲がり、コルガーはそれを丸めてぽいっと海に放り捨てる。体からはまだ緑色の光が燃え上がっている。

「ば、化け物だ……！！」

「この船はやばい、逃げろ！！」

フィドル奏者もハープ奏者もすっかり青冷め、やがて他の者たちと共に諸手を挙げて逃げ出した。

「化け物、か」

コルガーはため息を吐くとともに肩を落とし、傷ついた心を癒そうと瞳を閉じた。彼女の肩に手を置いたのはギーヴだった。

「気にすることないんだからね」

力強く言い放つギーヴとその隣で大きく頷いたヒリールにコルガ

ーは笑って見せた。今まで彼女にそう言ってくれる人はシスター・アンジェラだけだったが、今は違う。視線を向ければ、ヨイクもユアンもフレドリクソンも温かい目で彼女を見ている。

「もちろん、気にしません」

気丈に応じるコルガーに近づき、ユアンは彼女の手を握った。

「船を護ってくれてありがとうな、コルガー」

その時、大通りを真っすぐこちらへ向かってくる複数の足音がした。軍靴の足音、しかも大軍だ。

「静まれ！静まれ愚民ども！」

軍隊は港の入口に整然と並んだ。暴徒たちは商人につかみかかっていた手を止め、倉庫の扉を打ち壊そうとしていた槌を下した。

「アラン伯爵の名において、この場に居る者全員を、例外なく逮捕する！聞こえたか！例外なく全員逮捕だ！」

隊長が非情に言い渡すと、まずは商人側が騒ぎ始めた。

「ちょっと待て！俺は俺の倉庫を守るためにここにいるんだぜ！自分の財産を守って何が悪い！」

「そうだそうだ！こいつらに大事な商品を奪われるのを指くわえて見てろってのか？！」

「俺たちは被害者だ！正当防衛だ！」

商人や船乗りたちが口をそろえてそうだそうだと怒鳴り出したが、

隊長は動じなかった。

「この騒ぎの一部であること、それこそが罪なのだ！」

「この分からずやの馬鹿野郎！俺たちじゃなくて、あの貧乏人のクズどもをブタ箱にぶちこみやがれってんだ！」

商人がわめき散らすと暴徒が怒りの声を上げる。

「何だと、この欲深の悪徳商人どもが！天国の門で神の裁きを受ける前に、人の裁きを受けておいてもいいんじゃないか？！」

「言ったな、ゴミ野郎が！」

一時停止していた乱闘が再開され、さらにそこへ軍隊が突っ込んだ。三つ巴だ。だが、その混乱に乗じてこっそり逃げ出す者もいた。コルガーが感心しているとユアンが静かに言った。

「おれたちも逃げるぞ。ここに居るのはまずい」

フレドリクソンがすぐに頷き、先に怪我人を下ろすと言って操舵室に取って返した。ヨイクは望遠鏡で辺りを見回しながら眉根を寄せる。

「大通りの方は軍隊が塞いでるわ。いっそ船を出しちゃうのはどうかしら？」

確かに、陸路を走って逃げるより船で丸ごと逃げる方が簡単そうだ。

「それは駄目だと思うなあ」

のんびりと言ったのはギーヴだった。

「あれ見て。砦の大砲がいつの間にこっちを向いてるんだ。船を出せば撃たれるかもしれない」

ギーヴが指した高い崖の上には町を守る砦がそびえ立っている。

「いや？船を出さなくても撃つ気じゃね？」

コルガーは片頬を上げて引きつった笑みを顔に浮かべた。

「それはないでしょうよ。この混戦じゃ、仲間に当たるもの……ね？」

「そうか……な？」

コルガーとヨイクが乾いた笑いを漏らした時、大砲が動いた。どおんと言う大音響とともに大砲の弾が放物線を描いて飛んでくる。弾はメルセデス号のすぐ近くに着弾した。五人は船を下りて一目散に駆け出した。

「あいつら正気かしら？！」

「仲間に当たってもいいのかよ！」

「ばかやろおおぉぉーー！」

「ヒリールおいで！」

「うわあああん！待ってえぇ！」

五人は背中に爆風を感じつつ海沿いの小道を目指して船着き場を駆け抜けた。執事を背負ったフレドリクソンや負傷した仲間をかついだカール、他の乗組員たちも乱闘を逃れて次々に合流する。ユアンは横目で彼らの無事を確認した。

「この騒ぎが収まらない限り、船は出せないだろうな」
「冬至までにヒベルニアへ続く海流に行かないとまずいんだろ？」
コルガーは隣を走るユアンと顔を見合わせた。チャンスを逃せば来年までヒベルニアに行けない。
「そうよ！そうなのよ！それなのに！こんなことで！足止めなんて！絶対に御免よ！」
ぜえはあと大きく息をしながらヨイクは執念で怒鳴った。
「船と乗組員が無事なうちにさっさとここを出るべきだわ！」
「何か妙案が？」
ユアンが期待を込めて訊ねると、ヨイクは覚悟を決めたような低い声で言った。
「アラン伯爵に直談判するわ」
「アラン伯爵って誰？」
呼吸するのも苦しげなヨイクに代わってユアンがヒリールに答える。
「この町を治める横暴な領主だそうだ。軍隊に命令を出しているようだから、この町に滞在しているのは確かだな」
ユアンの説明にヨイクが頷く。コルガーは首をかしげた。
「領主がオレたちなんかに会ってくれるかな？」

「問題はそこだな。おれたちは皆お尋ね者か平民だ」
「知名度だけならヨイクが一番だよな。さっき通りかかった本屋にもヨイクの本があったし、パブの女の子もヨイクの本の民話をお客さんに読んでもらったことがあるって言ってた」
コルガーの提案にユアンは頷いた。
「民話学者のヨイク・アールトが研究のためにランズエンドにやって来て、民衆と軍隊の衝突に巻き込まれた。事情があってどうしてもすぐに船を出したい。どうか許可をいただけませんでしょうか伯爵さま、そんなところか？」
ユアンとコルガーがヨイクを顧みると、彼女は自棄になったように答えた。
「……それで行くわ！やるしかないもの！」
ヨイクの必死な様子にユアンはにやりと意地悪く笑った。
「がんばれよ、明日の朝にはとっておきの新聞広告も出る」
「そんなことでがんばれるか！明日にはこの町を出てってやるわ！」
ギーヴ、ヒリール、フレドリクソンを乗組員とともに海岸の岩場に待機させ、コルガー、ヨイク、ユアンは領主の館を訪ねた。館の周辺には見張りの兵士がうろうろしていて、暴徒たちも近づけなかったのだろう、門前はしんと静まり返っている。門番に声をかけ、

伯爵へのお目通りをと頼むと三人はあっさり控えの間に通された。街や港の混乱ぶりが嘘のようだった。

「この暴動には無関心だというスタンスで行け。余計な口出しをすれば伯爵の怒りを買うかもしれない。港にいる者を例外なく全員逮捕しろとか、仲間のいる船着き場に大砲を撃ちこめと命ずるくらいだ、伯爵は相当、融通が利かないイカレた男だろう」

ヨイクは大きく頷き、ユアンのいつも通りのポーカーフェイスを見つめ返した。これまでヨイクはエディンバラ名誉司教の住まいに潜入したり、ヒベルニアのお姫さまの閉じ込められた塔に忍び込んだりしてきたが、正面切って横暴な地方領主を訪ねるのは初めてのことだ。

「分かってる。出港の許可だけを狙っていくわ」

ヨイクは覚悟を決めて、壁際に立つ中世風の甲冑を睨む。そして深呼吸して、隣のコルガーに囁いた。

「コルガー、万が一の時には頼んだわよ」

壁に掛けられた絵画や床の大理石に歓声を上げていたコルガーはヨイクを振り返って気張らずに余裕の笑みを浮かべた。ちなみにまだ緑色のエプロンドレスを着てカツラをかぶっている。そこら辺の本物の女の子よりよっぽど可愛らしいわ、とヨイクは感心してしまう。

「任せとけって」

館の入り口で武器を取り上げられた今、いざという時に活躍する

のは武器要らずの無敵少年だ。この子は大物だわ。ヨイクは感心しつつ呆れもする。

「ヨイク・アールト様、付添いの方々、どうぞこちらへ」

使用人が扉を開き、恭しく三人を導いたのは小さなサロンだった。赤い炎の燃える暖炉の装飾、ゴブラン織のタペストリー、革張りのソファ、猫足のテーブル、分厚いペルシア絨毯、天井に描かれた天使たちの絵……使用人が部屋を出て行くと、三人はきょろきょろと室内を見回した。

「ヨイクの本がある。やっぱり、伯爵もヨイクの本を読んだんだ」

本棚の前でコルガーが言うと、ヨイクとユアンもその隣に立って本の背表紙を眺める。シェークスピアやダンテ、ユアンの好きな『ガリバー旅行記』や『三銃士』や『カンディード』もある。まだ見ぬ伯爵は、本棚を見る限り仲良くできそうな人物だ。ヨイクがそう考えているとついにノックの音がした。三人は扉を振り向き、居住まいを正した。

「アラン伯爵がおいでになりました」

金のドアノブが回り、扉が開いた。

「ようこそ、マドモアゼル・ヨイク・アールト。活躍はこの辺境の地まで聞こえてくるよ」

言いながらサロンに入って来たのは青白い顔の若者だった。ユアンと同じくらいの年頃の青年は立派な服に身を包み、フランス貴族風の白い巻き髪を揺らして微笑んだ。その瞬間、ユアンが小さく息

を飲んだ。ヨイクの頭の中も真っ白になる。

「おや、どうかしたのかいマドモアゼル？お連れの方も、ボクの顔に何か付いてるかな？」

アラン伯爵が薄い唇を釣り上げて首をかしげた。コルガーが眉をひそめ、唇の動きだけで「おい！」と呼びかけると、ヨイクは我に返った。

「い、いえ！失礼しました！伯爵があまりに、知人に似ていたものですから！」

「大変失礼致しました！」

ヨイクが弁解し、ユアンも慌てて倣う。二人は作り笑いを浮かべて勧められた席に着いた。コルガーは不思議そうに二人をちらりと見たが、すぐに伯爵の方を向いた。

「あ、改めまして、民話学者のヨイク・アールトと申します。この二人は連れのコルガーとトーマスですわ。このような非常時に突然のお目通りをお許しいただきまして大変ありがたく存じます」

驚きを振り払い、ヨイクは伯爵を真っすぐに見つめた。トーマスというのはユアンがいつも使っている偽名だ。

「こちらこそ嬉しいなあ。まさか、民話学者のヨイク・アールトに会えるなんて。ロンドンやダブリンでの噂通り、とっても美しい方だ」

伯爵は夢見るように言い、ヨイクに憧れの眼差しを向ける。舌っ足らずで幼稚な話し方まで彼にそっくりだ。

「まあ伯爵ったら！」

ヨイクは持ち前の根性と演技力でにっこりと微笑む。真冬だというのに掌に汗をかいていた。

「だけど、あなたのおっしゃる通り、今は非常事態だ。本当はゆっくりとお話したいところだけど、ボクはこの美しい領地を守るため、牛のように暴れまわる愚民どもを取り押さえなきゃいけない。単刀直入に用件を聞くよ」

ここで動揺すればかえって怪しまれるわ。ヨイクは自分に言い聞かせ、悲壮な表情を作って身を乗り出した。

「私は研究の旅の途中で、一刻も早く、どうしても行かなければならない所があるのです。ですが、港は軍隊と砦からの攻撃で混乱しています。私たちが安全にこの町を出て行けるよう、お力を貸していただけないものでしょうか？」

伯爵は青白い顔をゆがめて笑った。

「おやすい御用さ。ボクもヨイク・アールト先生の研究の手伝いができて嬉しいよ。通行許可証と出港許可証を書いてあげるから、少し待っていておくれ」

あっさりと承諾し、伯爵は立ち上がって扉の向こうに消えた。ヨイクは肩透かしをくったように脱力してソファの背に寄り掛かった。

「ずいぶん簡単に許可してくれたわね。私たちにかかずらっている暇なんてないってことかもしれないけど。――それにしても、ユア

ン」

ヨイクは珍しく狼狽しているユアンと視線を合わせる。

「あいつにそっくりね」

「……いや、もしかしたらそっくりというか、むしろ案外――」

ユアンの声を遮るように扉が開いた。アラン伯爵と二人の使用人が現れる。

「そう、案外、本人かもしれない。世の中は狭いようだね、グラスゴーのやり手商人ユアン・リプトン」

伯爵はそう言って扉を後ろ手で閉めた。かちゃりという音と共に伯爵の短銃がユアンに向けられる。二人の使用人の銃はヨイクとコルガーに向けられた。ユアンは天井を仰いでため息をついた。

「……あんた、やっぱりフォション侯爵だったのか」

彼は三年前、グラスゴーの劇場前でリプトン家の使用人を銃で撃ち殺した男だった。ヨイクに助けられなければ、ユアン自身も殺されていた。

「グラスゴーにいられなくなって、どこぞに婿入りしたとは聞いていたが、まさかアイルランドの地方領主になっていたとはな」

ユアンの落ち着いた声を聞きながら、ヨイクはいつでも逃げられるよう、わずかに腰を浮かせる。コルガーも警戒した様子でアラン伯爵を見上げた。伯爵は狂気じみた薄笑いを浮かべた。

「そうさ、おまえのせいでボクはグラスゴーにいられなくなった。婚約者にも振られ、こんな辺境の地に婿入りさせられた！ボクは侯爵の家に生まれたんだぞ、それが今じゃ伯爵だ！おまえのせいで、ボクの人生台無しじゃないか！おまけに領民どもは馬鹿ばかり！税が重い、物価が高い、天気が悪い、寒い、ひもじい、ボクのところへ来てはそんなことばかり言う！挙句に暴動だ！」

ユアンに詰め寄り、彼の顔に唾を飛ばしながら、伯爵はヒステリックに怒鳴り散らした。

「軍隊を派遣して関係者を全員逮捕するように命じたのに、今度は軍隊も乱闘に混じって不毛な戦い始めた。それを止めようと思って砦から大砲を撃ったら、愚民どもが押し寄せて来て砦を占拠した。どうしてボクの望み通り、みんな大人しくしていられないんだ！どうしてボクがこんな目に遭わなくちゃならないんだ?!誰のせいだ?!——全部おまえのせいだよ、ユアン・リプトン！おまえのせいだ！おまえのせいなんだ！」

ユアンの襟をつかみ、伯爵は狂ったように彼を揺さぶった。ユアンは顔をしかめてそれに耐えている。伯爵は急にユアンから手を離し、再び銃口を彼の眉間に突きつけた。

「死ね、ユアン・リプトン。そうすれば、おまえの仲間の出港を認めてやる！ヨイク・アールトのために死にますと言え！」

金切り声を上げる伯爵から目をそらし、ユアンは息を吐き出して

乱れた赤毛を手で撫でつけた。突きつけられた銃口は三年前と同じ、宇宙の果てのように真っ暗だった。三年前のあの日、死を覚悟したあの時でさえ、この世の未練を思いつかなかった。家族の顔すら浮かばなかった。だが、今は――。

「……民衆に砦を占拠されたのか？」

ユアンは震えないように声を張って訊ねた。今の自分は、死ぬことが怖い。これから成し遂げたいことがあり、見届けたいものも、手に入れたいものもある。ユアンは目を向けずにヨイクの存在を肌で感じた。錯覚以外の何ものでもないが、彼女の肺や心臓の動めく音さえ、己の耳には聞こえるような気がする。彼女の熱い血が全身を駆けめぐり、彼女の心の炎が燃え盛る音さえも。

おれはヨイク・アールトという人間の、人生を見つめていたい。できることなら永遠に。ユアンは思わず自嘲気味に笑った。何という女々しい願いだろう。

「笑ったな！ああ、いいさ、笑えばいい！でもね、ボクはあの馬鹿どもの言いなりになるつもりはないんだ！いざとなったらこの町に油をまき、火をつけて、何もかも灰にしてしまえばいいんだ！ボクもこの館ももろともね！そして真っ先に死ぬのはおまえだよ、ユアン・リプトン！」

銃口を突き付けられたまま、ユアンは大きく深呼吸した。

「おまえは、イカレてるな、相も変わらず」

ユアンはゆっくりと立ち上がった。瞳は伯爵を見据えている。

「ま、ま、またボクを殴るのか?!」
「いや。殴っても効果がないことは証明済みだから。――あ!!あれは何だ?!!」
「ん?」
「え?」

ユアンが窓の外を指して言った瞬間、彼以外の人間は一斉にそちらを向く。その隙にユアンは思い切り脚を振り上げ、伯爵の後頭部に力いっぱい回し蹴りを食らわせた。伯爵は脳震盪を起こしたようにばたりと床へ倒れこむ。我に返った使用人がユアンに銃を向けたが、横合いから飛び出してきたコルガーとヨイクが彼らの腕と銃を押さえつけて事なきを得た。ユアンは伯爵の上に馬乗りになり、力なく抵抗する伯爵を押さえつけて床のペルシア絨毯で簀巻きにしてしまった。

「この、この、商人の分際で、ボクに何てことするんだ!」

絨毯で巻かれた伯爵はみの虫のように床でのたうった。

「まったく、イカレてるわね、いつまでたっても」

使用人を縄で縛りあげたヨイクはぱんぱんと手を払った。

「こんな奴に殺されてやらなくて正解よ、ユアン」

ヨイクとは対照的に、コルガーは不安そうな顔をしている。

「なあ、大丈夫なの?腐っても貴族は貴族。この人、伯爵だぜ」

ヨイクは自信満々に胸を張った。

「二度とこの町に来なければいいだけのことよ。行きましょう、砦は民衆の手に落ちたそうだから、出港しても大砲で撃たれる心配はないわ。――ユアン？」

ぼんやりとヨイクを眺めていたユアンを、彼女は不思議そうに見返した。ユアンは自分に向けられたヨイクの瞳に吸い込まれそうになる。

「……生まれて初めて、死ぬのが怖いと思った」

ユアンがつぶやくと、ヨイクは目を丸くした。それから目を細めて笑う。

「そう、その割には落ち着いて見えたけど。いい経験だったわね」

死ぬのが怖いと思ったことを、いい経験などという人間がこの世に何人いるだろう。きっと彼女だけだ。ユアンは思わず手を伸ばした。指先にヨイクの手が触れた。彼女はぽかんと口を開け、ユアンの顔と手をまじまじと見つめる。

「……あの、ユアン、だいじょおぶ？」

ユアンはヨイクの手を握りしめる。

「あんたはおれの人生に喜びをもたらしてくれた。今まではそれだけで十分だと思っていた。でも、おれはヨイク・アールトという冒険小説の続きを知りたい。あんたの冒険を終わりまで見届けたい。――それがおれの未練だ」

いつか船の上で、ヒベルニアから戻ったらどうするつもりなのかとヨイクはユアンに訊ねた。ユアンはよく考えもせずに「教会から逃げながらリプトン書店の本を売るつもりだ」と答えた。だが、今ならきっぱりと己の本当の望みを言える。

「ヒベルニアから戻っても、おれはあんたについて行く」

八歳も年下の女性にこんなことを言う日が来るなんて、三年前の自分は夢にも思っていなかっただろう。だが、人生をかけてやりたいことがあるとすれば、この女性の瞳を輝かせること、この女性が何を成し遂げるのか見届けること、それだけだと思った。それだけ、たったそれだけだ。

「あんたが死ぬまでついて行く。おれに、あんたの人生を見届けさせてくれないか」

ヨイクは驚いたように瞬きを繰り返し、それから楽しそうに声を上げ、腹を抱えて笑い出した。

「あーっはっはっはっは！何言ってんのよ！」
「……爆笑するか？おれは本気で真剣に大真面目だぞ」
「あはははは！だってあんた、自分が何言ってるか分かってる？」
「これからもよろしく頼むって言ってるだけだろ！」

身体をふたつに折って笑い転げるヨイクに憤慨し、ユアンは簀巻きのアラン伯爵に片足をかけた。おかしなことを言ったつもりはないし、ユアンは正直な気持ちを率直に述べただけだ。
だから、蚊帳の外のコルガーの呆れたようなつぶやきは聞き間違いに違いない。

「どう受け取っても控えめなプロポーズだよな」

5．夜逃げめいた出港

「安全に出港できるようになったからって、この横暴伯爵を野放しにして立ち去っていいものかなあ。せっかくだから、砦の人たちにプレゼントしちゃおうよ」

というコルガーの提案にヨイクとユアンが同意し、簀巻きにされたアラン伯爵は砦を占拠した民衆の元に連行された。馬にまたがり、彼を担いで行ったのはコルガーだ。アラン伯爵はくぐもった悲鳴を上げて、じたばたともがいたが、徒歩で付き添うユアンがこう言って脅すと急に大人しくなった。

「この状態であんたを民衆に突き出したりしたら、十中八九、殺されるだろうな。大人しくしていれば奴らから命を守ってやらないこともないが、どうする？」

さらに、民衆の代表と対面する際、コルガーがこう励ますと伯爵は観念したようだった。

「安心しろよ、伯爵。オレたちが見張っていれば平和的なお話し合いができる。広い心で税を軽くしてやれよな」

民衆は彼らの訪問に手を叩いて喜び、特にユアンは「あのイカレ伯爵を公衆の面前でぶん殴って指名手配された男だろ」と歓迎された。伯爵は簀巻きを解かれ、民衆代表との話し合いの席によろよろとついたのだった。

話し合いはもちろん民衆が満足する内容で終わった。コルガーとヨイクとユアンは伯爵を館まで送り届けてやり、メルセデス号に戻

ってギーヴやヒリールと合流した。そして彼らは、長い夜が終わったことを喜び合い、各々の寝床に潜り込んだのであった。

明けて翌日。ヨイクは昼前にハンモックの中で目覚めた。グラスゴーを出てから三日間も船の中で寝泊まりしていたから一晩や二晩は地上の宿に泊まろうと言っていたのに、結局また船室で朝を迎えてしまった。ヨイクは苦笑しながら身を起こし、コルガーとギーヴの身体を案じた。ギーヴはエディンバラから、コルガーはベルファストからずっと船で移動してきたから、船内の生活にうんざりしていることだろう。

「まあ、彼らなら大丈夫か」

それでも今夜は地上の宿に泊まりたいものだ。ヒリールも船酔いに参っている。ヨイクはてきぱきと身支度を整え、船室を出て操舵室に向かった。ユアンがしかめ面で書類をめくっているだろうと思いながら操舵室の扉を開くと、そこに彼の姿はなかった。フレドリクソンもいない。船内に人の気配がほとんどないことに気がついた時、ヨイクはリプトン家の執事と廊下ではち合わせた。

「朝食は地上でとりましょうと、旦那さまが。他の皆様もすでに向かわれましたよ」

執事がそう言って手渡した地図を手にヨイクは船を下りて繁華街へ向かった。街は日常を取り戻していたが、昨夜の暴動の爪後はそこここに残っており、商店やオフィスの壊された看板や破られた戸や窓などが痛々しかった。

「ヨイクさん、おはようございます！！」

指定されたパブを訪れると、メルセデス号の乗組員たちが朝食を食べていた。ほぼ全員そろっているようで、ユアンたちは奥の席でトーストをかじったり食後のお茶を飲んだりしているところだった。

「おはよう」

ヨイクは声をかけてコルガーとヒリールの間に座った。向かいはフレドリクソンだ。

「おはよう、よく眠れた？」

ヨイクはアイリッシュブレックファーストを注文し、ギーヴの問いに頷く。

「ええ、でも今夜こそ地上のベッドで眠りたいわ」

「そうだね、俺も揺れない部屋でゆっくり休みたいなあ。リプトン君、頼んだよ」

「今夜の宿ならもう見つけてありますからご安心を」

注文通りに運ばれてきた朝食に取りかかったところで、ヨイクは仲間の様子がおかしいことに気がついた。コルガーとフレドリクソンは下を向いて肩を震わせているし、ヒリールはヨイクと目を合わせない。

「何？私、何か変？」

「はい」

笑いをこらえながらユアンがヨイクに差し出したのはランズエン

ドの今朝の新聞だった。ヨイクは恐る恐るそれを受け取り、ものすごい勢いで新聞をめくって広告欄を片っ端からチェックする。ヨイクの手は間もなく止まった。その顔がみるみる赤くなる。ユアンは素知らぬ顔で紅茶を飲んでいる。

「――こ、この、金の亡者!!」

ヨイクがユアンに叫んだ時だった。

「おおい、大変だ、アラン伯爵の軍隊が君たちを捕まえに来るぞ!!」

店の外から大声で教えてくれたのは昨夜のパブのフィドル奏者だった。コルガーは彼に礼を述べ、不機嫌そうに仲間を顧みた。

「懲りない奴だねえ」

ユアンも立ち上がって同意する。

「ああ。せっかく助けてやったのに、恩を仇で返すとはこのことだな」

乗組員たちも腰を上げ、皿に残った食べ物を慌てて口の中に詰め込んだ。ヨイクも目玉焼きとソーセージを全部頬張り、パンをポケットに突っ込んだ。そうしている間に軍靴の足音がどんどん近づいて来る。その靴音との距離を測り、ユアンはフレドリクソンに命じた。

「フレドリクソン、何人か連れて港へ走れ!おれたちはここで出港準備の時間を稼ぐ!」

「了解！準備ができたら大砲で合図しますぜ！」

フレドリクソンが最小限の手下を連れて裏口から店を出ると、間もなくアラン伯爵の軍隊が入り口からなだれ込んできた。おおよそ三十人ほどだ。

「アラン伯爵の名において、この場に居る者全員を、例外なく逮捕する！聞こえたか！例外なく全員逮捕だ！」

軍隊の長はそう言った。パブにいた無関係の市民は彼らが到着する前にさっさと店を出てしまったので、店内にはヨイクたちと乗組員しかいない。店主の姿さえ見えない。

「――この町とは本当に相性が悪いな」

「まったくだわ」

ヨイクとユアンは顔を見合わせて毒づき、ギーヴとヒリールを後方へ下がらせた。誰よりも前に出たのはもちろんコルガーだ。それを見てユアンはにやりと笑った。

「目的はあくまで時間稼ぎだが、全滅できるっていうなら任せるぜ？」

「へへ、誰に言ってるの？」

コルガーが不敵な笑みを浮かべて身構える。隊長は金切り声を上げて剣を振り上げた。

「突撃ー！！」

せまい店内で銃は使えない。アラン伯爵の軍隊は剣を抜いて一斉

にコルガーに向けた。コルガーは突っ込んできた兵士たちのいくつもの剣先を身軽によけ、ひとりの兵士の胸倉をつかんで隊列の真ん中に投げ飛ばした。投げられた本人も、頭の上に仲間が降ってきた連中もうめき声を上げて床に倒れ込む。

「私も今日はやるわよ。ここのところ大人しくしてたからね」

ヨイクは手首を回しながらユアンに目配せした。彼は茶色の瞳をくるりと回した。

「大人しく、ねえ」

ヨイクは剣を振り回して来た兵士に椅子を投げつけ、相手がひるんだ隙に短剣を一閃させる。別の兵士が切りかかって来ると、股間に蹴りを食らわせ、ついでに腹に拳を叩きこむ。兵士は声にならない痛みに顔をしかめてうずくまった。

「勘が鈍ったんじゃないか?民話集めの旅をしてた頃と比べて」

ユアンはヨイクに言い捨て、突き出された剣をテーブルナイフで受け止め、長い脚を回転させて別の兵士を蹴り飛ばす。続いて襲いかかってきた兵士にはカウンターの上に並んでいたアイリッシュウイスキーのボトルをお見舞いした。メルセデス号の乗組員たちも椅子やテーブルや皿を投げ、時に拳で応戦する。

「うわあ、き、貴様ら何をする!一緒に捕まりたいのか?!」

隊長の悲鳴がしてヨイクはそちらに顔を向けた。見ると、店の外から空き瓶やビールの空き樽を兵士に投げつけている市民がいた。パブのフィドル奏者や踊り子の少女たちの姿もある。隊長は頭部に

植木鉢が直撃したようで、額から血を流して怒り狂っていた。

「ユアン、行かなきゃ。ぐずぐずしてると、また暴動になりかねないわ」

息を切らせ、ヨイクはユアンと背中を合わせた。

「仕方ない。フレドリクソンの合図がまだだが……」

ユアンがヨイクを振り向いた時、遠くから大砲の音がした。フレドリクソンの出港合図だ。二人は頷き合って乱闘を繰り広げる乗組員たちを見た。

「フレドリクソンなら、なんと言って指示を出すかしら」

「きっとこうだろうな。――野郎ども、出港だ!!」

ヨイクも笑って叫ぶ。

「例外なく、全員、船まで駆け足!!」

「逃げろ逃げろ!アラン伯爵なんかに捕まるな!」

ヨイクとユアンは顔をくしゃくしゃにして大声で笑いながら、先陣をきって走り出した。わああっと声を上げながら、メルセデス号の乗組員たちもパブを出る。ギーヴはヒリールを連れておもむろに駆け出し、コルガーも最後尾で追手を退けながら走る。切る風はとてつもなく冷たかったが、ヨイクは少しも寒いと思わなかった。にっとユアンがヨイクに微笑んだ。

「初めて会った時も、こんな風に一緒に走ったな」

石畳をたたく数十個の靴。押し合いへし合い、港へと走る。通行人はどやどやとやって来た一団とそれを追いかける兵士たちの姿にぎょっとして道を開ける。

「あんたといるといつも走りっぱなしよ」

ヨイクが憎まれ口をたたくと、ユアンは眉を上げて笑みを深め、じっと彼女を見つめた。ヨイクの心の内を探るような目だった。

「そりゃこっちのセリフだぜ」

港に着くとメルセデス号の甲板でフレドリクソンが手を振っていた。帆が下され、錨が上げられ、舫い綱が解かれようとしている。追手を食い止めるコルガーを残して全員が船に乗り込み、船が陸から離れ始める。

「コルガー！もういい、早く来い！」

フレドリクソンが叫び、コルガーは追手を振り切るように船着き場を走り出した。彼の足はどんな駿馬より速い。船と船着き場の間の海を飛び越え、コルガーは甲板に着地した。

「おまたせ！」

「よし、野郎ども、出港だ！！！」

フレドリクソンが叫び、乗組員がオールを漕ぎ、船は沖に向かって走り出す。目の前には果てしなく広い海がどこまでも広がっている。その向こうにヒベルニアがあると思うと、ヨイクの胸は震える。

「撃て撃てー！！」

アラン伯爵の追手が船に向かって射撃を始め、ヨイクとユアンは身をかがめて短銃で応戦する。兵士たちの撃った弾は船の手すりやオールにいくつか穴を開けたが、ヨイクの反撃は隊長の軍靴に見事に命中した。隊長は足の甲を抑えて地面に転がり、兵士たちは上官が負傷したのをいいことに銃を下して逃亡者たちに大きく手を振った。ハンカチを振っている者もいる。

「じゃーーなーーー！！」

船尾の手すりの上に立ち、コルガーは笑顔で両腕を振った。船はぐんぐんと進み、やがて船着き場の兵士たちは豆粒のように小さくなった。

「アイルランド人って、いいだろ？」

コルガーが手すりの上から誇らしげに微笑み、仲間たちはくすりと笑った。

「さて、いよいよね！」

ヨイクは仲間たちの顔を見回した。ポーカーフェイスのユアン、急に緊張した面持ちのヒリール、いつも通り穏やかで、けれどどこか悲しげな顔をしたギーヴ。

「目指すは、ヒベルニア！！」

翌日のランズエンドの新聞には彼らの記事が似顔絵付きで掲載さ

れた。そのことを彼らが知るのはヒベルニアから戻った後のことで、ヨイクの本がランズエンドの書店で異常な人気を博した理由をユアンが調べなければ、ひょっとしたら知らないままだったかもしれない。領主を懲らしめ、町を救った立役者として、彼らは永く語り継がれることになるのだった。

6．最後の乗客

「お願い！」

ぱん、とギーヴは整った鼻筋の前で両手を組み合わせた。

ランズエンドを出発した日の夕刻、昨夜の無理がたたっては危ないから早めに錨を下して休もうと相談していたユアンとフレドリクソンのもとにやって来るなり、ギーヴはそう言った。ユアンは目を眇めた。

「ランズエンドが最後の寄港地だと言ったはずです。水も食料も十分あるので、今後寄港や上陸の予定はありませんよ」

フレドリクソンも宥めるように頷く。

「そうですぜ、猊下。それに、こういった黄昏時に、港でもない岬に船を寄せるのは危険です。座礁って聞いたことあるでしょう、海の中の岩に船底を食い破られるんですぜ」

船の持ち主と航海のプロフェッショナルに諭されてもギーヴは食い下がった。

「じゃあ、ちょっと小舟を出してくれるだけでいい！お願い！どうしてもあの岬に用事があるんだ！このとおり！」

ユアンとフレドリクソンは困り顔を見合わせた。

「猊下、理由をおっしゃって下さい。それによっては明日の朝に」

「明日の朝じゃ困るよ。君たちはご婦人に野宿しろって言うの？も

ういいよ、分かったよ、自分で何とかするよ……」

ギーヴはがっかりと肩を落として踵を返し、操舵室を立ち去る。ユアンとフレドリクソンは彼を追いかけて甲板に出た。ギーヴが船を寄せろと主張した岬はメルセデス号の左手にそびえる断崖絶壁だ。グラスゴー大聖堂の二倍の高さの崖の上には黄色の草が生えていて、白い羊の群れが放牧されている。

「みんなそろってどうしたの？」

船尾の方から歩いて来たのはヨイクだった。西の空の雲が朱色に染まっている。ヨイクが夕暮れに空を眺めるのが好きなことをユアンは知っている。

「猊下があの岬にどうしても用があるんだと」

ユアンは断崖絶壁を指して言った。ヨイクは首を傾げて訝しんだ。

「あんな高い所に？何で？」

ユアン、ヨイク、フレドリクソンの視線が集まり、ギーヴは言いにくそうに目を泳がせる。

「もうひとり、この船に乗りたがってる人がいる……みたい」

「はい？」

三人がギーヴに向かって顔をしかめた時、急に船が揺れた。フレドリクソンがギーヴを、ユアンがヨイクを支えたが、揺れは一向に収まらない。それどころか、船は大きく揺れながら旋回し、断崖絶壁の麓へ走り出した。

「せ、船長！船が勝手に！舵が利かねえです！」

操舵室からフレドリクソンの右腕が叫び、再びギーヴに視線が集まる。

「……猊下？！」

「大丈夫。座礁なんてしないから、心配しないで」

ギーヴはきっぱりと言ってフレドリクソンから離れ、甲板の手すりにつかまった。

「この揺れ、何事？」

船内からコルガーと彼に支えられたヒリールがやって来た。

「俺もヒベルニアへ行く覚悟が決まるまでずいぶんかかったから。彼女もきっとそうだったんだよ」

「はい？」

ユアンは訝るコルガーの肩に手を置いた。

「諦めよう」

「あの方ぁ一体、何者なんだ？」

いつも豪胆なフレドリクソンさえ笑顔をひきつらせ、ひとりでに走る船を気味悪そうに見下ろしている。そして十分後、船は座礁することもなく、断崖絶壁の下でピタリと止まったのだった。

船が崖の下に着くと、ギーヴはコルガーに崖を登るように言った。

「行けば分かるよ」

ギーヴの言葉に素直に従い、コルガーは強風が吹きすさぶ中、断崖絶壁をよじ登った。グラスゴー大聖堂の鐘楼を登るより簡単で、足場を探しながらひょいひょいと登っていくと、頂上には一人の老人が立っていた。灰色の修道着をまとい、大きな旅行鞄を手にした背筋の伸びた白髪の女性だった。コルガーはその人に目をとめるなり、彼女に駆け寄って抱きついた。

「ばあちゃん!!」

「久しぶりね、エド!」

シスター・アンジェラの温かい胸に顔をうずめ、コルガーは目を閉じた。アンジェラの優しく懐かしい声やにおいがコルガーの心を満たす。骨ばった指に髪をなでられ、コルガーはそのまま眠ってしまいたい衝動に駆られた。

「顔を見せて頂戴。――まあ、たったの十日間でたくましくなったこと」

コルガーの顔を自分の胸から離し、アンジェラは嬉しそうに微笑んだ。

「いろいろあったもん」

ばあちゃんと間違えられて寝ぼけた猊下に抱きつかれたこともあるんだから、という言葉が喉まで出かかったが、コルガーはそれを飲み込んだ。あの時は何とも思わなかったのに、アンジェラにそのことを隠した途端に不思議と胸がときめいた。あれはそう、誰も知らない、自分だけの秘密の思い出だ。

コルガーはアンジェラを両腕で抱き上げ、断崖絶壁を飛び降りた。二人の身体は淡い緑色の光に包まれ、ゆっくりと船の甲板に着地した。ヨイクやユアンや乗組員たちは夢でも見ているような顔で一部始終を見守っていた。

「やあ」

ギーヴがそう言って片手を上げると、アンジェラは茶色の目をきらりと光らせ微笑んだ。

「本当はランズエンドで合流したかったのだけれど、暴動が起きていると聞いてこちらで待っていたの。あなたなら見つけてくれると思ってたわ。こんな名もない岬にいても、昔、私が家出した時みたいに。あの時のこと、覚えてるでしょう？」

二人は互いに歩み寄り、しばし見つめ合った。コルガーはアンジェラの旅行鞄を手に提げたまま、ギーヴとアンジェラを離れた所から見守った。どうしてか、嫉妬に似た複雑な気持ちを抱いた。

「……その話はよそうよ」

ギーヴが情けない顔をして言うと、アンジェラはがっかりしたように一瞬目を伏せ、温かい微笑みと共に瞳を上げた。

「そうね。――マキシムに、会う覚悟ができたわ」
「そう言ってくるのを待ってたよ。一緒に行こう」
「ええ、六十年前の約束を果たしに」

二人を遠巻きに見ていたヨイクにコルガーは上着の裾を引っ張られた。

「ねえ、もしかして、あの方がシスター・アンジェラ？」
「うん。オレのひいばあちゃんのアンジェラ・グランディエ。後で紹介するよ」

頷くコルガーの耳に、ユアンも顔を寄せる。

「へえ、あれがマキシム・バルトロメの妻か。それにしても、猊下は彼女がここにいることがどうして分かったんだろうな」

コルガーは昔アンジェラが家出をしたときにギーヴがアンジェラの居場所をピタリと当てたという話を思い出した。アンジェラはこう言っていた。「ギーヴ猊下には、まだまだ秘密があるんだと思うのよ。私たちにさえ明かしていない秘密の力が」

ヨイクはお手上げという顔で舌を出した。

「そういう話は専門外。考えないことにしましょ。あの男は私たちの理解の範疇を遙かに越える聖なる妖怪だもの」

ギーヴとアンジェラがこちらに目を向けたので、コルガーは曾祖母の前に出てヨイクとユアンを紹介した。

「ばあちゃん、民話学者のヨイクと書籍商のユアンだよ。――ヨイ

ク、ユアン、オレの曾祖母のシスター・アンジェラ」

アンジェラは背の高いヨイクとユアンを見上げ、二人に白い手を差し出した。

「初めまして。コルガーがお世話になっているそうね、お会いできて嬉しいわ」

「初めまして、シスター。ユアン・リプトンです」

「ヨイク・アールトと申します、どうぞよろしく」

ユアンはアンジェラの手を取って操舵室に招き入れ、カールにお茶を入れてくるよう目配せした。俺とは待遇が違いすぎるんじゃないのとギーヴがぼやいたが、まともに聞いてやる者はいなかった。

「リプトンさん、アールトさん。ヒベルニアへ船を出そうと言い出したのはあなたたちなんですってね。どうか、私も同行させていただけないかしら」

ユアンの引いた椅子に腰を下し、アンジェラは朗らかに言った。ヨイクとユアンは彼女の向かいに座り、身を乗り出すように異口同音に答えた。

「もちろんです！ぜひ！」

コルガーは操舵室の入り口に立って、ヨイクとユアンが興奮した目でアンジェラを見つめている様子を興味深く眺めていた。子供の頃から親しんでいたアンジェラが、マキシム・バルトロメの妻、クラシックの生き残り、と歓迎されているのは不思議な気分だった。

「どうもありがとう。皆さん、よろしくお願いしますね」

アンジェラはにこやかに周囲を見回した。操舵室の中や外に集まった者たちは彼女の穏やかな声に「こちらこそ」と返したが、ただ一人、ヒリールだけは黙したまま、操舵室の外からじっとアンジェラを凝視していた。

「ヒベルニアへ着くまでしばらくかかりますから、どうぞクラシックに関する話を聞かせて下さいね、シスター・アンジェラ！」

「ええ、もちろん」

喜ぶヨイクに目を細め、アンジェラはゆっくりとヒリールに視線を転じた。

「あなたも、私が一緒に行っても構わないかしら、可愛らしいお嬢さん？」

ヒベルニアのお姫様は突然話しかけられたことに驚き、それから頬を染めて床を睨んだ。

「べつに、いいけど」

「けど？」

「あなたは嫌じゃありませんか？」

「嫌？私が何を嫌がると？」

「だって、わたしはマキシム・バルトロメの孫です。マキシムおじいさまはあなた以外の女性と結婚して私の父を産ませたんです。あなたは、わたしのこと、嫌じゃありませんか？」

ヒリールは今にも泣き出しそうな顔でスカートの太腿のあたりをぎゅっと握りしめた。

「たとえ血のつながりがなくても、マキシムの孫なら、私の孫のようなものだわ。いらっしゃい、握手をしましょう」

アンジェラは愛おしげにヒリールを見つめ、骨ばった手を彼女に伸ばした。ヒリールは躊躇いながら操舵室に足を踏み入れ、アンジェラの手を握った。

「私はアンジェラよ。よろしくね」

「……わたし、ヒリール」

「そう、ヒリール。私の子も孫も曾孫も、コルガー以外はみんな死んでしまったの。だからあなたに会えてとっても嬉しいわ」

アンジェラは空いている方の手でヒリールの髪を撫で、頬を撫でた。ヒリールはとうとう泣き出し、アンジェラに抱きしめられてしまった。コルガーはほっと胸を撫で下ろしながら操舵室を出た。外は薄暗く、雲の向こうの太陽が地平線の彼方へ沈んだことが分かる。

「コルガー様、お風邪を召しますよ」

しばらく海を見ていると後ろから声がして、振り返るとリプトン家の優秀な執事が立っていた。コルガーは彼の顔を見てにっこりと笑った。仲間たちの世話をかいがいしく焼いてくれるこの老執事のことをコルガーはすっかり好きになっていたのだ。

「うちのばあちゃんのこと、よろしくな」

執事は控えめに微笑んだ。

「もちろんです。が、旦那さまがまた頭を抱えるでしょうね。あの方はランズエンドで食料や水を調達する際、予定外の乗客が多いと

嘆いていましたから」

「え、予定外ってオレだけでしょ？」

「そもそもの始めは旦那さまとヨイク様とギーヴ猊下の三人だけの予定だったのです。それが、まずヒリール様とシスター・アンジェラをお連れになるとギーヴ猊下がおっしゃり、コルガー様が同行することになり、それからもう一人……」

執事の言葉の途中で、操舵室からユアンが彼を呼ぶ声がした。

「はい！ただ今！――ではコルガー様、失礼を」

執事が立ち去ってしまい、コルガーは執事も大変だよなあと呟きながら船尾へ向かって甲板をぶらりぶらりと歩いた。すると、水平線のあたりに船影が見えた。この船の方へ迷わず走って来る。

「ついて来てるな……ロッキンガム」

コルガーはアヤやパーシヴァルの従える悪魔のことを思い出して顔をしかめ、コートのポケットから酒瓶を取り出してぐいっとブランデーを傾けた。

ギーヴは船室内を見回し、嬉しそうにしているアンジェラに向かって嘆息をついた。

「ちょっと狭いんじゃない？本当にコルガーと同室でいいの？」

アンジェラはコルガーと同室にしてほしいとユアンに頼み、自分の荷物をコルガーの部屋に運び込んでしまった。コルガーの部屋はもともとアンジェラを乗せるために作られていたためベッドが運び込まれており、ユアンはそこにハンモックをかけるようカールに命じた。ギーヴとアンジェラが待っていると、間もなく鼠色の毛糸の帽子を目深にかぶったカール青年が現れ、てきぱきとハンモックを設置して立ち去った。

「ええ、もちろん。それに血のつながった女同士ですもの。一緒のベッドで寝たっていいくらい」

ギーヴは自分の胸がどきりと跳ねるのを感じた。

「……本人から聞いたよ、あの子、本当は女の子だって」

コルガーに打ち明けられる前からギーヴはそれを知っていた。ウイスキー修道院を出発し、ハートフルな宿屋に泊った晩、ギーヴは夜中に目を覚ましたのだ。水音が聞こえてそっと目を開けると、いつの間にかパブから帰って来たコルガーが湯浴みをしていた。「おかえり」と声をかけようとしてギーヴは目を疑った。暗い部屋にぼんやりと浮かび上がる、暖炉の炎に照らされた柳のようにしなやかな白い肢体は凄烈なまでに美しかった。まるで女神のようだと思った。

「ええ、あの子は十六歳の女の子です。そうでなきゃ、女子修道院で生活できませんもの」

「本当のコルガー・バルトロメはあの子の二つ年上の兄なんだってね」

「そう、彼は三月地震で死んでしまった。エドは兄に成り替わって生きている」

アンジェラは真っすぐにじっとギーヴを見つめた。ギーヴはその目がコルガーにそっくりだと思った。二人とも曇りのない綺麗な目をしているのだ。

ギーヴはまぶたを下し、あの夜のコルガーの姿を再び思い浮かべる。それは欲望の炎を煽りながらも、ギーヴの信仰心をたまらなく刺激した。神々と共に崇めたいとさえ思った。

「――あの子は、人を殺したことがあるのかい？」

ギーヴの問いにアンジェラは眉をひそめて唇を引き結んだ。

「俺は心配だよ、あの子が」

コルガーは、にこにこ笑っていても、どこか危ういところがある。それに時々、ふっと悲しげな顔をしたり、刃物のように鋭い目つきで何かを見ていることがある。

「そうね。だけど私にはどうしてやることもできない。ただ、愛してやることしかできないわ。あの子の心の傷が癒されることを願って」

アンジェラは無念そうに目を伏せた。ギーヴも自分の無力を感じた。クラシックの象徴などと呼ばれ、名ばかりとはいえエディンバラ名誉司教猊下などと呼ばれ、立派な法衣など着ている自分が、たった一人の愛する血縁者の心を救ってやることもできないなんて、あまりに情けない。

「こんな時、己の無力を思い知るよ」

ギーヴはぽつりと弱音を零した。

7. 撃たれてもいい

「風が吹かねえ」

フレドリクソンの何度目かのぼやきにヨイクは頭を抱えた。彼の言う通り、シスター・アンジェラを乗せた翌日の朝からちっとも風が吹かず、船がなかなか進まないのだ。普段穏やかであっけらかんとしているフレドリクソンも、さすがにナーバスになっている。

日中は帆をたたみ、オールを使って船を漕いでいるが航程は順調に遅れており、ランズエンドを出発して七日目の明日の夜、ようやくヒベルニアへ続く海流へ到達する。明日は冬至、つまり、ヒベルニアへの道が開ける日だ。

「本当は余裕を持って到着したかったけど、まあ滑り込みセーフってとこね」

「ランズエンドを一晩で発ったのは正解だったぜ」

何日か羽根を伸ばすつもりだったランズエンドを早々に出港したのはアラン伯爵の軍隊に捕まりそうになったからだった。思わぬ幸運があるものだとヨイクは思った。

「まあまあ二人とも、なるようにしかならないんだから、落ち着こうよ」

操舵室の隅でぼんやりと紅茶を飲んでいたギーヴが笑う。人生において焦るということがめったにない男である。

「それもそうね」

ギーヴがフレドリクソンや航海士とトランプを始めたので、ヨイクは操舵室を出て甲板へ向かった。空を覆う雲は濃い灰色をしていて、辺りには冷たく重い空気が薄気味悪く沈殿していた。船尾に行くと先客がいた。

「いよいよ明日だな。冬至に間に合ってよかったよ」

ヨイクを目にとめ、手すりにもたれて酒瓶を傾けていたユアンが言った。ヨイクは彼の隣に立って水平線を睨む。

「ランズエンドを一晩で発ったのは正解だった、ってフレドリクソンが言ってたわ。アラン伯爵に感謝しなきゃね」

「そうだな。あのイカレ伯爵には酷い目に遭わされたが、おれはあいつのおかげであんたに巡り会えたわけだしな。おれにとっては幸運と不運を背中合わせにしたコインのような男だ」

ヨイクがユアンの顔を盗み見ると、彼は物思いにふけるかのように、微笑みをたたえて遠くを見ていた。ヨイクは目を閉じて波の唸る音と白いしぶきが船にぶつかる音だけをしばらく聞いていた。

「あのね、ユアン、機会がなくてずっと黙ってたんだけど」

ヨイクはおずおずと切り出した。

「私がグラスゴーであんたを助けたのは偶然じゃなかったのよね。あの時、私はハナからあんたに出資してもらいたくて、あんたに会いにグラスゴーを訪れていたの」

「……は？」

ユアンはぽかんと口と目を開いた。いきなり何を言い出したのかと問うような顔だった。

「私があの場に居合わせたのは本当の偶然だけど、私はあんたが大金持ちで変わりもののユアン・リプトンだって知ってたのよ。でなきゃグラスゴーになんて行かないもの」

ユアンは考え込むようにしばらく沈黙して頭をかいた。

「始めから話してくれないか？」

「私は十四歳の時にミシェルさんの日記の翻訳をした。ヒベルニアとクラシックに興味がわいたのもその頃だった。そして十五歳の時に父に連れられて出かけたエディンバラで、ミシェルさんの日記に登場するギーヴという人が、エディンバラ名誉司教だということを知った。彼に会いたくて、私は彼の研究会へ参加を申し込んだけれど願いは叶わず、その時、抽選に漏れた別の学者のパトロンから、あんたの名前を聞いたのよ。彼はグラスゴーの老商人で、私にこう言った。『俺の知り合いにユアン・リプトンって奴がいる。そいつなら、あんたの研究に金を出すかもしれない。何しろ愛読書が『ガリバー旅行記』だって言うから本物の変わりものさ』ってね」

「……老商人」

「ええ。私は路銀が底をつきかけた時、その老商人のことを思い出してグラスゴーへ向かったの。私たちが出会ったあの日、あんたは商談に向かっていたでしょう。その相手は、この私よ」

ユアンは酒瓶にコルクを詰め込み、再び黙りこんだ。三年前の記憶を思い出そうとしているようにも見える。

「あの日の商談は……きっとおれが喜ぶ話だと言って知己がセッティングしてくれた商談だった」
「うん。その知己っていうのが、私にあんたのことを教えてくれた人。確か、スコットって人じゃなかったかしら。彼が私のためにあんたを呼び出してくれたのよ」

ユアンは水平線へ目をやってしみじみと言った。

「そうか、あの商談のことをずっと気にしていたんだ。そうか、あんただったのか」
「ま、今となってはどうでもいいことだけどね。あんたと私は、たとえあそこで出会わなくても、きっとどこかで出会う運命だったんじゃないかしら」

ヨイクはユアンの横顔を見上げ声を立てて笑ったが、ユアンは笑わなかった。

「ヨイク」

突然、ユアンがヨイクの手をつかんで彼女を引き寄せた。ヨイクは自分の頬がユアンの胸にぶつかるのを感じ、彼の顔を見上げた。その瞬間、ユアンの顔がヨイクに覆いかぶさってきて、逃げる間もなく唇が重なった。

「ユ、ユアン？！」

ヨイクが顔を背けると、ユアンはヨイクの波打つ金髪の中に手を入れて彼女の頭と腰を引き寄せた。再び口づけられ、唇をこじ開けられて、ヨイクは混乱しながらユアンの胸を押し返す。だが彼はび

くともせずに、差し入れた舌でヨイクの口の中をゆっくりと撫で、自分の唇でヨイクの下唇を噛んだ。ヨイクは思いがけずくらくらした。こんなことをされたのはもちろん初めてだ。今までのユアンは泥酔している時でさえ紳士だった。

ヨイクは自由の効く手で腰の短銃を抜いた。何かの拍子で引き金を引かないように注意しながら、その冷たい銃口をそっとユアンの頬に押し当てる。ユアンは静かに唇を離し、ヨイクの瞳と短銃を見比べた。

「……震えてるぞ」

唇は離れたのに、ユアンの吐き出した息が自分の口の中に入ってくる。吐息で口づけされているような気がしてヨイクは顔を背けた。書籍商の服からは紙とインクの匂いがした。

「や、やかましい。それ以上のことがしたかったら、それなりの覚悟が必要よ。わ、私には婚約者がいるんだから」

ヨイクは小刻みに震える指を引き金に近づけた。ユアンは平然と、けれども熱い瞳でヨイクを見下ろしている。彼の濡れた赤い唇が何とも言えず艶めかしく、ともすれば膝の力が抜けてしまいそうだった。

「弾は一発だろ。あんたとやれるなら撃たれてもいい。下半身と頭以外にしてくれ」

「何言ってんのよ！ユアンのばか！」

頭に血が上ったヨイクは渾身の力で膝を蹴り上げ、ユアンが股間を押さえてその場に崩れ落ちると、床に向かって短銃の引き金を引

いた。ばん、とユアンの頭のすぐ横に弾丸が撃ち込まれる。

「い……いくら何でも、む、無茶苦茶だろ……」

「うるさい！今度やったら殺すわよ！」

ヨイクは自分の胸を抑え、大股で甲板を立ち去る。途中でカールという大男と鉢合わせたが、顔を見られたくなくて、ヨイクは俯いたまま彼の横を通り過ぎた。

8．美味い酒に釣られる2

コルガーが寝室に戻るとアンジェラは本を読んでいた。彼女がすでに休んでいると思いそっとドアを開けたコルガーは、アンジェラの顔を見てうっと声を上げた。

「まあ、なんて失礼な子でしょう。今夜こそ一緒に寝ようと思って待っていたのに」

「そう言うと思って、わざわざ遅い時間に戻ってきたんだよ」

時計は深夜一時を指している。先ほどまでカールを相手に厨房でウイスキーを飲んでいたコルガーは後ろ手で扉を閉め、諦めて寝支度を始めた。アンジェラが乗船してからずっと彼女の一緒に寝ましょう攻撃から逃げ回っていたのだが、ついに年貢の納め時がきたようだ。

「明日にはヒベルニアへ着くんですって」

アンジェラは世間話のように気軽に言って、コルガーの脱いだ上着を壁に掛けた。

「……へえ」

ヒベルニアに着く。それはコルガーにとって決して感動的なものではない。コルガーの目的はヒベルニア王マキシムに会うことだ。彼に会い、なぜ三月地震が起きねばならなかったのかを問い詰め、家族が死ぬことになった理由をはっきりさせたい。それが自分にできる家族への精一杯の弔いだとコルガーは信じている。

コルガーは仲間たちがヒベルニアを目指す理由を頭の中に浮かべる。ギーヴとアンジェラは六十年前の約束を果たすため、ヨイクとユアンにとっては研究のため、ヒリールにとっては帰郷だ。みんな、なんて穏やかな目的を持って明日を迎えるのだろう。コルガーは自分自身の凶暴さに一瞬嫌気がさした。

「ばあちゃん、マキシムに会うの、まだ怖い？」

コルガーが訊ねると、アンジェラは意外そうな顔で曾孫を顧みた。二週間前、アンジェラは「変わってしまったマキシムに会うことも、変わってしまった自分を彼の前にさらすことも、彼の築いた家庭を目の当たりにすることも怖い」と言っていた。六十年も約束を先延ばしにしてきたことを後ろめたく思ってもいるようだった。

「そうね、怖いわ。だけど覚悟を決めた」

きっぱりと告げてアンジェラはベッドに入った。コルガーもその隣に足を入れる。

「ばあちゃんにはオレが付いてるぜ。もしもマキシムがばあちゃんを苛めたら、絶対にオレが守ってやる」

コルガーは息まきながらランプの火を消した。慈しみ深い闇とベッドに身をゆだね、コルガーは目を閉じた。アンジェラの体温に心地よい眠気を覚えた時、アンジェラの指がコルガーの前髪に触れた。

「あのね、この間は言わなかったけど、私、もうひとつ、怖いことがあるの」

怖いと言いながら、アンジェラの声は楽しそうだった。

「え？何？」
「心の天秤が傾きを変えてしまうこと」
コルガーは何のことやらさっぱり分からなかった。
「六十年前の私はマキシムのことしか見えていなかった。マキシムは太陽の光を浴びて輝く英雄で、日陰で昼寝している猊下なんて、ちっとも魅力的に見えなかったの」
コルガーの胸がどきりと鳴った。
「でも、今はどうか分からないわ。私は離れ離れになってからもずっとマキシムを愛してきたけれど、彼に会った途端、変わってしまった彼に幻滅して愛情がなくなってしまうかもしれない。そして、もっと素敵な誰かさんに恋をしてしまうかもしれない」
八十歳の曾祖母からこんな話を聞くのは何故だかいけないことのように思えた。コルガーはどきどきと高鳴る胸を抑えて暗闇の中のアンジェラを見た。
「ば、ばあちゃん？！」
「おかしなことを言ったかしら？人はいくつになっても恋をするものよ。たとえ曾孫がライバルになってもね」
アンジェラは手を伸ばしてコルガーを抱きしめた。コルガーは眩暈を感じた。目を開くと天井にぶらさがったハンモックがぐるぐると回っていた。
「ら、ら、らいばる？！お、おばあちゃん、わたしは別に……！」

「さあエド」

アンジェラはコルガーの本当の名前を呼んだ。

「もう寝なさい」

コルガーの本当の性別を知り、彼女を本名で呼ぶのはアンジェラや修道院の女たちだけだ。コルガーは居心地の悪い想いで目を閉じたが、一向に眠くならない。

「ねえ。ばあちゃんが家出した時、猊下と何があったの？」

アンジェラを船に乗せた際、ギーヴは「その話はよそう」と言って情けない顔をしていた。アンジェラは茶色の目をきらりと光らせ、片目を閉じた。

「うふふ、秘密よ」

アンジェラはコルガーの頭を撫で、壁の方を向いて眠ってしまった。コルガーはアンジェラやギーヴのことを考え込んでしまい、なかなか寝付けなかった。

「だめだ」

しばらく悶々と寝返りを繰り返していたが、アンジェラの眠りの妨げになるかもしれないと思い、コルガーはベッドを抜け出した。寝間着の上に上着を羽織って部屋を出て厨房に向かう。こんな時は酒だ、しかもブランデーだ。コルガーは頭の中で繰り返されるアンジェラの言葉を振り切るように廊下を進み、厨房の前でぴたりと足を止めた。中から人の声が聞こえたのだ。

「おれを信用できないという気持ちは分かる」

ユアンの声だ。ものすごく不機嫌そうだった。

「隠さなくてもいいさ、おれがいつ裏切るか、不安でたまらないんだろう？」

コルガーは混乱した。ユアンが裏切る？相手の声は小さすぎて聞こえない。ユアンと話しているのはヨイクだろうか？それともフレドリクソン？いいや、二人とも声だけは大きい。となると、執事か別の使用人か。どちらにせよ、室内には不穏な空気が漂っているようだ。

「はっはっは！手厳しいな！だが、約束は約束、そして雇い主はおれだ。ヒベルニアに着いたら、おれの命令通りにしろ。じゃあな」

ユアンが扉に近づいてくる。コルガーは飛び上がってその場から逃げ出した。足音を忍ばせて無茶苦茶に走っているうちに、うっかり女性陣の寝室の前まで来てしまっていた。コルガーも本当は女性なので別段やましいこともないのだが、誰かに見られたら面倒だ。

「あれ、コルガー？」

「ぎゃあ！」

真後ろから声をかけてきたのはギーヴだった。ろうそくを持ったヒリールも一緒だ。そういえばギーヴとヒリールがフレドリクソンや航海士と操舵室でトランプに興じているとカールが言っていた。ヒリールの船酔いの良い気晴らしになるようだとカールは喜んでいたが、まさかこんな時間まで遊んでいたとは。

「どうしたの？こんなとこで」
「べ、べ、別に！！」

力いっぱい叫んだところで、コルガーは再び眩暈を覚えた。健康には自信があるのだが、月経が近いのかもしれない。よろめいた身体をギーヴに支えられ、コルガーは情けない気持ちになった。こんな時、決まって思い知るのだ。どんなに男になろうとしても、結局は本当の男にはなりきれないということを。

「顔色が悪いね、部屋まで送っていくよ。じゃあね、おやすみ、ヒリール」
「おやすみなさい、ギーヴおじいさま。コルガー、お大事にね」

ヒリールが機嫌良く自分の部屋に入るのを見届け、ギーヴはコルガーを促して歩き出した。船内はしんと静まり返っていて、波の音と船がきしむ音だけが聞こえた。途中でユアンの部屋の前を通ったが、彼の気配はなかった。また操舵室にこもっているのかもしれない。

「俺は酒を飲めないから分からないけど、こういう時って飲まない方がいいのかな」

黙って歩いていたギーヴがつぶやいたのは、彼の部屋の前にさしかかった時だった。

「はい？」
「俺の部屋に、ランズエンドで買った良いブランデーがあるんだけど、飲む？」

コルガーは突然元気になった。

「ブランデー?!よっしゃ!!……って、なんで猊下が酒なんか」

「だって君、美味い酒を飲ませてあげるよって言われたら、誰にでもついて行くんでしょう」

「……ジャックのことまだ言ってるんですか」

「君と話したかったんだ。おいでよ」

とろけるような笑顔で誘われ、コルガーは思わず頷いてしまった。ギーヴは笑みを深め、コルガーの手を引いて部屋の中に少女を導いた。ギーヴの部屋はコルガーの部屋と同じくらいの広さで、内装もほとんど同じだ。コルガーはどきどきしながら彼のベッドに腰掛けた。

「二人で話すのはグラスゴー以来だね」

目を細め、ギーヴはコルガーにグラスを差し出す。てっきり食堂から拝借したものかと思ったら、新品のベネチアングラスだった。これもランズエンドで買ったのだろうか。ひょっとしたら、彼は随分と前からコルガーと話そうとしていたのかもしれない。

「……久しぶりな気は、します、猊下と話すの」

「うん、久しぶりだ」

「お久しぶりです」

「お久しぶりです」

ギーヴはブランデーの瓶を手にコルガーの隣に腰を下した。椅子が無いのでベッドに並んで座る以外に方法はないのだが、コルガーは急に緊張した。冷たい冬の空気を介してギーヴの体温が伝わって来るような気がする。

「どうぞ」

ギーヴがブランデーの瓶を傾ける。コルガーは手の中のグラスに素晴らしい芳香の液体が注がれるのをうっとりと見つめた。

「あ、すみません、猊下」

ブランデーに夢中になっていたコルガーははっと顔を上げる。楽しそうにコルガーを見つめていたギーヴと目が合った。慈しむような緑色の瞳はどこか悲しげで、それでいて扇情的だった。

「げ、猊下は何か、紅茶とか、オ、オレ、厨房に取りに行きます！」

ギーヴは腰を上げかけたコルガーを制止し、ベッドについた両腕で支えるように上体を後ろにそらした。

「俺はいいよ。それより、早く飲んでみて」

そんなに見つめられては飲みにくい。コルガーはギーヴの視線を意識しながらブランデーを一口含んだ。

「……美味しい」

「ああ良かったあ。結構高かったんだけど、そんなに美味しくなかったらどうしようって心配してたんだ。俺は味見もできないし、まあ、できたとしても味なんて分からないんだけど」

ギーヴはほっと息をつき、のんびりと笑った。コルガーも緊張が解けて笑ってしまった。ああ、久しぶりに彼のテンポに巻き込まれるのは、なんて心地がいいんだろう。

「猊下」
「うん？」
「オレが女だって、気が付いたのはどうしてですか」
コルガーは自分の胸を見下ろした。布をきっちり巻いて潰しているので、どう見ても平らだ。なぜバレたのだろう。ギーヴは言いにくそうに口を開いた。
「ハートフルな宿屋に泊った夜、君、湯浴みをしてたでしょう。次の日、俺が熱を出したのは君のせい。俺はこの六十年、刺激の少ない生活をしてきたから」
コルガーは記憶を探り、その夜のことを思い出した。パブで飲んで帰り、眠っているギーヴの横で湯浴みをした。彼が眠りこんでいると思ってやたら堂々と髪や体を洗ったものだったが……。
「の、覗いてたんですか？！」
コルガーは思わず寝間着の胸元を手で押さえた。
「人を覗き魔みたいに言わないでよ。水音で目が覚めて、たまたま見ちゃったんだ。……十分間くらい」
「それっ、全然たまたま見ちゃったレベルじゃないしっ！！」
ショックだった。コルガーは思い切り落ち込んで顔を両手で覆った。恥ずかし過ぎる。ひど過ぎる。泣きそうだ。
ところが、打ちひしがれるコルガーの隣で、ギーヴはのんきにのたまった。

「俺はこう見えて百九歳だけどさ、やっぱり、色々と邪まなことを考えてしまうよねえ」
「知るか！！ってか考えるな！！」
「いいじゃない、男の宿命だもの」
「オレはあなたの兄の曾孫ですよ。ましてマキシムと猊下は双子でしょう。つまりオレにとって猊下は直系の先祖に等しいってことです。人の道にはずれます！」

自分で言った言葉に、コルガーの胸はずきんと痛んだ。

ああ、そっか、だめなんだ。この人を好きになっては。どうしてもっと早く、思い当らなかったのだろう。取り返しがつかなくなる前に、気が付けばよかった。

「ああ、そっか」

ギーヴも間の抜けた声で言った。

「それは、ちょっと、びっくりだな。遠い親戚だと思ってたのに、そっかあ、うっかりしてた」

彼は俯いてゆっくりと頭をかき、それから顔を上げて微笑んだ。

「ともあれ謝るよ。このブランデーに免じて許して下さい、コルガー様」

ギーヴはブランデーの瓶を目の高さに掲げ、冗談めかしてははーっと頭を下げた。コルガーはぎこちなく笑顔を作り、空のグラスを差し出した。胸の奥がぎゅっと押しつぶされる。

「……しょうがねえなあ」

色つきガラスの器に注がれたブランデーを口に含み、これまで生きてきて感じたことのなかった切ない思いとともにそれを飲み下す。そういえば、いつかギーヴがコルガーに訊ねたことがあった。君には苦手なことがあるのか、と。コルガーはこう答えたのだ。

――そりゃありますよ。例えば……諦めることとか。

「――そういえばさっき銃声がしたでしょう、あれ、ヨイクだったらしいよ」

ギーヴの声にコルガーは現実に引き戻された。何時間か前に甲板から銃声が聞こえ、ちょっとした騒動になったのだった。様々な憶測が飛び交っていたのだが、犯人が判明してみれば、コルガーはなるほどという気分だった。

「……誤発砲か何かですか？」

「俺も詳しいところは分からないんだけど、ヨイクとリプトン君が喧嘩をしてたってカールが言っていて、見張り台にいた子もヨイクが怒鳴ってるのを聞いたとか何とかって。どうしちゃったんだろうね、もうすぐヒベルニアに着くっていうのに」

コルガーは先ほど盗み聞いたユアンの話声を思い出した。不機嫌そうな低い声で彼は言っていた。

――隠さなくてもいいさ、おれがいつ裏切るか、不安でたまらないんだろう？

「もしかしてユアンは……」

「え？」

「……な、なんでもない！」

コルガーは慌てて首を振った。ユアンが何か企んでいるとは思えなかったし、不確かな情報を軽率に口にするのは憚られた。だが、もしもユアンが妙な動きをすれば黙っているつもりはないし、本人を問い詰めるチャンスがあればそうするつもりだ。

話が途切れるとしばらく沈黙が続いたが、コルガーはその沈黙が嫌ではなかった。何も聞かずに黙ってそばにいてくれるギーヴの存在が有難いとさえ思った。

「――家族の話、聞いてもらえませんか」

コルガーが思い切って切り出すと、ギーヴは緊張した面持ちで彼女へ目を向けた。無理に聞き出す気はないようだが、耳を塞ぐ気もないようだ。

「君が話したいことなら、何でも、いくらでも聞くよ」

コルガーは心を決めた。

9．償い（前書き）

残酷なシーンがあります。ご注意下さい。

9．償い

コルガーはギーヴから視線を外し、白い壁を見つめた。狭い個室の中には装飾のひとつもない。アンジェラは持参した風景画を一枚壁にかけていた。それは古ぼけた水彩画で、青い空と海と緑の野が描かれた爽快な絵だった。

「父は……」

三月地震で死んだ父の顔を思い出そうと、コルガーは目をつぶった。記憶は信じられないほどおぼろげだった。

「父は男爵でした。領地は狭くて収入は多くありませんでしたが、父は二人の嫡子とオレたち三人の庶子の教育費だけは惜しまず、夜会や美食や葉巻や最新のファッションに背を向けて、いつも子供たちと一緒にいてくれました。今から思えば、父が社交界からどんな風に思われていたのか心配にもなりますが、とにかくオレたちは父がいつでもそばにいてくれることが嬉しかったんです」

話し始めると、父と過ごした様々な思い出が脳裏に蘇り、胸に温かいものが広がった。コルガーは変わりものの父が好きだった。彼に二度と会うことができないことが改めて悔やまれる。彼はすでに過去の人だ。そして母はもっともっと過去の人だった。

「母は、オレが十歳の時に亡くなりました。病気です。父は何度も医者を呼んで母を診させようとしましたが、母は断固として医者に会いませんでした。たった一度だけ、ようやく母が医者を寝室に招き入れた日の翌朝、母は亡くなりました」

母との思い出はもっと曖昧だった。思い出したのは、明るい日差しの降り注ぐ緑の庭で、母と兄と妹と昼寝をしたこと。妹の頭にバッタがとまって大笑いした。

「母が亡くなっても、オレたちはすぐに立ち直りました。母を愛していなかったからじゃありません。母を愛していたからこそ、オレたちは前を向いて歩かなきゃならなかったんです。母のくれた命を繋ぐために」

家族全員で母の死を悼み、悲しみ、そして手を取り合って立ち上がった。父は兄を励まし、兄はコルガーを励まし、コルガーは妹を励ました。

「三月地震で父や兄が死んだ時もそうでした。父も兄もいつだってオレを大切にしてくれていて、オレの幸せを願ってくれていた。だから、彼らが死んでしまっても、オレは生きていかなきゃならない。悲しいけど、悔しいけど、心細いけど、オレは踏ん張ってみせる、何が何でも、絶対に。――だけど」

ぐっと握った拳が膝の上で震える。眼球が、心臓が、血液が、脳が、胃が、腸が、肺が震える。

「だけど、ずっと行方不明になっていた妹の死体を河原で見つけた時、オレは生まれて初めて、自分が生きていてはいけない気がしたんです」

三月地震は世界を変えた。

目に見える街や建物や地形を変えたのはもちろん、天変地異は社会を変え、家族を奪い、友達を消し去り、あらゆる日常を壊し、いくつもの未来を滅ぼした。

三月地震の発生から三日間、コルガーは昼も夜も妹を捜し歩いた。父や兄の遺体が見つかっても、妹の消息だけがつかめなかったのだ。彼女がどこかで生き延びていることを信じて、家の近所や公園や広場や彼女の友人の家を訪ねて歩いた。

捜すあてがなくなると、捜索範囲を広げ、彼女が絶対に立ち寄りそうにない繁華街にも足を伸ばした。ほとんど眠ることも食べることもなく、狂ったように妹を捜し続けるコルガーを止めるものは誰もいなかった。誰もが自分自身と家族のことに手いっぱいで、他人の不幸を思いやることなどできなかったし、コルガーのように離れ離れになり生死も分からない肉親を捜し歩く者は無数にいた。

疲労と絶望に苛まれ、とぼとぼと街を歩いていたコルガーに、あれはあんたの妹さんじゃないか、と男が声をかけてきたのは夕刻のことだった。男の憐れみに満ちた目を見た時、コルガーは心臓を冷たい刃で撫でられたような心地がした。だが、うまく回転しない頭が無理やり自分を騙そうとする。きっと妹はひどく疲れてぼろぼろになって、けれど生きて発見されたに違いない。

男の誘導で街を抜け、河原に下りた時には夕暮れが訪れていた。分厚い雲に覆われて夕日は見えなかったが、西の空が恐ろしいほど赤く染まり、丈の高い河原の枯れた草むらが寂しげな橙色に揺れていた。

あれだ、と男が指をさした。草むらの間に女の子の服の裾が見えた。見覚えがある。妹の服はコルガーが洗濯していた。

世界が遠のいていくのを感じた。

音を立てて、何もかもが壊れていく。

全身が心臓になったかのように全ての血管が脈打った。それなのに頭から血の気が引いて、体中の毛が一斉に立ち上がる。足が動かない。指先さえ動かせない。でも、確かめなければ。ひょっとしたら、あれは妹ではないかもしれないのだから。

コルガーは恐る恐る草をかきわけて歩を進めた。とうとう服の裾のそばに、靴を履いていない足が見えた。傷だらけで、土気色をしている。

それ以上見てはいけない。空っぽの頭の中に警鐘が鳴り響いた。見てしまえば己の世界の天と地がひっくり返り、正常な精神や、心の平穏や、十五年かけて築き上げた平凡な日常を失うことになるかもしれない。目に映るすべてのもの、この世に存在するあらゆるものの価値を見失い、それらを憎むことになるかもしれない。

いいや、見なければならない。コルガーは足をさらに踏み出した。あれは何かの間違いだ、妹ではないに決まっている。あの愛らしく明るい娘が、こんな屍になっているはずがない。絶対に違う。絶対に。一縷の望みに全てを託し、コルガーは最後の草をかきわけた。

目に飛び込んできたのは妹の苦しげな顔だった。目と口を大きく見開き、驚きと恐怖を顔に張り付けたまま彼女は絶命していた。彼女の服は切り裂かれ、さらされた小さな乳房や肉づきの薄い胴体やほっそりとした手足には痣や擦り傷がいくつも見て取れた。

「あれ、まさか本当にあんたの妹だったの?」

背後で男が笑った。笑い声が三人分であることに気がついても、コルガーは驚きも恐れもしなかった。

「あんたも同じようにしてやるよ。お姉ちゃんと一緒なら、妹も喜ぶだろ？」

男に肩をつかまれて草の上に押し倒され、別の二人の男に手足を押さえつけられる。赤い空を背に、男が覆いかぶさって来た。声を上げても、きっと誰にも届かない。わたしの知らない所で、妹はこんな目に遭っていたのだ。

「うわあああああああ！！！」

手足を押さえる男たちの腕を振りほどき、コルガーは目の前の男の首を絞めた。両手の十本の指に力を入れ続けると、男は苦しげに喘ぎ、顔をゆがませ、痙攣し、やがて動かなくなった。人を殺したのはもちろん初めてだった。それは考えていたよりずっとあっけなかった。

残った二人の男は数秒呆然としていたが、仲間が殺されたことに逆上したのだろう、すぐにナイフを抜いてコルガーに向けた。コルガーはしっかりと立ち上がり、血の涙を流しながら男たちを睨んだ。突き出された二本のナイフをよけ、それらを難なく奪いとって振りかざすと、男たちは青ざめた顔を見合わせて逃げ出した。死んだ男の遺体は川に流した。

「妹があんな目に会ったのに、妹を守るべきオレがのうのうと息をしているなんて間違いだ。オレ自身は父や兄や極光の女神に守られていたのに！大事な、たった一人の妹を、わたしは守れなかった！」

「コルガー、もうやめて」

「そればかりか、妹を失った悲しみ以上に、オレは自分が犯してし

まった過ちに恐れ慄いている！妹の墓の前に立っても、彼女のことを偲ぶより、オレがこの手で殺してしまった男のことばかり考えてしまう！オレはなんてひどい姉だろう！」

「コルガー！！」

ギーヴが強い力でコルガーを抱き寄せた。コルガーは自分が泣いていることに気が付き、しゃくりあげながらギーヴの身体にしがみついた。以前コルガーが手入れをしてやったギーヴの法衣は頬で触れると意外と硬くて、あの日よりも強くギーヴの匂いがした。コルガーはこんな時なのにひどく切ない気持になる。自分がどうして泣いているのか分からなくなりそうだ。

薄く目を開けるとコルガーが手放したグラスがベッドの上に転がり、白いシーツにブランデーの染みをつくっていた。どうしてか、なんて卑猥な光景だろうと思った。

「君はひどくなんかない。ひどくなんかないよ、コルガー。君はとてもとても優しいんだよ」

コルガーの髪を撫でながら、ギーヴが苦しげに言う。

「コルガー、君が楽になれる方法がひとつだけある」

耳にギーヴの息がかかる。コルガーはギーヴの法衣に顔をうずめたまま、濡れた睫毛を静かに上下させた。

「それは、許すことだ」

とん、とん、と幼子をあやすようにギーヴの手がコルガーの背中を優しくたたいた。

「妹を殺した男たちを許し、生き残った自分を許し、過ちを犯した自分を許す。許せるよう努力する。そうでなきゃ、きっと、幸せになれないんだと思う。自分や誰かを許せないということは、とても苦しいことなんだと思うよ」

コルガーはギーヴの胸で頭を振った。

「でもオレは、オレを許していいんですか？オレは許されていいんですか？楽になっていいんですか？」

「償いとは、苦しむことじゃない。罪を忘れず、人生を真っすぐに歩いて行くこと、それが償いだ」

すべてを許し、罪を忘れず、人生を真っすぐに歩いて行く。

コルガーはギーヴの腕の中で彼の言葉を丁寧に心へ書き留める。

少しだけ心が軽くなったような気がした。ギーヴはそれ以上何も言わず、コルガーの細い身体を抱き続けていた。

１０．極光の女神

ヨイクはじっと西の地平線を睨んでいた。甲板には冷たい風が吹いていて、ヨイクの身体は氷のように冷たくなっている。幾度も休憩をはさみながら、ヨイクはもう十時間以上そこに立っていた。一年で最も長い夜の終わりが近づいていたが、船をヒベルニアへ導く海流は一向に現れない。日暮れから宵にかけては、わくわくと瞳を輝かせた仲間たちが甲板で海流の出現を待ち受けていたが、いつまでたっても海に変化がないため日付が変わる頃には皆船内へ戻ってしまった。今甲板にいるのはヨイクとコルガーだけだった。

隣に立つコルガーがコートの中の上着に手を突っ込み、懐中時計を取り出した。銀色の蓋を開けると、針は朝の七時過ぎを指していた。夜明けまで、あと二時間あまり。

「なんて夜が長いんだろ」

はあああと大きなため息をつき、コルガーは手袋をした指先で時計の蓋を撫でる。寒そうにしているが、船内に入る気はないようだ。

「年季の入ったいい時計ね」

ヨイクは焦る気持ちを抑え、コルガーに顔を向ける。少年は唇の端を上げた。

「我が家に伝わる魔法の時計」

「魔法の時計？」

ヨイクは笑ったが、寒さでこわばった頬はうまく動かなかった。

「親父がおふくろにプロポーズした時、周りから猛反対されたんだって。うちの親父は名ばかりとはいえ男爵、おふくろは一般庶民、とても一緒にはなれない。しかも親父には婚約者がいた」

婚約者という言葉にヨイクはぎくりとした。

「結局、親父は婚約を解消できずに貴族の女の人と結婚した。だけど、親父とおふくろは揃いの時計を買って、こっそり教会に行って神様に祈った。『どうかこの人と同じ時間を歩ませて下さい』って。そうしたら、おふくろが兄を身ごもって、周りの人たちも親父とおふくろのことを認めてくれたんだってさ」

「いい話じゃない。私、好きよ」

コルガーはヨイクの短い返事から彼女の気持ちをくみ取ったのか、まるでギーヴのように柔らかく微笑んだ。

「大丈夫だよ、ヨイク。ヒベルニアへ向かう海流はきっと現れる」

ユアンもギーヴも操舵室へ戻る際、そう言ってヨイクの肩を叩いたが、コルガーにかけられた同じ言葉はヨイクの心にしっとりと沁み込んだ。不思議と信用に値するような気がした。

「夜明けが来ても　西を向いていればまだ夜だ
朝が来ても　目を閉じていれば真夜中だ」

突然、コルガーが歌い始めた。聞いたことのない歌だった。

「もし　太陽が昇らなかったら

東へ向かって走ればいい
僕と　世界の夜明けを見に行こう

夜の向こうには朝が
暗闇の向こうには光が
混沌の先には希望が
必ず僕らを待っている」

ヨイクがぽかんとしていると、コルガーは照れたように頭をかいた。

「子供の頃、親父に連れられて観に行ったオペラに出てきた歌だよ」

混沌の先には希望が待っている。ヨイクはその言葉を噛みしめ、コルガーの声に耳を傾ける。少年はヨイクを元気づけるように明るい声色で続けた。

「あのさ、オレ、三月地震で家族をみんな亡くしたんだ。だから九ヶ月前は、目の前が真っ暗で、その先の人生もずっとずっと真っ暗で、もう二度と楽しいことも嬉しいことも起こらないと思ってた。ギーヴ猊下と出会って故郷を出ることも、民話学者のヨイク・アールトと一緒に旅をすることも、君とこんな風に並んで話すなんてことも、全然、想像もしてなかった。だけど、オレは今、間違いなくここにいる。あの時は想像もしていなかったことが、現にここで起こっている。きっと、人生ってさ、本人の想像を上回るところにあるんじゃないかな」

コルガーは力強く言って笑い、暗い西の水平線を見つめた。

「今は見えなくても、必ず希望はあるんだ。喜びも、幸せも。きっ

とそうだ」

「あ！見て、ヨイク！」

コルガーが歓喜の声と共に北の空を指したのは八時半を過ぎた頃だった。灰色の雲から緑色の光が漏れている。極光（オーロラ）だ。ヒベルニアが近いせいか、この辺りの雲は薄いようだ。

「まあ！きれい！」

ヨイクが両手を顎の下で組み合わせた時、雲間から覗いていた緑色の極光がゆっくりと空を縦断し、海にぽとりと落ちてきた。形も大きさも人間そのものだった。

「……え？」

ヨイクとコルガーは目を疑った。口を開けてお互いの顔を見る。

「今のって……うえ！」

船が傾き、コルガーはヨイクを抱えて船の手すりから離れた。ヨイクはコルガーにしがみつき、急に荒ぶり始めた海面を見下ろした。頭上では雷が轟き、突然車軸のような雨が降り出した。風がごうごうと音を立てて吹き始める。時が来たのか。ヨイクは生まれてこの方、こんなに高揚したことはなかった。そして、こんなに恐れ慄いたことも。

「これは私の想像の範疇を越えるわ」

ヨイクは自嘲気味に笑い、平気な顔で辺りの様子を眺めているコルガーを大した玉だと感心する。グラスゴーで初めて会った時から、ただ者ではないと思っていたけれど。

「コルガー！ヨイク！」

操舵室からギーヴが走って来る。スピードが遅いとはいえ彼が走るのはよほどの有事だけだ。ギーヴの後ろからはユアンとヒリール、アンジェラもやってくる。皆ひと眠りして身支度を整えていたようだ。誰かが警鐘を鳴らすと、あちこちから船員が起き出してきて全員が持ち場についた。

「これは、いよいよってことよね！」

ヨイクが期待を込めてギーヴに訊ねると、ギーヴは神妙な顔で空を仰いだ。

「たぶんね。フレドリクソン、錨を上げて！」

長い髪を乱してギーヴが叫び、フレドリクソンが部下に指示を出す。錨が上げられ、帆が張られ、船はみるみるスピードを上げて走る。

「すごい！これがヒベルニアへ続く海流なのか?!」

少年のような笑顔で船の舳先に身を乗り出し、ユアンが感嘆する。それはあの夜、ヨイクを抱きしめて口づけした男とは思えないほど

子供っぽく、冒険小説が好きな彼らしい姿だった。

「――彼女が来てる」

ぎしぎしと音を立てて突っ走る船の上で、ギーヴがぽつりと言った。それは強風にかき消されそうなほど小さなつぶやきだった。

「彼女？」

ヨイクがギーヴに訊ねた時、見渡す限りの海面が淡い緑色に輝き、地平線まで昼間のように明るくなった。まるで、船が緑の光の上を航行しているようだった。

「正直、信じてなかったぜ、ヒベルニアへ続く海流なんてよ。常識的に考えて、ありえねえ。だが、これじゃあ、ヒベルニアへも続いてるわなあ」

情けない顔でフレドリクソンが笑い、他の船員たちも夢でも見ているような顔つきで船を操っている。アンジェラは悠々と風を受けて目を細め、気持ち良さそうにしている。その隣ではヒリールが身を固くして辺りの様子をうかがっていた。

「驚くのはまだ早いかもしれませんよ、船長さん、みなさん」

言いながらアンジェラが指したのは風を切って疾走する船の行く手の海面だった。ぼんやりとした緑色の塊が揺れる波の上に浮かんでいる。それは人の形をした光だった。

「人だ！面舵（おもかじ）！よけろ！」

フレドリクソンが操舵室に怒鳴ったが、人の形をしたものは船がよけるより速く宙に浮かび上がり、放物線を描いて甲板に着地した。コルガーはその人型の緑色の光を凝視し、なんて美しいのだろうと思った。

光は薄布のドレスをまとった長身の女性で、足首まで届く長い金髪を裸に近い官能的な肉体にさりげなく巻きつけていた。彼女は慈悲深く美しい瞳を一同に向け、最初にアンジェラに目を留めた。

――アンジェラ、天使の名を持つ娘よ、よくぞ私の元に戻ってきました。

瑞々しい唇からこぼれおちたのは鈴を振るような声だった。女のコルガーでさえどきどきしてしまうような色のある声だ。

アンジェラは甲板にさっと片膝をつき頭を垂れた。

「再びお目にかかれて光栄です、極光の女神」

――おまえも年を取りましたね。あれからどれほど時が経ったのでしょう。

「六十年だよ」

答えたのはギーヴだった。極光の女神ははっとしてギーヴを見つめ、それから眉をひそめて首を振った。それはまるで昔の恋人に再

会したような、甘く切なく苦しげな顔だった。

――ギーヴ、おまえに言うことはありません。

ギーヴは憐れむような目で極光の女神を見つめた。

「こんなに遅くなったことを怒っているなら謝るよ。ごめんね、エド」

謝罪するギーヴに目もくれず、極光の女神はヒリールとコルガーに歩み寄った。二人ともびっくりして身を固くし、直立不動だった。

――無事の帰還を祝福しましょう、海神の名を持つ私の娘、ヒリール。

極光の女神はヒリールの髪をそっと撫で、それからコルガーの頬に口づけした。

――ああ、やっと会えましたね、私と同じ名を持つ愛しい娘、エド。あなたが生まれて十六年、ずっとあなたを見守ってきたのですよ。

コルガーは唇を噛んだ。何者かが自分を守ってくれていたことは、子供のころから知っている。三月地震で死んだ兄でも、暴漢に殺された妹でもなく、自分だけを守ってくれていたことを。

「あなたは何故、兄でも妹でもなく、わたしを助けてくれるのですか？」

――あなたはマキシムとアンジェラの子孫の中でも特にアンジェラに似ていました。何より、あなたは私と同じ名を持っている。特別

に愛しいのはおかしなこと？

「じゃあ、もし……もし妹の顔がアンジェラに似ていて、妹の名前がエドだったら、妹を助けてくれたんですか？！わたしたち姉妹は、たったそれだけのことで生死を分けられたんですか？！」

――……そう、あの子は死んだのですね。

極光の女神は長い睫毛を伏せて唇を引き結んだが、その声は氷のように冷たかった。コルガーは身体の横でぎゅっと拳を握った。目の前にいる人外の美女に返す言葉がなかった。極光の女神のおかげで自分は生き延びることができた。それなのに女神を責め立てるのは、妹を守ることができなかった無力な自分の責任を転嫁するようなものだ。だが、こうも思ってしまう。――わたしは極光の女神のせいで、家族を失ったにも関わらず生き延びる羽目になった。

コルガーははっとして頭を振った。決して考えてはいけないことだ。

「コルガー」

彼女の偽りの名を呼んで、ギーヴがそっとコルガーの肩を抱いた。女神と同じギーヴの緑色の瞳はこの上がなく優しく、コルガーはギーヴの手にそっと自分の指先を重ねた。

「船長！ロッキンガムの船が急速に近づいてきます！」

叫んだのは見張り台の青年だった。すっかりお馴染みとなったロッキンガムの船が、メルセデス号の右側を少し遅れてやってくる。大砲の弾が当たるか当たらないかというかなり近い距離だ。甲板に

ジャックらしき姿が見えた。

――あの船には同胞が乗っているようですね。

極光の女神はほっそりとした指で肉感的な唇を撫で、思案するように言った。

「同胞？」

ヨイクが顔をしかめるとギーヴが応じた。

「彼女にとって、アザゼルやミスティックは同胞なんだよ」

――一緒に導いてやりましょう、おいでなさい、ヒベルニアへ。

女神が朗々と言い放つと、風雨は完全な嵐と化し、落雷があちこちに降り注ぎ、船が傾いて甲板に波が躍り込んできた。一同が慌ててつかまるものを探している間に極光の女神の姿は消え、海を輝かせていた緑色の光も消えて、船は再び夜の闇に包まれた。

「船長！舵が聞きません！船が何かに引っ張られてます！」

操舵室からの悲鳴を受け、フレドリクソンはヨイクの顔を見た。

ヨイクはギーヴを振り仰ぎ、そろって大きく頷きあった。ヨイクは叫んだ。

「いいのよ!!このまま流れに乗ってちょうだい!!」

嵐の空には真っ黒な雲がうねるように低く流れ、間もなく狂ったように霙が降り出した。吹きすさぶ風に逆らい、ヨイクは船首へ歩を進める。船体が上下に暴れまわるので、何度も転びそうになる。後ろからユアンがやってきた。高波を浴び、二人ともずぶ濡れだった。

「みんなは中に入った、あんたも入れ!海に落ちるぞ!」

背中にユアンの声がかかったが、彼を振り返るのが気恥ずかしくてヨイクは船首に一番近いマストの前でうつむいた。ヨイクは彼に口づけされてから今までまともにユアンの目を見られないでいる。

「……こうするから平気よ」

言いながらヨイクはびしょぬれのカバンの中から自分で綯った縄を取り出す。それを自分の腰に巻きつけ、マストにも巻きつけて結ぶ。頬を打つ霙が痛くてたまらなかったが、覚悟はもうできている。

「一秒でも早く見たいのよ、この、私自身の目で、――ヒベルニアを」

ヨイクは何もない真っすぐな西の地平線を見た。あの向こうにヒベルニアがある。夕日が沈んでいく様を見て、一体、何度ヒベルニアに焦がれたことだろう。そこへ、やっと、辿り着くのだ。胸が苦しくなるほどの感動を覚え、ヨイクは風や波しぶきの冷たさにも耐えられた。

「おれが何考えてるか分かるか?」

船の速度が上がり、ヨイクとユアンはマストにしがみついた。メルセデス号は急流を下るような速度で航行している。空も海も暗黒そのもので、その先に地獄があると言われても誰もが信じて疑わないだろう。

「知らないわよ」

「こんな嵐じゃ、あんたが引き金を引いても着火しないだろうなと」

「こんな時に何考えてんのよ！」

ユアンがくっくっと低く笑い、ヨイクは自分がからかわれたことに気が付く。霙が吹きつけていると言うのに顔や体がかっと熱くなる。昨日から彼に振り回されっぱなしなことに気が付き、ヨイクは思わず唇を噛んだ。ユアンは赤くなったヨイクをおもしろそうに眺め、それから眉と唇を歪めて前方へ視線を転じた。

「おれもあんたと同じだ。どんなに不幸になったって、誰に馬鹿にされたって、おれはおれが生きる意味と喜びが欲しい。あんた、カームスにそう言ったんだろ」

「カッコつけてみたけどね、本当はただの強がりよ。私だって他の女の子たちと同じように、夫から愛され、子供を愛し、平凡な暮らしがしたかった。――だけど、どうしてかこんなところまで来てしまったの」

波や風の音がうるさいせいで、二人はお互いの耳元で怒鳴り合っている。

「岐路に立つたびに、好奇心に負けていたから？」

「そうよ。本当は危険なことなんてしたくない、安全な場所で誰かに守られていたい。だけど私には見たいものがある。そのためなら、わが身が危険にさらされてもいいと思えるほど見たいものが」

やがて小石大の雹が甲板をぱらぱらと叩き始め、命あるもの全てを殺そうとするかのような、凍てついた風が吹き始めた。船は、時に立ちはだかる壁のような波を突いて進み、時に大波に持ち上げられて放り出されそうになった。いつ転覆しても、沈没しても不思議ではなかった。

「この目で見たいもの、知りたいこと、触りたいもの、匂いをかぎたいもの、肌で感じたいもの、聞きたいこと、そういうもののために私はここまで来たんだわ」

ユアンの顔を丸一日ぶりに見上げると、彼は興味深そうな目で彼女をじっと見下ろしていた。ヨイクは照れ隠しに指摘した。

「……で、何であんた、私がカームスに言ったことを知ってるのよ」

ユアンは珍しく目を泳がせた。

「……カームスに聞いた」

「でも、あの晩はあんた酔いつぶれてたじゃない」

メインマストがきしみ、その先端が嵐へもぎ取られていったその時、水平線の彼方に何かが見えた。ヨイクはふと祖母の言葉を思い出した。

――ヨイク、嵐よ。あなたの行く手には嵐が見える。

村を旅立つヨイクに一族のシャーマンであった祖母がそう予言した時、ヨイクは彼女に訊ねたのだ。嵐の向こうには何があるの、と。

――島よ。嵐の向こうに、光り輝く美しい島が見える。

暗黒の世界を切り裂くように、空から一条の光が差している。それはまるで、天が漏らした黄金色のため息のようだった。

その光の中に、島はあった。

「……ヒベルニアだわ」

ぽつんと低い呟きがヨイクの唇から漏れた。近づくにつれ、島とその周りだけに青空が広がっているのが分かる。こちら側は嵐の渦中なので暗いが、いつの間に夜が明けていたのだ。

「見ろ、太陽だ……」

嵐を抜け、雨と波に洗われた甲板に明るい光が差した。ヨイクもユアンも海へ落ちたように頭から爪先まで濡れていたので、九ヶ月ぶりに浴びた太陽の光は、気が遠くなるほど温かく優しく感じられた。

「太陽だ！太陽だ！太陽だ！」

嵐の中、必死で船を操っていた船員たちが歓喜の声を上げ、はしゃぎながら上半身の服を脱ぎ捨て、やわらかな日光を全身に浴び始めた。騒ぎを聞きつけて船の中からも船員たちがわらわらと出てくる。操舵室からはフレドリクソンも飛び出して来た。

「おおお、ヒベルニアだ！！ヒベルニアに着いたぞおお！！」
「あれがヒベルニアかよ！」
「まさか本当にあったとはな！」
「すげえよ、俺たち、御伽噺の主人公みたいだ！！」

歓声や笑い声が弾け、誰かが酒を持ち出した。船の揺れが落ち着き、甲板で即席の酒盛りが始まる。コルガーがフィドルのお手並みを披露し、ギーヴとアンジェラがそれに合わせて歌った。

「眩しいもんだな、こんな冬の太陽でも」

ワインの瓶を手にやって来たユアンに声をかけられ、ヨイクは我に返った。ヨイクは宴にも混ざらず、マストによりかかったまま太陽の恩恵を受ける小さな島をぼんやりと見ていたのだ。そこは緑豊かな楽園のようで、空に浮かぶまろやかな白い光は、小さな島を愛でるように甘く輝いている。

「そうね」

ヨイクは上の空で応じ、自分とマストをつないでいた縄を切って、濡れた髪を撫でつけた。ワンピースの水気を絞り、ブーツを脱いで踵を持ってひっくり返すと杯を傾けたように水が零れ出た。

「あ！しまった！」

ヨイクははっとして、斜めにかけた鞄を開けてカームスからの手紙を取り出した。婚約者からの便りは雨水にインクが流れてしまってすっかり読めなくなっていた。ヨイクは片手で額を抑えて空を仰いだ。研究に必要な覚書の類は船室に保管しておいたのだが、この手紙のことはすっかり忘れていた。

「あーあ、これじゃあ、もう何が書いてあったか分からないわ。まあ、分かったとしても、もう手遅れなのかもしれないけれど」

その時、嘆き悔やむヨイクの背後でポンと小気味のいい音がして、甘い芳香がふんわりと漂ってきた。振り返ると、ユアンがワインのコルクを抜きながら、後方に見えるロッキンガムの船と酒盛りに興じる船員たちを眺めていた。ずぶぬれの書籍商はヨイクの視線に気が付いて彼女を顧みた。

「これはヒベルニアへ着いたら開けようと思ってたんだ」

太陽の光の下でヨイクの相棒は少年のように笑った。

「昨日は悪かったな」

ユアンはそう言ってすまなそうな顔をした。

「……二度としないって約束するなら許すわ」

ヨイクの要求を鼻で笑い、書籍商はゆっくりとワインの瓶を傾けた。

1. ヒベルニア王マキシム

どこからか歌声が聞こえていた。

「過ぎた日々はただ懐かしく
振り返ることしかできないけれど
ただ心だけで　この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

アヤは身体を起こして暗い船室を見回した。数少ない小さな窓からは青白い月光が差しこんでいて、この土地の雲が晴れていることに何度目かの感動を覚える。日中に浴びた太陽の光が恵みなら、月や星の光は癒しだ。

「勝手に出歩くな」

パーシヴァルの低い声が反対側の壁際から聞こえた。ロッキンガムの商船には個室などないので、同じ部屋の離れたところに二人の男が毛布を被って転がっている。鼾をかいているジャックはもちろん、パーシヴァルも眠っていると思っていた。

「外の空気を吸いに行くだけよ」

アヤはパーシヴァルをじろりと見下ろし、扉を開けて甲板に出た。濃紺の夜空いっぱいに月と星が降るように輝いていて、うんと手を伸ばせば星ひとつくらいもぎ取れるような気がした。下弦の月と満天の星はあまりに明るく、アヤのすらりとしたシルエットが甲板にくっきりと濃い影を落とした。

「愛を告げる勇気も　己の非を認める強さも
運命に立ち向かう覚悟もなかった
あなたが許してくれるなら
他にはもう何もいらない」

アヤは甲板の手すりに寄り掛かり、目と鼻の先に見える小島を眺めた。その島はヒベルニア本島から五百メートルほど離れた沖に浮かぶ平らな島で、豊かな緑に覆われていた。人々の生活から隔離された聖域のようにも見えた。歌声はその小島から聞こえていた。

「ただ心だけで　この心だけで
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

静かな夜だ。歌声以外は穏やかな波の音しか聞こえない。アヤは目を閉じた。

「この心だけで　この魂だけで
あの場所へ　あの時へ　あなたのもとへ」

ああ、この声はギーヴ・バルトロメの声に似ている。ベルファストのウイスキー修道院でアヤを見逃してくれた男の声。まるでクリームかチョコレートのように低く甘く優しく、それでいて眠れる獅子のようなたくましさを備えた雄々しい歌声だ。

「……ヒベルニア王？」

アヤははっとして目を開いた。まさか、これはギーヴの兄であるヒベルニア王マキシムの歌声なのだろうか。

「だろうな」

いつの間に隣にパーシヴァルが立っていた。すっかり身支度を済ませ、起きぬけとは思えない鋭い目つきで小島を睨んでいる。

「ようやく月が昇った。小舟を下せ、上陸する」

ロッキンガムの商船はギーヴたちに続いてヒベルニアへやって来ると、すぐに針路を北東の離れ小島に向けた。パーシヴァルの悪魔アザゼルが、極光の女神の居場所がこの小島であると突き止めたからだ。

一方、ギーヴたちはどうやらどこかの小さな漁村に入港したようだった。ヒベルニア王がこの小島にいることを知らない彼らは、今頃ヒベルニア王の居城でも目指していることだろう。

「了解。船員を起こすわ」

アヤとジャックとパーシヴァルは一言もしゃべらず小舟を漕いでそっと小島に近づいた。緑に覆われた小島の中央に白い石で建築されたルネッサンス様式の建物があった。聖堂のようだ。大きな窓がいくつもある。

「あれは何だろうな」

小舟を岩場に泊め、岩壁をよじ登って島への上陸を果たすと、腰上丈の草が覆い茂る野原の向こうに白い塔が立っていた。岬に立つ灯台のようにも見えるが、その割に宗教的な雰囲気が漂っている。

『あたし、いつか絶対ヒベルニアを見つけるの！楽しみにしててね、ばあや！』

ふと、子供の頃のアヤが大人になったアヤの目の前を笑いながら横切ったような気がした。アヤは額を抑えるふりをして小さく苦笑した。

――ばあや、私は今、あなたが焦がれていたヒベルニアにいるわ。あなたがずっと憧れていたマキシム・バルトロメのそばに。

アヤは感慨深く辺りを見回した。風が吹きわたり、草原が波のように揺れ動く、ここはなんて穏やかで平和な土地なのだろう。

「あの聖堂か、あの塔か、ヒベルニア王がいるのはどちらかだろうな」

パーシヴァルの声にアヤは我に返った。ヒベルニア王の歌声は途絶えている。

「二手に別れましょう。私は聖堂へ行くわ。パーシヴァルは塔へ。――ジャックは舟を見張っていて」

「え、俺、見張りぃ？」

ジャックの抗議の声を無視してアヤは聖堂へと歩き出した。平坦な緑の島に君臨するかのような聖堂は月や星の光を浴びて佇んでいる。どうしてか、ヒベルニア王マキシムがいるならこちらだとアヤは思った。

草をかき分けて大股で歩きながら、アヤは育ての祖母を想った。ヒベルニアへ辿り着いたことでアヤの目的は半分果たされた。もしも祖母なら今後どのような身の振り方をするだろう。考え始めると、答えは簡単に導き出せた。

「三月地震の原因がヒベルニア王にあるのなら彼の間違いを諫めて世界の雲を晴らし、彼とヒベルニアとクラシックを守る」

アヤは掌に爪が食い込むほど拳を握った。パーシヴァルはヒベルニア王から気象兵器を奪おうとしている。彼を止めなければ。

聖堂の扉は装飾の細かい青銅で作られていた。クラシックの崇める四人の女神の物語が絵巻物のように彫刻されていたが、アヤは彼女たちの逸話を一つも知らなかった。祖母は自分の信仰をアヤに押し付けることをしなかったのだ。

扉は人が一人通れるだけの隙間を残して閉ざされていた。アヤは足音を忍ばせてそっと扉に近づき、恐る恐る中を覗いた。

そこに、まだ見ぬヒベルニア王マキシムがいた。

聖堂の内壁や天井には白い雲がたなびく真っ青な空が描かれていた。そこに、四人の女神と一人の男神、何十人もの天使が浮遊している。描かれているのは神が太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、この世界を創り上げたという最も有名な場面だ。それはエディンバラ教会の教えとも合致するのでアヤも知っていた。教会の教えと異なるのは四人の美しい女神の存在だ。

入り口の正面に大きなステンドグラスがあった。原色のガラスで描かれたケルトの組み紐模様は青白い月光を鮮やかな色どりへ変え、

聖堂の床や説教台や長椅子を飾りたてている。

ヒベルニア王マキシムは、その色鮮やかな光の中に跪き、静かに祈りを捧げていた。

彼のまとった純白の法衣の上にステンドグラスの光がきらきらと舞い降り、まるで光に祝福されているようだとアヤは思った。背中で束ねた長い金褐色の髪も、長身でがっしりとした体躯も双子の弟のギーヴ・バルトロメにそっくりだった。ギーヴ同様にマキシムの肉体も実年齢より遥かに若く、三十代の男に見えた。

「誰だ?」

息を潜めてマキシムに見入っていたアヤを突然彼が振り向いた。アヤは口元をおさえ、飛び出しそうになった悲鳴を飲み込んだ。どくどくと血液が音を立てて全身を駆け廻る。

「……ヒベルニア人ではないな」

マキシムはフランス語でつぶやき、膝を払いながら立ち上がった。彼はゆっくりとアヤに歩み寄り、ステンドグラスの光の外に出た。アヤは逃げ出すことも彼に近づくこともできずに立ち尽くしていた。

――これが、ヒベルニア王マキシム。

「ここで何をしている? どこから来た?」

マキシムは今度は英語で言った。彼の秀麗な目鼻立ちや緑色の瞳はギーヴそのものだった。音楽のような声も、どこかおもむろな立ち居振る舞いも。だが、柔和で穏やかなギーヴとは明らかに表情が

違う。マキシムは氷のように冷たい視線をアヤにそそいでいた。

「私は……リヴァプールから来ました」

アヤも英語で応えた。マキシムの瞳から目をそらせなかった。

「イングランド人か」

マキシムは互いの手が届きそうな距離までやってきて足を止めた。彼は聖堂の入り口で立ち尽くすアヤを無表情に見下ろし、翡翠色の目を眇めた。

「おまえ、悪魔を飼っているな。エディンバラ教会の関係者ではないようだが、なぜ悪魔など連れてヒベルニアくんだりまでやって来た?」

アヤは握った拳を自分の胸に当て、ここへ一人で来たことを後悔した。底知れぬ恐怖が足元から忍び寄って来るような、マキシムに何もかも見透かされているような、そんな気がしたのだ。

「そ、育ての祖母がクラシックで、祖母はクラシックの大行進にも参加しました。あなたのことをとても慕っていて、息を引き取る最期の瞬間まで、あなたの治めるヒベルニアの地を踏みたいと口にしていました……だから、祖母の果たせなかった望みを私が代わりにと……」

アヤがしどろもどろに答える間中、マキシムは口をつぐんでいた。

「あなたがヒベルニアへ旅立つ時、祖母は大怪我をしていたんです。でも、祖母はそれが治ったらシスター・アンジェラたちと共にヒベ

ルニアへ向かう気でいました」

まるで催眠術のようだ。アヤの舌は勝手に動き、ぺらぺらと細かな事情までマキシムに話している。

「それに、あなたにお訊ねしたいことがあるのです。世界中が雲に覆われているにも関わらずヒベルニアにだけ太陽が照っているという話を聞いて、エディンバラ教会や列強国、豪商たちはヒベルニアに気象兵器があるのではないかと騒いでいるのです。そんなものは本当に存在するのですか？」

ようやくマキシムが応えた。

「はっはっは！！気象兵器か！！それはいい！！はっはっは！！」

楽しそうに嘲笑してマキシムは腹を抱えた。ばかばかしくて仕方がないという風だった。ひとしきり大笑いすると、マキシムは唇の端を上げた。

「それに近いものはある。いいや、『いる』」

「いる？」

アヤがさらに問いかけようとした時、マキシムの目がはっとしたように見開かれ、彼の顔色が一変した。それは喜びや怒りがないまぜになったような表情だった。

「時が来たよ、女神」

マキシムはつぶやくと、ステンドグラスを見上げて両手を組み合わせ、鮮やかな光の中で再び跪いた。

2. 修道女の回想（前書き）

シスター・アンジェラの回想中心です。

2. 修道女の回想

「お願い、帰って来てよ、マキシムが悲しんでるから」

六十年前にアンジェラが家出した時、彼女を迎えにベルファストまでやって来たギーヴはそう言って情けない顔をした。アンジェラの家出の原因は些細なことだったが、林檎修道院を飛び出して既に三週間が経過していた。

「どうして私がここにいると？」

果樹園で他の修道女たちと談笑しながら昼食をとり、食後の紅茶を飲みつつのんびりと寛いでいたアンジェラは敷布から立ち上がってギーヴの顔を凝視した。暖かい日差しが注がれ、果実の甘い香りに包まれたその場所は、ギーヴがいつも昼寝をしている林檎修道院の果樹園に似ている。

目の前に立っているのは間違いなく、ギーヴだ。彼に瓜二つのアンジェラの夫マキシムではない。アンジェラはがっかりした。捜し当てられるような場所ではないことは分かっていたけれど、それでももしマキシムがアンジェラを迎えに来てくれたら、すべてを諦めて最後の最後まで彼と一緒にいようと思っていたのだ。

「……なんとなく、西の方に君がいるような気がしたから」

アンジェラの落胆に気がついたのか、ギーヴは申し訳なさそうに目を泳がせながら応える。二人は紅茶を楽しんでいる修道女たちから離れ、小枝や雑草を踏みしめて春の果樹園の中をゆっくりと歩き始めた。

「誤魔化さないでよ。どうして私がこの修道院にいるって分かったの？」
「……それは、ええと、その」
「はっきりしてよ」
アンジェラが問い詰めるとギーヴは悲しそうに眉根を寄せた。
「ひみつ」
ギーヴが悲しそうな顔をすると、アンジェラまで悲しくなる。マキシムとアンジェラは夫婦の約束をし、互いに全幅の信頼を寄せているが、ギーヴとマキシム、ギーヴとアンジェラの間には、薄く透明で目には見えない、けれども強固な壁がある。ギーヴは何か重要なことを、アンジェラたちに隠している。
「ごめんね、本当はマキシムをこっちに来させようとしたんだけど、あいつったら俺の話も聞かずに大慌てで君の実家に向かっちゃって」
アンジェラの実家はフランスの農村だ。道の整備もされていない山間の村なので、そこに辿り着くにはかなり骨を折るだろう。山に住みつく盗賊の類に命や財産を狙われる危険もある。今さらながら、アンジェラは自分の身勝手な行動を後悔した。
「……髪を梳いていたら白髪を一本見つけたの」
「え？」
いきなり話題を変えたアンジェラに、ギーヴは首をかしげた。アンジェラは大きくため息を吐き出し、何かを吹っ切るように両腕を空に振り上げ伸びをする。

「もちろん一本きりよ、私、まだ十九歳なんだから。でもね、急に怖くなったのよ。マキシムは永遠に歳を取らないけれど、私はどんどん年老いていく」

その事実を思い知らされた時、アンジェラは林檎修道院を飛び出していた。書き置きも言付けもなく突然行方不明になった彼女をどれだけの仲間が心配したことだろう。だけど、アンジェラはどうしてもマキシムのそばにいるのが不安になってしまったのだ。

「マキシムと一緒にいるのが怖いわ。これから自分がどんな悲しみに襲われるのか、どんな苦しみに苛まれるのか、怖くて仕方がない。私はその悲しみや苦しみに耐えられるのか、耐えることができず、心を醜くゆがませるのか」

「それが家出の理由？」

アンジェラは正直に頷いた。見た目は少し年上のお兄さんという姿のギーヴだが、実際の彼の年齢は四十八歳だ。彼に何かを偽ったり誤魔化したりできるとは思わない。

「でも、もういいわ。覚悟を決めた。マキシムは私を許してくれるかしら」

アンジェラがそう言って苦々しく微笑むと、ギーヴは緑色の目を慈しむように細めた。アンジェラは胸が高鳴るのを感じてギーヴから目をそらした。うぬぼれかもしれないが、夫の弟は自分に好意を抱いているのではないか。こんなところまで自分を迎えに来てくれたのも、マキシムのためだけではないのではないか。

「心配しなくても大丈夫。マキシムは君に弱いから」

ギーヴは感情の読み取れない笑顔をつくり、手を伸ばしてアンジェラの肩にそっと触れた。

その晩、ギーヴは修道院の世話になった。二人がフランス語で会話していたために他の修道女たちが勘違いしたのだろう、ギーヴはアンジェラの夫として歓迎された。二人が誤解に気が付いたのは、ギーヴの寝床を整えたと言って修道女がアンジェラの部屋へ彼を導いた時だった。アンジェラの部屋の空いているベッドに洗いたてのシーツと毛布がセットされているのを見て、アンジェラもギーヴも固まった。

「おやすみなさい」

笑みを浮かべて立ち去る修道女を見送り、二人は仕方なく部屋に入った。別の部屋とベッドを改めて用意することもできたが、アンジェラはギーヴが嫌でなければ彼と同室でも構わないと言った。ギーヴも同じようなことを口にしたので、結局、二人はそのまま眠ることになった。

「明かり、消すわね」

アンジェラに背を向けてギーヴが上着を脱ぎ始めたので、アンジェラは慌てて蝋燭の火を消した。カーテンの隙間から漏れる黄色い月明かりが床に落ち、目が闇に慣れてくると上着を脱いだギーヴの広い背中がくっきりと見て取れた。アンジェラは彼に背を向け、ギーヴが衣擦れの音を響かせて服を脱ぎ、寝台をきしませて横たわるまで、不可解な緊張と恥ずかしさに耐えて立っていた。

「おやすみ、アンジェラ」

もぞもぞと寝返りをうち、枕の位置を調整するギーヴの気配を感じながら、アンジェラはほっと息をついて自分のベッドに入った。毛布の中で服を脱ぎ、四肢を伸ばす。押し寄せる疲労感が有難かった。もしも疲れていなければ、緊張して眠れなかったかもしれない。

「おやすみなさい、ギーヴ。――今日はありがとう、迎えに来てくれて嬉しかったわ」

アンジェラは目を閉じた。ゆっくりと意識が沈みこんでゆく。眠りに落ちる瞬間の、まるで温かい腕に魂を抱きしめられるような感覚に、アンジェラは神々の存在を思う。きっと、死の瞬間さえ、神々はこうして彼女を抱きしめてくれるだろう。

「アンジェラ」

アンジェラが夢の世界に入りかけた時、ふと、額に何か生温かいものが触れた。それはすぐに離れ、今度は瞼に触れた。右頬に触れ、左頬に触れ、顎に触れる。アンジェラは目を開けた。

「マキシム……？」

寝ぼけ眼でつぶやいてから、アンジェラは自己嫌悪に駆られた。月光に照らされたギーヴが、叱られた子犬のような顔で表情をゆがませたからだ。ここにマキシムはいない。アンジェラを迎えに来たのはギーヴなのだ。

「ギーヴ？」

アンジェラは肘をついて身体を起こし、下着しか身につけていない胸元に毛布を引き寄せた。腰から下は見えないがギーヴは裸だった。彼はアンジェラのベッドの横に跪いている。アンジェラは顔がかっと熱くなるのを感じて目を伏せたが、ギーヴの太い首や厚い胸板やがっしりとした肩の形が瞼の裏から離れない。それはマキシムに似ているようで、やはり別人のものだった。

「ギ、ギーヴ、失礼でしょう、話があるなら服を着て！」

アンジェラの抗議の声はギーヴに届かなかった。ギーヴは長い手を伸ばしてアンジェラの肩をつかむと彼女を抱き寄せた。ギーヴの素肌の胸に頬が触れ、アンジェラは混乱した。彼はさらに腕を伸ばしてアンジェラの背中に両腕を回し、強い力で彼女を抱きしめた。

「痛い、苦しいわ、ギーヴ、やめて」

身体が痛いのか、胸が苦しいのか、アンジェラは抱きつぶされながらギーヴの長い髪を引っ張った。彼は腕の力をわずかに緩めたが、今度は首を曲げてアンジェラの唇にキスをした。

「ごめん、アンジェラ、ごめん」

唇を触れ合わせたまま、ギーヴが熱に浮かされたようにつぶやく。

「お願いやめて、ギーヴ」
「ごめんね、許して」

謝罪の言葉を繰り返し、ギーヴはアンジェラの身体を抱きしめ続けたが、彼の頬に涙の筋が光っているのを見つけて、アンジェラは動けなくなってしまった。ギーヴが悲しそうな顔をすると、アンジ

ェラまで悲しくなる。彼が泣いていると、自分まで泣きたくなる。アンジェラは目を閉じた。彼の顔をこれ以上見つめ続けたら、このまま抱かれてもいいとさえ思ってしまうかもしれない。

「許して、アンジェラ」

ギーヴの熱い吐息と欲望に取り付かれたような上ずった声が彼女の身体に静かな火を放つ。彼女は彼の身体を押し返すことも抱きしめることもできず、彼の口づけを受け続けていたが、やがて背徳感に駆られてとうとう意を決した。

アンジェラはギーヴの唇を指先でつまんだ。ギーヴは驚いたように目を丸くして、濡れた睫毛を何度か上下させた。自然と彼の腕の力が緩んだ。

「ギーヴ、あなた、夕食でお酒を飲んだでしょう」

ギーヴの唇から指を離し、アンジェラは冗談めかして彼を睨みつけた。腰に手を当て、怒ったようなポーズをとる。我に返ったのか、ギーヴはアンジェラから身体を離し、驚いた顔のまま彼女をじっと見つめた。

アンジェラはにっこりと微笑んだ。

「全部、お酒のせいよ。あなたは本当にお酒に弱いんだから」

林檎修道院へ帰り着くまでは教会や修道院で寝泊まりしながら夜を過ごしたので、アンジェラとギーヴが寝室で二人きりになることはもうなかった。ギーヴもそれを避けていたようで、街の宿屋に泊

ることになった晩はわざわざ安宿を選び、男女別の大部屋で他の旅人たちと雑魚寝した。

懐かしいフランスに戻り、林檎修道院へ帰って来ると、アンジェラは仲間の修道士たちに快く迎えられた。マキシムもアンジェラの実家の村から戻ったばかりだと聞き、アンジェラは荷物を寝室に置くやいなや、厨房でマキシムの好きなコーヒーを入れた。豆を引きながらマキシムにどう謝ろうかと思案したが、いざ彼の書斎に足を踏み入れると何もかも忘れてしまった。マキシムは開け放された扉に背中を向けて本を読んでいた。アンジェラは彼がどんな顔をしているのか知るのが恐ろしくて、なるべく時間をかけて彼に近づき、コーヒーを机の上に置いた。

「ただいま」

本から顔を上げ、マキシムは白い湯気の立ち上るコーヒーに目を止めた。彼の視線はすぐにアンジェラに向かった。

「ありがとう」

マキシムは怒るでもなく静かに言った。

「あなたがそう言ってくれるなら、コーヒーなんていくらでも入れるわ。何杯でも、何杯でも」

なぜだか泣きたくなって、アンジェラは唇を噛んだ。マキシムはアンジェラの頬に手を伸ばし、硬い指先でそっと触れた。

「あなたは私を責めないの？」

「君は何も悪いことをしていない。悪いのは俺だ」

力強く微笑むマキシムに、アンジェラは首を振った。とうとう涙がこぼれた。

「あなたこそ、何も悪いことをしていないわ。私が自分のことしか考えてなかったのよ」

マキシムが立ち上がってアンジェラを抱きしめる。夫の胸に頬を寄せ、彼の匂いを胸一杯に吸い込むと、アンジェラは泣きわめきたいほどの幸福を感じた。アンジェラを責めるどころか、マキシムは家出の理由さえ訊ねなかった。この道の先に何があったとしても、マキシムは彼女の不安や悩みを理解し、受け止めてくれるに違いない。ずっとずっと、限りない愛情で互いの胸を満たし合っていける。

「そうだとしても、帰って来てくれて嬉しいんだ。だから、ありがとう」

その時、アンジェラは胸に誓った。すべてを諦めて、最後の最後まで彼と一緒にいようと。どこまでも、いつまでも、何があっても――。

アンジェラはうたた寝から目覚めた。目を開けると曾孫のコルガーがベッドの横に立っていた。

「ばあちゃん、そろそろ上陸するって」

「あら、私ったら」

起き上がろうとして、アンジェラはそれをやめた。起きようとしても起き上がれないのだ。身体が石のように重い。

「ばあちゃん？どうしたの？」

――神々よ、私にもう少しの間、力を貸して下さい。私には、まだやり残した仕事があるのです。

口の中で祈りを捧げると、すっと身体が持ち上がった。

「あいたた、首を寝違えちゃったわ、先に行ってちょうだい」

コルガーが出て行くと、アンジェラは時間をかけて身体を起こし、手早く身支度を整えた。髪を撫でつけようと壁にかけた小さな手鏡をのぞき、そこに映る年老いた自分の蒼白な顔にどきりとする。その顔の真ん中の茶色の瞳だけがきらりと生命力を放っていて、まるで、生に取りつかれている屍のように思えた。アンジェラは荷物の中から化粧道具を取り出し、頬と唇に薄く紅をのせて甲板へ向かった。

「やめて下さいよー！オレ、こう見えてすっごい怖がりなんだから！」

「あっはっは！俺だって怖がりだよ？でもね……」

夜明け前の暗い空の下で、彼女の曾孫と夫の弟が声を上げて笑っている。二人は顔を見合わせて笑いながら、海に身を乗り出すように船の手すりに並んで寄り掛かっている。仲むつまじい二人の後ろ姿は胸が苦しくなるほどの懐かしさと、小さな寂しさと、わずかな羨望を感じさせた。

「あ、ばあちゃん！」

コルガーがはじけるような笑顔で振り向いた。三月地震で家族を亡くしたばかりの彼女を引き取った時、アンジェラはもう二度とコルガーの笑顔を見られないのではないかと思っていた。

風のない静かな夜更けに、コルガーが妹の遺体を抱いてウイスキー修道院にやって来た時のことをアンジェラは今でもはっきりと覚えている。妹の遺体を壊れもののようにそっと礼拝堂の床に横たえると、顔の筋肉を微動だにせず、コルガーは祭壇に向かって跪いた。素朴な礼拝堂に死臭が漂い、手指を組み合わせて祈りを捧げ続けるコルガーの姿は常軌を逸した儀式のようにも見えた。何を祈っているのか、コルガー自身も分からなかったことだろう。

夜明け前、二人は遺体を修道院内の墓地にひっそりと埋葬した。コルガーの父や兄はすでに貴族の共同墓地に葬られている。墓地を管理する者もいないので、兄と同じように妹をそこへ埋葬することもできたが、そのためには彼女の遺体を他人の目にさらさなければならない。コルガーはきっとそれを嫌がるだろうとアンジェラは修道院の墓地の提供を申し出た。

月も星も見えない真っ黒な闇の中、スコップで土をすくっては放り投げ、すくっては放り投げ、かわいそうな妹を埋めるための穴を掘りながら、少女は嗚咽を押し殺し、歯を食いしばって泣いた。静かな夜に響くざくりざくりと土をかく音を聞いていると、まるで傷ついた少女とこの世に二人きりになってしまったような気持ちがした。

「――もう、生きて行く意味が分からない」

ようやく墓穴を掘り終えると、コルガーは妹の遺体をゆっくりと穴の中に横たえたが、妹の身体に土を被せるのをためらうように、彼女は静かに穴を見下ろしていた。

「この手で妹を土の中に埋めて、それでも生きなければならない理由が分からない」

泥だらけの両手で顔を覆い、コルガーは慟哭した。それは孤独なオオカミの悲痛な叫びのようだった。

「これが夢でなくて現実なら、現実なんて、消えて無くなった方がいい！これが世界なら、わたしは世界なんて要らない！こんなわたしなら、わたしはわたしさえ要らない！」

八十年も生きていれば、様々な災難に遭う。大切な人の死、愛するものとの別れ、貧困、病。それらに直面しては乗り越えてきたアンジェラと、まだ世の中を知らない無垢な少女の経験値の落差は大きいが、アンジェラさえ、少女のような目に遭ったことはなかった。どんな言葉をかけてやるべきか、アンジェラは逡巡してから口を開いた。

「人が何のために生まれ、何のために生きるのか、それは神々さえ分からないわ。それでも人が死んではいけないのには理由があると思うの」

アンジェラはコルガーの肩にそっと触れた。小刻みに震える氷のように冷たい身体は硬く、まるで穴の中に横たわる遺体のようだった。だが、少女の身体には静かに、けれど確かに血が通っている。

――マキシムとアンジェラの血だ。

「あなたは今、自分をこの世に繋ぎとめるものを全て失ったと思っているかもしれない。だけど、それはまだまだこの大地のどこかに必ず眠っている。それは決して数多くはないかもしれないけれど、だけど――探しなさい」

「……わたしを、この世に繋ぎとめるもの？」

「そうよ。例えば、私はどう？私があなたの曾祖母だと言ったら？」

コルガーの見開かれた虚ろな瞳に小さな光が宿るのが見えた。

「私は修道女だけど、六十年前に子供を一人産んだの。それがあなたの祖父のミシェルよ」

アンジェラは実の息子にさえ、自分が母親だと告げなかった。ミシェルは死ぬまでアンジェラのことを母親の姉だと思っていた。その秘密をコルガーに明かしたのは、すべての肉親を失ったと思い打ちひしがれている彼女を慰めるためではあったが、修道女でありながら身ごもり、私生児を密かに出産したアンジェラのことを彼女なら責めたりしないだろうという確信があったからだ。そして、万が一アンジェラが教会の教えに異を唱えるクラシック教徒だと知っても、コルガーならそれを冷静に受けとめるだろうと思ったのだ。

「シスターが、わたしの曾祖母？」

大きな茶色の目でじっと見つめられ、アンジェラは微笑んだ。するとコルガーは縋りつくようにアンジェラの背中に両手をまわし、彼女の胸に顔を押し付けてきた。赤ん坊のような仕草は愛らしく思えたが、本来は自立心の強い勝気な少女が弱りきっていることを思い知って、アンジェラは少女の背中を力いっぱい抱きしめた。

「いくら絶望しても、いくら悲しみにくれてもいい。頑張らなくてもいいし、無理に立ち上がる必要もないわ。だけど死んでは駄目よ、エド」

数日後、教会が死亡者のリストを作成すると発表し、市民は家族の死亡届を提出した。コルガーが自分と妹の死亡届を出し、兄の名を名乗って建築現場で働き始めたのはその少し後のことだった。

「もう、聞いてよばあちゃん！猊下がさあ！」

アンジェラの意識はメルセデス号の甲板に引き戻された。コルガーがギーヴの隣を離れ、アンジェラの元に駆け寄って来る。

あの時、生きて行く意味が分からないと泣いていた少女が、今、こうして幸福そうに笑っている。己をこの世に繋ぎとめるほど愛しいものは多くない、けれどそれは必ずある。そう言って励まし、彼女を生かしたのはアンジェラだった。

「アンジェラ、おはよう」

ギーヴもアンジェラを振り返り、彼女に近寄って来る。アンジェラはふいに泣きたい気持ちになって、彼らに向かって笑みを浮かべた。

この世には、なんて愛しいものがあることだろう。

死が訪れた時、神々は彼女の魂を温かく抱きしめてくれる。けれ

ど、それと引き換えにこの愛しい人々の手を放すのはあまりに辛すぎる。

「おはようございます、猊下」

神々よ、もう少しだけ私に時間を下さい。

「おーい、コルガー、ちょっと手を貸してくれ！」

フレドリクソンに呼ばれてコルガーが走り去ると、アンジェラはその躍動的な背中を目で追った。どんな苦難も乗り越えられる、小さいけれどたくましい背中だ。

「あれだよ、アンジェラ。あれがマキシムのいる島」

ギーヴが長い指でさした小島は平坦な緑の大地に白い聖堂と小さな塔をのせている。だが、そこにマキシムがいると言われても、アンジェラは実感がわかなかった。彼に会うためにここまで来たというのに我ながらおかしな話だ。

アンジェラはギーヴを見上げた。彼も落ちつかない様子で顔をしかめている。

「マキシムは私を許してくれるかしら」

どこまでも、いつまでも、何があっても、最後の最後までマキシムと一緒にいようと、自分の胸に確かに誓った。だが結局、アンジェラはマキシムと離れる道を選んでしまった。もちろん、それはマキシムやクラシックのためにした苦渋の決断ではあった。

「心配しなくても大丈夫。マキシムは君に弱いから」

六十年前に交わした言葉を繰り返しながら、ギーヴは気まずそうに眉をひそめた。

「ねえ、ひょっとして、まだ怒ってる？六十年前のこと」

「怒ってなんかないわ。青春時代の、懐かしくて大切な思い出よ」

家出から戻って間もなく、アンジェラは妊娠した。もしもギーヴと過ちを犯していたら、身ごもった子供の父親は誰なのかと一生悩み続けたことだろう。あの程度で済んで良かったと思えば怒る気はしないし、夫以外の男性から愛情を寄せられ、背徳のひと時を過ごしたことは、慎ましい修道女の女としての自尊心を少なからずくすぐったものだ。

「女の人の心って分からないよねえ」

しみじみと呟き、ギーヴは小島に視線を転じた。メルセデス号は接岸するポイントを見極め、小島にどんどん近づいていく。

『帰って来てくれて嬉しいんだ。だから、ありがとう』

六十年前、家出から戻ったアンジェラにマキシムはそう言ってくれた。彼が再びそう言って微笑んでくれることを祈りながら、アンジェラは静かに胸に手を当てた。

2．修道女の回想（後書き）

いつもありがとうございます！

次回の更新は１２月２４日（土）です。

クリスマスイヴ！

3. 小舟の上の真実

嵐を抜け、ヒベルニアへ辿り着いたコルガーたちは、太陽の光が降り注ぐ入江に小さな漁村を発見し、村民の疑わしげな視線を浴びながら上陸した。野次馬の案内で村の長老を訪ねると、彼は六十年前の大行進の時に先陣を切っていたギーヴとアンジェラのことを覚えていた。乗組員を休ませる場所の提供とヒベルニア城への取次を請うと長老は快く承諾してくれた。

だが、彼らはすぐに村を出ることになった。彼らの船をつけていたロッキンガムの船が北に向かって航行していく姿を見て、それを追いかけることにしたのだ。

「恐らく、王が小陽島で祈りを捧げているのでしょう」

長老は小陽島という、聖堂と塔だけが建つ小島の名前と場所を教え、食料とヒベルニアの通貨を持たせて彼らを送り出した。小陽島に着くと案の定、沖にロッキンガムの船が浮かんでいた。

「あいつら、てっきりすぐに攻撃してくると思ってたのに」

小陽島へ上陸するための小舟を下す作業を手伝いながらコルガーはロッキンガムの船を睨んだ。メルセデス号はマストの先端を嵐にもぎ取られたというのに、ロッキンガムの船には一見したところ大きな損傷がない。きっと全員無事にヒベルニアへ辿り着き、今頃マキシムと対面しているのだろう。

「上陸した途端、待ち伏せに遭うかもしれないぞ」

小舟を下すコルガーたちの横でユアンが拳銃に弾丸を詰めながら言った。コルガーは彼に気づかれないようにユアンの表情をうかがう。頭の中に数日前に盗み聞いた彼の言葉がこだまする。

――おれを信用できないという気持ちは分かる。おれがいつ裏切るか、不安でたまらないんだろう？
あれは一体どういう意味なのだろう。

「こらコルガー、ぼけっとすんな！」

フレドリクソンに怒鳴られ、コルガーは我に返った。小舟を下すと、コルガーは船の漕ぎ手としてオールを渡された。清々しいくらいの男扱いにほっとしながら小舟に飛び乗ると、ギーヴ、アンジェラ、ヨイク、ユアン、ヒリールが彼女に続いた。全員が床に腰を落ち着けるのを確認してから、コルガーはゆっくりと小舟を漕ぎ始めた。ゆっくりといっても、怪力の彼女が漕げばかなりの速度が出る。

ぎしぎしと船がきしみ、ちゃぷちゃぷと波が音を立てる。狭い小舟に押し込められた人々は一様に黙りこみ、行く手に浮かぶ平坦な緑の島を見つめていた。コルガーは無心でオールを動かし続けた。何かを考えようとしても、緊張して思うようにいかなかった。

「上陸する前にはっきりさせておきたいことがある。よろしいですか、ギーヴ猊下」

ユアンが沈黙を破ったのは話声がメルセデス号に届かなくなった辺りだった。名指しされたギーヴは小陽島から書籍商へと視線を転じた。

「……何？」

「うかがいたいことは二つあります。まず、昨日のあれは何ですか？嵐の前に現れたあの――」

ユアンが言葉を選んでいる一瞬の隙にギーヴはああと無感動な声を漏らした。

「あれは極光の女神だよ」

ギーヴはいつも通りののんびりとした口調で応えた。ユアンは眉をひそめてちらりとヨイクの顔を見た。ヨイクも昨日の嵐の前に甲板に現れた女性について詳しく知りたいらしく、好奇心のこもった目で身を乗り出す。

「どういうこと？極光の女神って、クラシックの信じる神様の、四人の奥さんの一人よね？私たちの前に現れたあの人は、あれは本当に本物の女神なの？」

ヨイクの質問にギーヴはおかしそうに笑った。

「あっはっは！神だの女神だのが実在するわけないでしょう。彼女は自分のことを極光の女神だと思い込んでいる最上級の――悪魔だよ」

コルガーは耳を疑った。子供のころから日常的に力を貸してくれていたのは極光の女神だった。小舟を漕いでいる今でさえ、彼女の力を借りて怪力を出している。それが悪魔の力だったと思うと、極光の女神に対して抱いていた感謝の念はかき消え、騙されたという気持ちにすらなった。同時に、なぜ彼女がコルガーだけを助け、兄や妹を助けなかったのか合点がいった。神なら人々を平等に愛する

かもしれないが、悪魔なら気まぐれやえこひいきもあるだろう。コルガーは気まぐれで彼女に愛されたのだ。

「パーシヴァルの悪魔アザゼルやアヤ・ソールズベリの悪魔ミスティックは彼女にとって同胞だって言ったでしょう。彼女は悪魔。俺とマキシムは悪魔の力を借りている。契約はしてないけどね」

平然と語るギーヴにヨイクが困惑したように首を傾げた。

「よく分からないけど、パーシヴァルやアヤは悪魔と契約をして彼らを使役しているんでしょう？極光の女神は何故、契約もしていない、しかも聖職者であるあなたたちに力を貸しているの？」

ギーヴは何故か微笑んだ。

「俺とマキシムは神の四人の妻を敬愛するクラシックの頂点だ。つまり、彼女が俺たちを助けるのは、俺たちの祈りや信心に対する正当な報酬なんだよ。彼女は自分のことを神の妻である極光の女神だと、本当にそう思ってる」

「それは極光の女神を信じるクラシックなら誰にでも力を貸すってこと？」

「そういうわけじゃないと思う。彼女の本質は悪魔だから、自分が気に入った、俺たちの血縁者にだけ特別な力を与えてるんだと思うよ」

ギーヴの説明にコルガーは小舟を漕ぎながら納得して頷く。

「オレもそうだと思う、オレは子供の頃から女神に助けられてるけど、クラシック教徒じゃないし、彼女に祈りを捧げたこともないよ。女神も言ってたけど、ばあちゃんとマキシムの血を引いていて、女

神と同じ名前を持ってるってだけで女神はオレに力を貸してくれてた。つまり、全部彼女の気まぐれなんだよ」

ヨイクが考え込むように腕組みして黙るとギーヴが再び口を開いた。

「ヒベルニア以外の土地を雲で覆っているのも彼女の仕業だ。彼女にとって、これは四人の女神を歴史から抹消し、クラシックを弾圧した教会への復讐なんだよ、彼女は自分を蔑にした人間たちを恨んでいるんだ」

己を女神と思い込んでいる悪魔が世を恨んで世界を雲で覆った。コルガーはにわかには信じられず、空を仰いだ。頭上には夜明け前の暗い空が広がっていて、ふくよかな月と蒼い星々が輝いている。しばらくの間、誰もが黙りこんでいたが、とうとうユアンが落ち着かなげに言った。

「極光の女神が教会を恨んでいるとして、どうして彼女は今になって復讐を始めたんですか？教会にひと泡吹かせてやろうと思ったのなら、クラシックが多く殺された六十年前の大行進の時にやればよかったのに」

「それは俺にも分からない。……考えられるのはマキシムが焚きつけたか、女神が業を煮やしたか、それとも両方か……」

ギーヴは思案するように言い淀み、目を眇めて小陽島を見つめた。

「極光の女神を倒すの？世界の雲を晴らすために」

訊ねたのはヨイクだった。ギーヴは首を振った。

「悪魔とは言え、彼女には恩がある。それに彼女は強い。できれば穏便にことを済ませたい」

女神の恩恵で不老の身体を維持しているギーヴとしては、彼女を倒す気になれないのだろう。彼女の後ろ盾を失ったら自分がどうなるか、きっとギーヴは恐れているのだ。

「女神は祈りと信心の報酬として俺たちの言葉に耳を傾けてくれる。もし女神が現れたら、決して盾突くことなく祈ってほしい。そうすれば世界の雲を晴らしてくれるかもしれない」

「悪魔と言えば、ロッキンガムの悪魔にはどう対処したらいい？私は銃の通用しない相手とはお手合わせしたくないんだけど」

ヨイクは肩をすくめてユアンと顔を見合わせる。

「とりあえずこれで身を護って。そうしたら俺が倒す」

言いながらギーヴは聖水の小瓶を全員に配った。

「リプトン君、聞きたいことは二つあるんでしょう？もうひとつは何？」

ギーヴに問われ、ユアンはコルガーをじっと見つめた。頭からつま先まで舐めるように見られ、コルガーはぎくりとした。そういえば、極光の女神はコルガーのことを「私と同じ名を持つ愛しい娘、エド」と呼んでいた。女であることがバレているのかもしれない。コルガーが冷や汗をかいていると、ユアンは目を伏せて首を振った。

「いや、結構です。誰にでも暴かれたくない秘密のひとつやふたつ、あるでしょうし」

首をかしげているヨイクとヒリールの視線がコルガーとユアンの間を何度か行き来したが、小舟が小陽島に到着したため会話は打ち切られた。小舟を寄せ、上陸できそうな場所を見つけて六人は小舟を下りた。その時、ギーヴがユアンの肩をたたいて何か囁いているのが聞こえた。

「いい心がけだよ、坊や」

小陽島は起伏のない平らな島で、緑の草原の中心に聖堂と併設した修道院が建っている以外は少し離れたところに白い塔があるだけだ。ヒベルニア本島の目と鼻の先にありながら、ここは俗世とは切り離されているのだと漁村の長老が言っていた。

「早く行きましょ！」

好奇心の燃えたぎるヨイクが先陣をきり、六人は聖堂へ向かった。黄緑色の草原を強い風が吹き渡り、黎明の空には零れ落ちてきそうなほど大きな星々がきらりきらりと瞬いている。砂浜の波打ち際にはアイルランドやスコットランドからの漂着物がたくさん転がっていた。

コルガーは少し離れたところを歩くヨイクの横顔を盗み見た。彼女の青い瞳は明けの明星のように輝いていた。

「なあに？」

視線に気が付いて、ヨイクはコルガーを振り返った。コルガーは水平線に目を向けて微笑んだ。

「ヨイクを見てると、オレも夢を追いかけようって思えてくるよ」
「あら、コルガーの夢って、何なの？」
コルガーは胸を張り、訊ねるヨイクに破顔した。自分の人生を真っすぐに歩いて行くことこそが償いだとギーヴは言った。
「建築家になること！」

3．小舟の上の真実（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます！

次回更新は１２月２５日（日）夜です。

みなさま、よいクリスマスを☆

※今日の更新について※

すみません、加筆修正に納得がいかず、今日の更新は日付変更後となります。申し訳ありません。

以下は文字数を埋めるためのコピペ。

夜明けが来ても　西を向いていればまだ夜だ
朝が来ても　目を閉じていれば真夜中だ
もし　太陽が昇らなかったら
東へ向かって走ればいい
僕と　世界の夜明けを見に行こう
夜の向こうには朝が
暗闇の向こうには光が
混沌の先には希望が
必ず僕らを待っている

夜明けが来ても　西を向いていればまだ夜だ
朝が来ても　目を閉じていれば真夜中だ
もし　太陽が昇らなかったら

東へ向かって走ればいい
僕と　世界の夜明けを見に行こう
夜の向こうには朝が
暗闇の向こうには光が
混沌の先には希望が
必ず僕らを待っている

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4345y/

ヒベルニアの極光

2011年12月25日23時45分発行